

東京外国語大学記述言語学論集

思言

第11号

論文

- ラワン語ダル方言のPの名詞句における格標示……………大西 秀幸 (3)
 「モンゴル語内モンゴル諸方言に見られる“否定+lee”形式— 漢語の“了”との対照
 から —……………山田 洋平 (15)
 アイルランド語における「be+過去分詞」構文について……………山田 怜央 (31)

修士論文 要旨

- カム・チベット語ティンドゥ方言の記述的研究 —助動詞を中心に—……………才吉文毛 (51)
 モンゴル語の移動動詞について —とくに直示移動動詞の観点から—
 ……………ツェレンダブガ・ボヤンジャルガル (61)
 Modern Standard Arabic と Egyptian Arabic の受動構文やそれに類する構文について
 ……………松尾 愛 (71)

卒業論文 要旨

- 原形不定詞と共に起る迂言的使役動詞 have の意味役割について
 — 使役行為に対する使役主・被動者の意志性を中心に —……………石川 真衣 (85)
 「～(さ)せていただく」表現について —話し手と聞き手の意識に着目して—
 ……………岡垣 亮我 (93)
 岡山備前方言における疑問詞の係り結びについて……………岡本 進 (101)
 ハンガリー語の動詞派生辞について……………酒井 悠里 (109)
 インドネシア語の他動詞形成接尾辞-kan, -i について……………瀧川 加奈絵 (117)
 イタリア語とフランス語の受動構文について……………内藤 星美 (125)
 日本語の終助詞「よ」とベトナム語の文末詞の対照……………中村 詩衣奈 (133)
 ウズベク語における現在未来接辞-a/-y と現在進行接辞-yap の棲み分け
 — 動詞のアスペクト的性格の観点から —……………西田 千花子 (141)
 パラグアイのスペイン語における leísmo, laísmo について
 — グアラニー語との言語接触の観点から —……………濱口 恵利加 (149)
 内モンゴル語ホルチン方言の借用語について —漢語を中心に—……………ブヘ (157)
 フランス語における未来表現 —単純未来形と近接未来形—……………星野 加奈子 (165)
 現代日本語の「たしかに」 —「なるほど」と「たぶん」との比較から—…望月 雪絵 (173)
 島根県大田市方言における「終止形+ダ・デス」について……………森山 美紗子 (181)
 モンゴル語の接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee について……………若松 元樹 (189)

2015年

東京外国語大学

総合国際学研究科・外国語学部

記述言語学研究室

序文

『思言』の第 11 号をお届けする。その内容とレベルに関しては十分なものと言えるかわからないが、読んでくださる方々の評価をまちたいと思う。言語学の進展に何か少しでも寄与するところがあれば幸いである。

今回も印刷・刊行に関して東京外国語大学大学院の競争的経費を申請し、その援助を賜ることができた。10 号まで地道に続けてきたことが評価されたのか、ついにこのたび若干増額していただいた。おかげさまでわずかに自分の個人研究費を足しての刊行が可能であった。記してお礼申し上げます。深く感謝するとともに、より質の高い論集を目指して今後とも努力を重ねてゆきたいと考えている。

今回は、「論文」の方の査読のプロセスが何とか軌道にのり、査読のシステムを確立させることができた。査読に協力して下さった先生方やOBの研究者の方々に深くお礼申し上げたい。他方、外部から広く投稿を受け付けることは今年度も課題として残されたままである。当研究室での研究会に関しても、学内レベルでの公開は行っているが、これもまだ広く一般から人に聞きに来ていただけるようなレベルには至っていない。外部との交流を深めるとともに、さまざまな刺激を受けてやっていくようにすること、より広く世界に発信し、通用するような研究体制を構築する必要がある。まずは最低限この現状を維持し、論集を継続的に刊行していくとともに、一步ずつ工夫を重ねてより良い研究発信の体制を構築してゆきたいと考えている。

今号の編集にあたっては、森貝聡恵さん、岡本進君が中心になって尽力して下さった。ゼミの院生・学部生諸氏もよく手伝ってくれた。ここに記して感謝の意を表したい。

上記のように拙いままお届けする本号であるが、読んでくださった方々からは、今後も広く御批判御叱正を賜りたい。前号でもいくつか御意見を賜ることができた。これをうけて改善に努めるとともに、御意見を下さった方にはこの場を借りて深くお礼申し述べたい。

2015 年 12 月 21 日

風間 伸次郎

思言 第11号 目次:

論文

ラワン語ダル方言の P の名詞句における格標示

Case marking in P argument in Daru dialect in Rawang language 大西 秀幸 (3)

「モンゴル語内モンゴル諸方言に見られる “否定+=lee” 形式— 漢語の “了” との対照から —

“Negative +=lee” formation in the Mongolian spoken in Inner Mongolia A Comparison to “le” in Mandarin Chinese 山田 洋平 (15)

The ‘be + p.p.’ Construction in Irish

アイルランド語における「be+過去分詞」構文について 山田 怜央 (31)

修士論文 要旨

カム・チベット語ティンドゥ方言の記述的研究 —助動詞を中心に—

A Descriptive Study of Khams Tibetan Khri-du Dialect With Special Focus on the Auxiliaries An Analysis..... 才吉文毛 (51)

モンゴル語の移動動詞について —とくに直示移動動詞の観点から—

On deictic motion verbs in Mongolian ツェレンダブガ・ボヤンジャルガル (61)

Modern Standard Arabic と Egyptian Arabic の受動構文やそれに類する構文について

Passive and related constructions of Modern Standard Arabic and Egyptian Arabic 松尾 愛 (71)

卒業論文要旨

原形不定詞と共起する迂言的使役動詞 have の意味役割について — 使役行為に対する使役主・被動者の意志性を中心に —

An Analysis of Semantic Functions of English Causative *Have* : With Special Emphasis on the Volition of Causers and Causees against Causative Action 石川 真衣 (85)

「～(さ)せていただく」表現について —話し手と聞き手の意識に着目して—

Appropriate use of “(Sa) Seteitadaku”: Focusing on speakers’ and hearers’ notion on the expression 岡垣 亮我 (93)

岡山備前方言における疑問詞の係り結びについて

On *Kakari-musubi* in the Okayama-Bizen dialect 岡本 進 (101)

- ハンガリー語の動詞派生辞について
Differences between Hungarian derivational suffixes "-z(ik)" and "-l(ik)" 酒井 悠里 (109)
- インドネシア語の他動詞形成接尾辞-kan, -i について
The Two Transitive Suffixes -kan and -i of Indonesian 瀧川 加奈絵 (117)
- イタリア語とフランス語の受動構文について
Italian passive and French passive 内藤 星美 (125)
- 日本語の終助詞「よ」とベトナム語の文末詞の対照
A contrastive study of the final particle "yo" in Japanese and final particles in
Vietnamese 中村 詩衣奈 (133)
- ウズベク語における現在未来接辞-a/-y と現在進行接辞-yap の棲み分け —動詞のアスペク
ト的性格の観点から—
The Usage of Present Tense Affixes “-a/-y” and “-yap” In Uzbek - with a Focus on the Aspect of
Verbs 西田 千花子 (141)
- パラグアイのスペイン語における leísmo、laísmo について —グアラニー語との言語接触
の観点から—
“Leísmo” and “laísmo” in Paraguayan Spanish — Regarding the language contact with
Guarani — 濱口 恵利加 (149)
- 内モンゴル語ホルチン方言の借用語について —漢語を中心に—
The loan words in Khorchin dialect of Inner Mongolian — especially on the words from
Mandarin Chinese ブヘ (157)
- フランス語における未来表現 —単純未来形と近接未来形— 星野 加奈子 (165)
- 現代日本語の「たしかに」 —「なるほど」と「たぶん」との比較から—
Contemporary Japanese “tashikani” — comparing with “naruhodo” and “tabun” — 望月 雪絵 (173)
- 島根県大田市方言における「終止形+ダ・デス」について
“Finite Form + da, desu” in the Ohda City Dialect of Shimane Prefecture 森山 美紗子 (181)
- モンゴル語の接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee について
Suffix “-v, -laa⁴, -jee/-čee” in Mongolian 若松 元樹 (189)

論 文

ラワン語ダル方言のPの名詞句における格標示

大西 秀幸

(東京外国語大学大学院)

キーワード：チベット=ビルマ語派, 格, differential object marking, 定性, 代名詞

1. はじめにⁱ

1.1. 研究の背景と本稿の目的

ミャンマー連邦カチン州の北部で主に話されているチベット=ビルマ系言語であるラワン語には、動詞との文法関係を表す手段の一つとして名詞句に格小辞を後接させるというものがあるⁱⁱ。特に中核項であるS、A、Pの名詞句に対しては、Aは能格、S、Pは絶対格で示されることが一般的である。この点で、ラワン語は能格絶対格型の格標示を見せるといえる。一方で、Pに与格小辞がつく例も筆者のコーパスからは一定数確認された。本稿では、ラワン語の一方方言であるダル方言を考察の対象とし、Pの名詞句は何らかの要因によって与格か絶対格が選ばれるという作業仮説のもと、Pの格標示に関して「与格で示される要因」と「絶対格で示される要因」の2つの観点から述べる。そしてそれぞれの要因の重要度は階層があることを示す。

本稿の構成は次に示す通りである。1節で対象言語についての概説、略号・概念の定義と、基本的な中核項標示パターンの概観を行う。2節では、ダル方言でPが与格で示される要因と、絶対格で示される要因について考察する。3節では2節での主張をまとめたのち、それぞれの要因間には重要度に階層がみられることを示す。

1.2. 対象言語と調査について

ラワン語はミャンマー連邦共和国カチン州の北部に主に居住しているラワン人によって話されている言語である。Ethnologueⁱⁱⁱによると、ラワン語話者の人口は全体で63,000人であり、うちミャンマー連邦に居住する人口は62,000人であるとしている。系統的にはチベット=ビルマ系言語 (Tibeto-Burman)、中央チベット=ビルマ語支 (Central Tibeto-Burman) のうちヌン語群 (Nungish) に属する^{iv}。

Morse (1988) によるとラワン語はマトワン (Matwang)、ルンミ (Longmi)、タンサル (Tangsarr)、キンパン (Kwinpang)、ダル (Daru) の5つの方言に大別することができる。本稿で記述の対象とするのはダル方言である。

本稿で挙げるダル方言の例は、特に2012年から14年まで筆者が断続的に行ってきた調査によって得られたものである。筆者の調査に協力していただいた pūñsār tīṅkañs 氏 (1960年生、Nogmong Township (ダル方言の分布地域) 出身) はダル方言とビルマ語に堪能である。調査は主にビルマ語を媒介にして行った。

筆者の観察によるとダル方言の概要は以下に示す通りである。

- 音節構造：(C0ə) C1 (C2) V (C3) / T
- 音素：/ p, b, t, d, ts, dz, tɕ, dʒ, k, g, ʔ, φ*, β*, s, ɛ, h, m, n, ŋ, w, r, l, j, i, i, u, e, ə, o, a / *を付した子音は外来語にしか現れない音
- 基本語順：SV、APV
- 語類：名詞類 (名詞(普通名詞, 指示詞, 代名詞), 数詞), 動詞類(自/他動詞), 副詞類 (副詞), 小辞類 (助動詞, 後置詞, 類別詞など)
- 名詞句構造：[指示詞+名詞+数詞=類別詞] (=後置詞)
- 動詞句構造：[否定辞-使役化-<動詞, 人称, 数> =助動詞-TAM-述部標識]

1.3. 本稿で用いる音韻表記並びに略号

ダル方言の音韻転写には筆者の音韻解釈に基づいた表記を用いる。概略は以下の通りである。

- 音素：/ 概要で示した音素の表記通り
- 声調：高調 (Á)、中調 (Ā)、低調 (À)

次に本稿で用いる略号の定義をここでしておく。

| | | | | | |
|-------|---------------------------|--------|------|----------------------------|---------|
| 1 | 話し手人称 | | INT | intention | 意志 |
| 2 | 聞き手人称 | | LOC | locative | 処格 |
| 3 | 第三者人称 | | N1 | non-1 st person | 非話し手が主語 |
| - | 接辞境界 | | | subject | |
| + | 同一名詞句内の語境界(特に示す必要のある場合のみ) | | NEG | negative | 否定 |
| | | | NPT | non-past | 非過去 |
| = | 接語境界 | | OBLG | obligatory | 義務 |
| * | 調査協力者によって不適格と判断されたことを示す | | P | patient | 被動者 |
| | | | PFV | perfective | 完結 |
| ABL | ablative | 奪格 | PL | plural | 複数 |
| ABS | absolutive | 絶対格 | PN | proper noun | 固有名詞 |
| ALL | allative | 向格 | Q | question | 疑問 |
| CAUS | causative | 使役化 | R/M | reflexive/middle | 再帰/中動 |
| CL | classifier | 類別詞 | RPT | remote past | 遠過去 |
| CNMLZ | clausal-nominalizer | 名詞節化標識 | RPUT | reputation | 繰り返し |
| | zer | | SEQ | sequential | 継起 |
| COP | copula | コピュラ | SG | singular | 単数 |
| DAT | dative | 与格 | TOP | topic | 話題化 |
| DIR | direction | 方向 | VI | intransitive verb | 自動詞語根 |
| ERG | ergative | 能格 | VT | transitive verb | 他動詞語根 |

1.4. 本稿で使用する概念の定義

本稿では以下に定義する概念を用いて論じる。Blake (1994: 1) は格 (case) について以下のように定義している。

- 名詞に付与されてその名詞を含む句が持つ意味的・統語的な関係を示す標識の体系

このような機能を持つ形式により、名詞句は節中に導入される。ラワン語の場合、この機能を持つ代表的な形式が格小辞であり、名詞句に後置される。

Comrie (1981) は文中の中核的な項を三種類に分類し、それぞれ S、A、P と呼ぶ。それぞれの項は以下のように定義できる。

S: 自動詞の単一項、すなわち (自動詞の) 主語

A: 他動詞の動作主項および文法的にそれと同じ振る舞いをする項、すなわち (他動詞の) 主語

P: 他動詞の被動者および文法的にそれと同じ振る舞いをする項、すなわち目的語、および特殊構文 (2.1.2 で後述) の一方の項。

次に無標の絶対格について説明する。ダル方言の場合、格は多くの場合、明示的な格標示によって行われるものの、格によっては、明示的な標識を伴わないこともある。格標識を伴わない形式を本稿では「絶対格で示される」と表現する。具体的には以下にあげるような名詞が絶対格で示される。絶対格で示される名詞句には必ず絶対格で示されるものと他の格と交替可能なものがある。

【必ず絶対格で示されるもの】

- コピュラ主語とコピュラ補語
- 呼びかけ
- S

【他の格と交代可能なもの】

- 時間 (処格と交代可能)
- P (与格と交代可能、本稿で詳述)

1.5. 基本的な中核項標示パターンと動詞の自他

本節では、ダル方言の基本的な中核項のパターンについて概観する。(1) は自動詞文の例、(2) は他動詞文の例である。基本的な自他動詞文では S の名詞句と P の名詞句は絶対格で^v、A の名詞句は能格で示される。また、動詞語根は S の名詞句の人称を標示する自動詞語根 (VI) と、P の名詞句の人称を標示する他動詞語根 (VT) に分かれる。

(1) dzòntsè ədzēr =ē.

学生(S) 走る.VI =NPT

「学生が走る。」(作例)

- (2) jā=pè=i ni?gūŋ=lòŋ zàm-ù.
この=CL(男)=ERG(A) 尻尾=CL(モノ一般)(P) 捕まえる.VT-3P
「この男は尻尾を捕まえた。」

一方で P の名詞句が絶対格以外で示される例もある。例えば (3) は P の名詞句に小辞=səŋ が後置される。

- (3) əpūŋ=i ədūr=səŋ sət-ù.
PN=ERG(A) PN(P) =DAT 打つ/殺す-3P
「アプンはアドウを打った。」

(3)は=səŋ がなければ非文になる。従って、このとき P の名詞句は与格=səŋ で示されているといえる。本稿では =səŋ を与格小辞 (=DAT) と呼ぶ。以上のように P の名詞句は絶対格で示される場合と、与格で示される場合がある。

2. 与格標示に関与する要因

2.1. 与格で示される要因

2.1.1. 意味論/語用論的特性に関する要因

P の名詞句が与格で示されるために指示物の意味論的要因が関わっていることは Barnard (1934: 15) で既に指摘されている。本節ではまず Barnard (1934) の指摘について概観しておく。Barnard (1934) は P の名詞句が有生であれば与格で示され、無生であれば絶対格で示されると指摘している。有生物の P 名詞句が与格で示される例を (4) に、無生物の P 名詞句が絶対格で示される例を (5) に示す。

- (4) ŋà=i àŋ=səŋ ké-ŋ-ù-nā.
1SG=ERG 3SG=DAT 喰う.VT-1SG-3P-INT
「あいつを喰ってやるぞ。」 (Barnard 1934: 15)

- (5) əgí=i ea? ké-ù.
犬=ERG 餌 喰う.VT-3P
「犬は餌を食べた。」 (Barnard 1934: 15)

一方で、筆者のコーパスからは、Barnard (1934) の主張に対する反例が見つかっている。例えば (6) と (7) は P の名詞句が有生物なので与格で示されることが期待されるが、実際はいずれも絶対格で示される。

- (6) səmà lù-ù=ləm dī-əm.
妻 得る.VT-3P=～ために 行く-DIR
「妻を得るために旅に出た。」

- (7) *křantimòŋ=ta?* *sānī* *jā=pè=i* *eaʔré* *jəŋ-jəŋ-ù.*
 PN=LOC 昨日 この=CL(男性)=ERG 老人 会う/見る.VT-RPT-3P
 「クランティ地域で昨日この男はある老人に会った。」

(6)は P である *səmə* 「妻」を話し手も聞き手も特定せず、単に「嫁さがしをする」という文脈である。一方(7)は物語の序盤で、P である *eaʔré* 「老人」は初めて話に導入された名詞句である。従って、話し手にとっては特定されてはいるものの、聞き手はまだ特定できていない文脈である。2 つの例に共通するのは P がいずれも不定^vであるということである。すなわち P が定の名詞句であれば与格で示されると考えることができる。(8)から(10)の例は P が定名詞句で、与格で示される例、(11) から (13) は P が不定名詞句、かつ絶対格で示される例である。対象となる名詞句を下線で示す。

- (8) *nà=i* *əgi=səŋ* *sət-ù-wē* *i=ē.*
 2SG=ERG(A) 犬=DAT 殺す-3P-CNMLZ COP=NPT
 「お前が(その)犬を殺すつもりだろう。」

- (9) *kà* *əin-jəŋ-ù* *dəməà=rì=səŋ* *dəcat=ē.*
 ことば 言う-RPT-3P シヤーマン=PL=DAT 尊敬する=NPT
 「(その)ことばを言ったシヤーマンを尊敬する。」

- (10) *nəmgā=ē=rəgap* *mərəŋ=səŋ* *wəŋ-ù=ē.*
 日が昇る=NPT=SEQ 村=DAT 囲む-3P=NPT
 「日が昇ると(強盗団)は(その)村を囲んだ。」

- (11) *nutzit=mè=i=nēr* *teim* *əə-jəŋ-lúŋ=ē.*
 賢い=CL(女性)=ERG=TOP 家 CAUS-長い-DIR=NPT
 「賢い女性は家を増築した。」

- (12) *əŋ=i* *pé* *zət+mən-ù=rət* *ŋà=i* *əmpà*
 3SG=ERG 籠 編む+続ける-3P=~/ので 1SG=ERG 食物
wən-ù=ləm *dī-əm*
 買う-3P=~/ために 行く-PFV
 「彼は籠編みをしていた、私は食物を買いに出かけた。」

- (13) *əŋ=i* *əŋ* *rì-bi-rà-ù.*
 3SG=ERG(A) 材木 運ぶ-RPUT-3P-OBLG
 「彼は材木運びを何度もしなければならなかった。」

(8) から (10) では与格を絶対格に交替させることはできず、また、(11) から (13) では絶対格を与格に交替させることもできない。

さらに詳しく実例を検討してみると、有生性よりもむしろ定性で有意な差が認められることが分かる。例えば、無生名詞であっても定であるような文脈を設定すると、P の名詞句は与格で示される。次の (5) は無生物のため絶対格で標示されたものとして Barnard が提示した例だが、P の名詞句が定であるような文脈を設定すると与格で示すことができる。(5)' は作例である。

- (5)' $\text{ɲà} \quad \text{əgi}=\text{mətù} \quad \text{ea?} \quad \text{lú-ŋ-ù}=\text{nèr} \quad \text{əgi}=\text{i} \quad \text{ea?}=\text{səŋ} \quad \text{ké-ù.}$
 1SG 犬=～ために 餌 得る-3SG-3P=SEQ 犬=ERG 餌=DAT 喰う-3P
 「私は犬のために餌を買い、犬が (その) 餌を食べた。」

(5)'のように先行文脈を足して、先行文脈の名詞句を照応するという形で名詞句の定性を引き上げると、与格標示が可能になる。

以上のように、P の名詞句が与格で示されることに関与する要因は Barnard (1934) の主張する有生性ではなく定性であるといえる。

2.1.2. 名詞句のタイプに関する要因

名詞句のタイプによって、与格で示されるか否かが決まると考えられる例がある。例えば、(14)、(15) においては P である名詞句が代名詞であるが、いずれも必ず与格で示され、絶対格で言い換えることができない。

- (14) $\text{wē}=\text{rəga?}=\text{nēr} \quad \text{əŋŋiŋ} \quad \text{dū}=\text{ri} \quad \text{ea?rē}=\text{ri}=\text{i} \quad \text{ɲà}=\text{səŋ} \quad \text{è-cá-ŋ-ù.}=\text{ē.}$
 それ=地域=TOP 3PL 役人=PL 老人=PL=ERG 1SG=DAT N1-知る-1SG-3P=NPT
 「その土地であれば、彼ら役人の老人は私を知っている。」

- (15) $\text{tí?ja?} \quad \text{pòyaq} \quad \text{əŋ}=\text{səŋ} \quad \text{ɲà}=\text{i} \quad \text{dərə-ŋ-jəŋ-ù}$
 一晚中 3SG=DAT 1SG=ERG 議論する-1-RPT-3P
 「一晚中、彼らと私は議論した。」

また、(16) では rəp 「家族」とそれを照応する代名詞 əŋŋiŋ 「彼ら」が文内に現れ、それぞれ P と考えられるが、代名詞は与格で示され、普通名詞は絶対格で示されている。

- (16) $\text{wēkat}=\text{ner} \quad \text{rəp} \quad \text{əjúrət}=\text{nèr} \quad \text{əŋŋiŋ}=\text{səŋ} \quad \text{cəŋut} \quad \text{dáj} \quad \text{dī-ŋ}$
 そのとき=TOP 家族 祈る=SEQ 3PL=DAT 教える 終える 行く-1SG
 そのとき、その家族のために祈り、彼らに (読み書きを) 教え終えてから、出発した。

このように、名詞句のタイプが代名詞であれば、与格で示されるという傾向がみられる。

この傾向は 2.1.1 で示した意味論／語用論的特徴を使って説明できると考える。すなわち、代名詞は、話し手や聞き手、その他発話場所にいるヒトを指示したり、文脈上にでてくるヒトを照応したりすることから本来的に定性が高い。そのため、定性の点で与格標示が必須になるということである。

しかし、(17) に示すように疑問代名詞も与格で示されなければならないということを考えると、

この場合与格で示されることに関与しているのは定性ではなく、名詞句のタイプであると考えられる。すなわち名詞句のタイプが代名詞であれば、必ず与格で示されるということである。

- (17) *nà=i kǎgú=səŋ jəŋ-ù=lé.*
 2SG=ERG 誰=DAT 見る-3P=Q
 「あなたは誰を見たの？」

2.1.3. 述語に関する要因

一部の動詞が述語に現れる場合、P の名詞句は与格で示される。例えば (18) は *lōŋzà* 「畏怖の感情をもつ」という動詞が述語にくる例だが、P の名詞句は必ず与格で示されなければならない。

- (18) *dərū=mè gərǎigəsəŋ=səŋ lōŋzà=ē.*
 ダル=CL(女性) 神=DAT 畏怖の感情を持っている.VI=NPT
 ダルの女性は神に対して畏怖の感情を持っている。

(18) の例で注目すべきは、能格で示されることが期待されるAが絶対格で示されていることと、意味的には項が二つあるにも関わらず動詞が自動詞語根である点である。(18) のように述語動詞によって特殊な構文が現れるケースはコーパスから観察される。本稿ではこれを特殊構文と呼ぶ。特殊構文は以下のような格配列をとる。

NP1.ABS NP2=DAT V.INTR

図 1: 特殊構文の格配列

つまり、特殊構文をとると必ず項が与格で示されるということである。

同じラワン語の別種であるマトワン方言でも同様の構文が指摘されている。LaPolla (2008: 1) はこの構文について次のように記述している。

Some stative intransitive verbs can take an oblique argument marked by the locative/dative marker (LaPolla (2008: 1)).

- (19) *Ngà vgīs̀vng svrēngē.*
Ngà vgī-s̀vng svrē-ng-ē
 1sg dog-LOC afraid-1sg-N.PAST
 'I'm afraid of dogs.' (LaPolla (2008: 1)) (表記も原文まま)

LaPolla (2008) はこのような構文を、他動詞文と自動詞文の中間に位置する構文であると考えている。なぜなら、この構文は、動詞が自動詞形 (自動詞文的特徴)、2つの項のうちひとつが義務的に与格で示される (他動詞文的特徴) というように自動詞文と他動詞の双方の特徴を共有しているためである。

筆者のコーパスからは *lōŋzà* 「畏怖の感情をもつ」の他に、*sərē* 「怖がる」、*jàŋ* 「気づく」、*ətó*

「ショックを受ける」、pū「気を付ける」の5つの動詞がこの構文に現れることがわかっている。5つの動詞に意味的な類を立てるとすれば、「心の動き」という類が暫定的に立てられると考えられる。

なお、このような動詞は他の言語でも特殊な格配列で現れることが多いことが指摘されている。例えばパルデシ (2010: 21-22) によると心理的経験 (気に入る、嬉しくまたは悲しく感じるなど)、生理的な経験 (汗をかく、めまいをする、くしゃみをする、お腹がすく、のどが渇くなど)、必要性を感じる (～が必要だ)、欲求または願望 (～がほしい) などを描写する述語は、南アジアの多くの言語において絶対格以外の主語 (おもに与格あるいは属格) をとる。(20) はマラーティー語の与格主語構文の例である。

- (20) raam-laa ti mulgi pasant PaD.li
 Ram-DAT that girl.FSG choice fell
 「ラームはあの女の子が気に入った (パルデシ (2010: 22)) 。」

ダル方言の特殊構文も、動詞の持つ意味特性によって特殊な構文で現れると考えられる。

しかしここで問題となるのはすべての「心の動き」の動詞がこの構文をとるわけではない。例えば「畏怖の感情をもつ」と意味的にはよく似た「尊敬する」という動詞は、基本的な他動詞文に現れ (21a)、特殊構文への言い換えはできない (21b)。

- (21) a. kà ɛ̃n-jəŋ-ù d̄əmeà-rì=səŋ d̄əcat-ù
 ことば 言う-RPT-3P シャーマン=PL=DAT 尊敬する-3P
 「(その) ことばを言ったシャーマンたちを尊敬した。」
- b. *kà ɛ̃n-jəŋ-ù d̄əmeà-rì=səŋ d̄əcat
 ことば 言う-RPT-3P シャーマン=PL=DAT 尊敬する
 「(その) ことばを言ったシャーマンたちを尊敬した。」

「心の動き」を表すすべての動詞が特殊構文を要求するわけではないという問題は、述べられた状況に関して主体が行使する制御性の度合いで説明することができる。例えば何かに対して「畏怖の感情を持つ」ということについて主体は制御性を持っていない。つまり、何かに対して「畏怖の感情をもたない」という選択はできないのである。一方で、「尊敬する」は (少なくともダル方言話者の感覚では) 主体が「尊敬しない」ことを選択できると考えられる。例えば、(22a) のように「尊敬しないこと」は選択できるが、(22b) のように「畏怖の感情をもたない」ことは選択できない。いずれも作例である。

- (22) a. àŋ=səŋ mə-eùŋ-ù = təkàŋ àŋ=səŋ mə-dæat-ù.
 3SG=DAT NEG-好む-3P=～ので 3SG=DAT NEG-尊敬する-3P
 「彼が嫌いなので、彼を尊敬しなかった。」(作例)
- b*. àŋ=səŋ mə-sərē = təkàŋ àŋ=səŋ mə-lōŋzà-ù.
 3SG=DAT NEG-怖い=～ので 3SG=DAT NEG-畏怖の感情を持っている-3P
 「彼を恐れていないので、彼に畏怖の感情を持たなかった。」(作例)

このように主体がその実現を制御できない事象を述べる場合、構文的な対立が起こる^{vii}。こういう対立が他の「心の動き」動詞にもみられるかどうかについては今後更なる検証が必要である。

このように、述語動詞が P の名詞句が与格で示されるか否かに関与する場合がある。

2.2. 絶対格で示される要因

次に与格で示されない(つまり必ず絶対格で示される)要因を挙げる。P の名詞句に話題化後置詞 =nēr が付加されると、絶対格で示されることになる。例えば(23)では、P である wēmī 「その猫」に話題化の小辞が後置されている。このとき P の名詞句 wē+mī 「その猫」は定であるにも関わらず、与格で示すことができない。

- (23) mī=i eúŋ+húŋ+rəm=ta? dəzá-daʔ-ù. wē+nī=kèní
 猫=ERG 木+神聖+中=LOC 落とす.VT-DIR-3P その+猫=ABL
 wē+mī=nēr dəŋgú=i=wā gō-at-ù.
 その+猫=TOP 雄鶏=ERG=～だけ 呼ぶ.VT-PFV-3P
 「その猫は聖なる木の中に(ごみを)落とした。その日以来その猫は雄鶏が追うようになった。」

また P 参加者が代名詞であっても、話題化の後置詞が付加されると与格で示すことはできない^{viii}。

- (24) kàcəŋ=i àŋ=nēr daʔ-jəŋ-ù.
 先祖=ERG 3SG=TOP 許す-RPT-3P
 「彼は、先祖が許した。」

(24) は P の名詞句が代名詞なので、2.1.2 で指摘したように与格で示されることが期待されるが、実際には絶対格で示され、話題化の小辞がついている。

次に特殊構文の例であるが、この場合も P の名詞句に話題化の小辞がつくと、与格で示すことができなくなる。(18) を改変したものを (18)' に示す。いずれも作例である。

- (18)' a. *dərū=mè gəráigasəŋ=səŋ=nēr lōŋzà=ē.
 ダル=CL(女性) 神=DAT=TOP 畏怖の感情を持っている.VI=NPT
- b. dərū=mè gəráigasəŋ =nēr lōŋzà=ē.
 ダル=CL(女性) 神=TOP 畏怖の感情を持っている.VI=NPT
 「ダルの女性は神に対しては畏怖の感情を持っている。」(作例)

(18)'a'に見るように与格と話題化小辞は共起できない。bのように必ず絶対格と共起させなければならぬ。

なお、話題化の小辞と共起できないのは、与格小辞だけである。他の格小辞は話題化小辞と共起が可能であることが確認されている。

(25) támuŋ-ù əsəŋ=i=nēr táca-ci
慣れる.VT-3P 人=ERG=TOP 理解する.VT-R/M
「(それに) 慣れた人は (それを) 理解した。」

(26) zūŋ=kaʔ=nēr mə-dī
学校=ALL=TOP NEG-行く
「学校には行かなかった。」

このように、話題化小辞が生起することは、与格で示されるか否かに関与すると考えられる。

3. まとめ

本節ではここまでの主張をまとめ、各要因間に想定される階層性について論じる。P の名詞句が与格で標示されるか否かに関与する要因を以下にまとめる。

- 与格標示の要因となるのは Bernard (1934) の指摘する有生性でなく、通常、定性である
- 定性に関係なく名詞句が代名詞であれば与格で示される
- 述語にいくつかの特定の動詞 (主体によって制御されない動詞、たとえば dəcat 「尊敬する」、lōŋzà 「畏怖の感情を持っている」) が現れると、特殊構文をとり、P の名詞句は与格で示される
- P の名詞句に話題化小辞がつくといかなる場合でも P の名詞句が与格で示されることはない

以上の事実から、複数の要因は等しいレベルで関与するのではなく、重要度に階層が見られることが分かる。即ち、P の名詞句が与格で示されるためには、まず話題小辞がついていないことが必要で、その要因をクリアした環境でのみ述語のタイプが関与し、次に名詞句のタイプ、最後に定性という形で与格標示に関与する。

ダル方言において P の名詞句は与格あるいは絶対格で示されうるが、そのどちらで示されるかを決定する要因は一つではない。主題化、述語のタイプ、名詞句のタイプ、定性が要因として関与する。そして各要因間には階層がある。

参考文献

- Barnard, J. T. O. (1934). *A handbook of the Rawang dialect of the Nung language*. Rangoon: Superintendent of Gov't. Printing and Stationery.
- Blake, Barry K. (1994). *Case*. Cambridge: Cambridge University Press.
- LaPolla, Randy J. (2000). Valency-changing derivations in Dulong/Rawang. *Changing valency: Case studies in transitivity*, 282-311.
- LaPolla, Randy J. (2008). Transitivity and transitivity alternations in Rawang and Qiang. *Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan*. Institute of Linguistics.
- Morse, Robert H. (1965). Syntactic frames for the Rvwang (Rawang) verb. *Lingua*, 15, 338-369.
- Morse, Stephen A. (1988). Five Rawang dialects compared plus more. *Prosodic analysis and Asian linguistics: to honour RK Sprigg*, 237-250.
- Sun Hongkai; Liu Guangkun. (2009). *A Grammar of Anong*. Language Death Under Intense Contact. Leiden • Boston: Brill.
- パルデシ, プラシヤント. (2010). マラーティー語における他動性のスペクトル. 西光義弘 & プラシヤント・パルデシ (編) 『自動詞・他動詞の対照』 7-32. くろしお出版.
- 多吉&孙宏开. (2009). 独龙族的基本特点和方言土语概况. 独龙族社会历史调查 (二), 160-183.
- Žirkov, L. I. (1955). *Lakskij âzyk*. Moscow: AN SSSR.

ⁱ 本稿は日本言語学会第 150 回大会(大東文化大学)での口頭発表「ラワン語ダル方言における他動詞目的語の標示について —与格後置詞=səŋ が現れる要因—」の内容に加筆・修正を加えたものである。質疑応答の場で有益なコメントを下された先生方に感謝したい。更に本稿の草稿に関して様々な形でコメントをいただいた諸先生および友人の皆さんに謝意を表したい。

ⁱⁱ 格標示の他に語順や、動詞の人称一致も文法関係を決定していると考えられる例がある。本稿ではこのうち、格標示に注目するということである。

ⁱⁱⁱ <http://www.ethnologue.com/language/raw> (最終閲覧日 2015/10/23)

^{iv} ヌン語群に属する言語としては、中国雲南省で話される独龍語(Drung)と中国雲南省福貢県からミャンマーカチン州にかけて話されるアノン語(Anong)が知られる。独龍語については多・孫 (2009) に、アノン語については Sun & Liu (2009) に詳しい記述がある。ラワン語 (マトワン方言) に関しては、Morse (1965) や LaPolla (2000) に文法記述がある。

^v 本稿では絶与格で示される P を基本ととらえる。それは特定の条件以外ではいかなるタイプの目的語にも絶与格標示が可能であるからである。つまり特定の条件下で特殊な標示として与格で示されるということである。

^{vi} 本発表では「定/不定である」ということを Chafe (1979: 39)の次の定義に従って言及している。即ち「ある指示物について、聞き手も既にそれについて知って、同じようにカテゴリー化できる全ての指示物の中から、話し手の意図する指示物を同定できると、話し手が見なすことができるもの(Chafe (1979: 39))」を定と、そうでないものを不定と言及している。

^{vii} 同じような特徴をもつ言語として北東コーカサス諸語のラック語 (Lak) が挙げられる。Žirkov (1955: 41, 38) によるとラック語では A には通常能格を使うけれども、知覚動詞の主語には与格を用いる。

Buttal(能格)bavxxunnu ur ču. 「父が馬を売った。」

Buttan(与格)ussu xxal xunni 「父には兄が見えた。」

Case marking in P argument in Daru dialect in Rawang language

Hideyuki Onishi

(Tokyo university of foreign studies)

Key words: Tibeto-Burman family, differential object marking, definiteness, information structure

Daru is one of the dialects in Rawang language of Tibeto-Burman language family and spoken by Daru people in North part of Kachin state of Myanmar.

In this paper, based on my own data, an overview of case-marking system for P (transitive object) is presented. P is presented by absolutive case or dative case. In this language, case-marking for P is not determined by a single factor, but rather multiple factors are simultaneously working. The factors examined here are the followings: definiteness (not animacy), NP-type (pronoun), predict-type and information structure.

モンゴル語内モンゴル諸方言に見られる“否定+=lee”形式
— 漢語の“了”との対照から —

山田 洋平

(東京外国語大学博士後期課程／学術振興会特別研究員)

キーワード：モンゴル語，漢語，内モンゴル，否定，完了，終助詞

1. はじめに

中華人民共和国 (以下、中国) 内モンゴル地域で使用されているモンゴル語において、次の例1下線部に見るような終助詞 =lee が観察される¹。

(1) *bi ošxüalee.*

bii oš-x-üə=lee
1SG to.go-FUT-NEG=LEE

「私は (やっぱり) 行かない／私は行かないことにした」

cf. *bii ošxüä.*

bii oš-x-üə
1SG to.go-FUT-NEG

「私は行かない」山田(2014)

この終助詞 =lee はこの例のように否定形式と共に起して、「～なくなる／(考えを改めて、やっぱり) ～ない／～ないことにする／もう (これ以上) ～ない」などといった意味を表す文末表現を担う (山田 2014)。

内モンゴル地域で日常使用されるモンゴル語として、筆者の印象ではこの表現の使用頻度は比較的高いように感じる。モンゴル国で使用される話し言葉ハルハ・モンゴル語でこれに対応する表現が使用されないことを考えると、“否定 +=lee” という表現が中国において漢語²との相関関係の中で発達したものである可能性もある。本稿ではこうした観点から漢語の“了(「了」)”との対照を通し、=lee の特徴を整理する。

2. モンゴル語の内モンゴル諸方言とは

本稿で扱うモンゴル語内モンゴル諸方言とは、*sečēnbağador (erkilen naiiragolba)* (2005) が区分するモンゴル語4大方言³即ちハルハ、内モンゴル、オイラト、バルガ・ブリヤートのうち、おおよそ内モンゴル方言がこれにあたる。*sečēnbağador (erkilen naiiragolba)* (2005: 206) は2005年の中華人民共和国における国勢調査に基づきモンゴル語の内モンゴル方言話者を400万人ほどであるとしている。

¹ 本稿における表記等は筆者の音韻解釈に基づき、先行研究等における表記も恣意で改めて引用している。また日本語以外の文献の引用は筆者訳に基づく。各例文の例文番号、グロス、和訳および下線等も特に断りのない限り筆者による。出典を示していない例文は筆者調査による。

² いわゆる中国語の北方官話を指す。より正確には当該地域の方言からの影響であると言うべきだが、本研究では当地の漢語の方言差に関して十分な考慮がされていない。後で挙げる漢語に関する先行研究も、基本的に普通話(標準語)に関する言及である。

³ この分類には異論もあるが、分類そのものについては筆者の手に余るため議論を留保する。

内モンゴル諸方言には次のような言語が含まれる (図 1)。ここでは栗林 (1992) を参照し便宜上フルンボイル市で使用されるバルガ・ブリヤート方言についても図示する。

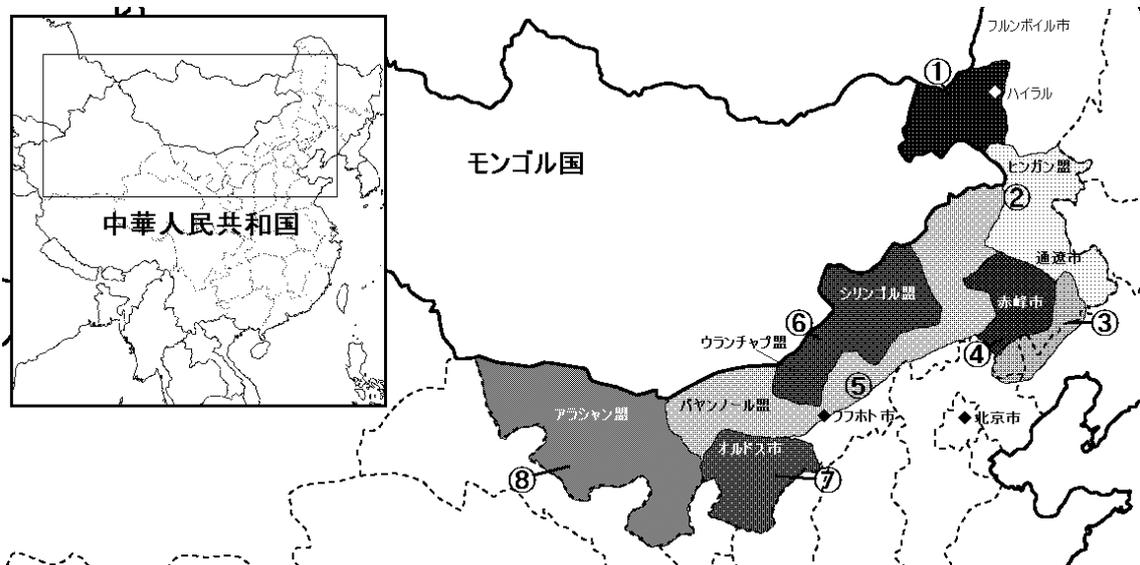


図 1. 内モンゴル諸方言の分布 (栗林 1992 を元に作成)

栗林 (1992) による分類のうち、モンゴル語の東北部方言が図中の①にあたる。以下この言語をバルガ・ブリヤート方言と呼ぶ。モンゴル語の中部方言すなわち内モンゴル諸方言は東北から順に②ホルチン方言、③ハラチン方言、④バーリン方言、⑤チャハル方言、⑥ハルハ方言、⑦オールドス方言、⑧アラシャン方言に分けられる (栗林 1992)。②のホルチン方言は内モンゴルにおける話者数最大の言語であり、通遼市・ヒンガン (興安) 盟を中心とした内モンゴル東北部に 100 万人以上の話者を有する (查干哈达 1996: 1)。

これらの言語の間では時折コミュニケーションに支障が出るほどの言語差がある一方、モンゴル文字による文字言語が共有されており、チャハル方言を標準とした標準音による教育や放送も普及している。また漢語話者も多く、この地域のモンゴル語話者の多くが漢語との二言語併用で生活をしている。

3. 先行研究

本章では、本稿で問題とする =lee に関する先行研究を 3.1. でまとめた後、これと関連する事項を 3.2. で概観する。

3.1. =lee について

=lee という要素に関しては、ホルチン方言の文法記述である查干哈达 (1996)、bayančohdo (2002)、ハラチン方言の下位方言の文法記述であるムンゲンゲレル (2009)、モンゴル語の諸方言に関して広く記述した Janhunen (2012) などと触れられているほか、形式的に類似する

要素を広く考察した芦村 (2002) による考察がある。これらについて 3.1.1. で整理したうえで、当該要素の用法について検討をした山田 (2014) を 3.1.2. でまとめる。

3.1.1. 各先行研究における扱い

查干哈达 (1996: 98-101) は定動詞叙述形の形式を現在未来、過去、未完全過去と分類し、未完全過去 -IAA の形式が否定形式の後ろに用いられ「完全過去時制」を示すとする (例2)。

(2) *šixən tag soṅsxülee.*

šix=n tag soṅs-x-üe=lee.

耳=3SG.POSS at.all to.hear-FUT-NEG=LEE

「耳が全然聞こえなくなった」 (耳朵完全听不见了)

查干哈达 (1996: 101, 漢語訳は原文による)

bayančohdo (2002: 290-296) は定動詞叙述形を三時制・極性により六つに分類し、「未来否定」として -xUə (直接), -UUdee (暫時), -xUəlee (調和) の三つを挙げる。このうち-xUəlee は「-xUe + -lee」に由来し、「もともと行おうとしていた行動またはその時実現しそうだった行為を柔らかく⁴否定する」ものであると説明する (例3)。

(3) *xünees xəjəə absnaan bos müdxülee.*

xün-AAs xəjəə ab-sn-AAAn bos müd-x-üə=lee

person-ABL when to.get-PRF-REF already to.know-FUT-NEG=LEE

「人からいつ貰ったのかももう忘れてしまいました」 (lit. 知らなくなった)

bayančohdo (2002: 292)

ムンゲンゲレル (2009: 138-140) はホルチン方言の下位方言であるナイマン方言について文法記述を行ったもので、この中で漢語の “la (「啦」)” に由来し、形式的に「動詞の過去および完了語尾」と同形に合流したとする要素について扱っている。「これは漢語の「不+動詞+啦」「没有+啦」の影響を受けてつくられたと考える」(ムンゲンゲレル 2009: 139) とし、「ナイマン方言に固有の特徴ではなく、中国領内のモンゴル語諸方言に用いられるが、文語とハルハ方言には用いられない現象である」という指摘をしている (例4, 5)。

(4) *əngəəd joo gəəd joolood bosxülee.*

əng-AAAd joo gə-AAAd jool-AAAd bos-x-üə=lee

to.do.so-ANT ouch to.say-ANT to.say.ouch-ANT to.get.up-FUT-NEG=LEE

「すると{奥さんは}「痛い」と言ってもうめいて起きない」

⁴ 「柔らかく」は *eyerkoo* の訳 (山田 2014)。

(5) *aragt obgən xüüləə-x-üə=lee*.

aragt obgən xüüləə-x-üə=lee
 clever old.man to.excuse-FUT-NEG=LEE

「聡明なお爺さんは許さない」 (ムングゲレル 2009: 139, いずれも訳は原文による)

芦村 (2002: 173-174) はホルチン方言の下位方言であるジャロート方言における一連の形式に関する記述である。格接辞や副動詞接辞などに現れる =lee と同形の形式について広く考察を行い、いずれも共通して「時間」に関する読みが生じることを論じている。=lee の本稿で扱う要素については查干哈达 (1996: 98-101) の見方を踏襲している。ただし後続の否定語は短縮され形動詞接辞-x だけで否定の意を表す (-x-lee となる) という。

Janhunen (2012: 259) は、ハルハ方言で用いられる lee に対応する形式が内モンゴル諸方言において否定述語に後続し「予想外または決定」という意味を表わすとしている。この終助詞的要素は漢語の影響である可能性は否定できないという (Janhunen 2012: 259, 例 6, 7)。

(6) *öö sərjəe jooxən beej beexgüälee*.

öö sərj-AAjooxən bee-j bee-x-güä=lee
 oh PN-EMPSmall to.be-SIM to.be-FUT-NEG=LEE

「ああスルジ、もう小さくなくなったね」

(7) *öör xün duud-x xərəg-güü=laa*.

öör xün duud-x xərəg-güü=laa
 otherperson to.call-FUT matter-NEG=LEE

「もはや他の人を呼ぶ必要はない」

(Janhunen 2012: 259)

これらの先行研究では、当該形式の解釈や表記等について異なりもあるが、用例 (例 2~6) やその訳を見る限りは同一の要素について言及しているものであると言えよう。その扱いの違いをまとめると次の表 1 のようになる。

表 1: =lee にあたる形式の扱いまとめ

| 先行研究 | 呼称、意味記述 | 扱い ⁵ |
|-------------------|------------|----------------------|
| 查干哈达 (1996) | 完全過去時制 | 動詞語尾が否定形式の後についたもの |
| bayančohdo (2002) | 未来否定調和 | 動詞の変化のパラダイムの一部 |
| ムングゲレル (2009) | - | 漢語由来で動詞語尾との区別は困難 |
| 芦村 (2002) | - | 格接辞や副動詞接辞などと同列のもの(?) |
| Janhunen (2012) | 「予想外または決定」 | 終助詞 |

⁵ =lee を動詞語尾などと同じものであると分析するには、①この動詞語尾が助動詞的な動詞に付され、②文法化が進み動詞の語幹部分が脱落、③動詞語尾の部分のみが残り接語になる、という史の変遷を経ていると見る必要がある。モンゴル語における否定の *üə* といった要素が名詞類の語に由来し、直接に動詞語尾を接続するとは考えられないためである。

3.1.2. =lee の用法

山田 (2014) では先行研究の記述とハラチン方言の話者からの調査に基づき、=lee の意味と用法について考察した。この要素の「意味の核は「変化」にあり、否定と結びついて「～なくなる／(考えを改めて、やっぱり) ～ない／～ないことにする／もう (これ以上) ～ない」などのような意味を表す」(山田 2014) ことであり、用法は次の表 2 のようにまとめられる。

表 2: 山田 (2014) による =lee の用法

| 先行する要素 | | 後続する要素 |
|--|------|---|
| ○ <u>否定を表す文末表現</u> ⁶ 名詞類述語 bišee 動詞の形動詞形 - 否定語 üə 名詞類- 否定語 üə に由来する形式 | =lee | ○ <u>終助詞的な要素</u> =baa, =šii, =i, =daa など |
| ×否定の表現でも UUdee 「まだ～していない」 のような表現とは共起しない ×肯定の形式には共起しない | × | ×=lee 直前の形式が名詞修飾可能な 形式 (形動詞形、名詞類) であっても =lee がつくると名詞修飾はできない |

=lee に先行しうる要素は否定を表す文末表現である。動詞語尾との境目を曖昧にしている查干哈达 (1996)、bayančohdo (2002)、ムングングレル (2009)、芦村 (2002) らの扱いとはこの点が異なり、終助詞であるとみなす点で Janhunen (2012) の見方に同調する。

3.2. 関連事項

查干哈达 (1996) はこの形式を、定動詞過去の一形式 -IAA と関連するものとして扱っている。またムングングレル (2009) では漢語に由来する形式であるとしている。また言語を越えたこれらの要素を結び付ける橋本 (1978: 57) のような考え方もある。以下では 3.2.1. でモンゴル語の -IAA について、3.2.2. で漢語の 了 について概観する。

3.2.1. モンゴル語の -IAA

モンゴル語では動詞の過去形と呼ばれる形式に -w, -jee, -sAn, -IAA がある。このうち -IAA という形式の意味についてハルハ・モンゴル語では例えば次のような説明がある。

- 1.) 目撃され、近い過去に起こった動作について用いる
 - 2.) 疑問文は縮約形でのみ、「目撃したのに思いだせない」状況で用いられる
 - 3.) 否定文は (中略) 対応する形動詞形で表現されるのが普通である
 - 4.) (前略) 近い未来を表すこともある。(中略) 口語ではこの意味ならば疑問文にも用いられる(後略)
 - 5.) 終助詞を後続させることができる
- Kullmann & Tserenpil (2008: 187)

⁶ =lee などのような要素を伴わずとも文の述語たりうる表現を文末表現と呼ぶ。文末表現に後続する、つまりこれを欠いても文として成り立つような文末の非独立形式を終助詞であるとみなす。

他の記述でも基本的にはこの説明と大体において同様のことが書かれている。4) のような「未来を表す」という特徴については「-jee による近未来テンスも見かけることがある (東京外国語大学言語モジュール) とする記述もあり、この形式特有のものではない。

3.2.2. 漢語の le

まず呂主编 (2005) より漢語の le (「了」) に関する記述をまとめる。

了には2種類ある。了₁は動詞の直後に用いられ、動作の完成を表示する。了₂は文末に用いられ、事態の変化が起こった、あるいは起こることを表示し、文を成立させる機能がある。

呂主编 (2005: 351)

本稿で扱う le はここでいう了₂にあたる。呂主编 (2005) は2種類の le の用法を詳細に列挙しているが、その中でも否定表現と関連して次のような記述がある。否定を表わす語には méi (「没」) と bù (「不」) があるが、le を用いる文を否定表現にするには前者が選ばれやすい。次の説明は否定を表す語として後者 bù が選ばれた場合についての言及の一つだが、この表現が表出する意味は本稿で扱う =lee によく似ている。

否定「不」

(中略) ‘不’ がまず用いられ文末に ‘了₂’ が置かれるもので、意味的には「状況が変わって本来の計画や傾向に変更が生じた」ということを表すものである。

呂主编 (2005: 357)

le の史的変遷に関する研究として竹越 (2002) がある。これは漢語の文末に用いられる le を、漢語の北方方言が反映されているらしい『老乞大』という史料を用いて研究したものである。これによると文末の le は動詞語尾として「完成体」の意味を表す le に由来し、2段階を経て文末の「也」に取って代わる形で成立したのだという (竹越 2002)。竹越 (2002) によれば 14 世紀ごろに用いられていた「也」は已然変化と将然変化の二つの用法があり、16 世紀ごろまでには已然変化の意味で、18 世紀ごろまでには将然変化の意味で「了」に取って代られたと分析する⁷。

4. 問題提起

ムンゲンゲレル (2009) や Janhunen (2012) のようにこの形式が漢語に由来するという指摘もあり、また調査の中でもこの要素について「漢語に由来するのではないか」といった直感を持つ内モンゴル諸方言話者がいた。しかしながら次のような疑問が残る。

⁷ 文末に用いられる「了」という形式そのものは五代南唐の頃から用例が見られるという (孫 1999: 79)。ただしこれが本稿で扱うべき「モンゴル語に影響を与えそうな言語」であるかどうかの判断は難しい。

- ①漢語の由来形式とされる *la* の用法とどれほど類似しているのか。
- ②漢語由来であるならば、漢語の使用される地域すなわち内モンゴル地域全体でこの形式が用いられるのか

そこで本稿では以下、5. で①について、6. で②について検討を試みる。

5. 漢語の *la* との対照

意味的な側面からは =lee と「よく似ている」漢語の *la* について、使われ方の点から =lee の特徴と較べてみる。比較は表 2. を参考とし先行する要素 (5.1.) と後続する要素 (5.2.) という観点から行う。漢語の用例について出典の無いものは筆者作例により、容認度は調査協力者として漢語を母語とする黒龍江省出身の 20 代女性に判断していただいた。

5.1. 先行する要素

5.1.1. 共起しうる要素

まず、3.1.2. の表 2 によれば =lee は否定を表す文末表現の後ろにしか現れない。

◇ 否定を表わす文末表現に後続する =lee

- (1)再掲 否定を表す文末表現 動詞の形動詞形 - 否定語 *üə*

bii ošxüälee.

bii oš-x-üə=lee

1SG to.go-FUT-NEG=LEE

「私は (やっぱり) 行かない / 私は行かないことにした」

山田 (2014)

- (8) *yawj yoroosgüülee.*

yaw-j yoroo-sən-güü=lee

to.go-SIM can-PRF-NEG=LEE

「行くことができなくなった(もともと行こうとしていた)」

山田 (2014)

- (9)否定を表す文末表現 名詞類述語 *bišee*

bii odoo bagš bišeelee.

bii odoo bagš bišee=lee

1SG now teacher not=LEE 「私はもう先生ではない」

山田 (2014)

- (10)否定を表す文末表現 名詞 - 否定語 *üe* に由来する形式

bii ošix sanaagüülee.

bii oš-x sanaa-güü=lee

1SG to.go-FUT feeling-NEG=LEE 「私は行く気がしなくなった」

山田 (2014)

(11) *manee mal ügüilee.*

man-II- ϕ mal ügüi=lee
 1SG-GEN-DAT cow NEG=LEE

「(かつて飼っていたが)うちにはもう牛がない」

山田(2014)

続いて漢語の *le* にも否定表現が先行することを確認する。

否定を表す表現そのものはもちろん漢語とモンゴル語の間で相違がある。そもそも、モンゴル語の場合は否定表現を担う否定要素が文末に来るため、この否定要素と =lee が直接接続されることになる。漢語の否定表現としては否定を表す副詞 *méi* (「没」) や *bù* (「不」) が述語の前に来るため、否定要素と隣接して現れるわけではない。隣接はしないが、*le* は次の例のように否定表現の文末に用いられる (例 12, 13)。

◆ 否定表現に後続する *le*

(12) 任务紧, 明天不休息了

rènwù jǐn míngtiān bù xiūxi lè
 task busy tomorrow NEG to.rest LE

「仕事が忙しいので明日は休みません」

(呂主編 2005: 357)

(13) 进了工厂了, 不上学了

jìn le gōngchǎng le bú shàngxué le
 to.enter LE factory LE NEG to.go.to.school LE

「工場に入ったらもう学校へは行きません」

(呂主編 2005: 357)

これらの例については呂主編 (2005: 357) は 3.2.2. で触れたとおり、「状況が変わって本来の計画や傾向に変更が生じた」という意味であるとしている。

ところで、漢語の *le* は肯定表現とも共起する。次の例 14b は「状況が変わって本来の計画や傾向に変更が生じた」という意味があると解釈される例である。

◆ 肯定表現に後続する *le*

(14) a. 我明天不能去学校了

wǒ míngtiān bù néng qù xuéxiào le
 1SG tomorrow NEG can to.go school LE

「私は明日学校へ行けなくなった」

b. 我明天能去学校了

wǒ míngtiān néng qù xuéxiào le
 1SG tomorrow can to.go school LE

「私は明日学校へ行けるようになった」

しかし *lə* の使用頻度は非常に高く、その用例の中には次の例 15, 16 のように「状況が変わって本来の計画や傾向に変更が生じた」という意味を有しているとは考えにくい例も多い。これらはそれぞれ事態に変化が生じていることを肯定する、変化が完了したことを表す表現であるという。

◆肯定表現に後続する *lə*

(15) 小明也喜欢跳舞了 (已经开始喜欢)

xiǎo míng yě xǐhuān tiào wǔ lə
little PN also to.like to.dance dance LE

「明さんもダンスが好きになった (すでに好きになり始めている)」 (呂主編 2005: 352)

(16) 这地方比以前热闹多了

zhè dìfāng bǐ yǐqián rènao duō lə
this place than before lively much LE

「この土地は以前より賑やかになった」

(呂主編 2005: 354)

これらの例は「変化」という点で =lee と共通しているが、「状況が変わって本来の計画や傾向に変更が生じた」という =lee に似た意味も共有しているかという判断が難しい。=lee とは似ていない機能を持った *lə* もある一方で、例 14b に見たような =lee とよく似た意味を持つ要素が肯定表現と共起することもあるという事実を指摘するに留める。

5.1.2. 共起しえない要素

=lee は否定表現であっても「まだ～していない」という意味にあたる表現とは共起しない (例 17)。こうした意味的な競合による例外を除けば、基本的には肯定表現と共起しない要素であると言いうる (例 18)。

◇ =lee が後続しない表現

(17) -UUdee 「まだ～していない」

*bii badaa id-üüdee=lee

1SG meal to.eat-IMP.NEG=LEE ??「まだ食べていないという状況になった」山田(2014)

(18) 肯定表現

a. *bii oš-x=lee ~ b. *bii oš-n=lee

1SG to.go-FUT=LEE 1SG to.go-NPST=LEE

?? 「私は (行かないつもりだったが) 行くことにした」

c. *dur-tee=lee

d. *bii bagš=lee

favor-PROP=LEE

1SG teacher=LEE

?? 「(もともと嫌いだったが) 好きになった」 ?? 「私は先生になった」 山田(2014)

漢語においても例 17 に見るような意味的な競合による *méi* 「まだ～していない」と *lǎ* の共起は避けられるものと思われる⁸。他方、5.1.1. の例 14 で確認したように漢語では文の肯定・否定に関する共起の制限はあまり無さそうだと言いうる。

5.2. 後続する要素

5.2.1. 共起しうる要素

次に後続しうる要素について概観する。他の終助詞的な要素が後続するという点に関しても両言語の振る舞いは似ているようである (例 19, 20)。ただし当然のことながら、後続する終助詞群の機能や承接関係などはもちろん両言語間で違いがあり、必ずしも同列には扱えない。例えば漢語の *lǎ* が用いられる用例の中には、*lǎ* を取り除くと文として成立しにくくなるものもあるとする報告もある⁹。こうした点についてはさらなる研究が俟たれる。

◇ 他の終助詞が後続する =lee

(19) *šii maatər surguulidaan yawxiǎleeydaa.*

šii maatər surguuli-d-aan yaw-x-üǎ=lee=i=daa
2SG tomorrow school-DAT-REF to.go-FUT-NEG=LEE=Q=PTCL

「明日学校に行かないことにしたんだって？」

山田(2014)

◆ 他の終助詞が後続する *lǎ*

(20) 你明天不能去学校了吧

nǐ míngtiān bù néng qù xuéxiào lǎ ba
2SG tomorrow NEG can to.go school LE PTCL

「君は明日学校へ行けなくなっただろ」

5.2.2. 共起しえない要素

後続できない要素に関しても両言語の振る舞いは似ているようである。モンゴル語の =lee も漢語の *lǎ* もともに後ろに名詞類が来て名詞修飾をすることはできない。文を終止する働きがある、あるいはある種の対人モダリティ的な役割を担っているためであろう。

◇ 名詞修飾できない =lee

(21) a. *ir-x xün* b. *ir-x-üǎ xün*
to.come-FUT person 「来る人」 to.come-FUT-NEG person 「来ない人」

⁸ *méi* は *lǎ* が含まれる文を否定表現にすると用いられるが、この場合 *méi* のみが用いられ *lǎ* は削除される(呂主编 2005: 357)。ただし「捨てる」などのような意味の動詞の場合にはこの限りでなく、また次のような例でも使用可能であるという。好些天没见到张老师了 *hǎo-xiē tiān méi jiàn dào zhāng lǎoshī lǎ* {good-PL day not.yet.to.see to.reach:result.complement PN teacher LE} 「何日も張先生と会っていない」(呂主编 *ibid.*)

⁹ 呂主编 (2005: 351) は *lǎ* が文を成す働きをもつ(「有成句的作用」)としている (cf. 註 6 および 5.2.2.)。

c. *ir-x-üə=lee xün
to.come-FUT-NEG=LEE person^{??} 「来なくなった人」 山田 (2014)

◆ 名詞修飾¹⁰できない la

- (22) a. 能去学校的 b. 不能去学校的
néng qù xuéxiào de rén bù néng qù xuéxiào de rén
can to.go school of people NEG can to.go school of people
「学校に来られる人」 「学校に来られない人」
- c. *不能去学校了的人
bù néng qù xuéxiào la de rén
NEG can to.go school LE of people^{??} 「学校に来られなくなった人」

5.3. 漢語との対照まとめ

5.1.~ 5.2. をまとめると次の表 3. のようになる。表 3. 左に示したような特徴が当てはまれば○、当てはまらなければ×とした。=lee の特徴を基準として la の特徴に×が付された箇所が両形式の相違点ということになる。

表 3: =lee と漢語の la

| | | =lee の特徴 | la の特徴 |
|------|-----------------------|---------------------------|-------------|
| 先行要素 | 否定表現とのみ共起し、肯定表現と共起しない | ○ | × |
| 後続要素 | 「まだ～していない」という表現と共起しない | ○ -UUdee | ○ méi |
| 後続要素 | 他の終助詞的な要素を後続させられる | ○ =baa, =šii, =i, =daa... | ○ ba, ma... |
| 後続要素 | 名詞修飾できない | ○ | ○ |

表 3. la の特徴を見ると 4 項目中 3 つが○であり、とくに後続要素に基づく特徴の共通性は終助詞的な性質を共有していることをうかがわせる。しかし先行する要素を見ると、漢語 la は否定を表す文末表現に限らず肯定表現とも広く用いられるという点で大きく異なる。

6. =lee が用いられる地域

すでに指摘されているように、=lee は内モンゴル地域において広く用いられ、モンゴル国のモンゴル語などでは使用されない。その実態について調べるために、簡単なアンケート調査を行った。調査にあたっては、次の図 2 で示す地点 (おおよその場所を図中の◎または丸つき数字で示した) 出身の 20 歳代男女の話者に一人ずつ協力していただいた。⑧アラシャン方言については調査が行えなかった。比較のために①バルガ・ブリヤートおよびモン

¹⁰ 漢語の名詞修飾節は形容詞などと同じく被修飾語の前に置かれ、節の末尾に名詞修飾であることを示すマーカー de が現れる。

ゴル国にて行われるハルハ・モンゴル語 (図中の◎) についての調査を加えた。

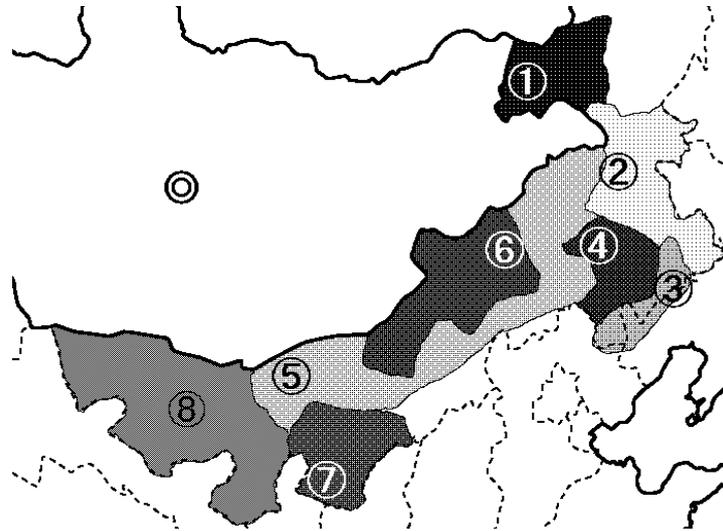


図 2. 調査協力者の出身地

アンケートの内容は次のような問いで、漢語または日本語を用いて調査した。

☆「明日はもともと学校へ行く予定であったが、急用ができて行けなくなった。このことを同郷の友達に伝えるとき、何と言うか」

☆「*bii ošxüalee./ bii ošj diirxüalee.* という表現を使うか」

bii oš-x-üə=lee / *bii oš-j diir-x-üə=lee*
 1SG to.go-FUT-NEG=LEE 1SG to.go-SIM can-FUT-NEG=LEE

調査の結果は次の表 4. の通りである。=lee にあたる表現を用いるものに ○ を付し、用いないものに × を付した。それぞれ特記すべき事項があれば付記した。

表 4: =lee の使用の分布 (「*bii ošxüalee./ bii ošj diirxüalee.* という表現を使うか」)

| 方言 | 調査協力者の出身地 | 使用の可否 |
|------------|---------------|-----------------|
| ◎ハルハ | モンゴル国ウブスハンガイ県 | × |
| ①バルガ・ブリヤート | フルンボイル市新バルガ右旗 | × 同地域のホルチン話者は使う |
| ②ホルチン | ヒンガン盟満族屯 | ○ |
| ③ハラチン | 通遼市フレー旗 | ○ |
| ④バーリン | 赤峰市バーリン右旗 | ○ |
| ⑤チャハル | バヤンノール市オラド | ○ =laa という形式である |
| ⑥ハルハ | シリンゴル盟シリンホト | ○ =laa という形式である |
| ⑦オルドス | オルドス市オトク前旗 | ○ |

この調査では①のバルガ・ブリヤート方言を除き、=lee が内モンゴル地域において広く用いられるらしいことが明らかになった。調査の過程で上記の表に含まれない複数のホルチン方言の話者にも同様のアンケートを行ったが、アンケート後に =lee に関する調査であったことを告げると「これはホルチン方言特有の表現である」というようなコメントが得られた。しかし上の表の通り、必ずしもホルチン方言に限られた現象ではないことがわかる。

また「ホルチンの民謡にもこの表現は出る」という情報も得られた。実際の民謡は得られなかったが、この地域において比較的古くから用いられていた表現であることを示すものだろうか。同じハルハと呼ばれる方言でも、モンゴル国で行われるものと内モンゴルで行われるものとで違いが出たことも重要である。

なお、この①のバルガ・ブリヤート方言の話者の回答や、その他調査協力者により正式な／文語調の表現であるとして得られた回答は、皆 =lee の代わりに bol「なる」という動詞が用いられるものであった。意味的には bol「なる」に通ずるものであること、=lee が口語的な表現であると認識されていることなどがうかがえる。

7. おわりに

モンゴル語内モンゴル諸方言で用いられる =lee には漢語の le とよく似た用法があるが、否定表現においてのみ使われるという点が異なる。それでも =lee が内モンゴル諸地域において広く用いられ、モンゴル国のモンゴル語で用いられないことを考えると、内モンゴル地域における上層語である漢語からの影響であるという仮説を立てる十分な根拠になる。

この要素が漢語からモンゴル語内モンゴル諸方言に入ったものであるとしても、これが否定表現とのみ共起する理由については説明が不十分である。6. で触れたようにこの表現が bol「なる」によってパラフレーズ可能であることも考慮する必要がある。否定表現に関する通言語学的な考察も視野にいれるべきだろう。

文末に用いられる漢語の le の成立の過程が関わっている可能性もあるが、竹越 (2002) が分析したデータを見る限りでは否定表現に現れる le の用例が多くなく、判断しがたい。逆にモンゴル語から漢語へ影響を与えた可能性なども興味深い課題であるが、口語的な表現とされる =lee について史的変遷を追求するのはやはり困難があるだろう。

それぞれの意味の違いについてもまだ検討の余地があり、他の終助詞的要素や漢語からの影響であると考えられる要素についても体系的に観察していく必要があるだろう。これらについては今後の課題である。

略号一覧

| | | |
|-------------------------------|-----------------------|---------------------|
| - 接辞境界 | FUT future 未来 | PRF perfective 完了 |
| = 接語境界 | GEN genitive 属格 | PROP proprietive |
| 1 1 st person 1 人称 | IMPF imperfective 未完了 | 被所有形容詞 |
| 2 2 nd person 2 人称 | NEG negative 否定 | PTCL particle 小辞 |
| ABL ablative 奪格 | NPST non-past 非過去 | Q question 疑問 |
| ANT anterior 先行 | PL plural 複数 | REF reflexive 再帰 |
| DAT dative-locative 与位格 | PN proper name 固有名詞 | SG singular 単数 |
| EMP emphatic 強調 | POSS possessive 所有 | SIM simultaneous 同時 |

参考文献

- 芦村京 (2002) 「モンゴル語ジャロート方言の “-le:” について」東京大学人文社会系研究科・文学部 言語学研究室『東京大学言語学論集』21 147-200
- byančohdo (2002) *horčin aman ayalgon-o sodolol kukehoda: ubor monkol-on yeke sorgagoli-iin keblel-on horiiA*
- 查干哈达 (1996) 『蒙古语科尔沁土语研究』北京: 社会科学文献出版社
- 橋本萬太郎 (1978) 『言語類型地理論』東京: 弘文堂
- Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian* London Oriental and African Language Library 19 Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company
- Kullmann, Rita & Dandii-Yadamyn Tserenpil. (2008) *Mongolian Grammar* Forth revised edition Ulaanbaatar: ADMON Co.,Ltd
- 栗林均 (1992) 「内蒙古語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』pp1426-1434 東京: 三省堂
- 吕叔湘主编 (2005) 『现代汉语八百词』增订本 第14刷 北京: 商务印书馆
- ムングゲレル, ウ (2009) 『ナイマン方言の研究』東京: 駱駝社
- sečenbagador (erkilen naiiragolba) (2005) *monkcol kelen-o nodoh-on ayalgon-o sinjilel-on odoridhal. kukehoda: ubor monkol-on arad-on keblel-on horiy_a*
- 孙锡信 (1999) 『近代汉语语气词 -汉语语气词的历史考察』北京: 语文出版社
- 竹越孝 (2002) 「从《老乞大》的修订来看句尾助词“了”的形成过程」『中国語学』249号 42-60
- 山田洋平 (2014) 「内モンゴルのモンゴル語諸方言に見られる終助詞 =lee について」日本言語学会第149回大会 70-75
- 山越康裕 (2005) 「シネヘン・ブリヤート語の借用に見られる諸特徴について」津曲敏郎編『環太平洋の言語』第12号 北海道大学大学院文学研究科 185-205
- 東京外国語大学語学モジュール > モンゴル語 > 文法モジュール「テンス(4) 非過去」
<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/mn/gmod/contents/explanation/036.html> (2015/10/31 確認)

“Negative + =lee” formation in the Mongolian spoken in Inner Mongolia

A Comparison to “le” in Mandarin Chinese

YAMADA Yohei

An enclitic “=lee”, meaning “change of a state,” is used in the Mongolian spoken in the district of Inner Mongolia. My previous study argued that this enclitic is used directly after negative polarity elements and represents “to behave in contrast to how one acted previously,” “not to do so after changing one’s plan or will,” “to decide not to do,” or “to no longer do.” This paper has a two-fold objective. The first objective is to point out the distribution of the places in which this element is used, and the other is to indicate the similarity between the element “=lee” in Mongolian and the terminal particle “le” in Mandarin Chinese. The “negative + =lee” formation is detected in almost the entire district of Inner Mongolia, barring Barga Buryat. However, the formation is never used by the Khalkha Mongols in Mongolia. This distribution suggests that this enclitic element is strongly related to Mandarin Chinese. The terminal particle “le” in Mandarin Chinese represents the statement of the sentence being referred to as a result of the changing state. From this viewpoint, both “=lee” and “le” appear to be similar, but the former is only used in the formation of negatives, whereas the latter is not restricted to negatives.

The 'be + p.p.' Construction in Irish

Leo YAMADA

(Doctoral Course, Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Irish, Goidelic, passive, ergative, perfect

0. Introduction

In Irish¹¹, there are several passive-like constructions.

Among these, the following three constructions seem to be considered as major ones (named by Nolan (2006):

- The Impersonal Passive (e.g. *-tar / -tear* in the habitual present tense)
- The Perfective¹² Passive (*tá* 'be' + verbal adjective)
- The Progressive Passive (*tá* 'be' + *a* 'his / her / their' + verbal noun)

In this paper, I will consider the second one, *the Perfective Passive*, which has been studied in several ways. This construction, called 'passive' in some studies, seems to have a problem on the point of whether or not it is truly 'passive'.

It is expressed with the substantial verb *bí* 'be' (*tá* in the present tense) and verbal adjective (past participle) and exemplified like (1) and (2) (note that in all of the examples, the symbols S, A and P and the text effects are added by me):

- 1) *Tá* an leabhar_P *léite* agam_A
 be.PRS DEF.M.NOM book.M.NOM read.PP at+I.SG
 'I_A *have* the book_P *read*.'

- 2) *Tá* sé_S *imithe*
 be.PRS he.SG.CNJTV¹³ leave.PP
 'He_S *is gone* off'

[Ó Siadhail (1989: 299-300), with his translations]

¹¹ Indo-European, Celtic, Insular, Goidelic; with 138,000 speakers in Ireland (Ethnologue). The typological characteristics are: the basic word order is VSO; the adjective is placed after the noun which it modifies; it has an inflectional morphology.

¹² It seems that they use the term *perfective* simply as an adjective form of the noun *perfect*, not as *perfective aspect*.

¹³ The *conjunctive* form (CNJTV) is a form of personal pronouns which is placed just after the finite verb, while the *disjunctive* form (DSJTV) elsewhere. In most cases, this distinction corresponds to that of nominative (conjunctive) / accusative (disjunctive).

Ó Siadhail (1989) calls this construction *passive perfective aspect*, so that the example (1) can be translated as ‘The book_P *is read* by me_A’. There are, however, two cases in which this construction is used, i.e. you can see a transitive verb *léite* (< *léigh* ‘read’) in (1), while an intransitive verb *imithe* (< *imigh* ‘leave’) in (2). In this paper, I would like to reveal its function with the corpus available on the Internet.

With the terms *subject* (S), *agent* (A) and *patient* (P), I mean *semantically* the *subject* in the intransitive notion, the *agent* in the transitive notion and the *patient* in the transitive notion respectively. In addition, words in **bold** and *italic* indicate a verbal phrase concerned, underlined an agent or a subject and placed in a rectangle a patient, *semantically* again. Furthermore, Ø ‘zero’ denotes a deleted (not appeared) element.

For the sake of simplicity, I will use the term *past participle* (*p.p.*, and *PP* in the gloss) for the *verbal adjective*. The other terms typical to the Irish language, the Goidelic languages or the Celtic languages follow Ó Siadhail (1989) and translations in my survey and all the glosses are responsible to me.

1. Preceding Studies

1.1. Overview

Constructions like (1) and (2) have been described in various ways. Ó Sé (1992) summarised some interpretations which had been done since 1966 as following:

- (i) perfective (in the Slavic sence)
- (ii) completive
- (iii) stative / perfective passive
- (iv) passive perfective aspect
- (v) ergative

(i) and (ii) have to do with mainly an *aspect*, while the (iii) and (iv), which have a lot in common, and (v) include a *syntactic* analysis for which I aim in this paper, so that I would like to argue the last two. That is, in following sections, I will give a brief summary about analyses of (iv) *the passive perfective aspect* and (v) *the ergative*.

1.2. The Perfective Passive

As mentioned above, Ó Siadhail (1989) calls this construction *the Perfective Passive* and claims that it corresponds to the *perfective active* construction with *tar éis* or *i ndiaidh*, both of which mean ‘after’, like (3):

- 3) *Tá* mé_A { *thar éis*¹⁴ / *i ndéidh*¹⁵ } an leabhar_P a *léamh*
 be.PRS I.SG.CNJTV after DEF.M.NOM book.M.NOM to read.VN.M.NOM
 'I_A *have* just *read* the book_P'

[Ó Siadhail (1989: 299)]

He pointed out that from the sentence in (1), the agent can be deleted, as exemplified in (4):

- 4) *Tá* an leabhar_P *léite* Ø_A
 be.PRS DEF.M.NOM book.M.NOM read.PP (at+Ø)
 'The book_P *is read* (by Ø_A)'

[Ó Siadhail (1989: 299)]

He also pointed out that this construction can be derived from intransitive verbs, as (2) (already mentioned above):

- 2) *Tá* sé_S *imithe*
 be.PRS he.SG.CNJTV leave.PP
 'He_S *is gone* off'

[Ó Siadhail (1989: 300)]

This construction seems to be a passive one with intransitive verbs. The intransitive passive can be found in some languages like German in (5):

- 5) de. Gestern *wurde* *getanzt*
 yesterday become.IND.PST.3SG dance.PP
 'Yesterday there *was dancing*'

[Keenan and Dryer (2007: 346)]

Passive constructions with intransitive verbs are described in Keenan and Dryer (2007) like following:

[...] many languages with basic passives allow the passive morphology to apply to intransitive verbs as well. For example, just as from *amare* 'to love' in Latin we form *amatur* 'he is loved', from *currere* 'to run' we form *curritur* 'it is run' in the sense 'there is running going on, running is being done'.

[Keenan and Dryer (2007: 332)]

¹⁴ Dialectal Variation.

¹⁵ Dialectal Variation.

This explanation can be applied to the German example (5) above with an unspecified agent and without any overt subjects, but it seems to be very different from the Irish example (2), where the agent is specified and a grammatical subject is given. In other words, in German, this construction is an *impersonal passive*, but contrary to that, in Irish, this is a *personal* one.

The Irish language has another construction for the *impersonal passive*, which is expressed by the conjugation of so-called *autonomous form* (e.g. *bristear* ‘there is broken’ < *bris* ‘break’) and clearly, this passive-like construction with intransitive verbs like (2) is *not* the passive and simply denotes an action which has been already done.

In addition to this, Ó Siadhail (1989) says that some verbs can be used either *transitively* or *intransitively*, i.e. in some cases the object can be deleted like (6) according to the context, and that when such a clause is rendered into the construction concerned in this paper like (6’), there will be some ambiguity of interpretation:

- 6) *D’ith* sé_A (é)_P → 6’) *Tá* sé_{A/P} *ite*
 eat.PST he.SG.CNJTV (he.SG.DSJTIV) be.PRS he.SG.CNJTV eat.PP
 ‘He_A *has eaten* (it)_P’ ‘(It)_P *is eaten* (by Ø)_A / He_A *has eaten* (Ø)_P’
 [Changed partly from Ó Siadhail (1989: 300)]

(6) is an unmarked construction in Irish, which has a VS(O) word order. However, according to Ó Siadhail (1989), when this is rendered like (6’) without a prepositional agent phrase (e.g. *aige* ‘by him’), the only argument *sé* ‘it / he’ can be interpreted as both P and A. This is visually illustrated with following two different constructions:

- 6a) *D’ith* sé_A (é)_P
 eat.PST he.SG.CNJTV he.SG.DSJTIV
 ↙ ↘
 6’a) *Tá* sé_P *ite* Ø_A
 be.PRS he.SG.CNJTV eat.PP (at+Ø)
 ‘(It)_P *is eaten* (by Ø)_A’
- 6b) *D’ith* sé_A (é)_P
 eat.PST he.SG.CNJTV (he.SG.DSJTIV)
 ↓
 6’b) *Tá* sé_A *ite*
 be.PRS he.SG.CNJTV eat.PP
 ‘He_A *has eaten* (Ø)_P’
 [Changed partly from Ó Siadhail (1989: 300)]

In (6a) the *grammatical object* appears, and in (6’a) it is promoted to the *grammatical subject* (i.e. placed just after the verb) and the original subject is demoted (here, rather deleted). To the contrary, in (6b) the *grammatical object* does not appear and the *grammatical subject* remains the *grammatical subject* even in (6’b).

1.3. The Ergativity

Some linguists analyse this construction in Irish as the *ergativity* in the *perfective* aspect.

The basic word order in Irish is VSO, where the subject is placed just after the verb and the object follows. As for nouns, the grammatical subject and the direct object are morphologically unmarked and distinguished only by the word order.

However, according to this analysis, like Noonan (1994), the different system of the case alignment can be seen between the *imperfective* aspect in (7a) and the *perfective* in (7b):

- 7a) **Chonaic** an garraíodóir_A an gadhar_P.
 see.PST DEF.M.NOM gardener.M.NOM DEF.M.NOM dog.M.NOM
 'The gardener_A saw the dog_P'
- 7b) **Bhí** an gadhar_P **feicthe** **ag** an ngarraíodóir_A
 be.PST DEF.M.NOM dog.M.NOM see.PP at DEF.M.NOM gardener.M.NOM
 'The gardener_A had seen the dog_P'

[(7b) from Noonan (1994: 297), (7a) is transformed from (7b)]

In (7a), the agent *an garraíodóir* 'the gardener' occupies the verb-after (i.e. subject) position and the patient *an gadhar* 'the dog' follows it. In contrast, in (7b), the patient is placed just after the verb with the subject function, and the agent is demoted to the oblique, the prepositional phrase.

With intransitive verbs as well, this analysis as the *ergativity* seems to be the case, as shown by example (8):

- 8) **Tá** na mic léinn_S **imithe** **abhaile** **ar** **saoire**
 be.PRS DEF.PL.NOM son.PL.NOM learn.VN.M.GEN leave.PP home on feast.F.NOM
 na Cásca
 DEF.F.GEN Easter.F.GEN
 'The students_S had gone home for Easter'

[Noonan (1994: 297)]

Here, the argument just after the finite verb *na mic léinn* 'the students' is very different from that in (7b) regarding its semantic role. This system can be formularised like following:

Table1: The Irish Split Ergativity

| | transitive | intransitive |
|---------------|--|----------------------------|
| Imperfective: | V + <u>A</u> + <u>P</u> | V + <u>S</u> |
| Perfective: | V + <u>P</u> + <i>p.p.</i> + [<i>ag</i> 'at' + A] | V + <u>S</u> + <i>p.p.</i> |

[Summarised from Noonan (1994: 296-297)]

2. Questions

Then, *which analysis is suitable to describe the Irish ‘be + p.p.’ construction?*

If the first – the analysis as *the perfective passive aspect* is suitable, two different constructions in the single morphosyntactic instance ‘be + p.p.’ have to be distinguished: one of these denotes *the passive perfective* (transitive) and the other *the active perfective* (intransitive).

However, as mentioned a bit in Ó Sé (1992), this contrast of meaning itself is not so surprising. Other languages in Western Europe, like French, Italian, German, etc. have contrasts like this, exemplified in French (9) (*être* ‘be’ + p.p.) and in German (10) (*sein* ‘be’ + p.p.):

9a) fr. Il_S *est* *parti*
 he.SG.NOM be.IND.PRS.3SG depart.PP.M.SG
 ‘He_S *has departed*’ (perfect)

9b) Le fer_P *est* *attiré* par l’aimant_A
 DEF.M.SG iron.M.SG be.IND.PRS.3SG attract.PP.M.SG by DEF.M.SG magnet.M.SG
 ‘The iron_P *is attracted* by the magnet_A’ (passive)

[Tamura et al. (eds.) (2005: 785)]

10a) de. Er_S *ist* nach Hause *gegangen*
 he.SG.NOM be.IND.PRS.3SG to house.M.DAT go.PP
 ‘He_S *has gone* home’ (perfect)

10b) Das Geschäft_P *ist* schon seit einer Stunde *geöffnet*
 DEF.N.NOM shop.N.NOM be.IND.PRS.3SG already since one.F.DAT hour.F.DAT open.PP
 ‘The shop_P *has been* already *opened* since one hour’ (stative passive)

[Zaima (ed.) (2003:1105)]

In these languages, the ‘be + p.p.’ construction has two functions: the one, in (9a) and (10a), is the auxiliary verb of *the perfect aspect* with some intransitive verbs, especially denoting actions of movement, changing, appearance, etc., while others take the *have* verb as the auxiliary; the other, (9b) and (10b) is *the (stative) passive* marker.

Has Irish also these usages of the auxiliary? Even so, in Irish, they are overlapped to some degree so that the ambiguity arises (as the pair of translations in (6’) shows), while in other languages like French, Italian, German, etc. they are clearly separated according to the verb type.

At least, it is very problematic that Ó Siadhail (1989) calls this construction *the perfective passive aspect*.

Then, how is the second one – the explanation of *the ergativity*?

Taking intransitive examples like (2) into consideration, this is more likely to be the case. However, on patientless examples like (6) below (already mentioned), which are still problematic, Noonan (1994) does not mention to it, nor cite any example.

- 6) *D'ith* $\underline{sé}_A$ ($\underline{é}_P$) \longrightarrow 6') *Tá* $\underline{sé}_{A/P}$ *ite*
 eat.PST he.SG.CNJTV (he.SG.DSJTIV) be.PRS he.SG.CNJTV eat.PP
 'He_A *has eaten* (\underline{it}_P)' 'It_P *is eaten* (by \emptyset_A) / He_A *has eaten* (\emptyset_P)'
 [Changed partly from Ó Siadhail (1989: 300)]

Both two interpretations seem to have a problem.

Even when the *patient* is deleted from the surface structure as in (6), I think that the grammatical subject *sé* 'he' will remain an *agent*, so that the whole clause remains a *transitive* clause in the underlying structure. And, transforming (6) into (6'), is not the *agent* to be deleted or demoted? Even more, does such an example truly exist?

In order to consider by which analysis the Irish 'be + p.p.' construction can be explained more properly, I will carry out the research in the next section.

3. Research

3.1. Methodology

This time, I use the corpus available on the Internet *Nua-Chorpas na hÉireann* (The New Corpus for Ireland), which contains 30 million words (no further information cannot be found because of the dead link).

The data I used here are limited only to the texts written *by native speakers* and *originally in Irish* (i.e. not by translation). Concerning dialectal variations, there is no option of *Standard*, so that some dialects are included.

Using this online corpus, I have searched the following two *p.p.* forms *ite* 'eaten' (< *ith* 'eat') and *ólta* 'drunk' (< *ól* 'drink'), in order to observe the situation surrounding examples such as (6). From the data retrieved, I have extracted those examples where the substantial verb *bí* 'be' appears in the finite form (i.e. the verbal noun is excluded).

After that, I have categorised them according to their constructions: *whether or not agentive prepositional phrases were used* and *what kind of nouns appeared in the subject position*.

Then, I will give the data retrieved from this research in the following section.

3.2. Result

Table 2 below presents the frequency concerning the co-occurrence with prepositional agent phrases:

Table 2: The co-occurrence with agentive prepositional phrases

| | <i>ite</i> ‘eaten’ | <i>ólta</i> ‘drunk’ | total |
|-------------|--------------------|---------------------|-------|
| with AGT | 145 | 186 | 331 |
| without AGT | 38 | 12 | 50 |
| total | 183 | 198 | 381 |

As a result, the great majority of examples show co-occurrence with prepositional agent phrases (and this tendency is much stronger in *ólta* ‘drunk’).

In addition, I have classified these prepositional agent phrases according to the person and the number, as following Table 3:

Table 3: The person and the number of prepositional agent phrases

| | <i>ite</i> ‘eaten’ | | | <i>ólta</i> ‘drunk’ | | | total | | |
|-------|--------------------|-----------|-----------|---------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| | SG | PL | total | SG | PL | total | SG | PL | total |
| 1ST | 21 | 11 | 32 | 35 | 14 | 49 | 56 | 25 | 81 |
| 2ND | 6 | 0 | 6 | 10 | 0 | 10 | 16 | 0 | 16 |
| 3RD | 64 | 43 | 107 | 86 | 41 | 127 | 150 | 84 | 234 |
| total | 91 | 54 | 145 | 131 | 55 | 186 | 222 | 109 | 331 |

As you can see, the use of the first person is quite often, 22.1% for *ite* ‘eaten’ and 26.3% for *ólta* ‘drunk’, 24.5% as a whole. This frequency of the first person may reflect the true function of the ‘be + p.p.’ construction in Irish, i.e. it may not be the *passive perfective aspect*, but the *ergative* (however, a further study on the frequency of the person in the passive construction is required).

Table 4 below presents the categorisation of nouns appeared in the grammatical subject position. Here, ‘food / drink’ includes some concrete food to eat or beverage to drink, like *arán* ‘bread’, *tae* ‘tea’, *bricfeasta* ‘breakfast’ etc., and ‘quantity’ includes some terms which can be used a unit to measure the quantity of food or beverage, like *dóthain* ‘enough (noun)’, *braon* ‘drop’ or, even as a concrete item like *buidéal* ‘bottle’, etc. In the final column, ‘others’ include some examples difficult to classify, which are not considered in this paper.

Table 4: Categorisation of nouns in the subject position

| | <i>ite</i> 'eaten' | <i>ólta</i> 'drunk' | total |
|--------------|--------------------|---------------------|-------|
| food / drink | 71 | 27 | 98 |
| quantity | 60 | 141 | 201 |
| human | 0 | 2 | 2 |
| pronoun | 34 | 11 | 45 |
| no subject | 10 | 8 | 18 |
| others | 8 | 9 | 17 |
| total | 183 | 198 | 381 |

Here, there is a gap between the two verbs: for *ite* 'eaten', the most frequent one is 'food / drink' and the second is 'quantity'; in contrast, for *ólta* 'drunk', they are reversed, and furthermore, there is a quite strong tendency toward 'quantity'. They two, however, can be seen as the patient in clauses concerned here (but note that this classification seems to be a little doubtful for its difficulty of judgement).

Now, I would like to consider the data in detail in the next section.

3.3. Consideration

In the following part, the English translation is responsible to me, in which I use the English 'have + been + p.p.' (*perfect passive*) construction for convenience.

i) 'food / drink'

In (11) and (12) you can see the grammatical subject as concrete entities to eat or to drink:

- 11) Nuair a *bhí* an príomhbhéile_P *ite*, tháinig an
 when REL.DIR be.PST DEF.M.NOM main_meal.M.NOM eat.PP come.PST DEF.F.NOM
 mhilseog.
 dessert.F.NOM

'[When the main meal_P *had been eaten*,] the dessert came'

- 12) agus nuair a *bhí* an tae_P *ólta*_P *acu*_A tháinig
 and when REL.DIR be.PST DEF.M.NOM tea.M.NOM drink.PP at+they.PL come.PST
 beirt fhear thart le huisce beatha,
 two_people.F.NOM man.PL.GEN over with water.M.NOM life.F.GEN

'and [when the tea_P *had been drunk* by them_A] two men came over with whiskey,'

These examples have not any (or at least, few) problems. Grammatical subjects appeared in

such clauses can easily identified as a *patient*, even though there is no overt agent like (11), because *the main meal* or *the tea* does not eat or drink something by itself. 71 / 183 (38.8%) of the examples for *ite* ‘eaten’ and 27 / 198 (13.6%) for *ólta* ‘drunk’, and 98 / 381 (25.7%) as a whole in my corpus have such a semantic feature, (i) ‘**food / drink**’.

ii) ‘**quantity**’

In the following examples (13) and (14), the grammatical subjects as ‘quantity’ are found:

- 13) Nuair a **bhí** a ndóthain _P **ite** acu _A agus iad
 when REL.DIR be.PST their.POSS sufficiency.F.NOM eat.PP at+they.PL and they.PL.DSJT
 luite ansúd ar an easair,
 lie.PP yonder on DEF.F.NOM bedding.F.NOM
 ‘[When their sufficiency _P **had been eaten** by them _A] and they had lied yonder on the bedding’

- 14) Níl a fhios agam cá mhéad deochanna _P
 NEG+be.PRS his.POSS knowledge.M.NOM at+I.SG what+his.POSS many.M.NOM drink.PL.NOM
 a bhí ólta agam _A; ¹⁶
 REL.DIR be.PST drink.PP at+I.SG
 ‘I don’t know [how much drink _P **had been drunk** by me _A]’

These examples also have not any problems to analyse. This is, again, because *their sufficiency* or *the unknown quantity of drink* does not eat or drink something by itself. 60 / 183 (32.8%) of the examples for *ite* ‘eaten’ and 141 / 198 (71.2%) for *ólta* ‘drunk’, and 201 / 381 (52.8%) as a whole in my corpus have such a semantic feature, (ii) ‘**quantity**’. The inequality of occurrence between the two verbs may reflect the pragmatic situation surrounding them: it seems to be more likely to say, ‘I have *drunk* too much’ than to say ‘I have *eaten* too much’, or something.

Both (i) and (ii) above are normally understood as a patient (possibly with few exception, of course). Unifying these two types, 131 / 183 (71.6%) of the examples for *ite* ‘eaten’, 168 / 198 (84.8%) for *ólta* ‘drunk’ and 299 / 381 (78.5%) as a whole, are found in this survey. It is found that the verb-after position (= the grammatical subject) of the ‘be + p.p.’ construction is very likely to be filled with a *patient*.

¹⁶ In Irish, the interrogative pronoun has to be placed in the beginning and requires, whether the question is *direct* or *indirect*, the *relative* clause construction which is realised by a relative particle before a verb:

i) Cá mhéad míle a shiúil tú?
 what+his.POSS many.M.NOM mile.M.NOM REL.DIR walk.PST thou.SG.CNJTV
 ‘How many miles did you walk?’

[An example from Ó Dónaill (1977), ‘cá’]

Regarding the use where the patient of the 'be + p.p.' construction is a **(ii) 'quantity'**, Ó Sé (1992) gives us a remarkable explanation, with the following examples from an advertisement of Radio about a landrover for sale (= *sí* 'she' in the examples) (15) and a plain expression corresponding to it (16):

15) *Tá* seachtó míle míle_P *déanta* aici_A
 be.PRS seventy thousand.M.NOM mile.M.NOM do.PP at+she.SG
 'She_A *has done* seventy thousand miles_P'

16) *Rinne* sí_A seachtó míle míle_P
 do.PST she.SG.CNJV seventy thousand.M.NOM mile.M.NOM
 'She_A *did* seventy thousand miles_P'

[Ó Sé (1992: 59)]

This conveys that the vehicle has accumulated the mileage in question and continues to run normally. The past tense (16) would be more suitable for referring to a vehicle which was no longer being driven (...)

This is much the same contrast as that between the (resultative) perfect and past tense in English; the perfect expresses the continuing relevance of a previous event or action.

[Ó Sé (1992: 59); the number is changed by me]

The continuing relevance discussed here is to be considered in the future, but a patient categorised as **(ii) 'quantity'** in this paper should have something to do with the explanation of Ó Sé (1992). This time, at least, it is found that nouns of 'quantity' are preferable as the grammatical subject of this construction.

iii) 'human'

There are only two examples where the grammatical subject is apparently categorised as 'human', as following:

17) Is minic a bhí an t-ádh ar an
 be.COP.PRS.REL.DIR often REL.DIR be.PST DEF.M.NOM luck.M.NOM on DEF.M.NOM
bhfean_{A/P} a *bhí ólta*.
 man.M.NOM REL.DIR be.PST drink.PP
 'It is often [that the man_A who *had drunk*] had the luck' /
 ?? 'It is often [that the man_P who *had been drunk*] had the luck'

- 18) Duine_{A/P} nach *bhfuil ólta* tá sé ar a chiall.
 person.M.NOM REL.DIR.NEG be.PRS drink.PP be.PRS he.SG.CNJTV on his.POSS sense.F.NOM
 ‘[A person_A who *has not drunk*] he is in his sense’ /
 ?? ‘[A person_P who *has not been drunk*] he is in his sense’

In these examples, there is no overt agent and the grammatical subjects (*ar an bhfear* ‘(on) the man’ in (17) and *duine* (18) appear, both of which are placed in superordinate clauses as antecedents. Superficially, it is quite difficult to predict their semantic roles, however, a situation like ‘someone is drunk by something’ is very bizarre (of course, such a context can be made, e.g. as a metaphor), so these two, normally, can be understood as an agent of each examples, without ambiguity.

More simply, in these two examples, the past participle *ólta* ‘drunk’ seems to function as an adjective derived from the verb *ól* ‘drink’, which is similar to that of English. In addition to that, there is no example of *ith* ‘eaten’. These situations may suggest that a human subject is not permitted in the ‘be + p.p’ construction in Irish (on which, however, further studies are to be done).

Concerning these (i) - (iii) above, it can be predicted whether they are an agent or a patient, according to their status of animacy. The function of the next one, however, cannot be easily identified.

iv.) ‘pronoun’

Here I will argue some cases where the pronoun appears in the subject position. In these cases, a sort of ambiguity may arise, as following:

- 19) (...) nuair a chuaigh mé á lorg an lá
 when REL.DIR go.PST I.SG.CNJTV to+his.POSS trace.M.NOM DEF.M.NOM day.M.NOM
 eile *bhí* sé_P *ite* ag na lúcha_A
 other.M.NOM be.PST he.SG.CNJTV eat.PP at DEF.PL.NOM mouse.PL.NOM

‘(...) when I went to look for it the other day [it_P *had been eaten* by the mice_A]’

- 20) D’fhéadfadh sé a bheith contráilte go leor nuair a
 can.COND he.SG.CNJTV his.POSS being.VN wrong PART plenty when REL.DIR
bheadh sé_{A/P} *ólta*
 be.COND he.SG.CNJTV drink.PP

‘He could be wrong enough [when he_A *would have drunk*]’ /

?? ‘He could be wrong enough [when it_P *would have been drunk*]’

Pronouns have no distinction between animate / inanimate reference in Irish (cf. *he/she* vs. *it* in English), and it is difficult to predict their semantic role, an *agent* or a *patient*. In (19), however, the

presence of an overt agent *ag na lúcha* 'by the mice' shows that the grammatical subject *sé* 'he' is a patient; in contrast, in (20), while it is doubtful a little, according to the context, the grammatical subject *sé* 'he' would be an *agent*, rather than a *patient*.

However, these two are examples less ambiguous, and other examples are very difficult to analyse. For such a reason, I will not present the statistical data concerning (iv) 'pronoun', but including (iii) 'human' above as well, it is exemplified that the grammatical subject of the 'be + p.p.' construction can be filled not only with a *patient*, but also an *agent*.

v) 'no subject'

This is a crucial point of this paper. Interestingly, there are some examples without any overt elements in the subject position (i.e. *apersonal construction*), like (21) and (22):

- 21) “Ó, ní bheidh, ní bheidh... *Tá* \emptyset_P *ite* agam_A cheana
 oh NEG be.FUT NEG be.FUT be.PRS eat.PP at+I.SG ever
 “‘Oh, no, no... I_A *have* already *eaten* \emptyset_P ’
 (lit. “‘Oh, no, no... \emptyset_P *has been* already *eaten* by me_A’)

- 22) Nuair a \emptyset_P *bhí* *ite* is *ólta* acu_A, chuaigh siad
 when REL.DIR be.PST eat.PP and drink.PP at+they.PL go.PST they.PL.CNJTV
 isteach sa seomra suí.
 inside in+DEF.M.NOM room.M.NOM sitting.M.GEN
 ‘When they_A *had eaten* and *drunk* \emptyset_P , they went into the sitting room’
 (lit. ‘When \emptyset_P *had been eaten* and *drunk* by them_A, they went into the sitting room’)

10 / 183 (5.5%) of the examples for *ite* ‘eaten’, 8 / 198 (4.0%) for *ólta* ‘drunk’ and 18 / 381 (4.7%) as a whole are found in this survey. Here, it seems that the patient is so backgrounded that it does not appear in the surface structure.

Then, compare this example with (6’) (already mentioned above):

- 6) *D’ith* sé_A (\emptyset_P) → 6’) *Tá* sé_{A/P} *ite*
 eat.PST he.SG.CNJTV (he.SG.DSJTIV) be.PRS he.SG.CNJTV eat.PP
 ‘He_A *has eaten* (it_P)’ ‘It_P *is eaten* (by_A) / He_A *has eaten* (\emptyset_P)’
 [Changed partly from Ó Siadhail (1989: 300)]

In (6), the patient of the clause is deleted, and in (6’), which is derived from (6), the only element in the clause, the grammatical subject, can function as both a *patient* and an *agent*. The latter case, where the single element denotes an agent of the construction concerned in this paper, has been exemplified above, however, there seems to be another process for paraphrasing, as shown below

analysed as the passive construction (and for intransitive examples like (2), my explanation may be adapted).

The cases of (v) 'no subject', like (6'c), however, seem to clearly show the characteristic of the *ergativity*, and if this is the ergative construction, it can be easily applied to intransitive clauses. In this paper I have not taken it into consideration in detail, but the frequency of the first person agent may also reflect its function of *ergativity*.

However, even if there are few, but some examples with an agent in its grammatical subject position like (6'b) do exist, some of which are presented in this paper as (iii) 'human' and (iv) 'pronoun'. So, in some cases, verbs like *ith* 'eat' or *ól* 'drink' would become *completely intransitive*, and the syntactic process could be applied to them. This is to be researched even more in the future.

6'b) *Tá* sé_A *ite*
 be.PRS he.SG.CNJTV eat.PP
 'He_A *has eaten* (∅_P)'

6'c) *Tá* ∅_P *ite* aige_A
 be.PRS he.SG.CNJTV eat.PP at+he.SG
 'He_A *has eaten* (∅_P)'

[Changed partly from Ó Siadhail (1989: 300)]

4. For Further Studies

This time, I limited the data to texts by native speakers and originally written in Irish, but I do not take dialectal variations into consideration (which can be selected in the corpus). It is pointed out that there are quite different varieties among each dialect.

At this point, the website *Gramadach na Gaeilge* (The Grammar of the Irish) describes: 'With verbs which can be used transitively and intransitively, (in Munster) only 'ag + agent' can appear as well, and the grammatical subject drops (my translation)'. Here, it is also pointed out that, in Connacht, examples like (6'b) exist. If so, I would like to consider the dialectal variations more in detail and to make a unified conclusion concerning the 'be + p.p.' construction in Irish.

It will be needed to understand the situation surrounding dialects, somewhat a dialectal continuum including Scottish Gaelic, to achieve an academic success.

Abbreviations

| | | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------|------|-----------------|
| 3 | 3rd person | DSJTV | disjunctive | PART | particle |
| - | morpheme boundary | F | feminine | PST | past |
| + | fusion | FUT | future | PL | plural |
| CNJTV | conjunctive | GEN | genitive | POSS | possessive |
| COND | conditional | IND | indicative | PP | past participle |
| COP | copula | M | masculine | PRS | present |
| DAT | dative | N | neuter | REL | relative |
| DEF | definite | NEG | negative | SG | singular |
| DIR | direct | NOM | nominative | VN | verbal noun |

References

- Keenan, Edward L. and Matthew S. Dryer (2007) 'Passive in the world's languages'. In Timothy Shopen (ed.), *Clause Structure, Language Typology and Syntactic Description*. Vol. 1, 325-361. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nolan, Brian (2006) 'The passives of Modern Irish', *Passivization and Typology : Form and function*. Amsterdam: John Benjamins Pub Co., 132-164
- Noonan, Micheal (1994) 'A Tale of Two Passives in Irish'. In Barbara A. Fox and Paul J. Hopper (eds.), *Voice: Form and Function*. 297-311. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Ó Sé, Diarmuid (1992) 'The Perfect in Modern Irish'. In *Ériu*. Vol. 43, 39-67. Baile Átha Cliath: Royal Irish Academy.
- Ó Siadhail, Micheál (1989) *Modern Irish: Grammatical Structure and Dialectal Variation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stenson, Nancy (1989) 'Irish autonomous impersonals', *Natural Language & Linguistic Theory*, Volume 7. Netherlands: Springer, 379-406.
- Tamura, Takeshi, Tsunekawa Kunio, Haruki Yoshitaka, Kurakata Hidenori and Yoshida Jo (eds.) (2005), *Royal Futsuwa Chu Jiten*, 2nd ed., Tokyo: Obunsha.
- Zaima, Susumu (ed.) (2003), *Shin-Access Dokuwa Jiten*, 2nd ed., Tokyo: Sanshusha.

Online Materials

- Ethnologue* <https://www.ethnologue.com/> (Retrieved 09/12/2015)
- Foclóir Gaeilge-Béarla* <http://www.teanglann.ie/> (Retrieved 08/12/2015), (Online Edition of Niall Ó Dónaill (1977) *Foclóir Gaeilge-Béarla*. Daly City: Colton Book Imports)
- Gramadach na Gaeilge* <http://www.braesicke.de/gram.htm> (retrieved 19/10/2015)
- Nua-Chorpas na hÉireann* <https://focloir.sketchengine.co.uk/> (retrieved 22/07/2015)

アイルランド語における「be+過去分詞」構文について

山田 怜央

(東京外国語大学 博士後期課程)

キーワード：アイルランド語，ゲール諸語，受動，能格，完了

本稿では、アイルランド語(インド＝ヨーロッパ語族ケルト語派ゲール諸語)における「be+過去分詞」という構文について考察をおこなった。

この構文は一見すると受動文のようにも見えるが、他動詞だけでなく、自動詞から作ることも出来る。どちらの場合も完了アスペクトを表すようであるが、他動詞では統語的な項表示が変化するのに対し、自動詞ではそうした変化が見られない。

この構文の解釈については諸説ある。例えば Ó Siadhail (1989)などは「完了受動」と呼んでいるが、Noonan (1994)などは「能格構文」としてしている。

前者の解釈を取った場合、「be+過去分詞」という1つの構文が「完了受動(他動詞)」と「完了(自動詞)」という2つの機能を持つことになる。ただしそのこと自体は奇妙なことではなく、例えばフランス語やドイツ語では「be+過去分詞」という構文が動詞の自他などに応じて2つの機能を持っている。

後者の解釈を取った場合、「be+過去分詞」が自動詞にも他動詞にも用いられるという点を簡潔に記述することができ、また他動詞の場合に起こる項の昇格・降格についても説明することが可能である。

とはいえどちらの解釈も研究が不十分であるため、本稿ではインターネット上で公開されているコーパスを用いて、この構文が現実にどのように使用されているのかを調査した。

その結果、先行研究で挙げられていない形である、他動詞を用いて「被動作主を表す文法的な主語が現れず、動作主を表す前置詞句のみが現れる例」が見出された。アイルランド語において、他動詞文の被動作主がしばしば省略されることは Ó Siadhail (1989)が指摘しており、この形はそれに対応する「be+過去分詞」構文であると考えられる。また、この形の存在から、アイルランド語における「be+過去分詞」構文が「完了受動」ではなく、「能格項文」の性格を持っているということ結論付けた。

2014 年度

修 士 論 文 要 旨

カム・チベット語ティンドゥ方言の記述的研究
—助動詞を中心に—

ツェジワンモ
才吉文毛

(言語文化専攻 言語・情報学研究コース)

キーワード：助動詞，証拠性，完了，継続

目次

| | |
|-------------------------|---|
| 1. 序論 | 2.2.2. 形容詞 |
| 1.1. 言語の概略 | 2.2.3. 動詞の種類 |
| 1.1.1. カム・チベット語の概略 | 2.2.4. 動詞のカテゴリー |
| 1.1.2. カム・チベット語の分類と先行研究 | 2.2.5. その他の品詞 |
| 1.1.3. ティンドゥ方言の概略 | 2.3. 統語論 |
| 1.1.4. 言語使用状況と言語接触 | 2.3.1. 基本語順 |
| 1.2. 調査 | 2.3.2. 疑問 |
| 1.2.1. 一次資料について | 2.3.3. 関係節 |
| 2. ティンドゥ方言の言語実態について | 3. 助動詞 |
| 2.1. 音韻論 | 3.1. 助動詞の分類 |
| 2.1.1. 音節構造 | 3.1.1. 近隣方言における助動詞の分類 |
| 2.1.2. 子音音素 | 3.1.2. ティンドゥ方言における助動詞の分類 |
| 2.1.3. 母音音素 | 3.2. 証拠性の観点から見た助動詞=$\text{ɔ}^{\text{h}}\text{LF}$、=$\text{du}^{\text{h}}\text{LR}$ |
| 2.1.4. 声調 | 3.3. 完了を表す助動詞 |
| 2.1.5. 二重母音 | 3.4. 継続を表す助動詞について |
| 2.2. 形態論 | 4. まとめと今後の課題 |
| 2.2.1. 名詞 | 5. テキスト |

0. はじめに

本稿では、カム・チベット語¹ティンドゥ方言²の助動詞を大まかに三つに分類し、各助動詞の意味的特徴を考察する。

¹ チベット語はシナ・チベット語族(Sino-Tibetan)、チベット・ビルマ語派(Tibeto-Burman)ヒマラヤ語群に属する言語である。大きく、西部古方言群、西部改新的方言群、南部方言群、中国国内の3大方言群(中央チベット語(Ü-Tsang)、アムド・チベット語(Amdo)、カム・チベット語(Kham))の計6つに分類できる(長野: 1989)。

² 以下、カム・チベット語ティンドゥ方言の一般的特徴を示す。

音節構造: (N)C(W)V(?)/T(括弧内は任意要素)

子音音素: 子音音素は $ph[p^h]$, p , b , $th[t^h]$, t , d , $lh[l^h]$, l , q , $kh[k^h]$, k , $gh[g^h]$, g , $tsh[ts^h]$, ts , dz , $tsh[tɕ^h]$, $tɕ$, $ɕh[ɕ^h]$, $ɕ$, j , h , m , $mh[m^h]$, n , $nh[n^h]$, $ɲ$, $ɲh[ɲ^h]$, $ɲ$, $ɣh[ɣ^h]$, l , $lh[l^h]$, r , $ʃ$, w , j の41個である。

母音音素: 単母音音素は i , e , $ɛ$, a , u , o , $ɔ$ の8個がある。二重母音は $ei?$, $iɛ$, ai , ae , $uɔ?$, ei の6個がある。

声調: HH型、HF型、LF型、LR型の四つがある。基本語順: SOV 格標識: 能格・絶対格型

以下、1節でチベット語の諸方言における助動詞の分類を示す。2節で調査について、3.1節で証拠性の観点から見た助動詞=*ɬɔʔLF* と=*duʔLR* について、3.2節で完了を表す助動詞=*shōLF*、=*thiLF*、=*lejēLF*、=*lerεLR* について、その次に、3.3節では継続を表す=*duwoLH* //=*dunguHF*、=*juwoHF*//=*junguHF*、=*duçhuwoHF*//=*duçhuguHF* について、4節でまとめと今後の課題について順に検討していく。

なお、本文中における例文番号、文字飾りは、特に断りのない限り筆者によるものである。

1. チベット語における助動詞の分類

本稿の対象となるティンドゥ方言の言語実態を体系的に記述したものは管見の限り見当たらない。しかし、チベット語の方言に目を向けると、チベット語の助動詞は一般的に主動詞に付加することによって証拠性、モダリティ、アスペクトなどを表す機能を持つものであると記述がなされている。本稿では、ティンドゥ方言の助動詞の意味機能に着目し、証拠性、完了、継続を表す助動詞を対象として考察する。

2. 本調査

本発表で用いた資料は、2012年から2014年までにかけて断続的に現地で行った調査で収集した1000語ほどの語彙、談話テキスト、5分程度の物語と1分程度の物語一本ずつから集めたものである。なお、用例には録音データからとったものと、必要に応じて筆者の作例も使用した。録音データから取った用例は以下表1で示したインフォーマントの番号で記す。何も表記しない用例は筆者によるものである。

表1: インフォーマント情報

| Number | 職業 | 話し手の名前 | 性別 | 生年・出身地 | 居住地 |
|--------|----------|-------------|----|------------|--------|
| 001 | 自営業者 | レディ | 女性 | 1985年ティンドゥ | ティンドゥ県 |
| 002 | 公務員 | ベマラァジ | 女性 | 1987年ティンドゥ | ティンドゥ県 |
| 003 | 公務員 | ゴンガシャ | 男性 | 1986年ティンドゥ | ティンドゥ県 |
| 004 | 学生 | ツェジワンモ (筆者) | 女性 | 1986年ティンドゥ | ティンドゥ県 |
| 005 | 教師 | オンダオツェリン | 男性 | 1986年ティンドゥ | ユシュ県 |
| 006 | 公務員 | ケジュバソン | 男性 | 1986年ティンドゥ | ユシュ県 |
| 007 | 公務員 | ソナンウエセ | 男性 | 1984年ティンドゥ | ティンドゥ県 |
| 008 | 公務員 | リンジンチュペ | 男性 | 1985年ティンドゥ | ティンドゥ県 |
| 009 | 公務員 (定年) | ツェリントシ | 男性 | 1954年ティンドゥ | ユシュ県 |
| 010 | 自営業者 | チンメドジェ | 男性 | 1945年ティンドゥ | ティンドゥ県 |
| 011 | 農家 | ソナンバンジュ | 男性 | 1947年ティンドゥ | ティンドゥ県 |

表 2: 物語データ

| 物語 | 話し手 | タイトル | データ規模(分) |
|------|-----|----------|------------|
| 物語 1 | 008 | カエルとウサギ | 1 分 25 分程度 |
| 物語 2 | 010 | 牧人と王様の戦い | 6 分程度 |

表 3: 談話データ

| 談話 | 話し手 | 話題 | データ規模 |
|--------|---------|-----------|--------------------------------|
| 談話 1 : | 001~004 | 仕事、飲み会、料理 | 44:51 時間 |
| 談話 2 : | 002~007 | 友人の話 | 37:43 時間 / 30:00 時間 / 16:32 時間 |

3. ティンドゥ方言の助動詞の考察

3.1. 証拠性の観点から見た助動詞

Aikhenvald(2006: 3)によると、証拠性(evidentiality)とは、「発話される内容の情報源を表す文法カテゴリーである」と定義されている。文法的証拠性を備えた言語には、以下のような六種の意味的パラメータが存在すると述べられている。

I. VISUAL 「視覚」: 視覚に基づく情報。

II. NON-VISUAL SENSORY 「非視覚的知覚」: 聴覚に基づく情報である。

III. INFERENCE 「推測」: 見たり、触れたりした証拠に基づくその結果。

IV. ASSUMPTION 「仮定」: 視覚に基づく結果以外の証拠に基づく、一般的知識。

V. HEARSAY 「伝聞」: 報告した人や媒体に言及せずに、情報を報告する。

VI. QUOTATIVE 「引用」: 引用した情報源に言及せずに、情報を報告する。

(Aikhenvald 2006: 63-64、枠は筆者)

本稿では、Aikhenvald の意味的パラメータの分類のうち、I. 視覚、II. 非視覚的知覚、V. 伝聞の三つの意味的パラメータの観点から $=tɔʔLF$ と $=duʔLR$ の意味機能を分析する。VISUAL 「視覚」と NON-VISUAL SENSORY 「非視覚的知覚」が区別される状態動詞述語文における $=tɔʔLF$ 、 $=duʔLR$ 使い分けについて、動態動詞³、コピュラ動詞、存在動詞に付加する $=tɔʔLF$ の伝聞的機能について考察する。

3.1.1. 状態動詞に付加する助動詞 $=tɔʔLF$ と $=duʔLR$ について

状態動詞文において、 $=tɔʔLF$ は感情・感覚を知覚した直後に情報を表現し、主動詞に付加する。この場合、主動詞に必ず助動詞を後置させ、助動詞を欠く文は非文である。

【非視覚的情報の場合】:

(1) huHF uzuʔHH ketchaHF tɔwoHF teuɬuHH çɛʔHH= $shôLF$, duʔLF
 2.SG.ERG 今 話 ひどい あんなに 言う=AUX 悲しい

³ ティンドゥ方言の動詞は、コピュラ動詞、存在動詞、動態動詞、状態動詞の四つに分類される。

deɛɛHH duʔLF=ʔʔLF

ずっと 悲しい=AUX

さっきあなたにあんなひどいことを言われたから、悲しいといえば悲しいよ。

(落ち込んでいる友人に「どうしたの?」と聞き、その回答) (002)

(2) *khaHF tshaHF=ʔʔLF*

口 痛い=AUX

(一口食べて)辛い。 (001)

一方、状態動詞の「大きい」、「小さい」、「長い」、「綺麗だ」、「高い」が主動詞となる場合は、目の前の対象物に対する「大きいか長いかなど」の判断を下すという意味になり、=*duʔLR*を用いる。

【視覚情報の場合】

(3) *ndiLF lokoHH tɛLF tɛeʔHH rɛHF=duʔLR*

この コード DEF すごく 長い=AUX

(コードを見て)このコードはすごく長い。

(4) *ndiLF logoHH tɛLF tɛeʔHH rɛHF=ʔʔLF*

この コード DEF すごく 長い=AUX

(コードを触って)このコードはすごく長い。

【経験に基づく判断の場合】

(5) *udeLF tɛeʔHH ɕhũHF=duʔLR*

これ すごい 美味しい=AUX

(目の前の料理を指さしながら)これ、すごくおいしいんだよ。

【恒常的な事態の場合】

(6) *taLF uzuHF ʔwoHF ʔwoLF=duʔLR*

それで 今 すごく 幸せ=AUX

私は今すごく幸せだ。(今の生活に満足している)

(1)~(6)の例から分かるように、=*ʔʔLF*は話し手がなんらかの感情・感覚を知覚した直後に情報を表現する。これに対し、=*duʔLR*は視覚の情報で判断する、または過去の体験に基づいて判断したことや、恒常的事態を述べるのに用いる。

3.1.2. 動態動詞、コンピュータ動詞、存在動詞に付加する=*ʔʔLF* と=*duʔLR*

動態動詞には=*ʔʔLF* と=*duʔLR* のいずれも付加できるが、=*duʔLR* はコンピュータ動詞、存在動詞には付加することができず、=*ʔʔLF*のみ付加できる。

動態動詞に付加する場合：

(7) *abaHF thɛHF wɔLF=ʔʔLF*

お父さん.ABS 来る 来る=AUX

お父さんが来ているよ。(お父さんのバイクの音を聞いて判断している)

まだお父さんが目の前にいない状態であるが、バイクの音やお父さんの声、などの情報によってこれから来ることを判断している。

一方、 $=du\text{?}LR$ は過去に経験したことに基づく場合に用いる。

(8) $khuHF=gu$ $g\ddot{o}ph\text{?}HF$ $t\text{?}woHF$ $tseHF=du\text{?}LR$

3.M.SG=ERG サッカー すごく 遊ぶ=AUX

彼はすごくサッカーが上手だった。

存在動詞とコピュラ動詞に付加する場合：

三つの存在動詞のうち、ソトの存在動詞 $nguHF$ とウチの存在動詞 $wor\epsilon LR$ は $=t\text{?}LF$ に前置することができず、ウチの存在動詞 $woLR$ にのみ前置できる。この場合話し手がうわさで耳にした伝聞情報など何かを媒介して情報を収集していることを表す。コピュラ文の場合もソトのコピュラ動詞に付加することができず、ウチのコピュラ動詞の付加へのみとなる。

(9) $\text{?}woHF$ $nuwaHF=gu$ $z\ddot{u}HF=du\text{?}LR=dzu$ $m\ddot{o}HH$ $t\epsilon LF$ $kaboHF$

お兄さん PSN=ERG 売る=AUX=NMLZ バター DEF 白い

$j\ddot{e}LF=t\text{?}LF$

COP=AUX

ニマさんが売っているバターは白いバターだそうだ。

例(9)は「白いバターだということは噂で聞いた」という意味で、伝聞的情報である。

3.2. 完了を表す助動詞

完了を表す助動詞としては $=lej\ddot{e}LF$ 、 $=thiLF$ 、 $=sh\ddot{o}LF$ 、 $=ler\epsilon LR$ の四つが存在すると考えられる。

意味的には、話し手が意識的に引き起こした事態の場合に $=lej\ddot{e}LF$ を用いるのに対して、話し手と直接的なかわりがなく且つ話し手が目撃情報で事態を叙述する場合には $=thiLF$ を用いる。 $=sh\ddot{o}LF$ は、話し手に向かって行われた事象を叙述する場合に用いる。 $=ler\epsilon LR$ は聞き手に情報を提示する場合に用いる。

完了の他動詞文において、誰の行為なのか、また行為が誰に向けられているのかという方向性によって助動詞が選択されることもある。1>2、1>3 の場合は $=lej\ddot{e}LF$ 、2>1、3>1 の場合は $=sh\ddot{o}LF$ 、3>2、2>3 の場合は $=thiLF$ が選択される。

3.2.1. $=lej\ddot{e}LF$ について

$=lej\ddot{e}LF$ は話し手自身が完結した行為について述べる場合、「私がお母さんに食べ物を送った」「昼ごはんを食べた」などに用いる。話し手の意識の下で行われた事態に用いることが多い。

(10) ηiLF $aw\ddot{a}HF=lu$ $saczuHF$ $kuHF=lej\ddot{e}LF$

1.SG.ERG お母さん=DAT 食べ物.ABS 送る=AUX

私がお母さんに食べ物を送った。

- (11) *ɲi*LF *sawã*LF *su*LF=*lejẽ*LF
 1.SG.ERG ご飯.ABS 食べる.PFV=AUX
 私はご飯を食べた。

自分の行為であっても無意識にしてしまったことの場合、思わず「暴力を振るった」、思わず「溢した」などというような時は=*lejẽ*LFを用いることができず、=*thi*LFを用いる。例(12)、(13)と(14)、(15)にそれぞれ同じ文脈であっても、=*lejẽ*LFを付加した場合には、意味的には意識して学生に暴力を振るったことを表すのに対し、=*juthi*LFを付加した場合には、無意識的行為を表す。従って、=*lejẽ*LFは、話し手の意識だけで行われた構文のみに用いられるとみることができる。

- (12) *tɔzu*LR *tshu*HF *dutu*LF *ɲi*LF *lhoma*HF=*lu* *ɕɕi*LR=*lejẽ*LF
 先 授業 時 1.SG.ERG 学生=DAT 殴る=AUX
 私は、さっきの授業で学生に暴力を振るった。 (003)

- (13) *tɔzu*LR *tshu*HF *dutu*LF *ɲi*LF *lhoma*HF *zei*LR=*lu* *ɕɕi*LR *çhu*LF=*juthi*LF
 先 授業 時 1.SG.ERG 学生 INF=DAT 殴る しまう=AUX
 私はさっきの授業でつい学生一人を殴ってしまった。

- (14) *kuzi*HF *thu*HH=*lu* *tɕhu*HF *phu*=*lejẽ*LF
 服 上=DAT 水.ABS かける.PFV=AUX
 服に(わざと)水をかけた。

- (15) *kuzi*HF *thu*HH=*lu* *tɕhu*HF *pho*HF *çhu*LF=*juthi*LF
 服 上=DAT 水.ABS 溢す.IPFV しまう=AUX
 服に水を溢してしまった。

=*lejẽ*LFは二人称主語の疑問文にも用いることができる。

- (16) *tɪ*LF *ɲupo*HH *hetũbu*HH *tɕu*HF *si*LF=*lejẽ*LF
 DEF 日 2.PL 何.ABS する=AUX
 その日、あなた達は何をしたの? (002)

3.2.2. =*thi*LFについて

=*thi*LFは3.2.1.節で述べたように、一人称主語の他動詞文の無意識の場合に用いる。しかし、無意識の場合のみならず、一人称以外の人称の場合にも使用するが、話し手と直接には関係せず、話し手の視野、知識内の事象であることを前提とする場合に用いる(例(17))。

- (17) *ɲũwa*LF *suli*LF *shũ*HF=*thi*LF
 PSN.ABS PLN 行く.PFV=AUX
 ニマは西寧へ行った。

このほか、例(18)のような自発的(自動詞文)で、話し手のコントロール外にある事象は、時間的変化のプロセスの局面をとらえていると考える。

(18) *luʔHF theLF=thiLF*

電気.ABS 来る=AUX

電気が来た。(停電になっていたときに、急に電気が来た状態の場合)

3.2.3. =shōLF について

=shōLF は話し手の方に向かう行為、モノの移動などに用いる。動作主である二人称や三人称が動作対象の一人称に向けて行った行為であり、話し手の意識内で左右できる事象でない場合に用いる。この場合は=shōLF が逆行態のマーカースとして機能していることを示している。

(19) *taçhiHF=gu ɲaLF=lu jugheHF jëHF=shōLF*

PSN=ERG 1.SG=DAT 本.ABS くれる=AUX

タシが私に本をくれた。

=shōLF は感情の主体である話し手側が受け取っている感覚である。この場合は、開始のアスペクト的性質を持っていると考える。

(20) *kaHF=shōLF, taLF mēLF zəiLR swuHF*

疲れ=AUX もう 休み INF 休もう

疲れてきた、休もう。(疲れていて休憩をしようとするところで)

また、以下例(21)、(22)のように、=shōLF は意外や想定外の場合にも用いることができる。

(21) *putiHF ngoLF=lu tɔHF deLF=ziLF juHF theLF tɔwoHF jɔLF=shōHF*

あの人 頭=DAT つける いる=NMLZ トルコ石 DEF 大変 きれい=AUX

あの人の上に付けているトルコ石がすごくきれい。

(22) *thiru putiHF jowōHH tehāHF=shōLF*

今日 あの人 上手な 踊る=AUX

今日、あの人上手に踊った。

3.2.4. =lɛrɛLR について

=lɛrɛLR は「推論的帰結」「情報提示」「状況説明」などの文法機能を持っていると考えられる。完了の事態を表す構文であるが、完了した事態についてアスペクト的にその局面を取るかではなく、話し手がこの事態についてどのように認識しているかというモダリティの意味合いが強いと考える。なお、=lɛrɛLR は主動詞の特徴から意味機能を考察するより、むしろ文脈に重点に置いて考察すべきだと考え、分析を試みる。

【推論的帰結】:

(23) *ɲuwāLF=gu khuHF shuLF=lɛrɛLR*

PSN=ERG 持つ 行く.PFV=AUX

ニマが持って行った。

例(23)は「昨日彼がそれをほしうって言ったから」という情報に基づく、思考をめぐらせて「タシが持っていた」という事態が成立する。事態が成立するには、裏付けられる何かしらの証拠があると考ええる。

【情報提示】:

(24) *çuHF goLF=lɛɛLR, nawatsaiHF ɲɔʔHF goLR goHF=lɛɛLR*
 酸っぱい いる=AUX 少し 甘い も 要る=AUX
 酸っぱくて、また少し甘いのがほしいのよ。 (004)

例(24)は、聞き手が話し手にキャンディーを作ってあげるという話の流れである。そこで、話し手が好きなキャンディーの味を取り上げて相手に教える。この場合、話し手のなかでは、すでに把握している情報や知識を相手に提示する場合に用いることが多い。

【状況説明】:

(25) 003:*nunghaHH phɔLF nɔoHF goLF duʔ*
 明日 向こう 行く.IPFV いる SFP
 明日、向こうに帰る？
 002:*uũ, ɲetshuLF thiruLH=ni phɔHF nɔoHF tɕhuʔLR=lɛɛLR*
 そう ウチ 今日=ABL 向こう 行く.IPFV いい=AUX
 そう、ウチは今日で向こうに帰れるんだ。

例(25)は、祭りが終わって地元に戻ることも知っている 003 が、002 に確かめたところ、実は 002 の職場では今日で終了して帰れる、ということを手相に教えるという流れである。

3.3. 継続を表す助動詞

本節では、状態の継続を表す助動詞=*duwoLH//=dunguHF*、働きかけによる動作の結果を表す=*juwoLH//=junguHF*、動作の継続を表す助動詞=*duçhuwoHF//=duçhunguHF* についてそれぞれペアで見えていく。

助動詞=*duwoLH//=dunguHF*、=*juwoLH//=junguHF*、=*duçhuwoHF//=duçhunguHF* の動詞述語部における現れ方は次のとおりである。①主動詞+=*duʔLR*(助動詞)+*wo/ngu*(内/外の存在動詞)である、②主動詞+*juwo/jungu*(*ju* は単独で現れることができない形式+内/外の存在動詞)である、③主動詞+=*duʔLR+çhuwoHF//=duʔLR+çhunguHF*、の三つの現れ方がある。ペアとなる助動詞はウチとソトの存在動詞と複合しているという点を除けば、文法機能に異なりは見られない。

【結果の継続】:

(26) *sɔLF zɛiLR çhuLF=dunguHF/*=junguHF*
 鳥 INF 死ぬ=AUX
 鳥が死んでいる。(結果の状態)

(27) *sq*LF *zei*LR *se*LF=*jungu*HF/*=*dungu*HF

鳥 INF 殺す=AUX

鳥が殺されている。(働きかけによる結果の状態)

【動作の継続】：

(28) *sq*LF *zei*LR *phu*LF=*duçhungu*HF

鳥 INF 飛ぶ=AUX

鳥が飛んでいる。(動作の継続)

例(26)は道を通る際に、死んでいる鳥の死体を見て、「鳥が死んでいる」という結果の状態を表す時に用いるが、同様の文脈であっても、死んでいる様子から殺されたことが分かった場合、動作に焦点が当たったことにより=*jungu*HF を付加することができる(例(27))。状態の変化が動作の終了限界に達する前である場合、つまり動作の継続を表す場合は例(28)のようになる。

3.3.1. 結果の継続を表す助動詞

=*duwo*LH と=*dungu*HF はいずれも「継続」の助動詞として分類することができるが、ここでいう「結果」は主動詞の特徴によって「移動の結果」「状態変化の結果」「モノやヒトの存在」「状態の継続」のように現れる。

【移動の結果】：

(29) *ŋi*LF *lhasa*HF=*ni* *tshu*HF=*lu* *nbqi*LR *khu*HF=*duwo*LH

1.SG.ERG ラサ=ABL こっち=DAT お土産.ABS 持つ=AUX

ラサからお土産を持ってきたよ。

例(29)は、話し手が「お土産を買う」という動作を過去の時点で既に終了し、「お土産」を話し手が持っているというような移動の結果になる。

【結果の確定】：

コピュラ動詞が前置する場合は話し手が事態に対する確信を持ち、事態の結果が確定する場合に用いる。

(30) *ŋi*LF *dzu*LF=*zi*HF *the*LF *re?*LR=*duwo*LH

1.SG 言う.PFV=NMLZ DEF COP=AUX

私が言ったのが真実である。

【状態変化の結果】：

状態動詞と共起する場合は、状態が変化した後の結果を表す。

(31) *ŋi*waLF *teini*HH *dzahu*LF=*lu* *shu*HF=*thi*LF=*a*, *tadzu*HH*redzu*

日 何 内陸=DAT 行く.PFV=AUX=CONJ 明らかに

*wo*LR=*zi*LF *ko?*HF=*dungu*HF

ある=NMLZ 白い=AUX

何日間か内陸に行ってきたら明らかに白くなっているよ。

【働きかけによる動作の結果】：

以下例(32)では動作対象の「虫」に「殺す」が動作を働きかけることによって結果状態が持続している。この場合、虫の死骸が目の前にあることを前提とする発話である。また、例(33)のように、動作対象である「子供の髪」に対して「話し手」が働きかけた結果「切った」という結果状態の持続を表している。いずれも他者の働きかけによる動作対象の結果状態である。

(32) *nbu*HF *zɛi*LR *shɛ*LR=*jungu*HF

虫.ABS INF 殺す=AUX

虫を殺しておいた。

(33) *nɔ̃nu*LR *tɑ*HF *rhu*HF=*juwo*HF

子供 髪.ABS 切る=AUX

子供の髪を切っておいた。

3.3.2. 動作の継続を表すもの助動詞

動態動詞の「働く」のような動詞が主動詞の場合は、=*duɕhuwo*HF を付加して動作の進行・継続を表すことができる。

(34) *tehũ*HF *nɔ̃*HF=*ni* *lika*HF *li*LF=*duɕhuwo*HF

家 中=ABL 働き する=AUX

家で家事をしている。

4. 今後の課題

本稿では、カム・チベット語の助動詞を考察し、前置する主動詞の特徴と意味機能について分析した。今後はこの研究結果を土台に、さらに網羅的、体系的に記述することを目的として調査や研究を進めていきたい。

略号一覧

-接辞境界 / =接語境界 //ウチとソトの対応関係 / >動作の方向/1(first person)一人称 / 2(second person)二人称 / 3third person 三人称 / ABL(ablative)奪格 / ABS(absolutive)絶対格 / AUX(auxiliary)助動詞 / CONJ(conjunctive particle)接続助詞 / COP(copula)コピュラ / DAT(dative)与格 / DEF(definite)定 / ERG(ergative)能格 / INF(infinitive)不定 / IPFV(imperfective)非完了形 / M(masculine)男性形 / NMLZ(nominalizer)名詞化接辞 / PFV(perfective)完了形 / PL(plural affix)複数 / PLN(place name)地名 / PSN(personal name)人名 / SG(singular)単数 / SFP(sentence final particle)文末助詞

参考文献

長野泰彦 (1989) 「チベット語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 (第2巻 世界言語編 中)』746-790. 東京：三省堂.

Aikhenvald, Alexandra. (2006) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.

モンゴル語の移動動詞について
—とくに直示移動動詞の観点から—

TSERENDAVGA BUYANJARGAL
(言語文化専攻 言語・情報学研究コース)

キーワード：モンゴル語, ダイクシス, 移動動詞, come 選択型/go 選択型

修士論文目次 (囲み部分が本稿の該当箇所)

| | |
|--------------------------|---------------------|
| 0 はじめに | 4 移動動詞と格の意味・用法 |
| 1 先行研究 | 5 複合動詞 |
| 2 空間表現の捉え方 | 6 本稿の考察に基づく辞書記述への試案 |
| 3 ダイクシスと動作主体の観点から | 7 結論 |
| 3.1 目的と研究方法 | |
| 3.2 ダイクシスの観点から | 略号一覧 |
| 3.3 動作主体との共起 | 参考文献 |
| 3.4 まとめ | 言語資料 |

0. はじめに

本稿はモンゴル語の移動動詞 *ir-*「来る」、*oč-/jav-*「行く」について、直示 (*deixis*) の観点から考察を行うものである。まず次節で先行研究を整理し、2 で調査方法を示す。3 で分析を行い4 でまとめる。なお、特に断りのない限り本稿における例文番号、グロスおよび表番号は筆者によるものである。

1. 先行研究

モンゴル語の移動動詞を直示の観点から分析している研究は管見の限り見られない。そこで以下では 1.1 において佐藤 (1997) によるモンゴル語の移動動詞に関する記述を見た上で、1.2 で Fillmore (1997)、1.3 で澤田 (2010) というように英語と日本語の移動動詞について論じている代表的な先行研究を取り上げ、方法論を探る。1.4 で先行研究のまとめを示す。

1.1. 佐藤 (1997)

本稿で扱うモンゴル語の移動動詞 *ir-*「来る」、*oč-/jav-*「行く」の本来的な意味に関して詳しく述べている研究に、佐藤 (1997) がある。

佐藤 (1997: 59) は、「日本語の「行く」に対応する 2 つの到達点指向性移動動詞 *jav-* と *oč-* の違いはしばしば文法書のなかで取り上げられている。これら二つの動詞の意味上の違いは、橋本・谷 (1993: 83) が述べる通り、前者が方向性だけで到着したかどうかを示さないのに対し、後者は到着点を表すといった点に求められる」と述べている。

佐藤 (1997:60-61) は到達点指向性移動動詞として ir-「来る」、oč-「行く」を挙げて、「これらの動詞は到達点として与位格を取って、語義のなかに到達点を取り込むことはない」としている。

1.2. Fillmore (1997)

Fillmore (1997) は直示に関する体系的な研究である。Fillmore (1997: 61-62, 82-84) によると、直示は「人称直示」(person deixis)「場所直示」(place deixis)「時間直示」(time deixis)「談話直示」(discourse deixis)「社会直示」(social deixis) という 5 つから成り立つという。時間直示(time deixis) には、発話時 (encoding time) と受信時 (decoding time) という区別がある。本研究に関係のある部分をまとめると、以下のようになる。

- 人称直示表現には話し手 (speaker)、聞き手 (addressee) と聴衆 (audience)⁴ という 3 つの カテゴリーがある。
- 場所直示表現の代表的な表現は副詞である here、there 及び指示詞の this、that とそれらの複数形である。
- 時間直示表現の代表的な表現は副詞である now、today などである。
- 直示移動動詞は come と go、bring と take が代表的である。

1.3. 澤田 (2010)

澤田 (2010) は、直示と視点について広く論じている。澤田 (2010: 222) は「発話場面に依存して解釈が決まる言語表現を直示表現 (deictic expressions) という」と述べている。澤田 (2010: 230) では、Lyons (1977: 579) を参照して「直示表現では、話し手の視点が【今・ここ・私】から移動することがある。これを直示投射 (deictic projection) という」と記述している。

さらに直示動詞として移動動詞の come と go を取り上げ、聞き手の領域への話し手の移動について「come 動詞」と「go 動詞」のどちらを選ぶかは言語によって異なるとしている。例えば、英語・ドイツ語・フランス語などでは come 動詞、日本語やスペイン語・タイ語・韓国語などでは go 動詞が使用されるとしている (澤田 2010: 225-226)。

1.4. 先行研究のまとめと本研究の方向性

佐藤 (1997) は意味論的な記述であるが、jav-「行く」と oč-「行く」の違いについて直示の観点から考慮されていない。以下の議論では直示を重視して進めていく。

Fillmore (1997) は直示表現の種類とそれが成り立つ要素について広く論じており、直示は基本的に話し手と聞き手、時間、場所から成り立つとしている。つまり、直示移動動詞について考える際に、【話し手と聞き手の場所】【発話時と受信 (伝達) 時】【出発地と到着地】【出発時と到着時】という概念を考えなければならない。

⁴ Fillmore (1997: 62) によると聴衆 (audience) とは、話し手 (speaker) と聞き手 (addressee) のペアには含まれないが、場合によって会話のグループの中に参加していると見なせる者のことであるという。

澤田 (2010) は話し手が聞き手の領域へ移動するとき go 動詞と come 動詞のどちらが用いられるかについて述べているが、モンゴル語がどちらのタイプに属するかも考察すべきである。

2. 調査方法

澤田 (2012a: 53) によれば「行く」と「来る」は直示表現である。移動動詞であっても、「到着する」「着く」などは話し手がどの地点にいても使えるため、直示表現ではない。本稿では直示という観点に着目し、モンゴル語の移動動詞として ir-「来る」と jav-, oč-「行く」を扱う。佐藤 (1997) で言及されている jav-「行く」と oč-「行く」の違いについて、本稿では「行く」に対応する jav- が直示動詞であるかどうか検討する必要があると考える。そこで【話し手と聞き手の場所】【発話時と受信 (伝達) 時】【出発地と到着地】【出発時と到着時】といったそれぞれの条件を設定して用例を作成し、条件ごとに使用可能な動詞が何であるか考察する。

さらに Fillmore (1997) の条件設定を参考にし、澤田 (2010) が述べる go 動詞 come 動詞についてモンゴル語でいずれが選ばれるのかを検証する。検証に際しては筆者作成の例文を用いて、20 歳代のモンゴル語ハルハ方言の母語話者 10 名を対象に聞き取り調査を行った。

3. 調査結果と考察

ここでは、【話し手と聞き手の場所】【発話時と受信 (伝達) 時】【出発地と到着地】【出発時と到着時】といった Fillmore (1997) の挙げる条件に基づく用例を通して分析を行う。実際に移動を行う動作主体となるのが話し手であるとして、発話時および到着時に、話し手と聞き手がそれぞれ到着点にいるかどうかという要素で成り立つ 8 つの場面を設定する。これをまとめると表 1 のようになる。表中の × は条件として使用しないことを意味する (移動する動作主体であるため、到着時には必ず到着点にいる)。

作例では、話し手と聞き手の対話を想定し、移動する動作主体は B である (つまり A は質問者=聞き手で、B は実際に移動する回答者=話し手ということである)。なお、ここでの到着点は A と B との心理的な距離とは無関係な地点であるということに注意されたい。

表 1: モンゴル語のダイクシス動詞の考察条件

| | 発話時 | 到着時 | 到着点 |
|---|-----|-----|-----|
| A | いる | いる | |
| | いない | いない | |
| B | いる | × | |
| | いない | × | |

発話時に A (聞き手) が到着点にいる／いない、発話時に B (話し手、動作主体) が到着点にいる／いない、到着時に A が到着点にいる／いない、という条件を掛け合わせると $2 \times 2 \times 2 = 8$ で 8 通りの条件を扱うこととなる。以下、この表 1 をもとにそれぞれの条件を見る。

条件①：両者とも、発話時・到着時いずれも到着点にいる場合

表 2: 条件①

| | 発話時 | 到着時 | 到着点:C |
|---|-----|-----|-------|
| A | いる | いる | |
| B | いる | × | |

A と B は発話時に到着点 C にいる。移動する B が C に着く時、A も C にいる。

A: Či daraa žil { C-d ir-ex üü? / *C-d oč-ix uu? /
 2SG.NOM 後 年 C-DAT 来る-P.INF Q / C-DAT 行く-P.INF Q? /
 *C-∅ jav-ax uu? }
 C-IND 行く-P.INF Q?
 「あなたは来年 { C に来る? / *C に行く / *C 行く? }」

B: Bi daraa žil { C-d ir-ne / *C-d oč-no / *C-∅ jav-na }
 1SG.NOM 後 年 C-DAT 来る-NPST / C-DAT 行く-NPST / C-IND 行く-NPST
 「私は来年 { C に来る / *C に行く / *C 行く }。」

このように、条件①の場合は ir- を用いる。

条件②：発話時に移動主体が到着点にいない場合

表 3: 条件②

| | 発話時 | 到着時 | 到着点:C |
|---|-----|-----|-------|
| A | いる | いる | |
| B | いない | × | |

発話時に A は到着点にいるが B はいない。B が移動して C に着く時にも、A は C にいる。

A: Či daraa žil { C-d ir-ex üü? / *C-d oč-ix uu? /
 2SG.NOM 後 年 C-DAT 来る-P.INF Q / C-DAT 行く-P.INF Q? /
 *C-∅ jav-ax uu? }
 C-IND 行く-P.INF Q?
 「あなたは来年 { C に来る? / *C に行く? / *C 行く? }」

B: Bi daraa žil { *C-d ir-ne / C-d oč-no / *C-∅ jav-na }
 1SG.NOM 後 年 C-DAT 来る-NPST / C-DAT 行く-NPST / C-IND 行く-NPST
 「私は来年 { *C に来る / C に行く / *C 行く }。」

条件②の場合は B が A のもとへ移動する時に oč-が用いられている。

条件③: 到着時に聞き手が到着点に不在の場合

表 4: 条件③

| | | | |
|---|-----|-----|-------|
| | 発話時 | 到着時 | 到着点:C |
| A | いる | いない | |
| B | いる | × | |

A と B は発話時に到着点にいる。しかし、A は B が C に着く時には到着点にいない。

A: Či daraa žil { C-d ir-ex üü? / *C-d oč-ix uu? /
 2SG.NOM 後 年 C-DAT 来る-P.INF Q / C-DAT 行く-P.INF Q? /
 *C-∅ jav-ax uu? }
 C-IND 行く-P.INF Q?
 「あなたは来年 { C に来る? / *C に行く? / *C 行く? }」

B: Bi daraa žil { C-d ir-ne / *C-d oč-no / *C-∅ jav-na }
 1SG.NOM 後 年 C-DAT 来る-NPST / C-DAT 行く-NPST / C-IND 行く-NPST
 「私は来年 { C に来る / *C に行く / *C 行く }。」

条件③では、条件①と同様に ir-を用いる。

条件④: 発話時に聞き手が到着点にいない場合

表 5: 条件④

| | | | |
|---|-----|-----|-------|
| | 発話時 | 到着時 | 到着点:C |
| A | いない | いる | |
| B | いる | × | |

A は発話時には到着点にいないが、B が C に着く時にはいる。B は発話時に C にいる。

A: Či tegeed xezee { C-d ir-ex / *C-d oč-ix / *C-∅ jav-ax } ve?
 2SG.NOM そして いつ C-DAT 来る-P.INF / C-DAT 行く-P.INF / C-IND 行く-P.INF Q?
 「あなたは、それでいつ {Cに来る / *Cに行く / *C行く} ?」

B: Bi 5 sar-d { C-d ir-ne / C-d oč-no / *C-∅ jav-na }
 1SG.NOM 5月-DAT C-DAT 来る-NPST / C-DAT 行く-NPST / C-IND 行く-NPST
 「私は5月に {Cに来る / Cに行く / *C行く}。」

条件④では、BがAのもとへ移動する時に ir-も oč-も用いうる。

条件⑤：発話時には移動主体がおらず、到着時には聞き手がいない場合

表 6: 条件⑤

| | | | |
|---|-----|-----|-------|
| | 発話時 | 到着時 | 到着点:C |
| A | いる | いない | |
| B | いない | × | |

Aは発話時にはCにいるが、到着時にはいない。Bは発話時にCにいない。

A: Či daraa žil { C-d ir-ex üü? / *C-d oč-ix uu? / *C-∅ jav-ax
 2SG.NOM 後年 C-DAT 来る-P.INF Q / C-DAT 行く-P.INF Q? / C-IND 行く-P.INF
 uu? } Bi ter üje-d baj-x-güj baj-x. Zügeer üü?
 Q? 1SG.NOM その時-DAT いる-P.INF-NEG いる-P.INF 大丈夫 Q
 「あなたは来年 {Cに来る / *Cに行く / *C行く} ? 私はその時いないかもしれない。大丈夫?」

B: Zügeer ee. Bi tegsen č ge-sen { *C-d ir-ne /
 大丈夫 EMPH 1SG.NOM それでも EMPH という-P.PST C-DAT 来る-NPST /
C-d oč-no / C-∅ jav-na }
 C-DAT 行く-NPST / C-IND 行く-NPST
 「大丈夫よ。私はそれでも { *Cに来る / Cに行く / C行く}。」

条件⑤においてBがCへ移動する時には jav-も oč-も用いられる。

条件⑥：発話時に両者とも到着点に不在である場合

表 7: 条件⑥

| | | | |
|---|-----|-----|-------|
| | 発話時 | 到着時 | 到着点:C |
| A | いない | いる | |
| B | いない | × | |

A と B は発話時には到着点 C にはいない。しかし A は B が到着点に着く時にはいる。到着点:C (二人とも発話時にはそれぞれ D と E という別のところにいる)

A: Bi daraa žil { C- \emptyset jav-na / *C-d oč-no / *C-d ir-ne. } Ter
 1SG.NOM 後 年 C-IND 行く-NPST / C-DAT 行く-NPST / C-DAT 来る-NPST その
 üje-d či { C-d ir-ex üü / *C-d oč-ix uu /
 時-DAT 2SG.NOM C-DAT 来る-P.INF Q / C-DAT 行く-P.INF Q ? /
 *C jav-ax uu? }
 C-IND 行く-P.INF Q?

「私は来年 {C に行く / *C に行く / *C に来る}。その時にあなたは {C に来る / *C に行く / *C 行く}？」

B: Bi { *C-d ir-ne / C-d oč-no / *C- \emptyset jav-na }
 1SG.NOM C-DAT 来る-NPST / C-DAT 行く-NPST / C-IND 行く-NPST
 「私は { *C に来る / C に行く / *C 行く }。」

条件⑥において B が A のもとへ移動する時には oč- を用いる。

条件⑦: 聞き手が、発話時も到着時も到着点に不在である場合

表 8: 条件⑦

| | | | |
|---|-----|-----|-------|
| | 発話時 | 到着時 | 到着点:C |
| A | いない | いない | |
| B | いる | × | |

A は発話時にも到着時にも到着点 C にはいない。B は発話時に C にいる。到着点は C である (A は発話時に別の地点 D にいる)。

A: Či D- \emptyset jav-aad, xezee { C-d ir-ex / *C-d oč-ix /
 2SG.NOM D-IND 行く-C.ANT いつ C-DAT 来る-P.INF / C-DAT 行く-P.INF /
 *C jav-ax } ve?
 C-IND 行く-P.INF Q?

「あなたはDに行つて、いつ {Cに来る?/*Cに行く?/*C行く?}」

B: Bi 1 sar bol-ood { *C-d ir-ne / C-d oč-no / C-∅ jav-na }
 1SG.NOM 1 月 経つ-C.ANT C-DAT 来る-NPST / C-DAT 行く-NPST / C-IND 行く-NPST
 「私は1ヶ月経つたら {Cに来る / *Cに来る / C行く}。」

条件⑦においてはBがCへ移動する時にjav- と oč- が用いられている。

条件⑧：両者とも発話時に到着点に不在で、質問者は到着時にも不在の場合

表 9: 条件⑧

| | | | |
|---|-----|-----|-------|
| | 発話時 | 到着時 | 到着点:C |
| A | いない | いない | |
| B | いない | × | |

Aは発話時にも到着時にも到着点Cにいない。Bは発話時にCにいない。到着点:C (BはD, AはEにいる)。

A: Či xezee { C-∅ jav-ax / *C-d ir-ex / *C-d oč-ix } ve?
 2SG.NOM いつ C-IND 行く-P.INF / C-DAT 来る-P.INF / C-DAT 行く-P.INF Q
 「あなたはいつ {C行く / *Cに来る / *Cに行く}?」

B: Bi udaxgüj { C-∅ jav-na / *C-d ir-ne / *C-d oč-no. }
 1SG.NOM もうすぐ C-IND 行く-NPST / C-DAT 来る-NPST / C-DAT 行く-NPST
 「私はもうすぐ {C行く / *Cに来る / *Cに行く}。」

この条件のもとでは動詞はjav-のみが用いられうる。

ここまで条件①～⑧において使用される動詞を見てきた。これらの調査結果は次ページの表10のようにまとめられる。

表 10: モンゴル語移動動詞の使用状況

| 条件 | 使用される動詞 | 使用状況 |
|------|-----------|---------------------------|
| ①, ③ | ir- | 共通点はBとAが発話時に到着点にいる |
| ②, ⑥ | oč- | Bが到着点に着く到着時にAが到着点にいる |
| ⑤, ⑦ | oč-, jav- | BとAのどちらかが発話時に到着点にいる |
| ④ | ir-, oč- | Bが発話時に到着点にいて、Aが到着時に到着点にいる |
| ⑧ | jav- | Bのみが話題になっている到着点に移動する |

表 10 で、とくに条件④は A が直示投射 (deictic projection) を使っていることが指摘できる。つまり、発話時に A は到着点に存在していないが、話し手の B が到着点に到着する時点で A も到着点にいるということを前提で発話していることが言える。

なお、この調査に関しては筆者の判断に加え、モンゴル人の母語話者である 20 代の 10 人全員が同様の判断を認めたことをここに付記する。

4. まとめ

本稿では動詞が複合体を成さず単独で使用される ir-, jav-, oč- を中心に調査した。澤田 (2010) では、話し手が発話時に到着点にいる聞き手のもとへ移動する時に使用される動詞によってその言語が come 選択型か go 選択型か判別しているが、モンゴル語の場合① (ir-)、② (oč-)、③ (ir-)、⑤ (oč-, jav-) のように 3 つとも用いることが可能であることが明らかとなった。

分析の結果は以下の表 11 の通りである。

表 11: モンゴル語における、発話時に到着点にいる聞き手のもとへの移動

| 条件 | 場面 (A は聞き手、B は実際に移動する話し手) | 用いられる動詞 |
|----|---|-----------------|
| ① | <u>A と B は発話時に到着点におり</u> 、A は B が到着点に着く時にもそこにいる。 | ir- 「来る」 |
| ② | <u>A は発話時に到着点におり</u> 、B はいない。A は B が到着点に着く時にもそこにいる。 | oč- 「行く」 |
| ③ | <u>A と B は発話時に到着点にいるが</u> 、A は B が到着点に着く時にはそこにはいない。 | ir- 「来る」 |
| ⑤ | <u>A は発話時に到着点におり</u> 、B はいない。A は B が到着点に着く時にはそこにはいない。 | oč- と jav- 「行く」 |

このようにモンゴル語は、単純に come 選択型と go 選択型のどちらかに分類することはできず、より複雑な体系を持つ言語であると見ることができる。

一方、本発表で扱った 8 つの条件からの日本語の「行く」に対応する oč- と jav- の違いが、前者は到着点を重視し、後者は到着点を重視しないということから、佐藤 (1997) による指摘を支持することになる。ただし詳細に見れば格助詞の使用に関する問題も関わってくるものと思われる。これについては今後の話題とする。

最後に、ir- 「来る」、oč-, jav- 「行く」の使用条件の決め手をまとめると以下のようなになる。

- ir-: 話し手が発話時に到着点に存在していること。
- oč-: 話し手が到着点に着く時に、聞き手がそこにいること。
- jav-: 話し手と聞き手のどちらかが発話時に到着点に存在するか、または話し手が到着点に着く時に、聞き手がそこに存在しないこと。

略号一覧

| | |
|----------------------------|-------------------------|
| - morpheme boundary: 形態素境界 | IND indefinite: 不定格 |
| 1 first person: 1 人称 | INF infinitive: 不定形 |
| 2 second person: 2 人称 | NEG negative 否定 |
| 3 third person: 3 人称 | NOM nominative: 主格 |
| ANT anterior: 完了 | NPST nonpast: 非過去 |
| C converb: 副動詞 | P participle: 分詞 |
| DAT dative: 与位格 | PST past: 過去 |
| EMPH emphatic: 強調 | SG singular: 単数 |
| | Q question particle: 疑問 |

参考文献

- Fillmore, Charles J. (1997) *Lectures on Deixis*, California: CSLI Publications Center for the Study of Language and Information Stanford.
- Lyons, John. (1977) *Semantics, vol.2*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐藤暢治 (1997) 「モンゴル語の移動動詞—経路とその格標示—」 『ニダバ』 26: 59-68. 西日本語言語学会.
- 澤田淳 (2010) 「直示と視点」 澤田淳・高見健一編『ことばの意味と使用』 222-333. 東京: 鳳書房.
- 澤田淳 (2012) 「ダイクシスを捉える理論的枠組み—日本語ダイクシス表現の体系化の試み—」 『Ars Linguistica』 19: 41-63. 日本中部言語学会.
- 橋本勝・谷博之 (1993) 『モンゴル語文法・講読』 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Modern Standard Arabic と Egyptian Arabic の 受動構文やそれに類する構文について

松尾愛

(言語文化専攻 言語・情報学研究コース)

キーワード：受動構文，内部屈折，自動詞，再帰，動作主

0. 修士論文の構成

筆者の修士論文の構成は以下に示す構成となっている(一部省略)。

| | |
|---|---|
| 0. はじめに | 5. 本調査 1(MSA における第 VII 形動詞・第 VIII 形動詞／受動構文) |
| 1. 本稿の対象と表記 | VIII 形動詞／受動構文) |
| 2. 本稿で扱う文法事項に関する先行研究 | 6. 本調査 2(EA における第 VII 形動詞・第 VIII 形動詞／it-接辞構文) |
| 3. 予備調査 1(CA における第 VII 形動詞・第 VIII 形動詞) | VIII 形動詞／it-接辞構文) |
| 4. 予備調査 2(MSA の第 VII 形動詞・第 VIII 形動詞のミニマルペア) | 7. 調査結果のまとめと考察 |
| | 8. 今後の課題 |

筆者の修士論文では、まず古典アラビア語(以下、CA と記す)において、受動構文に類似するとされる派生形動詞の第 VII 形動詞(inFaʕaL 型)および第 VIII 形動詞(iFtaʕaL 型)の機能を確認した。その後、現代標準アラビア語¹(以下、MSA と記す)の内部屈折による受動構文、エジプトアラビア語²(以下、EA と記す)の it-接辞を付加した受動構文、および MSA・EA それぞれに存在する第 VII 形動詞(inFaʕaL 型)と第 VIII 形動詞(iFtaʕaL 型)を用いた構文について、それぞれの有する機能の異同を明らかにすることを目的としていた。新聞を中心としたテキストから当該構文を抽出・分析することにより、MSA の第 VII 形動詞(inFaʕaL 型)に

¹ アラビア語は、セム系言語の一種で、文法学の発展とともに高度に規範化された言語である。現代標準アラビア語とは、古典アラビア語に基礎を置き、現在アラブ諸国で公用語として制定されている書き言葉のアラビア語のことで、主にメディアや公的な場面で用いられる言語である(上原 2006: 31-32 を要約)。なお、榮谷(2004: 121-122 要約)は、正則アラビア語について、「決して母語として獲得される言語レベルではなく教育を受け学習して身に付けていく」言語であると指摘している。「アラビア語の規範とされる正則アラビア語」のことを「フスハー(最も明白な、純粋な al-fuṣḥā)」とよぶことがある。転写については、以下の通りとする。أ=ʔ, ب=b, ت=t, ث=θ, ج=g/ǧ, ح=h, خ=x, د=d, ذ=ḏ, ر=r, ز=z, س=s, ش=ʃ, ص=sʕ, ض=dʕ, ط=tʕ, ظ=zʕ, ع=ʕ, غ=ǧ, ف=f, ق=q, ك=k, ل=l, م=m, ن=n, ه=h, ي=j, و=w 長母音の表記については、aa, ii, uu を、二重母音は ai, au を用いることとする。

² エジプトアラビア語は、Woidich (2005: 323 要約)によると、「Cairo Arabic は単に Egyptian Arabic と呼ばれることがしばしばある。エジプト中で使用される主要な言語の媒体である。もともとは首都カイロの方言だったが、数百万人のエジプト人話者が身に着けている。特に、日常の言語として、都市部で使用されている」と述べられている。

転写については、以下の通りとする。أ=ʔ, ب=b, ت=t, ث=t/θ, ج=g/ǧ, ح=h, خ=x, د=d, ذ=ḏ, ر=r, ز=z, س=s, ش=ʃ, ص=sʕ, ض=dʕ, ط=tʕ, ظ=zʕ, ع=ʕ, غ=ǧ, ف=f/v, ق=?/q, ك=k, ل=l, م=m, ن=n, ه=h, و=w, ي=j, 母音については、短母音は a, (e), i, (o), u とする。長母音は aa, ee, ii, oo, uu と表記する。なお、本発表で扱う中心的な文法事項の一つである it-接辞に関して、先行研究では t-や et-など表記に揺れがみられる。引用時には表記は it-に統一する。

は自動詞化機能と外的使役主の存在の含意があると確認した。一方、従来の先行研究では、第 VIII 形動詞(iFtaʕaL 型)は再帰や中間態、一部相互態とされていたが、極わずかな動詞にしかそれらは認められず、第 VIII 形動詞(iFtaʕaL 型)の主要な機能は①自動詞化、②他動詞化機能と、③項は増減せず、意味の抽象度増加機能を有していると指摘した。一方、EA では、第 VII 形動詞(inFaʕaL 型)は MSA と同様の機能が認められたが、第 VIII 形動詞(iFtaʕaL 型)は、MSA とは異なり、他動詞化機能はほぼなく、専ら自動詞化が主要な機能であると結論付けた。なお、MSA の第 VII 形動詞(inFaʕaL 型)と第 VIII 形動詞(iFtaʕaL 型)は 1 項動詞としては、その使用が相補分布をなしていることも 1700 万語規模の新聞コーパスを通じた調査で明らかにした。MSA・EA とともに受動構文の動作主の明示は可能だが MSA よりも EA のほうがはるかに制約が大きいと確認できた。

本稿では修士論文における調査を通じて明らかにしたこと(目次の□で示した部分)を中心に扱う。

1. 先行研究

本節では MSA と EA それぞれについて本稿で扱う文法事項に関連した先行研究をしめす。

1.1. MSA に関する先行研究

本稿で扱う文法事項について、MSA の先行研究を以下にまとめて示す。

【形】受動構文 = 母音交替による内部屈折³ / 第 VII 形 = inFaʕaL / 第 VIII 形 = iFtaʕaL

【項】受動構文 = 他動詞の受動構文の場合項は 1 つ減少する。Maalej(2008: 225)

・第 VII 形 = 派生前に比べて項が 1 項減少する。Ratcliffe (2005: 182)

・第 VIII 形 = 派生前に比べて項が 1 項減少する。Ratcliffe (2005: 182)

【機能】受動構文 = 受身 Maalej (2008: 225)

・第 VII 形 = 第 I 形の受け身に相当するもの Holes (2004: 104)

再帰-受動態 Bubenik(2008), McCarus (2008: 252)

他動詞を自動詞に変える働き ハッサン (2011: 77)

・第 VIII 形 = 第 V 形や第 VII 形に類似した再帰 Holes(2004: 104)

reflexive / middle Bubenik(2008), McCarus (2008)

一部は相互態 Abdul-Raof(1998: 170)

【動作主】

・受動構文 = 動作主は明示されないのが普通 Cantarino(1974), Holes(2004)など

min+などの前置詞句で行為を実際に達成する道具としての論理的な主語が示せる

Cantarino (1974: 52)

³ 動詞基本形の語根パターンを C₁C₂C₃(第 I 形)とすると、第 I 形の受動態(三人称男性単数の完了形)は、それぞれの語根の各子音に後置する母音を **u**、**i**、**a** に内部屈折させ、完了形の場合には、C₁**u**C₂**i**C₃**a** とする(例 1: *kataba* “he wrote” ⇒ *kuṭiba* “it was written”)ことで作られる。未完了形の場合には、**ju**C₁C₂**a**C₃**u** とする(例 2: *yaktubu* “he writes” ⇒ *juktabu* “it is written”)ことで作られる。なお、MSA の動詞は人称、性、数、ヴォイス、テンスに応じて屈折する。

- MSA では特に新聞などで前置詞句 *min qibal / min t'araf* ('from the side / party of') で動作主を示せる。 Holes (2004: 320)
- 何らかの外的動作主が必ず含意されている Danks (2011: 148)
- ・ 第 VII 形 = 典型的に動作主を伴わない Abdul-Raof (1998: 170)
 - 何らかの外的動作主が含意されている Danks (2011: 148)
 - ・ 第 VIII 形 = 相互態の場合には典型的に動作主を伴う Abdul-Raof (1998: 170)
- 【その他】
- ・ 受動構文 = 主題の内在的な力だけでは自然に成立できない事象は、受動表現によってのみ表現される ハッサン (2011: 77)
 - ・ 第 VII 形 = 動作の結果に焦点 Holes (2004: 104)
 - 主題の内在的な力だけでは自然に成立できない事象を表す第 VII 形の自動詞は存在しない。 ハッサン(2011: 77)

1.2. EA に関する先行研究

本稿で扱う文法事項について、EA の先行研究を以下にまとめて示す。

【形】

受動構文 = itFaʕaL、第 VIII 形・第 X 形は音交替による内部屈折⁴

第 VII 形 = inFaʕaL / 第 VIII 形 = iFtaʕaL

【機能】

- ・ 受動構文(itFaʕaL) = 受身 / 再帰(reflexivity) / 産出⁵(yielding) Abdel-Massih et al. (2009: 194)
- ・ 第 VII 形 = 特別に語彙化されたものに限定される Woidich(2005: 329)
 - yielding / 再帰 Abdel-Massih et al. (2009: 283)
- ・ 第 VIII 形 = 特別に語彙化されたものに限定される Woidich(2005: 329)
 - 相対的に多いのは、再帰(reflexivity)と相互(reciprocity) Abdel-Massih et al. (2009: 284)

【動作主】

- ・ 受動構文 = 動作主の明示はなされない。 Abdel-Massih et al. (2009: 190)
- (itFaʕaL) min 'from' という前置詞句で加害者の動作主は示せる。 Agameya(2008:562)
- ・ 第 VII 形 = 動作主は不明 Abdel-Massih et al. (2009: 284)
- ・ 第 VIII 形 = 再帰の場合、典型的に有生の主語を有する。
 - 相互態の場合普通 2 またはそれ以上の動作主を有する。 Abdel-Massih et al. (2009: 284)

⁴ 動詞基本形の語根パターンを C₁C₂C₃(第 I 形)とすると、第 I 形の受動態(三人称男性単数の完了形)は、それぞれの語根の各子音に後置する母音を u, i, a に内部屈折させ、完了形の場合には、C₁uC₂iC₃a とする(例 1: kataba "he wrote" ⇒ kutiba "it was written")ことで作られる。未完了形の場合には、juC₁C₂aC₃u とする(例 2: yaktubu "he writes" ⇒ juktabu "it is written")ことで作られる。なお、MSA の動詞は人称、性、数、ヴォイス、テンスに応じて屈折する。

⁵ Abdel-Massih et al. (2009: 283)は産出(yielding)を「Yielding は英語の自動詞としてしばしば翻訳されることもあれば、英語の受動構文として翻訳されることもある。EA においてはその区別は不明瞭な傾向にある」と述べている。

2. CA・MSA・EAの第VIII形動詞

修士論文では4節～6節にて、第VII形・第VIII形・受動構文をそれぞれコーパスを用いて用例抽出・分析を行った。本稿では紙幅の都合上、第VII形については割愛し、第VIII形について述べる。

2.1. 調査手法

CAの第VIII形動詞は、University of Leedsが開発しているThe Quranic Arabic Corpus Version 0.4(語彙数30,895語)を使用してVerb^FormVIIIを条件に全ての第VIII形動詞を抽出した。MSAの第VIII形動詞は、ウェブサイト“日本語で読む中東メディア”で公開されている新聞記事の原文をPDFファイルの形式で保存(語彙数は17680語)し、アラビア文字で、**ﺕ**(t)を指定し、第VII形動詞を用いた構文および第VIII形動詞を用いた構文を手作業で抽出する。EAのテキストはインターネットサイト“wikipedia”にMasriで書かれている項目の中から、MSAの調査で用いたようなテキストと乖離の少ないテーマになるように、政治や文化に関する話題を中心に19項目の記事(総語彙数は27875語)を選んだ。検索文字列は、アラビア文字で、**ﺕ**(t)とした。

2.2. 調査結果

調査で得られた第VIII形動詞を用いた構文は、CAが963例(異なり語数101語)、MSAが受動構文として用いられている42例を除くと、72例(異なり語数49語)、EAが130例(異なり語数で40語)得られた。表1は、調査で得られた第VIII形動詞をタイプ別に分類した結果一覧である。

表1: CA・MSA・EAの第VIII形動詞のタイプ

| 第VIII形のタイプ (派生前⇒派生後の項構造) | CA | | | MSA | | | EA | | |
|-----------------------------|--------|-----------------|-----|--------|------|-----|--------|------|-----|
| | 一意の語 | 割合 ⁶ | 用例数 | 一意の語 | 割合 | 用例数 | 一意の語 | 割合 | 用例数 |
| ①類(2項⇒1項に減少) | 39 | 38.6 | 238 | 15 | 30.6 | 22 | 14 | 35.0 | 41 |
| ②類(1項⇒2項に増加) (2項⇒3項に増加) | 5 1 | 5.9 | 64 | 9 1 | 20.4 | 14 | 1 — | 2.5 | 21 |
| ③類(2項⇒2項増減なし) | 43 | 42.6 | 626 | 13 | 26.5 | 24 | 14 | 35.0 | 46 |
| ④類(1項⇒1項増減なし) | 10 | 10.0 | 28 | 11 | 22.4 | 12 | 0 | 0.0 | 0 |

⁶ 一意の語(タイプ)全体にしめるそれぞれのタイプの割合が示してある。小数点第二位を四捨五入した数値で割合は示してあるため割合の合計は100.0にはなっていない。

| | | | | | | | | | |
|-----------|-----|-----|-----|----|---|----|----|------|-----|
| その他(I形なし) | 3 | 3.0 | 7 | — | — | — | 11 | 27.5 | 22 |
| 計 | 101 | — | 963 | 49 | — | 72 | 40 | — | 130 |

CA・MSA・EA とともに、第 VIII 形動詞の機能としては項の減少をもたらす①類(2 項→1 項)が相対的に高い割合を示している。CA では相対的に頻度の低い②類(1 項→2 項)や④類(1 項→1 項)も MSA では決して低い割合で現れているわけではない。MSA では①から④の機能それぞれが同程度現れたといってもよい数値が得られた。一方、EA では④類(1 項→1 項)の動詞は 1 個も得られず、①類(2 項→1 項)と③類(2 項→2 項)の動詞が同じ割合で得られた。なお、EA の②類(1 項→2 項)の動詞については異なる分析も可能であるがここでは紙幅の都合上説明は割愛する。

2.2.1. 第 VIII 形動詞①類(2 項→1 項)

2.2.1.1. MSA の第 VIII 形動詞①類(2 項→1 項)

調査で得られた「派生前が 2 項動詞で第 VIII 形動詞が 1 項動詞」の用例一覧を以下に示す。

【アジャンクトなしの 1 項動詞】 1 *iftakaa* 「(船長 PN が)文句を言う」 / 2 *irtafafa* 「(輸入品全ての価格が)あがる」 / 3 *intahaa* 「騒動が終わる」【行為を実際に達成する道具としての論理的な主語(前置詞句)伴う動詞】 4 *is'radama* 「(車が)(bi-爆弾によって)衝突する」 / 5 *ittasama* 「(トルコの政策は)(bi+静かさで)特徴づけられる」 / 6 *ittasama* 「(クルド人地区は)(bi+静かさで)特徴づけられる」【相互態として用いられている動詞】 7 *ixtalafa* 「(2 人は)(*Sala* 以下について)異なっている」 / 8 *iftabaka* 「(イスラエル軍とレバノン軍が)(*Sala* 国境で)交戦する」【場所・時間・理由を伴う 1 項動詞】 9 *intaz'ama* 「活動が《*fii* 広場で》通常通りだ」 / 10 *iltazama* 「(議長が)《?amaama...の前に》責任がある」 / 11 *ihtafada* 「(市民団体が)《?amaama 大使館前に》集まる」 / 12 *ihtafada* 「(数千人が)《*fii* 県に》集まる」 / 13 *ixtafaa* 「(赤い服が)《*fii* アレッポで》消える」 / 14 *ixtalla* 「(おおくのことが)《*fii* 将来に》かき乱される」 / 15 *ixtafaa* 「(光景が)〔悼んで-ACC〕消える」【アジャンクト(前置詞句+意味上の目的語)を伴う 1 項動詞】 16 *ihtaadza* 「(破壊者及びテロリストたちは)(?ila+プロパガンダを)必要とする」 / 17 *ihtaadza* 「(難民たちは)(?ila+支援を)《min qibal 支援団体から》必要とする」 / 18 *ihtaadza* 「(私たちは)(?ila+金額を)必要とする」 / 19 *iStarafa* 「(外相は)(bi+努力を)認める」 / 20 *iStarafa* 「(外相は)(bi+節を)認める」 / 21 *iStarafa* 「(組織のトップが)(bi+節を)認める」 / 22 *iStaqada* 「(外相は)(*fii+*存在を)信じる」

先行研究で指摘されている第 VIII 形動詞の機能である相互態の例を以下に示す。調査で得られた第 VIII 形動詞の用例全 72 例のうち、相互態として用いられていると分析できたのは 2 例のみ(*ixtalafa* 「[(2 人は)(*Sala* 以下について)異なっている」、*iftabaka* 「(イスラエル軍とレバノン軍が)(*Sala* 国境で)交戦する」)であった。

(1) *wa-qutila* *d^ʕaabit^ʕ-un* *kabiir-un* *bi-l-dʒaif-i* *l-ʔisraaʔiilii-ji*
 and-kill: **PASS**.1.PFV.3.M.SG officer-NOM great-NOM of-DEF-troop DEF-Israel-GEN
wa-θnaan-u *min al-dʒunuud-i* *l-lubnaanii-jiin-a* *wa-s^ʕuħufii-jiin-a*
 and-two-NOM of DEF-soldier.PL-GEN DEF-Lebanese-PL-GEN and-journalist-PL-GEN
lubnaanii-ji
 Lebanese-GEN

ħiina **ʔtabakar** *quww-aat-u* *l-dʒaif-i* *l-ʔisraaʔiilii-ji* *wa-l-dʒaif-i*
 when get entangled: **VIII**.PFV.3.F.SG force-PL-NOM DEF-troop-GEN DEF-Israel-GEN and-DEF-troop-GEN
l-lubnanii-ji *ʔala* *l-ħuduud-i* *fii* *ʔayust^ʕus-a* *ʔaab* *l-maad^ʕii-ji*.
 DEF-Lebanese-GEN on DEF-border-GEN in August-ACC August DEF-past-GEN

「イスラエル軍の上級士官とレバノン人兵士 2 名とレバノン人ジャーナリストが去年 8 月に国境でのイスラエル軍とレバノン軍が交戦した際に死亡した。」 [اشتباك 交戦する 110527quds]

動作主(Agent)が 2 つ現れている例である。「イスラエル軍とレバノン軍」は換喩として用いられているものと分析し、「典型的に動作主を伴う」という先行研究の記述とも一致している。

動作主が明示的に *min qibal* “from side of …” という前置詞句を伴って現れた唯一の例を(4)に示す。

(4) *wa-haaʔulaaʔi* **jaħtaadʒuuna** *ʔila* *riʕaajat-in* *xaas^ʕs^ʕat-an*
 and-they.NOM need: **VIII**.IPFV.3.M.PL to support-GEN special-ACC
min qibal-i *l-mudʒtamaʕ-i* *d-daulii-ji* *wa-munaz^ʕz^ʕamat-i-hi*
from side-GEN DEF-society-GEN DEF-international-GEN and-organization-GEN-it
l-insaaniiʒat-i *wa-fii* *ʔasraʕ-i* *waqt-in* *mumkin-in*
 DEF-humanitarian-GEN and-in most quickly-GEN time-GEN possible-GEN

「[攻撃で難民となった] 彼らはとりわけ国際社会や人道支援機関によるできる限り早い支援を必要としている。」 [احتاج 必要だ 120319quds]

2. 2. 1. 2. EA の第 VIII 形動詞①類 (2 項→1 項)

【アジェンクトなしの 1 項動詞】 1 *ʔintaha* 「(危機が)終わる」 2 *ʔintaha* 「(闘争が)終わる」 3 *ʔintaha* 「(暗黒時代が)終わる」 4 *ʔintaha* 「(この期間が)終わる」 5 *ʔintaha* 「(主題が)終わる」 6 *ʔintafar* 「(後退が)広がる」 7 *ʔintafar* 「(起訴が)広がる」 8 *ʔintafar* 「(火が)広がる」 9 *ʔintafar* 「(科学的傾向が)広がる」 10 *ʔintas^ʕar* 「(誰が)勝つ」 11 *ʔixtafa* 「(数千人が)消える」 12 *ixtalaf* 「(研究の程度が)異なる」 13 *ʔiʔas^ʕar* 「(思考が)限定される」 【行為を実際に達成する道具としての論理的な主語(前置詞句)伴う動詞】 14 *ʔintaha* 「(エジプト・リビア戦争が)(bi-**ع**ジプトの勝利によって)終わる」 15 *ʔintaha* 「(このことが)(bi-**ع**国際的同盟の成立によって)終わる」 16 *ʔintaha* 「(攻撃が)(bi-**ع**大ダメージによって)終わる」 17 *ʔintaha* 「(戦争が)(bi-**ع**敗北によっ

て)終わる」18 *ʔintaha* 「(貧困が)(bi-これによって)終わる」19 *ʔiʔtaraf* 「(マルクスは)(bi-宗教的愛国的情熱と愛情によって)知られている」20 *ʔihtamm* 「(かれは)(bi-出来事に)興味がある」21 *ʔihtamm* 「(研究者たちは)(bi-言語の研究に)興味を持っている」22 *ʔiktafa* 「(カッサンドロスは)(bi-指名に)満足する」【場所・時間・理由を伴う 1 項動詞】23 *ʔintaha* 「オスマン朝が《fii レバノンとシリアで》終わる」24 *ʔintasʕar* 「エジプト軍が《fii 戦闘で》勝つ」25 *ʔintasʕar* 「飛行機が《fii そこで》勝つ」26 *ʔintafar* 「オスマン朝が《fii レバノンとシリアで》終わる」27 *ʔiftayal* 「エルマフディが《fii テレビの世界で》働く」28 *ʔixtafa* 「寛容論が《min 社会から》消える」29 *ʔittagah* 「戦争が《li 惨劇へ》向かう」30 *ʔixtalaf* 「歴史家は《ʕan 地質学者とは》異なる」31 *ʔiʔtarak* 「カリーム・アーミルが《maʕ エルマフディに》加わる」32 *ʔiʔtarak* 「プトレマイオス 1 世が《maʕ セレウコスとリュシマコスに》加わる」【アジャンクト(前置詞句+意味上の目的語)を伴う 1 項動詞】33 *ʔintasʕar* 「(プトレマイオスが)(ʕala ドミトリウスに)勝つ」34 *ʔintasʕar* 「(プトレマイオスが)(ʕala ドミトリウスに)勝つ」35 *ʔittasʕal* 「(米国防務長官が)(bi エジプト外相に)連絡を取る」36 *ʔittasʕal* 「(歴史書が)(bi 人文的知識に)触れる」37 *ʔittasʕal* 「(絵が)(bi 歴史に)触れる」38 *ʔittasʕal* 「(イスラエル首相が)(bi キッシンジャーに)《テレビで》連絡を取る」【hāl(様態を表す対格名詞)を伴う 1 項動詞】39 *ʔiftayal* 「(ヒサーム氏は)(新聞記者として)働く」40 *ʔiftayal* 「(組織は)(法律事務所として)機能する」41 *ʔiʔtaʔad* 「【受】(プトレマイオス 1 世は)(ʔan 節だと)信じられている」

MSA・EA とともに相互態の用例は極わずかしか得られなかった。再帰についてもそれと分析できる動詞は一部の動詞に過ぎないと指摘できる。

2.2.2. 項の増減がみられない③類(2 項→2 項)／④類(1 項→1 項)

MSA・EA それぞれの項が派生前より増減しない第 VIII 形動詞の結果を示す。

2.2.2.1. MSA の第 VIII 形動詞③類(2 項→2 項)／④類(1 項→1 項)

③類(2 項→2 項)については、調査で得られた一意の語を以下に示す。

③類(2 項→2 項) 1 *irtaqada* 批判する 2 *iltaqaʕa* とる 3 *ibtayaa* 望む 4 *iftaraa* 買う 5 *iltaqaa* 会う 6 *iʔtaqada* 信じる 7 *ittaxaḏa* とる 8 *ʔihtaqḏaza* 拘束する 9 *ihtaḏḏa* 必要だ 10 *imtaraka* もっている 11 *iʔtaqala* 逮捕する 12 *intahadḏa* とる 13 *iḏtaaha* 襲う

④類(1 項→1 項) 【アジャンクトなしの 1 項動詞】 1 *iqtaraba* 「(戦争が)近い」【アジャンクト(前置詞句+意味上の目的語)を伴う 1 項動詞】 2 *ihtaʔazʕa* 「(大佐が)《bi 金額を》維持する」3 *ihtaʔazʕa* 「(リビアが)《bi 金額を》維持する」4 *ihtamma* 「(イスラエルは)《bi 人権に》関心がある」5 *intamaa* 「カウフマン議員が《ʔila 労働党に》属している」6 *iktafaa* 「(海賊が)《bi 強奪に》満足する」7 *iktafaa* 「ワシントンが《bi+仲裁人の命令に》満足する」8 *iftaqara* 「リビアは《ʔila 散布装置を》欠いている」9 *intazʕara* 「大統領は《ʔila 人民を》待つ」10 *intabaha* 「人は《ʔila 彼らの活動に》気づく」11 *iʔtamada* 「議長は《ʕala ソフトパワーに》頼る」12 *iltahaqa* 彼の息子は《bi 彼女 2 人に》加わる」

本来であれば「フェイスブック」が主格で現れて受動構文として用いられることを期待するが、「フェイスブック」は前置詞句 *ʔila* に後続して現れている。*juhtaadzu* が示す受動構文の主語は 3 人称男性単数であるが、非人称構文と理解すべき用例である。さらに、同じ動詞を用いた能動態を 2 文目に後続させていて、動作主(agent)の明示がなされていると分析することができる例である。

動作主の明示がない受動構文の多くの場合、動作主が不明というよりは、段落の前部に「誰によって」「何によって」その動作がなされたか理解することができる例であった。

収集した 138 例の受動構文の中には、非人称構文として分析できる用例が 8 例存在した。以下に例を示す。異なり語数としては 4 語の動詞(*ihtamala*, *iʃtaqada*, *iftaradʕa*, *ihtaadza*)が用いられている。*ihtamala*, *iʃtaqada*, *iftaradʕa* の 3 つの動詞は「みなされる」という意味で、*ihtaadza* は「必要とする」という意味で用いられる動詞である。

(3) *lam taqum bi-haaḏih l-ʃamaliijat-i quwwat-un min xaliidz-i l-wilaa-jaat-i*
 NEG do: JUSS.3.F.SG of-this.GEN DEF-mission-GEN military-NOM from gulf-GEN DEF-state-PL-GEN
l-muttahidat-i l-ʔamriikijjat-i ʔabad-an juhtamalu ʔanna hunaalika
 DEF-united-GEN DEF-American-GEN never-ACC be probably: PASS.VIII.IPFV.3.M.SG that here
ʔafraad-an min buldaan-in ʔuxraa qad tamma
 person.PL-ACC from country.PL-GEN another.GEN already complete:1.PFV.3.M.SG
stixdaam-u-haa fii-haa
 utilization-NOM-its.GEN in-it.GEN

「湾岸[駐留の]アメリカによる軍事活動は全く行われなかった。軍事活動を行った別の諸国のメンバーがいると見られる。」 [Kafri 2003: 33-34]

意味の上では *haaḏih l-ʃamaliijat* 「軍事活動が...とみなされる」と軍事活動を主語に解釈することはできるが、統語的には、軍事活動は女性形であるので *juhtamalu* の形ではなく *tuhtamalu* (3 人称女性単数) の形で本来であれば動詞は屈折するはずである。しかし、3 人称男性単数形の動詞の形で現れていることから、この *juhtamalu* の形があらわす 3 人称男性単数は「非人称」であると考えべきである。

3.2.2. EA の受動構文

調査の結果、204 例文(異なり語数で 118 語、その内訳は、派生前が第 I 形の動詞が 59 個、第 II 形の動詞が 44 個、第 III 形の動詞が 8 個、派生前の動詞が不明なものが 5 個)が得られた。第 I 形および第 II 形の 2 項動詞から派生するケースが全体の 88.8%(116 個中 103 個)を占めている。第 III 形から派生した it-接辞構文の用例は非常に少ないといえる。Woidich(2005: 329)の指摘通り、第 I, II, III 形に it-接辞は付加することができるのはこの調査からも明らかである。今回の調査ではわずかに第 VIII 形動詞の 1 例のみが内部屈折による受動構文であった。

204 例中わずかに 1 例、動作主が *min* という前置詞句を伴って明示されていた例を以下に示す。

(4) *ritʔard t-taalit malik ʔingiltira ... ʔithazam min henri*
 Richard.PN DEF-III king England ... be defeated: *itʔaʕal*.PFV.3.M.SG *by* Henry.PN
tiiduur ʔillii ʔittawwig malik tahta sm henri s-saabif
 Tudur.PN REL be crowned: PASS.PFV.3.M.SG throne under name Henry DEF-VII
 「リチャード 3 世はイングランド王で...ヘンリー 7 世という名の下で王位についたヘンリー・テューダーによって負かされた。」 [حروب الوردنين]

この文では、リチャード 3 世がテューダーに殺されたことを示すために、前置詞句 *min* “from” を用いて動作主を明示している。Agameya(2008)が指摘しているように、被害を受けたことを表す動詞(この場合、「殺害」)に *min* を用いて動作主を明示している。MSA と比べると、MSA は 138 例のうち、7 例(5.1%)に動作主の明示がみられたが、EA では 204 例中 1 例のみ(0.5%)しか得られなかった。調査で得られた用例の少なさを鑑みても MSA より EA のほうが前置詞句による動作主の明示には制限があることは明らかである。

動作を実現するための論理的な主語の明示が MSA 同様に前置詞句を伴って示すことができる例が 2 例あった。以下に 1 例示す。

(5) *bi-ʔatal.....perdikkaas ʔitwaʔaft l-harb wa...*
 by-killing Perdiccas.PN suspend: *itʔaʕal*.PFV.3.F.SG DEF-war.F and...
 「ペルディッカスの殺害によって戦争は延期された。そして...」 [بطليموس الاول]

2 例文では、「戦争の延期」、「殺害行為」という行為を行わせたのは *bi-* “by” 以下の前置詞句によって明示的に示されていた。

4. 調査から明らかになったこと

調査を通じて得られた、先行研究では指摘されていなかった知見については表中 で示した。

| MSA | 受動構文 | 第 VIII 形動詞 |
|-----|--|--|
| 項 | <ul style="list-style-type: none"> • 2 項動詞/3 項動詞の項が 1 つ減少する • 1 項動詞の場合項は減少しない。(1 項動詞の受動態は極めて稀) ⇒3 人称男性単数形の形に動詞を活用させて非人称構文による受動構文を作る。 | <ul style="list-style-type: none"> • 派生前に比べて項が 1 項減少する • 派生前に比べて項が 1 項増加する • 項が増減せず 2 項動詞のまま(意味の拡大) • 項が増減せず 1 項動詞のまま(意味の拡大) |

| | | |
|-----|---|--|
| 動作主 | <ul style="list-style-type: none"> ・動作主は明示されないのが普通 (文脈から明らかに動作主が分かるものが多い) ・<i>min</i>+などの前置詞句で行為を実際に達成する道具としての論理的な主語が示せる ・前置詞句 <i>min qibal</i>+動作主 ('from the side ')で動作主を示せる | <ul style="list-style-type: none"> ・相互態の場合には典型的に動作主を伴う ・1項動詞の場合 行為を実際に達成する ・論理的な主語や外的な動作主が明示的に段落内に示されることがある |
| その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・非人称構文による受動構文の用例がいくつかみられた | <ul style="list-style-type: none"> ・何らかの外的動作主の存在が明示され「ひとりでにある状態になる」と解釈できるような用例は得られなかった ・1項動詞としては第VII形と第VIII形動詞は相補分布をなしている |
| EA | it-接辞構文 | 第VIII形動詞 |
| 形 | I, II, III 形に it-接辞を付加 | iFtaʕaL |
| 項 | ・大部分が1項動詞 ・まれに2項動詞 | ・1項動詞 ・2項動詞 |
| 機能 | <ul style="list-style-type: none"> ・項の減少 ・受け身 | <ul style="list-style-type: none"> ・項の減少(自動詞化)と2項動詞の意味拡大が中心的機能 ・項の増加(他動詞化)は非常にまれ ・④類(1項→1項)のデータは得られず ・ごく一部、再帰・ごく一部、相互態 |
| 動作主 | <ul style="list-style-type: none"> ・動作主は明示されないのが普通 ・(危害を加えられたことを示す際のみ)「<i>min</i>+動作主」の形で動作主を明示することができる | <ul style="list-style-type: none"> ・何らかの外的動作主の存在が段落の中に明示されているものもある |
| その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・名詞からでも it-接辞を付加して新しく語彙が作れる | <ul style="list-style-type: none"> ・生産性が it-接辞に比べれば低い |

略号一覧

I~X pattern I~X 派生形第 I~X 形, 1/2/3 first/second/third person 1/2/3 人称, DEF definite 定冠詞, F feminine 女性形, FUT future 未来, IPFV imperfective 未完了, JUSS jussive 短形, M masculine 男性形, NEG negative 否定, PASS passive 受動態, PFV perfective 完了, PL plural 複數形, PN proper name 固有名詞, REL relative 關係詞, SG singular 單數形, - 形態素境界

参考文献(アルファベット順)

Abdel-Massih, Ernest T, et al. 2009. *A Reference Grammar of Egyptian Arabic*, (originally printed in 1979), Washington, D. C.: Georgetown University Press. / Abdul-Raof, Hussein. 1998. *Subject, Theme and Agent in Modern Standard Arabic*, Richmond: Curzon Press. / Agameya, Amira. 2008. "Passive (Syntax)," in Kees Versteegh et al. (eds.), *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics: Lat-Pu*, vol. III, Leiden: Brill, 558-564. / Badawi, El-Said. 1973. *Mustawayāt al-'Arabīyah al-Mu'āširah fī Miṣr : Baḥṭ fī 'Alāqah al-Luġha bi-l-Ḥaḍārah*, Cairo: Dār al-Ma'ārif. / Bubeník, Vít. 2008. "Passive," in Kees Versteegh et al. (eds.), *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics: Lat-Pu*, vol. III, Leiden: Brill, 552-558. / Cantarino, Vicente. 1974. *Syntax of Modern Arabic Prose: The Simple Sentence*, vol.1, Bloomington: Indiana University Press. / Danks, Warwick. 2011. *The Arabic Verb: Form and Meaning in the Vowel-lengthening Patterns*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins. / ハッサン, エバ. 2011. 「エジプトアラビア語における動作主の脱焦点化について」山田久就・高慧禎・佐々木冠編『一般言語学論叢』つくば: 筑波一般言語学研究会, 14: 65-89. / Holes, Clive. 2004. *Modern Arabic: Structures, Functions and Varieties*, rev. ed., Washington D.C.: Georgetown University Press. / Maalej, Zouhair. 2008. "Valency," in Kees Versteegh et al. (eds.), *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics: Q-Z*, vol. IV, Leiden: , 624-627. / McCarus, Ernest N. 2008. "Modern Standard Arabic," in Kees Versteegh et al. (eds.), *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics: Lat-Pu*, vol. III, Leiden: Brill, 238-262. / Ratcliffe, Robert R. 2005. "Semi-Productivity and Valence Marking in Arabic –The So-called "verbal themes" –," in Toshihiro Takagaki et al. (eds.), *Corpus-based approaches to sentence structures*. Amsterdam: John Benjamins, 179-190. / 上原唱. 2006. 「現代標準アラビア語の地域的特徴に関する研究——エジプト・シリア・チュニジアの新聞を比較して」アラブ・イスラム研究編集委員会編『アラブ・イスラム研究』, 5: 31-42. / Woidich, Manfred. 2005. "Cairo Arabic," in Kees Versteegh et al. (eds.), *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics: A-Ed*, vol. I, Leiden: Brill, 323-333. / Wright, W. 1962. *A Grammar of the Arabic Language, Translated from German of Caspari and Added with Numerous Additions and Corrections*, vol.1, 3rd ed., (originally printed in 1896), Cambridge: Cambridge University Press.

参考資料

MSA のコーパス資料 Kafīrī, Maḥmūd 'Abd al-Ḥamīd. 2003. *Duwal Miḥwar al-Šarr al-'Ilhābīyah: Amrikā, Buriṭāniyā, 'Isrā'īl, Dimašūq: Dār al-Qutaybah.* 「日本語で読む中東メディア」
<http://www.el.tufs.ac.jp/prmeis/html/pc/top.html> 調査対象とする新聞(2010~2012)Al-Ahram
<http://www.ahram.org.eg/> Al-Hayat <http://alhayat.com/> Al-Jaridat
<http://www.alwatan.sy/Al-Nahar> <http://www.annahar.com/> Al-Quds al-Arabi
<http://www.alquds.co.uk/> "The Quranic Arabic Corpus" <http://corpus.quran.com/> EA のコーパス
 資料 "Wikipedia Maṣrī" <http://arz.wikipedia.org/wiki/> 1 ليبراليه / 2 ماركسيه / 3 اشتراكيه علميه / 4 اشتراكيه
 الحرب المصريه الليبيه / 8 الحرب السكندريه / 7 الحرب الاهليه اللبنانيه / 6 عصور الظلام / 5 التاريخ / 4 اشتراكيه
 المبادرة المصريه للحقوق / 12 تفكيك الاتحاد السوفييتي / 11 الحرب العالميه الثانيه / 10 الحرب العالميه الاولى / 9
 جورج / 17 صالون المناقشه/ارشيف 9 / 16 حروب الوردتين / 15 علياء المهدي / 14 شايفنكم / 13 الشخصيه
 18 / 18 سيمنون / 19 اخنوخ فانوس (いずれも最終閲覧日 2015/01/08)

2014 年度

卒 業 論 文 要 旨

原形不定詞と共起する迂言的使役動詞 **have** の意味役割について
— 使役行為に対する使役主・被動者の意志性を中心に —

石川 真衣

(欧米第一課程 英語専攻)

キーワード：英語，迂言的使役動詞，有生性，意志性

0. はじめに

本稿の目的は、アメリカ英語における、原形不定詞と共起する迂言的使役動詞 **have** の意味役割を明らかにすることである。特に、使役主と被動者の有生性の組み合わせ及び、使役主や被動者が使役行為を指示・実行する意志性の有無を、共起した動詞から判断する。先行研究・小説及びコーパスから抽出した例文の訳、例文番号及び図表番号は、特に断りの無い限り筆者による。尚、本稿では、迂言的使役動詞を太字、本動詞を下線で示す。

0.1. 迂言的使役動詞とは

以下は、迂言的使役動詞に関する丸田(1998: 3)の記述を適宜要約したものである。

分析的使役動詞¹（または迂言的使役動詞）は、**make, cause, let, have**等の純粹に使役の意味を表す動詞で、結果出来事を表す独立した非使役述語²と組んで使役構文を構成する。

(1) **I had my secretary type the letters.**

私は自分の秘書にその手紙を作成させた。

(丸田 1998: 3)

本稿では、迂言的使役動詞のうち、**have** の意味役割に焦点を絞って調査を行う。

1. 先行研究

管見の限りアメリカ英語を対象とした研究は見られなかったため、迂言的使役動詞に関する先行研究として、イギリス英語を対象とした Wierzbicka(2006:171-179)と Ikegami(1990: 181-187) をまとめる³。Wierzbicka(2006)は作例以外は 1960 年代の小説から、Ikegami(1990)は Survey of English Usage コーパス（総語数 5000 語）から例文を抽出している。尚、現在はより大規模なコーパスが公開されており、管見の限り同コーパスを発見することはできなかったため、Ikegami(1990)がどの年代を対象としているのかは不明である。

¹ 本稿では、「(迂言的) 使役動詞 **have**」または「**have** 使役構文」という呼称に統一する。

² 本稿では「本動詞」に、動詞の形について言及する場合は「原形不定詞」と呼称を統一する。

³ どの地域の英語を研究対象としているかを明記した研究は殆ど見られなかったため、地域差は少ないのではないかと考えた。

1.1. Wierzbicka (2006)

使役主と被動者の間には、「使役主は被動者に要望を述べることができ、被動者はそれを拒否することができないという上下関係」が存在する。このような理由から、have 使役構文における使役主は、被動者が自らの指示を受け入れることを前提としている。よって、被動者は人間である必要があり、動物や無生物は基本的には許容不可能である。

1.2. Ikegami (1990)

have 使役構文の意味範囲は広く、使役主が最大限の主導権を持ち、被動者が最小限の自発性を持つ（使役主が被動者の行動を統制できる）ものから、使役主が最小限の主導権しか持たず、被動者が最大限の自発性を持つ（使役主が被動者の行動を統制できない）ものまでに及ぶ。have 使役構文における中心的な意味役割は後者に近く、それが特に顕著に現れるのは、被動者が無生物であり、人間の制御が及ばない事象に言及する場合である。

(2) ...if you do **have** any emergency arise, I'll just have to pack up and go...

もしあなたに何か緊急事態が起これば、私はすぐに荷物をまとめて行かねばならない。

(Ikegami 1990: 183)

1.3. 両先行研究の比較

両先行研究の例文を比較すると、共起している構文によっては、主張に共通点と相違点がみられることがわかった。Wierzbicka(2006)は、使役動詞 have の意味役割に影響を及ぼす要素を含まない、S+have+O+V 型の構文のみを研究対象にしているのに対し、Ikegami(1990)は、S+have+O+V 型を 2 例、また、助動詞等の要素を含んでいる例や、他の構文中に使役動詞 have が共起している例を 12 例、考察対象としている。そのような理由から、分析の際は構文を大まかに上記の 2 種類に分類する必要があると考えた。

更に、両先行研究の相違点である被動者の制御可能性は、本動詞の制御可能性から判断できるのではないかと考え、共起した動詞の分類も併せて行った。分類の際には、『ジーニアス和英辞典』第 2 版の D と S (dynamic =人間の意志で制御可能な、stative =人間の意志で制御不可能な出来事・状態) の表記を参考にした。尚、本稿では辞典中の D を意志動詞、S を無意志動詞という呼称に統一する。改めて先行研究の例文を S+have+O+V 型とそれ以外の構文に分け、共起した動詞を分類すると、次のような結果となった。

まず、S+have+O+V 型については、使役主・被動者が共に人間の例は Wierzbicka(2006) が 5 例、Ikegami(1990)が 2 例、使役主が人間・被動者が動物の例は Wierzbicka(2006)が 3 例、使役主が人間・被動者が無生物の例は Wierzbicka(2006)が 1 例、うち 11 語（異なり語数 11 語）全てが意志動詞であった。以下はその一例である。

(3) She **had** the girls clean his bicycle...every morning.

毎朝彼女はその女の子たちに彼の自転車を綺麗にさせた。

(Wierzbicka 2006: 177 (Naipaul 1969: 481)を一部省略)

原形不定詞と共起する迂言的使役動詞 **have** の意味役割について
 — 使役行為に対する使役主・被動者の意志性を中心に —

これらの例は、使役主が被動者を制御可能な使役の意味を持つ文として挙げられているため、**S+have+O+V** 型については、両先行研究において見解が一致しているといえる。

以下は、Ikegami(1990)が取り上げている **S+have+O+V** 型以外の例を分類した表である。

表 1: **S+have+O+V** 型以外の例における使役主・被動者及び共起した動詞の内訳

| 構文 | 使役主 | 被動者 | 例文数 | 計 | 動詞の内訳 | |
|--|---|-----|----------------|---|-------|-------|
| | | | | | 意志動詞 | 無意志動詞 |
| S+助動詞+have+O+V | 有生物 ⁴ | 人間 | 5 ⁵ | 6 | 3(3) | 1 |
| S V1 for having O V2 | | | 1 | | 1 | 0 |
| S+助動詞+have+O+V (制御不可) | 人間 | 無生物 | 2 | 4 | 0 | 2(2) |
| If S have O V, ... (制御不可) | | | 1 | | 0 | 1 |
| It took S ten seconds to have O V | | | 1 | | 0 | 1 |
| ...having O V...⁶ | - | 人間 | 2 | 2 | 2(2) | 0 |
| 計 | 全 12 例、うち意志動詞 6 語 (5 語)、 無意志動詞 5 語(5 語)、判断不可 1 語 | | | | | |

(Wierzbicka(2006)及び Ikegami(1990)を基に作成)

【**S+have+O+V** 型以外の例：助動詞を含む例】

(4) ... much later than Mrs Corley or Mr Piper would **have** you believe.

Mrs Corley または Mr Piper があなたを信じさせるよりもずっと後に....

(Ikegami 1990: 185)

S+have+O+V 型以外の構文では、無生物の被動者を許容していたり、被動者を制御できない無意志動詞が共起したりしている。このうちの何らかの要素が、使役動詞の意味役割を拡大させていると考えられる。ただし、両先行研究で提示されている例文は計 23 例と多くない。**S+have+O+V** 型の中心的意味役割の考察や、どのような要素が使役動詞 **have** の意味役割の拡大に関与しているのかの特定を行うには、より多くの例を分析する必要がある。

2. 調査の目的と方法

先の節に挙げた先行研究の問題点を踏まえ、本稿の目的と方法を以下のように設定した。

2.1. 調査の目的

本稿の目的は、アメリカ英語の迂言的使役動詞 **have** の中心的意味役割を明らかにすることである。分析時に着目する点は、使役主と被動者の有生性の組み合わせと出現頻度及び、共起した動詞が制御可能な動作か否か (= 意志動詞か無意志動詞か) の 2 点である。本動詞の分類基準は、先行研究の例文の本動詞を分類した際に用いたものと同様である。

⁴ 1 例使役主が神であるものを含むため、有生物と表記した。

⁵ 例文(4)は前後の文脈がなく、**believe** (信じる) 意味の意志性が不明瞭なため、判断を保留とした。

⁶ 本文中で提示されていない例文が、被動者が人間ものは 4 例、無生物のものは 2 例存在する。

2.2. 調査方法

より多くの事例を分類・考察するために、2回の調査を行った。以下に調査方法を示す。

【第1回調査：小説を用いた調査】

本文中から「使役動詞 have+原形不定詞」の形をとる文を抽出した。調査に用いたのは、Cather(1940) (全 296 ページ)、Faulkner(1948) (全 247 ページ)、Salinger(1955/57) (全 202 ページ)⁷の3冊である。いずれも1940～50年代にアメリカで出版された小説である。

【第2回調査：コーパスを用いた調査】

より多くの例文を抽出する目的で、コーパス(COHA: Corpus of Historical American English, 総語数4億語)を用いた調査を行った。筆者が試みた限り、COHAではhave使役構文のみを抽出することができなかつたため、共起する品詞を指定して検索を行った。尚、第1回調査で用いた小説の年代に合わせて、抽出する例文は1940～50年代のものに限定した。

3. 調査結果

調査の結果、共起した本動詞の意志性を、構文と使役主・被動者の有生性ごとに分類すると、以下のような結果となった。尚、表中の括弧内は異なり語数を表す。

3.1. S+have+O+V型に関する考察

以下は、2回の調査において得られた、S+have+O+V型の構文を分類した表である。

表 2: S+have+O+V型の構文

| | 使役主 | 被動者 | 例文数 | うち意志動詞 | うち無意志動詞 |
|------|-----|-----|------|---------------------------|-----------|
| 小説 | 人間 | 人間 | 2 | 3 (3) | 0 |
| コーパス | 人間 | 人間 | 79 | 79 (58) | 0 |
| | 人間 | 無生物 | 4 | 2 (2) | 2 (2) |
| | 無生物 | 人間 | 2 | 2 (2) | 0 |
| 総計 | | | 87 例 | 86 語 (64 語 ⁸) | 2 語 (2 語) |

3.1.1. 使役主・被動者が共に人間であるもの (81 例)

S+have+O+V型の構文のうち、使役主と被動者が共に人間であるものは81例、うち82語(異なり語数60語⁹)全てが意志動詞であった。以下は共起した例文の一例である。

(5) On Christmas morning she ... **had** all the men on the place come in to get their presents and their Christmas drink¹⁰.

⁷ Cather(1940)及びFaulkner(1948)は、電子版を利用した。文庫版とはページ数が異なる可能性がある。

⁸ 小説とコーパスでcomeという語が重複しているため、異なり語数の総計から1語差し引いた。

⁹ 同上。

¹⁰ 紙幅の都合上一部省略した箇所については、その旨を「...」で示した。

クリスマスの朝、彼女（主人）はプレゼントとクリスマスドリンクを受け取らせるために、屋敷の全ての人間（召使い）を部屋に入らせた。

(Cather 1940: 220)

S+have+O+V 型の構文のうち、使役主・被動者が共に人間であるものは意志動詞と共起し、「使役主が被動者に使役行為をさせる」という使役の意味を保持する文として現れた。

3.1.2. 使役主が人間・被動者が無生物であるもの（4例）

S+have+O+V 型の構文のうち、使役主が人間・被動者が無生物であるものは4例抽出された。そのうち意志動詞が2語（clone: 複製する・draw up: 作成する）、無意志動詞が2語（open: 開く、run off: 流出する）共起した。抽出された例文は以下の通りである。

【被動者が形式上は無生物だが、実質的には人間を指すもの（1例）】

(6) ... he **had** it draw up a sober official statement.

彼は（閣僚に）穏健な公式声明を作成させた。 (COHA の例を一部省略)

例文(6)の被動者は形式上は無生物だが、閣僚を指しているため、実質的には人間同士の使役である。その意味役割も人間同士の使役と変わらず、使役の意味を保持している。

【被動者は無生物だが、他に使役行為の実行者が存在すると考えられるもの（1例）】

(7) ...his mop of white hair was so well curled Alexandra was sure he **had** it clone at a beauty parlor.

彼の白い髪の毛の房はとても綺麗に巻かれていたので、Alexandra は彼がそれ（髪）を美容院で複製させたとわかっていた。

(COHA の例を一部省略)

例文(7)は、被動者以外に使役行為の実行者（美容師）が存在し、「使役主が、被動者以外の使役の実行者に指示をして、被動者のある状態にさせる」という意味を持つと解釈できる。形式上は「S+had+O+原形不定詞」となっているが、実際は、*He had his hair cut.* のような、「S+had+O+動詞の過去分詞形」が持つ受益の意味に近いと考えられる。

【被動者が無生物であるもの（2例）】

(8) By the time he **had** it open, the painful feeling was gone.

彼がそれ（弁当箱）を開けた時には、その痛ましい気持ちは晴れてしまっていた。

(COHA)

(9) ...a... major-general **had** them run off, and saw and heard every word of the conversation between the Rehab Shop and -- nowhere.

少将がそれら（ビデオテープ）を流出させ、the Rehab Shop とどこかしらとの間で交された会話の一言一句を見聞きした。

(COHA の例を一部省略)

上記の例文(8)・(9)は、「主語が行った行為の結果、目的語をある状態にさせる」という意味で使われていると考えられる。これらは使役の形をとってはいるが、実際に動作を行うのは被動者ではなく主語であるという点で、使役の意味は薄いと考えられる。ただし、例文(9)の run off は過去分詞形である可能性も考えられる。その場合は、目的語（被動者）は無生物であるため、「本文中には明示されていない人間の動作主に目的語をある状態にさせる」という意味で使われている可能性もある。英語母語話者¹¹にこの構文を確認して貰ったところ、例文(8)については「苦労して～した」という意味が付加されるというコメントを得た。S+have+O+V 型において、確実に被動者が真の無生物であるといえるのは例文(8)のみであることから、この例文は特に例外的な用法であると考えられる。よって、そのような例外性が「苦労して～した」というニュアンスを付加していると考えられる。

3.1.3. 使役主が無生物・被動者が人間であるもの（2例）

S+have+O+V 型の構文のうち、使役主が無生物・被動者が人間である組み合わせは2例（意志動詞 decorate: 飾り付ける・pass: 流通させる）抽出された。どちらの例においても、使役主は「ある組織の人（the magazine 及び the Nazis）」を指しているため、これらは実質的に人間同士の使役であるといえる。これらの意味役割は、3.1.1.節で提示したものと変わらないと考えられるため、例文の提示は省略する。

3.1.4. 使役主・被動者が共に無生物であるもの（0例）

S+have+O+V 型のうち、使役主・被動者が共に無生物であるものは1例もなかった。

3.1.5. S+have+O+V 型に関する考察のまとめ

最も共起数が多かったのは、使役主・被動者が共に人間の組み合わせであるもので、その数は全87例中、81例であった。更に、使役主が人間・被動者が無生物のもの2例の被動者（または使役行為の実行者）が実質的に人間であるものであり、使役主が無生物・被動者が人間である2例における、使役主も実質的には「ある組織に所属している人間」を指していた。よって事実上87例中85例が使役主・被動者が共に人間の組み合わせとして出現したと考えることができる。使役主・被動者が共に人間であるもの85例は全て意志動詞と共起したことから、S+have+O+V 型の、最も中心的な組み合わせは、「人間の使役主・被動者の下、意志をもって行う動作を被動者に行わせること」であるといえる。

¹¹ イギリス出身の女性からコメントを得た。

3.2. 使役動詞 **have** が他の要素と共に出現した例に関する考察 (382 例)

使役動詞 **have** が他の要素と共に出現した例は、382 例みられた。以下はその内訳である。

表 3: 使役動詞 **have** が他の要素と共に出現したもの

| | 使役主 | 被動者 | 例文数 | うち意志動詞 | うち無意志動詞 |
|------|-----|-----|-------|---------------|--------------|
| 小説 | 人間 | 人間 | 5 | 5(5) | 0 |
| | 人間 | 無生物 | 1 | 1 | 0 |
| コーパス | 人間 | 人間 | 331 | 255(146) | 78(22) |
| | 人間 | 動物 | 1 | 2(2) | 0 |
| | 動物 | 人間 | 1 | 1 | 0 |
| | 人間 | 無生物 | 18 | 2(2) | 17(12) |
| | 無生物 | 人間 | 19 | 5(5) | 15(7) |
| | 無生物 | 無生物 | 6 | 2(2) | 5(5) |
| 総計 | | | 382 例 | 273 語 (160 語) | 115 語 (43 語) |

使役動詞 **have** が他の要素と共に出現したものを、できる限り細かく構文ごとに分類したところ、助動詞 **will** が使役動詞 **have** の意味役割の拡大に大きく影響していることが分かった。本稿では、**S+have+O+V** 型においては共起しなかった例外的用法として、人間同士の使役のうち無意志動詞が多数共起した「**S+will+have+O+V**」型と、使役主が無生物・被動者が人間であるもののうち、多数を占めた「**as S would have O V**」型について取り上げる。

人間同士の使役において「**S+will+have+O+V**」の形をとった 30 例のうち、3 例は 3 人称が話し手であり単純未来を表すもので、うち 2 例 (2 語) (**include** (含む)、**exclude** (除外する)) は意志動詞と共起し、残り 1 例は無意志動詞 **believe** (信じる) と共起した。残りの 27 例は、使役主が 1 人称単数であるものであった。そのうち意志動詞と共起したものが 5 例 (2 語) (**call** (電話する) が 3 例、**come** (来る) が 2 例)、無意志動詞と共起したものが 22 例 (5 語) (**know** (知っている) が 19 例、**notice** (気づく)・**suffer** (困る)・**understand** (わかる) が各 1 例) であった。以下はその一例である。

(10) **My husband, I'll have you know, died happy.**

私の夫は幸せに死んだのだと、あなたにわからせてやる。

(COHA)

話し手の強い意志を表す助動詞 **will** と共起した例文において、意志動詞と無意志動詞が共起した割合は約 1 : 4 であった。しかし、同じ話し手の意志を表すものでも、**will** よりも意志が反映される度合いが弱い **shall** については 3 例 (4 語) (**come** (来る)・**go** (行く)・**send** (送る)・**talk** (話す)) 全てが意志動詞と共起し、無意志動詞は共起しなかった。

未来の予定を表す「**S is/are going to have O V**」も 11 例 (8 語) (**come** (来る)・**take** (取

ってくる) が各 2 例、bring (持ってくる)・call (電話する)・stand up (立つ)・start (始める)・treat (扱う)・wait (待つ) が各 1 例) 抽出されたが、本動詞は全て意志動詞であった。

以上の要素から、話し手の強い意志が現れることが、無意志動詞をとることができる 1 つの条件であるという結論に至った。その場合は、被動者の使役行為に対する意志性は考慮されず、「被動者がある状態におく」という意味で使われるのではないかと考えられる。

使役主が無生物・被動者が人間であるものにおいては、「(as) S would have O V」という構文が 19 例中 9 例と約半数を占めた。以下はその一例である。

(11) Your editorial “Workers and Investors” would have us believe that America today has practically achieved social ownership...

あなたの社説「労働者と投資者」は、私たちに、今日のアメリカは事実上社会的所有権を得たということ信じさせるでしょう。(COHA)

これらの構文の使役主として共起したものは、全て抽象概念 (book・previous work・tradition 等) であり、本動詞として共起したのものも、believe (信じる)・love (愛する)・suppose (考える) 等の、心理や思考に関連する動詞であった。その場合、「抽象概念が原因となり、人間の被動者がある状態にさせる」という意味を表していると考えられる。

4. まとめと今後の課題

今回の調査では、多くの実例の抽出と考察を行ったことで、ある程度使役動詞 have の中心的意味役割や、例外的用法を特定することができた。今回は、動詞の意志性を判断する際に『ジーニアス和英大辞典』第 2 版を用いたが、多くの場合は文脈による判断に頼らざるをえなかった。筆者は英語母語話者ではないため、意志動詞・無意志動詞の判断が英語母語話者と一致していない可能性がある。そのような理由から、今後は英語母語話者を対象にしたアンケート調査を行い、より客観的な分類を行う必要があると考えられる。

参考文献

【英語の文献】 Ikegami, Yoshihiko. (1990) Have/Get/Make/Let + Object + (to-) infinitive in SEU corpus. In 国広哲弥教授還暦退官記念論文編集委員会 ed., *文法と意味の間*, 181-203. 東京:くろしお出版. / Naipaul, Shiva. (1969) *Fireflies*. London: Penguin Classics. / Wierzbicka, Anna. (2006) The English Causatives – Causation and Interpersonal Relations. *English: Meaning and Culture*, 171-203. Oxford: Oxford University Press. 【日本語の文献】 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー—語彙的使役動詞の語彙概念構造—』東京: 松柏社。

調査資料

【辞典】小西友七・南出康世編著(2003) 『ジーニアス和英辞典 第 2 版』東京: 大修館書店。【文献】Cather, Willa. (1940) *Sapphira and the Slave Girl*. New York: A. A. Knopf. / Faulkner, William. (1948) *Intruder in the dust*. New York: Random House, Inc. / Salinger, J. David. (1961) *Franny and Zooey*. Boston: Little Brown Company.

【コーパス】Davies, Mark. (2010-) *The Corpus of Historical American English: 400 million words, 1810-2009*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coha/>. (最終閲覧日: 2015 年 1 月 15 日)

「～(さ)せていただく」表現について
—話し手と聞き手の意識に着目して—

岡垣 亮我

(欧米第一課程 英語専攻)

キーワード: 「～(さ)せていただく」, 謙譲語, 話し手と聞き手の意識, 慇懃無礼

0. はじめに

日本語の敬語には、「～(さ)せていただく」という非常に改まった謙譲表現が存在する。一般的には相手から恩恵・許可を受けるときに使うのが基本の用法だが、恩恵・許可が想定できない場面にまで用法が拡大し、頻繁に使われるようになってきている。その使用に関しては話し手と聞き手で認識が異なる部分がある。本稿は「～(さ)せていただく」表現について、アンケート調査を通じて年齢層別に得られた話し手・聞き手双方の意識に基づいて、「～(さ)せていただく」表現が実際の使用においてどの場合に適切かを明らかにすることを目的とする。なお、特に断りのない限り例文番号は筆者によるものとする。

1. 「～(さ)せていただく」表現とは

日本語記述文法研究会編(2009)は、「～(さ)せていただく」表現は基本的には「～(さ)せていただく」内容に対する許可と、その許可に対する恩恵の要素が含まれる謙譲表現であると述べている。しかし、許可者が実際に想定できない場合にも「～(さ)せていただく」表現が用いられるようになってきている。日本語記述文法研究会編(2009)によると「～(さ)せていただく」表現が多用されるのは、「～いたす」という謙譲表現が動詞によって強い制限を受けることと深い関係があるという。この「～いたす」と動詞による使用制限について記述のある菊池(1997)を要約して以下に示す。

「お(ご)～する」は謙譲語の中でも単に自分の行為を低めて述べる場合には使うことができない。さらに「～いたす」はサ変動詞にしか後接できないという問題があり、非サ変動詞では「行く・来る→まいる」「言う→申す」のように特定の形がある場合を除いては、謙譲語の形が作れない。これに対して、「～させていただく」なら、サ変・非サ変を問わず使うことができる。

(菊池 1997: 45-46 を要約)

菊池(1997)は、サ変・非サ変を問わず「～(さ)せていただく」表現が使えることから、この表現の使用が拡大してきたと推察している。

井上(1999)は、文法的に不要な「さ」を入れる表現で、「～(さ)せていただく」表現の誤用である「さ入れ」表現について記述している。「さ入れ」表現多用の背景について井上(1999)の記述を要約して示す。

「休む」「帰る」「伺う」などの動詞は文法的には五段活用動詞で、本来は「休ませて、帰らせて、伺わせて」で十分である。ところが一段動詞やサ行変格活用動詞だと「閉めさせて」「休業させて」のように「させていただく」が多く使われることから、それにそらえて「さ」を入れ、「休まさせて、帰らさせて、伺わさせて」などとしたのである。

(井上 1999: 172-173 を要約)

本稿では「さ入れ」表現と「～(さ)せていただく」表現の間に特別な違いを設定しないが、文法的に問題のある「さ入れ」表現が聞き手の判断に影響を与える可能性も考えられる(4.3節で詳述)。

2. 先行研究と問題提起

実際には行為の許可者や恩恵が認められない場合にまで使用が拡大してきた「～(さ)せていただく」表現だが、拡大用法の全てが容認されるわけではない。「～(さ)せていただく」表現を含む用例を示し、実際に聞き手の容認度を問うた研究には菊地(1997)、宇都宮(2004)、伊藤(2011)がある¹。

しかし、いずれも「～(さ)せていただく」表現の話し手の具体的意識(使用する理由)については言及していなかった。さらにいずれの調査においても「～(さ)せていただく」表現に対する意識と年齢の関係に言及していない。菊地(1997)は、年齢の異なる社会人103名を対象にアンケート調査を行ったが、回答を年齢層別に分けておらず、宇都宮(2004)も300名のアンケート対象者を「学生」と「一般」という2つのカテゴリに区別しただけである。伊藤(2011)のアンケート対象は高校の一クラスで、極めて限られた年齢層であった。

以上のことから、話し手(「～(さ)せていただく」表現を使用する／しない理由)・聞き手(他人の「～(さ)せていただく」表現の使用が気になる／気にならない理由)の双方の具体的な意識を踏まえて「～(さ)せていただく」表現の使用がどの程度適切かということ、「～(さ)せていただく」表現に対する態度を年齢層別に調査することに意義があると筆者は考える。

¹菊地(1997)は、「～(さ)せていただく」表現について社会人103名(20代21名、30代18名、40代45名、50以上19名)を対象に、7つの例文の容認度を○か×で問う形式のアンケート調査を実施した。アンケートに使用した例文は紙幅の都合上割愛する(以下の先行研究についても同様)。

宇都宮(2004)は、日本語母語話者300人を対象にアンケート調査を行い、複数の状況における「～(さ)せていただく」表現の使用実態についての違和感・敬意度レベルを調査した。アンケート対象者は大学生が164名、大学生より年齢が上の対象者(「一般」とする)が136名の計300名である。

伊藤(2011)は、秋田県秋田市の高校生55名(男子31名、女子24名)を対象にアンケート調査を行い、「～(さ)せていただく」表現の自然度と、その判断要因について、分析・考察を行ったものである。

3. 調査

3.1. 調査方法

「～（さ）せていただく」表現に対する意識調査のために、日本語母語話者 106 名²（10 代 17 名、20 代 32 名、30 代 10 名、40 代 18 名、50 代 17 名、60 代以上 12 名）を対象にアンケート調査を行った。アンケートには年齢・性別に加え、「～（さ）せていただく」表現を積極的に使用するか否か、使用／不使用の理由（自由記述）、他人の使用が気になったことがあるか否か、「～（さ）せていただく」表現に対して受けた印象（自由記述）を尋ねたうえで、菊地(1997)のアンケートで用いられた例文を示して適切かどうかを○×で質問した。このように質問項目を設定したのは、「～（さ）せていただく」表現を含む形式についての容認度を問うだけではなく、普段日本語母語話者が同表現に対して抱いている意識（使用理由・聞き手としての印象）を調査するためである。アンケート質問票を以下に示す。

アンケート質問票

- Q1. 性別と年齢を教えてください。性別() 年齢()
- Q2. あなたは普段「～（さ）せていただく」という表現を積極的に（頻繁に、あるいは積極的な態度で）使いますか。（はい いいえ）
- Q3. Q2 で「はい」を選択した方は、「～（さ）せていただく」表現を（積極的に）使用する理由を、Q2 で「いいえ」を選択した方は、「～（さ）せていただく」表現を（積極的に）使用しない理由を、それぞれお答えください。（自由記述。卒業論文本体では回答例あり。）
- Q4. 他人が「～（さ）せていただく」という表現を使っているのを聞いて、気になったことがありますか。（はい いいえ）
- Q5. 他人の「～（さ）せていただく」表現の使用について、どのような印象を受けましたか。（自由記述。卒業論文本体では回答例あり。）
- Q6. 以下の例文について、あなたの感覚で適切かどうかを○・×で教えてください。
(○：適切 ×：不適切)
- （学生が教師に）すみませんが、先生の本を使わせていただけないでしょうか。
 - （パーティの出欠の返事で）出席させていただきます。
 - （結婚式で媒酌人が）媒酌人として一言ご挨拶させていただきます。
 - （結婚式での、新郎の友人のスピーチ）新郎とは十年來のおつきあいをさせていただいております。
 - （同、新婦の友人のスピーチ）私は新婦と三年間一緒にテニスをさせていただいた田中と申します。
 - （近所の人に）私どもは、休日はハワイで過ごさせていただきます。
 - （セールスマンが客に）新製品を開発させていただきまして。

²10 代、20 代は本学学生が中心で、30 代以上は職種・業種を問わずアンケート調査を実施した。

3.2. 調査結果

3.2.1. 話し手として「～（さ）せていただく」表現を積極的に使用する理由

Q3. Q2 「『～（さ）せていただく』表現を積極的に使うか」に対して「はい」と回答した理由で最も多かったものを年齢層別に以下に挙げる。

<10代>

- ・(アルバイトなどで) 目上と話す機会が多いから
- ・使ったほうがフォーマル(または丁寧)だから (各5件)

<20代>

- ・(アルバイトや就職活動など、目上に対し) 丁寧さを示すことができるから(8件)

<30代>

- ・目上と接する機会が多いから
- ・客先のメールによく使うから (各2件)

<40代>

- ・目上に対して、付けばとりあえず失礼がないと思うから (5件)

<50代>

- ・目上やお客様に失礼のないように接したいから
- ・謙虚な気持ちで物事に取り組んだり、人に接したりしたいから
- ・丁寧だから (各2件)

<60代以上>

- ・柔らかい言い回しになると思うから (2件)

3.2.2. 聞き手として他人の「～（さ）せていただく」表現の使用が気になる理由

Q5. Q4 「他人の『～（さ）せていただく』表現の使用が気になるか」に対して「はい」と回答した理由で最も多かったものを年齢層ごとに以下に挙げる。

<10代>

- ・堅苦しいイメージだから
- ・敬語の間違った使い方を避けたいから (各2件)

<20代>

- ・必要以上に敬意を払われている気がしたから (7件)

<30代>

- ・へりくだりすぎていたから (2件)

<40代>

- ・慇懃無礼だと思ったから (4件)

<50代>

- ・へりくだりすぎだと思ったから (3件)

<60代以上>

- ・人間関係(対等な関係を含む)に不相応だったから (2件)

3.2.3. 「～（さ）せていただく」表現への「積極度」「消極度」「許容度」

本節では筆者が Q2・Q4 の回答から導き出した「積極度」・「消極度」、Q6 から導き出した「許容度」について述べる。はじめに Q2・Q4 の年齢層別回答状況を表 1・表 2 にそれぞれ示す。

表 1: Q2 「～（さ）せていただく」表現を積極的に使うか

| | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代～ | 全体 |
|-----|-------|--------------|-----|-----|-------|--------------|--------------|
| はい | 70.6% | 46.9% | 60% | 50% | 58.8% | 41.7% | 53.8% |
| いいえ | 29.4% | 53.1% | 40% | 50% | 41.2% | 58.3% | 46.2% |

表 2: Q4 「他人の『～（さ）せていただく』表現の使用が気になるか」

| | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代～ | 全体 |
|-----|-------|--------------|------------|-------|-------|------|--------------|
| はい | 35.3% | 53.1% | 60% | 33.3% | 47.1% | 50% | 46.2% |
| いいえ | 64.7% | 46.9% | 40% | 66.7% | 52.9% | 50% | 53.8% |

Q2（使用するか）で「はい」を選択し、Q4（気になるか）で「いいえ」を選択した「自分が積極的に使用し、かつ他人の使用に対して気にならない」人数の割合を「～（さ）せていただく」表現の「**積極度**」とすると、年齢層別の積極度は以下の表のようになる。

表 3: 「～（さ）せていただく」表現の年齢層別「積極度」

| | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代以上 | 全体 |
|-----|--------------|--------------|-----|-------|-------|-------|-------|
| 積極度 | 52.9% | 21.9% | 40% | 27.8% | 29.4% | 33.3% | 32.1% |

「積極度」と同様に、Q2（使用するか）で「いいえ」を選択し、Q4（気になるか）で「はい」を選択した「自分が積極的に使用せず、かつ他人の使用が気になる」人数の割合を「～（さ）せていただく」表現の「**消極度**」とすると、年齢層別の「消極度」は以下の表のようになる（「消極度」が高いほど、「～（さ）せていただく」表現に対して消極的であると考える）。

表 4: 「～（さ）せていただく」表現の年齢層別「消極度」

| | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代以上 | 全体 |
|-----|-------|-------|-----|--------------|-------|--------------|-------|
| 消極度 | 17.6% | 28.1% | 40% | 11.1% | 17.6% | 41.7% | 24.5% |

Q6 の各設問に対して「○（許容できる）」と答えた人の割合を以下の図に示す。

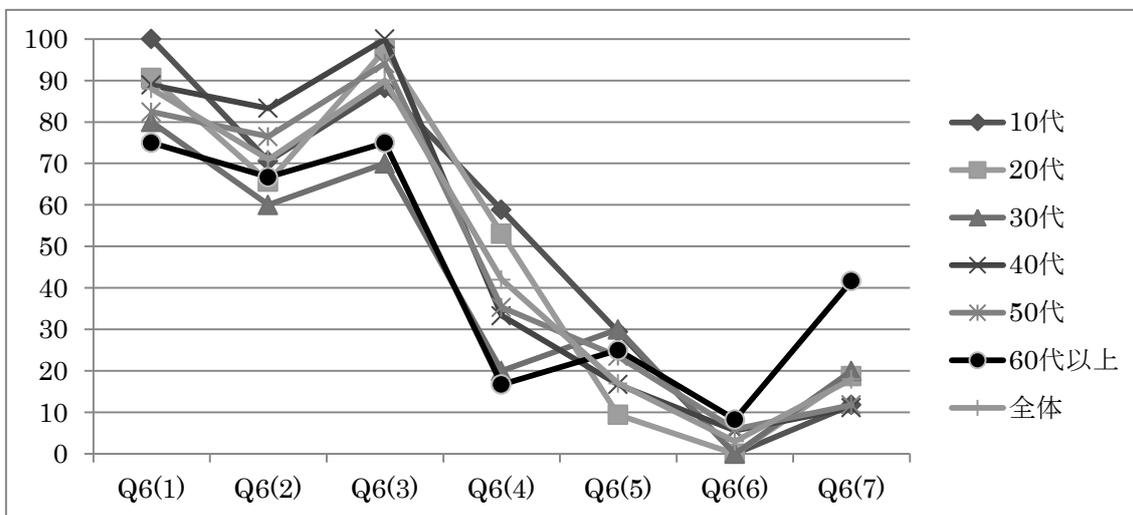


図 1: Q6 の各例文に対して「○」と回答した人の年齢層別割合

(3)>(1)>(2)>(5)>(4)>(7)>(6)の順に○の割合が多いという傾向はほとんどの年齢層に共通するが、年齢層ごとに○の割合の大きさが異なる。Q6 の各設問に対して○と回答した合計が全体の回答数に占める割合を「～（さ）せていただく」表現に対する「許容度」³とすると、年齢層別許容度は以下の表 5 で表すことができる。

表 5: 年齢層別許容度

| | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 全体 |
|-----|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-------|
| 許容度 | 48.7% | 47.3% | 40% | 48.4% | 47.1% | 44.0% | 46.6% |

4. 考察

4.1. 年齢別回答状況を踏まえて

10代は『～（さ）せていただく』表現を積極的に使い、かつ他人の使用も気にしない傾向が顕著に現れた。Q2・Q4の結果、「～（さ）せていただく」表現を積極的に使用する割合が最も大きく、かつ「他人の使用が気になる」割合が全年齢層中2番目に小さい。さらに「積極度」は最も高く、「消極度」は全年齢層中2番目に低い。「許容度」は全年齢層中最も高かった。

20代は「～（さ）せていただく」表現に対して消極的な傾向が全年齢層中最も強く現れた。この結果には20代のアンケート対象者が本学学生で、言語の使用に強い関心を持っていることも関係していると考えられる。Q2・Q4の結果、「～（さ）せていただく」表現を

³ 例えば、Q6に対して10代は回答者数17×例文数7=回答数119であり、そのうち○とする回答が58あったため、58/119で48.7%を導き出すことができる。

「積極的に使用しない」割合が「使用する」割合を上回り、「他人の使用が気になる」割合が「気にならない」割合を上回った。さらに「積極度」は全年齢層中最も低く、「消極度」は全年齢層中3番目であるものの、「全体」よりも高かった。

30代は「～（さ）せていただく」表現に対して消極的な傾向がみられた。Q4の結果、他人の「～（さ）せていただく」表現の使用が「気になる」割合が「全体」のそれを上回った。さらに、「許容度」は全年齢層中最低で、「消極度」は全年齢層中2番目に高い。30代は「～（さ）せていただく」表現に対して消極的な態度を持ちながらも、実際には使用することが多いという傾向が伺える。

40代「～（さ）せていただく」表現に対して積極的な傾向がみられた。Q2・Q4の結果、「～（さ）せていただく」表現を「積極的に使う」割合が「使わない」割合に比べて高く、かつ他人の使用が「気にならない」割合が「気になる」割合を大きく下回った。「許容度」は全年齢層中2番目に高く、「消極度」は最も低かった。

50代は「～（さ）せていただく」表現に対して積極的な傾向があると言える。Q2・Q4では、「積極的に使用する」「他人の使用が気にならない」割合が大きく、かつ「許容度」は「全体」よりも高い。「積極度」も「消極度」を上回っており、「許容度」は「全体」を上回った。

60代は「～（さ）せていただく」表現に対して消極的な傾向があると言える。Q4では「他人の使用が気になる」割合と「気にならない」割合がちょうど半々であった。Q2では「積極的に使用しない」が「使用する」を上回った。「許容度」は「全体」よりも低かった。

4.2. 聞き手と話し手の意識を踏まえて

話し手が「～（さ）せていただく」表現を（積極的に）使用する理由で最も多かったものを年齢層別に見ると、全て話し手の丁寧意識または謙譲意識に基づく回答であった。一方聞き手が他人の「～（さ）せていただく」表現を気にする理由で最も多かったものを年齢層別に見ると、「その場に合わない丁寧すぎる表現である」という旨の回答が目立った。このことから、「～（さ）せていただく」表現を巡っては、「話し手は丁寧・謙譲の意識を持っているのに対して、聞き手は丁寧すぎて慇懃無礼な印象を受ける」傾向が明らかになった。

4.3. 「さ入れ」表現を踏まえて

「さ入れ」表現について、自由記述回答欄には「『さ入れ』表現である」という理由で気になるとの回答はなかったが、「敬語として間違っている気がするから」「日本語としておかしい」など、「～（さ）せていただく」の間違いに関して言及する回答が複数見られた。

本調査の結果を見る限りでは断言できないが「さ入れ」表現が敬語として間違っているという意識が「～（さ）せていただく」表現に対する使用及び容認度に影響する可能性は考えられる。

5. まとめと今後の課題

アンケートによる意識調査の結果、「～（さ）せていただく」表現の使用に積極的なのは10代、40代、50代で、消極的なのは20代、30代、60代以上であることが分かった。しかし年齢と「～（さ）せていただく」表現に対する態度には明確な相関関係は見られなかった。さらに、「～（さ）せていただく」表現には話し手と聞き手とで意識に違いがあることも明らかになった。聞き手の意識の回答を踏まえると、許可・恩恵が存在する場合のほか、人間関係を考慮して、本当に丁寧に表現する必要がある場面を選んで限定的に使用するのが適切だと考えられる。しかしQ2・Q4の結果、全体では「『～（さ）せていただく』表現を積極的に使用し、他人の使用も気にならない」傾向があるため、その使用に関してさほど神経質になる必要はないと考えられる。

本稿では割愛したが、実際のQ3・Q5の自由記述項目の回答に、営業・請負・接客業など、職種柄使用する（しない）という回答が見られた。「～（さ）せていただく」表現は謙譲語という語の特性上、職業が話し手・聞き手の意識に影響を与える可能性は大きいと考えられる。しかし、アンケート質問票では職業の別を設けなかったため、回答者の職種が違えば年齢層ごとの回答の傾向も異なる可能性がある。さらに「～（さ）せていただく」表現の使用理由に関しては、「丁寧だから」という回答が多数見られたが、今回のアンケート調査では、20代で1件「お願いを聞いてもらいやすいから」という回答があっただけで、「丁寧」意識の先にある話し手の意図までは汲み取ることができなかった。

今後「～（さ）せていただく」表現のアンケートを行う際は、回答者の職業を問うこと、「丁寧」意識の詳細についても調査することが課題である。

参考文献

- 伊藤博美 (2011) 『『(さ) せていただく』表現における自然度と判断要因』『日本語学論集』(7), 139-152.
- 井上史雄 (1999) 『敬語はこわくない 最新用例と基礎知識』東京: 講談社.
- 宇都宮陽子 (2004) 『『～（さ）せていただく』の『定型表現』に関する考察——『待遇表現』の観点から』『待遇コミュニケーション研究』(2), 1-16.
- 菊地康人 (1997) 「変わりゆく『させていただく』」『言語』26(6), 40-47.
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法 7: 第12部 談話 第13部 待遇表現』東京: くろしお出版.

岡山備前方言における疑問詞の係り結びについて

岡本 進

(日本課程 日本語専攻)

キーワード：岡山方言，文法化，疑問文，モダリティ

0. はじめに

虫明(1958)や三宅(2014)によれば、岡山方言には疑問詞と呼応して述語を仮定形(本稿では条件形とする)で結ぶという「疑問詞の係り結び」が存在する。本稿では先行研究に従い、当該の現象を「疑問詞の係り結び」あるいは単に「係り結び」とする。具体的に例を挙げる(例文は上からカタカナによる音韻表記、形態素分析、グロス、標準語訳の順、以下同)。

- | | | |
|-----------------|-------------------|---------------------------|
| (1)a. ドケー行キヤー | b. ドコガ良ケリヤー | c. ドコナラ |
| dokee ik-jaa | doko=ga jo-kerjaa | doko=nara |
| どこ.ILL 行く-COND1 | どこ=NOM 良い-COND1 | どこ=COP.COND1 ¹ |
| 「どこへ行くか」 | 「どこが良いか」 | 「どこか」 |

(三宅 2014: 49)

筆者は18歳まで岡山県備前市で過ごしたが、(1a)や(1b)のような形式は耳にしたことがない。(1c)のような形式に関しては、よく耳にするし自身もよく使う。よって、この係り結びは消失しつつあるものではないかと思われる。加えて、(1c)に見られる文末の「ナラ」はコンピュータの屈折ではなく、一種の終助詞として機能していると考えられる。

卒業論文の主な論旨は次の3つである。

- I. 岡山備前方言における疑問詞の係り結びの実際の使用状況を調査する
- II. そのうえで、岡山備前方言で新しく出現したと考えられるモダリティ接語 =nara の文法的特徴と意味・機能を明らかにする
- III. モダリティ接語 =nara の地理的な分布を調査する

本稿ではIのみについて述べ、他は割愛する。なお、例文番号、グロス、標準語訳、文字飾りなどは筆者によるものである。本稿では =nara の基本的な意味を考察することの一つの主眼を置いているので、以下では =nara 及びその異形態 =naa, =na のグロスは NARA とする。例文は筆者(1992年生、男性、言語形成期は岡山県備前市)が作例したものも含む。

¹ 本稿ではこの =nara をモダリティ接語として分析するが、ここでは先行研究に従いコンピュータの条件形として扱う。

1. 先行研究

当該の現象について主要な先行研究に虫明(1958)、三宅(2014)がある。岡山方言ではないが、本稿の分析に大きく関わるものとして善理(1992)がある。

1.1. 虫明(1958)

虫明(1958)は、文中の疑問詞を受けて仮定形で文を結ぶという疑問詞の係り結びを扱っている。品詞別・助動詞別に、多様な係り結びの例文を挙げて考察している。2節の調査は、虫明(1958: 115-116)に挙げられている例文を用いて行った。例を挙げる。

- | | | |
|--------------------|--------------------|--------------|
| (2)a. ドッチカラ来リヤー | b. 何ガ悪ケリヤー | c. ドーナラ |
| docci=kara k-urjaa | naN=ga waru-kerjaa | doo=nara |
| どっち=ABL 来る-COND1 | 何=NOM 悪い-COND1 | どう=COP.COND1 |
| 「どちらから来るか」 | 「何が悪いか」 | 「どうか」 |
- (虫明 1958: 115-116)

係り結びの文の特徴として、①完全にまとまった文である、②仮定形で文を結んでいる、③疑問詞を含んでいる、④疑問文(疑問・反語)である、の4つが挙げられている。

1.2. 三宅(2014)

三宅(2014)は、日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究プロジェクトの一環として、岡山方言の疑問詞の係り結びを扱っている。係り結びの形態的・統語的特徴として、①述語の形態は、標準語の"～ば"に相当する、仮定条件を表す形態と同形である、②述語の形態(「仮定形」)には時制の対立がある(例文(3))、③肯否疑問文(YN 疑問文)では不可能である、④主文のみの現象であり、補文(間接疑問文)では不可能である、などが挙げられている。

- | | |
|----------------|-----------------|
| (3)a. デーガイヤー | b. デーガユータラ |
| dee=ga i-jaa | dee=ga juu-tara |
| 誰=NOM 言う-COND1 | 誰=NOM 言う-COND2 |
| 「誰が言う?」 | 「誰が言った?」 |
- (三宅 2014: 53)

係り結びを使用する話者は男性、中高年であるとしている。

1.3. 善理(1992)

善理(1992)によれば、徳島方言に次のような終助詞がある。

この他、全県的に聞かれる詰問調の疑問表現として、終助詞の、ナ・ナラがある。

ダレガ ホンナコト ユータンナラ(誰がそんなことを言ったんだ、言ってはいけない)、また、ア

ソコデ ボール ケリヨンノダレナ(あそこでボールを蹴っているのは誰だ。蹴ってはいけない)のように用いる。この「ナ」は老人層は「ナラ」を使うことが多い。

このようにナ・ナラは、前にくる疑問詞をうけて、その疑問文を完結させるものである。

(善理 1992: 248)

本稿では =nara をコピュラの屈折ではなく接語として扱うが、善理(1992)はこの =nara が徳島県で成立しているということを示している。「詰問調」という点も、内省では岡山方言に共通すると思われる。

2. 調査

先行研究にはいくらか不十分な点がある。まず、三宅(2014: 52)は「当該の現象は、「男性」、「中高年」が主な話者」であるとしているが、実際どのあたりの世代にまで残存しているのか言及がない。別の問題点として、係り結びの具体的な機能について記述がない。疑問と言っても、質問、確認要求の疑問文、疑いの疑問文、問い返し疑問文、納得、非難など様々な機能がある(日本語記述文法研究会編 2003: 20-51)。それにもかかわらず、先行研究では一貫して係り結びの機能は疑問・反語であると述べられているだけである(虫明 1958: 121-122、三宅 2014: 51)。

これらのことを明らかにするため、備前方言話者の世代差に着目して調査を行った。調査期間は 2014 年 8 月 6 日～同 13 日である。インフォーマントの世代と性別は下表のとおりである。本稿では 10 代と 20 代、30 代を若年層、40 代と 50 代を中年層、70 代を高年層とする。なお、年齢については 2014 年 8 月当時のものである。

表 1: インフォーマント情報

| 話者記号 | 年齢 | 性別 | 出生地 |
|------|------|----|------|
| A | 10 代 | 男性 | 備前市 |
| B | 20 代 | 男性 | 備前市 |
| C | | 女性 | 備前市 |
| D | | 女性 | 瀬戸内市 |
| E | 30 代 | 男性 | 備前市 |
| F | 40 代 | 女性 | 岡山市 |
| G | 50 代 | 女性 | 玉野市 |
| H | 70 代 | 男性 | 備前市 |
| I | | 女性 | 備前市 |

2.1. 調査方法

それぞれのインフォーマントに係り結びを実際に使うか、使うとしたらどのような場面を想定するかについて面接調査を行った。その際、1.1 節で取り上げた虫明(1958)に挙げら

れている係り結びの文を提示した。

2.2. 調査結果

係り結びの使用状況は以下のようであった。性差は高年層の名詞述語文のみに見られた。

表 2: 係り結びの使用者層

| | 高年層 | 中年層 | 若年層 |
|-----------------|-----|-----|--------|
| 動詞述語文 | ○ | △ | (個人差有) |
| 形容詞述語文 | ○ | △ | × |
| 名詞述語文(接語 =nara) | ○ | ○ | ○ |

(○…使うし意味も分かる/△…使わないが意味は分かる/×…使わないし意味も分からない)

以下より、動詞述語文、形容詞述語文、名詞述語文の順に係り結びの機能を記述する。なお、名詞述語文にはノダ文を含む。

2.2.1. 動詞述語文

動詞述語文の係り結びは、疑問文の主要な機能である「質問」としては用いられない。「質問」とは対他的な疑念の表明のことであり、①話し手に不明な情報があるため判断が成り立たず、②聞き手に問いかけることによって疑問の解消を目指す、という二つの基本的性質を有する(日本語記述文法研究会編 2003: 20)。

動詞述語文の係り結びが用いられるのは、「相談するとき・判断に迷っているとき」である。例えば、友人と食事をする際メニューを見ながら迷っているとき(4a)のように発話され、夕飯の献立に迷っているとき(4b)のように発話される。どちらも独り言として発話可能である。

(4)a. 何食ベリヤー

naN tabe-rjaa

何 食べる-COND1

「何食べようかな」

b. 晩御飯、ドースリヤー

baNgohaN doo su-rjaa

晩御飯 どう する-COND1

「晩御飯どうしようかな」

質問は対他的な機能であるのに対し、(4a), (4b)のような疑問文は対自的な疑念の表明である。日本語記述文法研究会編(2003: 34-37)はこのような対自的な疑問文を「疑いの疑問文」としている。これに則り、本稿では動詞述語文の係り結びはこの「疑い」の機能を担っているとする²。

動詞述語文の係り結びを用いない若年層 A, B にとって、(4a), (4b)のような発話は条件を

² 動詞述語文の係り結びが質問として機能している例が 1979 年収録の資料にある(国立国語研究所編 2007: 172)が、現在ではそのような機能は高年層でも観察されない。

表す従属節としてしか機能しない。

2.2.2. 形容詞述語文

形容詞述語文の係り結びは質問として機能しない。形容詞述語文の係り結びの機能はいわゆる反語である。本稿では従来反語と言われていたものを「全部肯定・全部否定」とする。本稿では全部肯定・全部否定を以下のように定義する。

全部肯定: 形式的には否定の疑問詞疑問文であり、意味的には肯定を表す機能。「すべて / 皆～する / だ」という意味になる。

全部否定: 形式的には肯定の疑問詞疑問文であり、意味的には否定を表す機能。「すべて / 誰も～しない / でない」、「全く～しない / でない」という意味になる。

例えば(5)は係り結びの形式をとることで、「全く悪くない」という全部否定を表している。

(5) 何が悪ケリャー

naN=ga waru-kerjaa
何=NOM 悪い-COND1
「何が悪いのか(何も悪くない)」

形容詞述語文の係り結びは、このように全部肯定・全部否定の機能を持っており、「質問」としては機能しない。

2.2.3. 名詞述語文

名詞述語文(及びノダ文)の係り結びはすべての世代において観察された。このことから、「岡山方言の疑問詞の係り結びは名詞述語文にのみ強く残っている」と結論付けることもできる。しかし筆者は、「疑問文に現れるモダリティ接語として =nara が成立した」とするほうがよいと考える。それは、①時制によって屈折しないこと、②=naa, =na などの異形態が存在すること、の2つの根拠のためである。

第一の根拠は時制によって屈折しないことである。三宅(2014: 53)にあるように時制の対立があるなら、(6a)のような形式が期待されるが、実際はそのような言い方は許容されず、過去について言及する際はすべての世代で(6b)のような言い方をする。

(6)a.* イツガ締切ジャッタラ

icu=ga simekiri=zjattara
 いつ=NOM 締切=COP.COND2
 「いつが締切だったのか」

b. イツガ締切ジャッタンナラ

icu=ga simekiri=zjatta-N=*nara*
 いつ=NOM 締切=COP.PST-DN=NARA
 「いつが締切だったのか」

(筆者内省による)

コンピュータであれば時制により屈折するはずである。このことから、=*nara* はモダリティ接語として文法化したと言える。

第二の根拠は異形態の存在である。以下に見るように =*nara* には =*naa* や =*na* のような異形態が存在する。

(7) ナンデユーコト聞カンノンナ、オメーフ

naNde ju-u koto kik-an-oN=*na* omee=*wa*
 なぜ 言う-NPST こと 聞く-NEG.NPST-DN_NARA おまえ=TOP
 「なぜいうことを聞かないんだ、お前は」

(自然発話傍受、2014/05/01、備前市: 犬を叱る女性の発話)

実際、今回の調査で =*nara* より =*naa* のほうをよく使用するという回答をG及びA, C, Dより得た。Iからは、「自身はこのような異形態を用いないが、=*naa* や =*na* などの異形態を使うのは若者に多い」という回答を得た。こういった傾向は「老人層は「ナラ」を使うことが多い」(善理 1992: 248)とする徳島方言の現状と合致する。

=*nara* 以外に =*naa*, =*na* などの異形態が使用されているという事実は、「～ナラ」という形式がコンピュータ「じゃ」の屈折形式として意識されておらず、モダリティを表す形式として文法化されたことの一つの根拠となる。なぜなら、従属節を作る際、コンピュータの屈折形式に「ナラ」以外の形は現れないからである。

(8) 暇ナラ(*ナー/*ナ)ケー

hima=*nara*(**naa*/**na*) k-ee
 暇=COP.COND1 来る-IMP
 「暇なら来い」

(筆者内省による)

このようなモダリティ接語が成立した要因として、以下のような通時的過程が考えられる。

従来の研究では「ドコガ駅ナラ(どこが駅か)」や「ナンションナラ(何をしているのか)」に見られるような「ナラ」を疑問詞の係り結び、すなわちコンピュータの(あるいはノダの)条件形として分析している。それは、疑問詞があれば述語要素は条件形に屈折するという、以下のような公式による。

- (9) ナンスル : ナンスリヤー(何をするか) 〈動詞述語文〉
 = イツガ寒イ : イツガ寒ケリヤー(いつが寒いか) 〈形容詞述語文〉
 = ドコガ駅ジャ : ドコガ駅ナラ(どこが駅か) 〈名詞述語文〉
 = ナンションジャ : ナンションナラ(何をしているのか) 〈ノダ文〉

一方、岡山備前方言では「ナンスン」、「イツガサミン」、「ドコガ駅ナン」のように、形式名詞-N を文末に付加することで疑問文の主要な機能である質問を表す³。=jo や =de など-N の後に出現するモダリティ接語と並行的に類推が働き、=nara が成立したのだと考えられる。つまり、(10a), (10b)に示すような類推である。(10b)では、ノダ文の一部であった「ン」が、疑問を表す形式名詞として再分析されている。

- (10) a. ドコガ駅 : ドコガ駅ヨ
 = ドコガ駅 : ドコガ駅デ
 = ドコガ駅 : ドコガ駅ナラ
- b. ナンション : ナンションヨ
 = ナンション : ナンションデ
 = ナンション : ナンションナラ

従来は(11a), (11b)のように分析されてきたが、本稿では(11a'), (11b')のように分析する。

- | | |
|----------------------|--------------------------------|
| (11)a. ドコガ駅ナラ | b. 何ションナラ |
| doko=ga eki=nara | naN s-jo-Nnara |
| どこ=NOM 駅=COP.COND1 | 何 する-ASP-NPST.のだ.COND1 (従来の分析) |
| 「どこが駅か」 | 「何をしているのか」 |
| a'. doko=ga eki=nara | b'. naN s-jo-N=nara |
| どこ=NOM 駅=NARA | 何 する-ASP-NPST.DN=NARA (本稿の分析) |
| 「どこが駅か」 | 「何をしているのか」 |

善理(1996: 248)には、徳島県でナラ・ナが確立した通時的過程については言明されていないが、おそらく本稿で立てている仮説と同様の類推が働いたと考えられる。

名詞述語文の係り結び、すなわち接語 =nara の主要な機能は「非難」である。例えば例文(7)では、話者は言うことを聞かない犬に対して非難している。

³ 木部(2010: 12-14)によれば、広島市では-N を付加することで疑問を表す(イントネーションは下降である)。内省では、このことは岡山備前方言にも当てはまる。

3. まとめ

岡山備前方言において、係り結びは高年層では十分に観察されたが、中年層・若年層においては、述語の種類や個人により使用状況にばらつきがある。

先行研究では、疑問詞の係り結びの機能は「疑問や反語を表す」(三宅 2014: 51)や「疑問表現または反語表現である」(虫明 1958: 121-122)としているだけで、どのようなタイプの疑問を表すかについては言及がない。今回の調査で、現在、岡山備前方言の係り結びは、動詞述語文は「疑い」、形容詞述語文は「全部肯定・全部否定」、名詞述語文(本稿では接語 =nara と見なす)は「非難」の機能をそれぞれ担っているということが明らかとなった。疑問文の主要な機能である「質問」の機能は形式名詞-N が担っている。

従来「ナンションナラ(何をしているのか)」等に見られる「ナラ」は係り結びとして説明されてきたが、この説明は適当ではない。時制によって変化しないことや異形態が存在していることを根拠に、「ナラ」はコピュラ「ジャ」の屈折ではなく、疑問文に現れる接語であるといえる。モダリティ接語 =nara が成立した理由の一つとして、=de や =jo など類推を促すような諸形式が存在していたことが挙げられる。

略号一覧

| | | | | | | | | |
|-------|--------------|------|-----|------------|-------|-------|--------------|------|
| ABL | ablative | 奪格 | ASP | aspect | アスペクト | COND1 | conditional1 | 条件 1 |
| COND2 | conditional2 | 条件 2 | COP | copula | コピュラ | DN | dummy noun | 形式名詞 |
| ILL | illative | 方向格 | IMP | imperative | 命令 | NARA | | ナラ |
| NEG | negative | 否定 | NOM | nominative | 主格 | NPST | non-past | 非過去 |
| PST | past | 過去 | TOP | topic | 主題 | | | |

参考文献

- 木部暢子 (2010) 「イントネーションの地域差—質問文のイントネーション—」 小林隆・篠崎晃一編 『方言の発見 — 知られざる地域差を知る』 東京: ひつじ書房 / 国立国語研究所編 (2007) 『全国方言談話データベース 日本ふるさとことば集成 第41巻 鳥取・島根・岡山』 東京: 国書刊行会 / 善理信昭 (1992) 「徳島県方言」 平山輝男ほか編 『現代日本語方言大辞典』(総論編) 244-248. 東京: 明治書院 / 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』 東京: くろしお出版 / 三宅知宏 (2014) 「岡山方言の不定語疑問文をめぐって—対照研究的視点をふまえた記述的一般化—」 金水敏編 『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書(1)』 49-68. 東京: 国立国語研究所 / 虫明吉治郎 (1958) 「疑問詞の係結 —中国方言の場合—」 (『国語学』 34 所収) 井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編 『日本列島方言 18 中国方言考 1 中国一般・岡山県』 115-127. 東京: ゆまに書房

ハンガリー語の動詞派生辞について

酒井 悠里

(日本課程 日本語専攻)

キーワード：ハンガリー語，動詞派生辞，名詞，-z(ik)，-l(ik)

0. はじめに

ハンガリー語¹では、名詞類に動詞派生辞を伴うことで、能動動詞、再帰動詞、使役動詞を派生することが可能である。7種ある動詞派生辞の中でも最も生産性が高いとされているのが-z(ik)と-l(ik)^{2,3}である。

しかし、この2つの派生辞の使い分けは明らかにされておらず、管見の限り、詳細な調査を行った先行研究はない。また時代によっても移ろい得るものである⁴ことが考えられる。

本発表では動詞派生辞-z(ik)と-l(ik)について、音、意味、語彙、対立の観点からそれぞれの現在の特徴と使い分けを明らかにすることを目的とする。

先行研究の日本語訳、例文番号、グロスは特に断りの無い限り、筆者によるものである。

1. 先行研究

本節では、先行研究としてハンガリー語で書かれたハンガリー語の文法書である Ruzsiczky(1961)と Kiefer(1998)の2つを取り上げる。Ruzsiczky(1961)は-z(ik)と-l(ik)について意味の観点より例をあげつつ分類を行っている。これに対し Kiefer(1998)は意味だけでなく音韻からも観察を行い、特徴を述べている。以下にそれぞれ要約する。

1.1. Ruzsiczky(1961)

Ruzsiczky(1961)では-z(ik)と-l(ik)について次のように分類を行っている。

1.1.1. -z(ik)

-z(ik)接辞を伴う派生語は以下の a. から h. の意を表すとしている。

¹ ハンガリー語はウラル語族、フィン・ウゴル語派、ウゴル諸語に属し、ハンガリー共和国、ルーマニア他で話される。話者は約1500万人。母音は長母音7つと短母音7つ、子音は25。名詞や動詞の活用語尾、派生接尾辞と語幹の間に母音調和が起こる。膠着語に分類され、基本語順はSOVとSVOの2つある(以上、早稲田・徳永1992:361-371より要約)。本稿で扱うハンガリー語は首都ブダペストで話されるものとし、表記は正書法に則る。

² -z(ik), -l(ik)を接辞する際、語末が母音の語の場合は直接、語末が子音の場合は母音調和規則に則り、-o-, -a-, -e-, -ö-の挿入母音が入る。本稿における両接辞の表記は全てRuzsiczky(1961)に則ることとする。

³ -ikとはRuzsiczky(1961)によると、再帰または自動詞を表す接尾辞である。

⁴ 筆者にハンガリー語を教授頂いた方(ブダペスト在住、40代女性)の証言で、vacsora(夕食)から派生した夕食を食べるという意の動詞が、現在はvacsorá-zikであるのに対し、90年代まではvacsorá-lが使われていたということがある。

- a. 何かを供給する
(1) ruhá-z(服を着る) < ruha(洋服), só-z(塩をつける) < só(塩)
- b. 何かで作業、動作する
(2) ágyú-z(砲撃する) < ágyú(大砲), kanal-a-z(スプーンですくう) < kanál(スプーン)
楽器を表す名詞基語で、何かを演奏する
(3) gitár-o-z(ik)(ギターを弾く) < gitár(ギター), hárfá-z(ハープを弾く) < hárfa(ハープ)
遊具を表す名詞基語で、何かを、また何かと遊ぶ
(4) kártyá-z(ik)(トランプで遊ぶ) < kártya(トランプ)
スポーツを表す名詞基語で、何かのスポーツをする
(5) sí-z(ik)(スキーする) < sí(スキー), tenisz-e-z(ik)(テニスをする) < tenisz(テニス),
交通機関を表す名詞基語で、何かで行く、移動する
(6) bicikli-z(ik)(自転車に乗る) < bicikli(自転車), szánká-z(ik)(そりに乗る) < szánka(そり)
- c. 何かを作り出す
(7) lárma-z(ik)(騒ぐ) < lárma(騒音), fénykép-e-z(写真を撮る) < fénykép(写真),
形容詞を基語として、何らかの状態におく
(8) tiszta-z(きれいにする) < tiszta(きれいな), apró-z(小さくする) < apró(小さい)
- d. 何かの名付ける、何かで呼ぶ
(9) bácsi-z(おじさんと呼ぶ) < bácsi(おじさん), magá-z(敬語で話す) < maga(2 人称敬称)
- e. 何かから取り上げる、取り除く
(10) hamu-z(煙草の灰を落とす) < hamu(灰), héj-a-z(皮をむく) < héj(皮)
- f. 何かを消費する
(11) kenyér-e-z(パンを食べる) < kenyér(パン), sör-ö-z(ビールを飲む) < sör(ビール)
- g. 何かに参加する
(12) ülés-e-z(ik)(会議に出席する) < ülés(会議), bál-o-z(ik)(社交ダンスする) < bál(舞踏会)
- h. 時を表す名詞基語で、時がたつ、過ぎる
(13) éjszaká-z(ik)(夕べを過ごす) < éjszaka(夕べ)
- a. から h. の分類に入らない例外として 20 語挙げている⁵。

1.1.2. -l(ik)

-l(ik)接辞を伴う派生語は以下の a. から e. の意を表す。

- a. 何かで作業する、動作する

⁵ batyu-z(袋を持って行く、出かける) < batyu(袋), betű-z(文字をつづる) < betű(文字), cédulá-z(ik)(曆に記入する) < cédula(カレンダー), egyké-z(一人っ子を持つ) < egyke(一人っ子), elő-z(追い抜く) < elő(先の),
érettségi-z(学位をとる) < érettségi(学士), falu-z(ik)(村に暮らす) < falu(村), normá-z(ik)(ノルマを課す) < norma(ノルマ), rohamunká-z(激務をする) < rohamunka(激務), legy-e-z(空気を回す、あおぐ) < légy(ハエ),
alkalmá-z(ik)(適応する) < alkalom(時、場合、機会), dugvány-o-z(挿し木をする) < dugvány(切り枝), irány-o-z(狙う) < irány(方向), raktár-o-z(貯蔵する) < raktár(貯蔵庫), súlypont-oz(重心を置く) < súlypont(重心), csel-e-z(ごまかす) < csel(企み、ごまかし), elem-e-z(分析する) < elem(要素), feltétel-e-z(推定する) < feltétel(状態),
kísérlet-e-z(実験する) < kísérlet(試み、実験), környék-e-z(囲む) < környék(周辺)

- (14) *kez-e-l*(切符を切る) < *kéz*(手), *lapát-o-l*(シャベルですくう) < *lapát*(シャベル)
- b. 何かを供給する
- (15) *lakat-o-l*(南京錠をかける) < *lakat*(南京錠), *abrak-a-l*(餌をやる) < *abrak*(餌)
- c. 何かの状態で、また誰か/何かにある役割で動作する
- (16) *tolmács-o-l*(通訳する) < *tolmács*(通訳), *szolgá-l*(仕える) < *szolga*(奴隸)
- d. 何かを作り出す、何かへと変化する
- (17) *tűz-e-l*(火をつける) < *tűz*(火), *dal-o-l*(歌う) < *dal*(歌)
- e. 何らかの状態に保つ
- (18) *csodá-l*(感嘆する) < *csoda*(奇跡), *igen-e-l*(認める) < *igen*(賛成、肯定)
- 色を表す基語で、その色に見えるという意味を表す。
- (19) *fehér-lik*(白く見える) < *fehér*(白い), *piros-lik*(赤く見える) < *piros*(赤い)

1. 1. 3. -z(ik)接辞と-l(ik)接辞の違い

名詞から動詞を派生する際、必ずしも片方の接辞が選択されるということではなく、両方の接辞を用いることもある。その場合、2つの派生語が全く同じ意を表す場合(20)と、意味の違いがある場合(21)がある。

- (20) *sí-e-l*, *sí-zik*(スキーをする) < *sí*(スキー)
- (21) *ur-a-l*(打ち勝つ), *ur-a-z*(人を *ur* と呼ぶ) < *úr*(征服者、紳士)

1. 2. Kiefer (1998)

Kiefer(1998)では、-z(ik)と-l(ik)接辞の特徴について音韻と意味の2つの観点から以下のように述べている。

1. 2. 1. 音韻

音韻の観点から2つの接辞は以下の a. から h. のように特徴づけられるとしている。

- a. -z(ik)は-l(ik)よりも生産性が高く、基語末が母音の場合、-l(ik)よりも-z(ik)が用いられる。
- (22) *pipá-zik*(パイプを吸う) < *pipa*(パイプ), (*pipá-l* も可であるが稀)
- b. 新しい派生語を作るとき、かつ基語の語末が母音の際、用いる接辞は必ず-z(ik)である。
- (23) *diszkó-zik*(ディスコに行く), **diszkó-l*, *videó-zik*(ビデオを撮る), **videó-l*
- c. 語末の子音が r, l の名詞で、かつ新しい名詞の場合は-z(ik)を用いる。
- (24) *e-mail-e-z*(Eメールを送る) < *e-mail*(Eメール), *sör-ö-z*(ビールを飲む) < *sör*(ビール)
- d. 基語末が子音、かつ1音節の際、多くの場合は-l(ik)を用いる。
- (25) *boksz-o-l*(ボクシングする) < *boksz*(ボクシング), **boksz-o-z*
- 例外として、*film-e-z*(映画を撮る), *lift-e-z*(持ち上げる)がある。
- e. 語彙的禁止規則⁶に基づき既に存在する語が、他方の派生を妨げることが多くある。

⁶ 【語彙的禁止規則】同一の意味の K1, K2 という派生語があるとき、もし K1 が派生辞で派生した既存の語である場合、K2 の接辞の語派生は有効ではない。また逆に K2 が既存の派生語の場合は、K1 の語派生は

f. たいてい一人の話者は一方を毎度使用する。

(26) ebéd-e-l, ebéd-e-z(昼食をとる) < ebéd(昼食)

g. その一方、-z(ik)と-l(ik)派生語は2つの別の意味へ分かれることがある。

(27) ok-o-z(引き起こす), ok-o-l(とがめる) < ok(原因、理由)

h. 同音異義語を避けるため、一方を選択することがある。

(28) dob-o-l(太鼓を叩く), *dob-o-z(doboz 箱)

1. 2. 2. 意味

Kiefer(1998)は基語の意味分野から以下のように考察を行っている。

-z(ik)は基語に道具や器具を表す名詞を持つ場合、「その道具で何かをする、終わらせる」という意味を表す。

(29) csákány-o-z(鋏を使う) < csákány(鋏), gereblyé-z(熊手でかく) < gereblye(熊手)

基語が楽器の場合、派生語の意味は「その楽器で演奏する(azzál muzsikál)」となり、-z(ik)接辞を伴うものと-l(ik)接辞を伴うものの両者が認められる。

(30) zongorá-z(ik)(ピアノを弾く) < zongora(ピアノ)

(31) hegedü-l(バイオリンを弾く) < hegedü(バイオリン)

スポーツを表す基語の場合、派生語は「何かのスポーツをする」という意味となる。この場合、-z(ik)接辞を伴う派生語の方がより豊富である。

(32) tenis-z-e-z(ik)(テニスをする), golf-o-z(ik)(ゴルフをする)

以上3つの意味分野について考察した結論として、派生の生産性については各々の意味分野において個別に調査する必要があるとしている。

2. 先行研究のまとめと問題点

Ruzsiczky(1961)は細かく分類を行っているが、挙げられている例外の数が多いこと、他先行研究で挙げられている例の中で Ruzsiczky(1961)の分類には上手く当てはめることができないと思われる語があること、-z(ik)と-l(ik)の分類で重なるものが多いことという3点から、分類の整合性は高くなく、各接辞の特徴をまとめるまでにとどまっている。

一方、音韻からの分類を試みた Kiefer(1998)では、外来語といった比較的新しく派生が起こった語の例が多く挙げられており、音韻からの分類は確かであると思われる。しかし、Ruzsiczky(1961)と同じく、説明できない例外の語があり、記述された音韻の規則ですべての語を説明できるわけではない。

同時に Kiefer(1998)は派生前の名詞の意味分野からの考察も行っているが、道具・器具、楽器、スポーツと分野数が少数に留まっている。他の分野での調査が必要であるだろう。

以上の問題点より、-z(ik)と-l(ik)による動詞派生について、より緻密な音韻からの規則を明らかにすることと、より客観性のある意味からの分類を行う必要性があると考えられる。

3. 調査

12,000 語を所収するハンガリー語-英語小辞典の、Berkáné 編(2004) *Magyar-Angol Angol-Magyar Zsebszótár* を用いる。本辞書において見出し語として掲載されている動詞で、-z(ik)と-l(ik)が接辞された語を手作業で収集する。合わせて基語となっている語を収集し、その語が単独で意味を成す名詞類(名詞、形容詞、副詞、擬音語)、数詞、接頭辞、後置詞であるもの⁷ を選択する⁸。

さらに例外的に、基語が外来語の動詞でそのままの形では使われず、-z(ik)や-l(ik)を接辞した場合にのみ使用される語も収集する。これらについては4.3節で扱うこととする。

収集した用例は表1の通りである。

表1: 収集結果

| | -z(ik) | -l(ik) |
|------------------|--------|--------|
| 総数 | 220 | 194 |
| 基語が名詞 | 210 | 169 |
| 基語が形容詞 | 3 | 17 |
| 基語が副詞、数詞、接頭辞、後置詞 | 7 | 8 |
| 基語が外来語動詞 | 0 | 18 |
| 1つの基語で両方の派生をもつもの | 15 | 15 |

4. 調査結果と考察

本章では調査の詳細な結果と考察を述べる。4.1.で音韻、4.2.で意味、4.3.で語彙、4.4.で対立の観点より考察を行う。なお、ここでいう「対立」とは同じ語幹に-z(ik)と-l(ik)の両方の接辞がつき、なおかつ何らかの意味もしくは機能の対立を示す場合、これを検討するものである。

4.1. 音韻

4.1.1. 音節数

各基語の音節数を調べたものを図1⁹にまとめる。なお、括弧内の数値はパーセンテージを示す。

結果、-l(ik)よりも-z(ik)の方に音節数の多い基語がみられるということが分かった。1音節、2音節語の数は両者で大きな偏りはないと言えるが、3

音節、4音節語では-z(ik)の方に大きく偏っていることがわかる。4音節語では複合語・派生語が基語(33)になっている。3音節語では、-z(ik)でのみ複合語・派生語が見られた((34)(35)(36))。

(33) fogócsiká-zik(追いかけてこする) < fog-ó-csika(追い人-指小辞、追いかけてこ)

(34) hógolyó-zik(雪合戦する) < hó-golyó(雪-玉、雪玉)

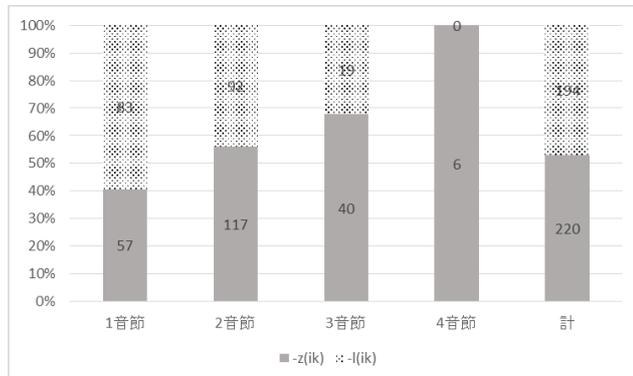


図1: 音節数

⁷ ハンガリー語学では形容詞や副詞、擬音語は名詞類に属するが、-z(ik)と-l(ik)の接辞の傾向が名詞と異なることからそれぞれ名詞とは別に扱うこととした。

⁸ この際、接頭辞がつき派生した動詞に意味が付加されているものと、基語が派生語または2語以上複合した複合語で、その形のみで辞書に掲載されていないものは除外することとする。

⁹ -z(ik)1音節: 57, 2音節 117, 3音節 40, 4音節 6, 計 220, -l(ik)1音節 83, 2音節 92, 3音節 19, 4音節 0, 計 194

(35) vacsorá-zik(夕食を食べる) < vacsora(夕食)

(36) trombitá-l(トランペットを吹く) < trombita(トランペット)

以上の結果から、音節数が多くなればなる程-z(ik)派生辞を伴いやすい。中でも複合語の場合はより-z(ik)派生辞を選択しやすいことが明らかとなった。

4.1.2. 基語末音

各基語末の音を調べ、図2と図3にまとめる。

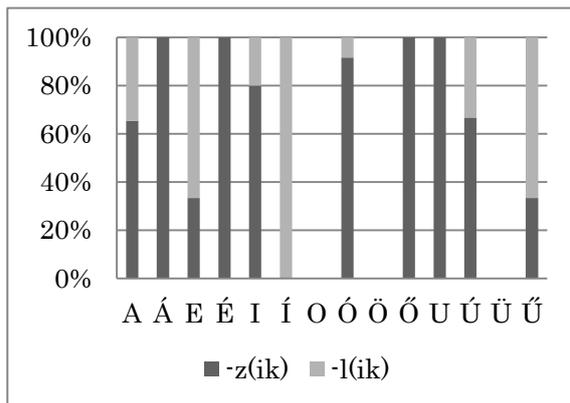


図2: 基語末音(母音)

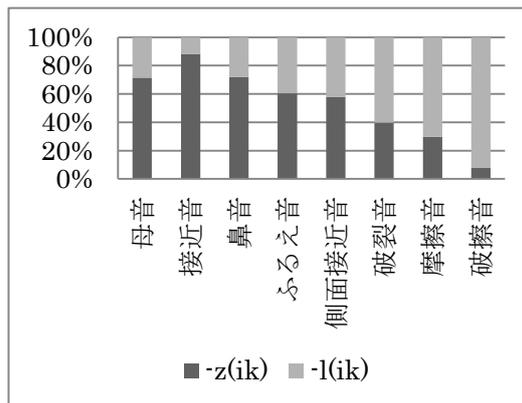


図3: 基語末音

図2¹⁰からわかるように、基語末音が母音の場合、約7割の確率で-z(ik)派生辞が選択されている。中でも/o:/は-z(ik)が11例に対し-l(ik)が1例と大きく偏りが見られた。

(37) hajó-zik(航海する) < hajó(船)

図3¹¹から、基語末音が子音の場合は、調音方法により偏りが見られることがわかる。共鳴音と摩擦音とで対立が見られた。鼻音、ふるえ音、接近音では-z(ik)が多くなり、摩擦音、破擦音では-l(ik)が多くなる傾向があることがわかった。側面接近音に関しては、-l(ik)との連続を多少避ける傾向があるからか、-z(ik)の方が多く現れた。摩擦音/z/に関しては、-z(ik)との連続を避ける傾向がさらにはっきりと見られ、ほぼ-l(ik)が選択されるということが明らかになった。

4.2. 意味

国立国語研究所(2004)『分類語彙表 - 増補改訂版』に則り、基語の分類を行う。

名詞、形容詞合わせて、-z(ik)の方が多くなった項目は69項目中48項目であった。このことから、-z(ik)の方が-l(ik)よりも生産性が高いことがわかる。

-l(ik)が多くなった項目は、名詞の中では「量」「人物」「成員」「社会」「行為」「事業」「土地利用」「身体」、加えて形容詞となっている。-z(ik)が多くなっている項目はより具体性のあるものが多く、-l(ik)が多くなっている項目は抽象性が高いと考えられる。また「身体」を除いて社会やそのシステムに関連した意味になっていることがわかる。

¹⁰ A: 36, Á: 1, E: 2, É:1, I: 4, Í: 0, O: 0, Ó: 11, Ö: 0, Ő:4, U: 1, Ú: 2, Ü: 0, Ű: 1

¹¹ -z(ik)母音: 65, 接近音: 15, 鼻音: 41, ふるえ音: 26, 側面接近音: 11, 破裂音: 51, 摩擦音: 14, 破擦音: 1, -l(ik) 母音: 29, 接近音: 2, 鼻音: 16, ふるえ音: 17, 側面接近音: 8, 破裂音: 77, 摩擦音: 33, 破擦音: 12

4.3. 語彙

4.3.1. 副詞基語他

基語が副詞、接頭辞他のもものは表 5 のようになった。接頭辞、後置詞は-z(ik)のみに、数詞、擬音語は-l(ik)のみに見られた。

表2: 副詞他

| | -z(ik) | -l(ik) |
|-----|--------|--------|
| 副詞 | 4 | 3 |
| 接頭辞 | 1 | 0 |
| 後置詞 | 1 | 0 |
| 数詞 | 0 | 1 |
| 擬音語 | 0 | 8 |

4.3.2. 動詞基語(外来語)

基語が外来語の動詞で、-z(ik)または-l(ik)を接辞して動詞としてのみ使用される語が-l(ik)にのみ 18 語見られる。接辞を付ける際、各言語の動詞接辞を取り除き、-l(ik)接辞している。

表3: 外来語動詞基語

| | -z(ik) | -l(ik) |
|-------|--------|--------|
| ラテン語 | 0 | 6 |
| ドイツ語 | 0 | 6 |
| フランス語 | 0 | 3 |
| 英語 | 0 | 3 |
| 計 | 0 | 18 |

<ラテン語>

-re を除いたうえで-l(ik)を接辞する。

(38) gratulá-l <gratulare(祝う)>

<フランス語>

-er を除いたうえで-l(ik)を接辞する。

(40) koncentrá-l <concentrer(集中する)>

<ドイツ語>

-en を除いたう

えで-l(ik)を接辞する。

(39) puc-o-l <putzen(綺麗にする、飾る)>

<英語>

そのままの形で-l(ik)を接辞する。

(41) stopp-o-l <stop(止まる)>

4.4. 対立

一つの基語から両方の接辞がついて派生が行われているものが 15 組見られた。以下にそれらを分類したものを示す。なお、音の規則に従うと先に派生されると考えられる方に下線を付した。基語末音が破裂音の場合は破線を付した。

A. 自他の違いがあるもの

一方が自動詞、他方が他動詞として派生したものが 2 例見られた。

(42) hám-o-z(皮をむく), hám-lik(皮がむける) <hám(皮)>

B. 基語の多義性より意味が異なるもの

基語となっている名詞の多義性により別の派生が起こっているものが 2 例見られた。

(43) kereszt-e-z(横切る), kereszt-e-l(クリスチャンの洗礼をする) <kereszt(十字、十字架)>

C. 一方が比喩的なもの

一方は名詞の意味から直接性のある派生が生じているが、他方が比喩的で基語の意味との直接性が薄れているものが 4 例見られた。

(44) határ-o-z(決める、決心する), határ-o-l(区切る) <határ(境)>

D. その他

上記の分類に属しないと考えられるものが多くある。いくつか例をあげる。

(45) szám-o-z(数字をふる), szám-o-l(数える) <szám(数)>

(46) ok-o-z(引き起こす、咎める), ok-o-l(責任を負う) <ok(原因)>

C.と B.の一部の語以外は意味の観点からではどちらの語が先に派生したのかが明らかではないが、次のような推測を行った。まず音韻の規則に従って一方の接辞による語が派生

し、その後語彙的禁止規則に従ってもう一方の接辞による語が派生し、その後使われていくうちに意味の棲み分けが生じた。

5. まとめと今後の課題

本稿では、音韻、意味、語彙、両派生辞の対立という観点から-z(ik)と-l(ik)の派生の条件について考察を試みた。

音韻の観点からは、音節数と基語末音に関して観察を行った。音節数については、1, 2音節語では大きな偏りはないが、3, 4音節語では-z(ik)がより多く選択されることが明らかとなった。基語が複合語・派生語の場合は-z(ik)となることもわかった。基語末音に関しては母音の場合は-z(ik)が多く現れることがわかった。子音に関しては、共鳴音の場合-z(ik)、摩擦音の場合-l(ik)が多く選択されることがわかった。側面接近音/l/と摩擦音/z/に関してはそれぞれ-l(ik)と-z(ik)との連続を避ける傾向が見られた。

意味の観点からは、基語の意味分野によって傾向を見た。-l(ik)が接辞する基語の方が抽象性が高く、社会やそのシステムに関するものが多いということが明らかになった。

語彙に関しては、形容詞、数詞、擬音語は-l(ik)、接頭辞と後置詞は-z(ik)を選択しやすいという傾向があることがわかった。外来語動詞を基語とする際は、まず元の言語の動詞接辞を取り除いたうえで-l(ik)を接辞することが明らかとなった。

対立については、1つの基語に両方の派生辞がついた語を集めてその違いに関する傾向を分析した。自他の差や名詞の多義性によるもの、さらに一方から他方が類推されるような比喩的なものがあることが明らかとなった。

本調査では小辞典を用いて基本的な語を網羅し、辞書の出版年時点での両接辞の派生の傾向を記述することができたと考える。さらに古い年代の辞書を用いることで派生の移り変わりや4.3節で行った推測についてより明らかにすることができるだろう。

-z(ik)と-l(ik)はその生産性の高さから、主に口語において次々と新しい派生語が生み出されているという現実がある。そのため、派生辞選択の現状をより詳しく把握するためには、口語資料での調査や、インターネット用語などの新しい外来語での調査などが必要だと考える。

参考文献: 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表 - 増補改訂版』東京: 大日本図書 / 早稲田みか、徳永康元 (1992) 「ハンガリー語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 (第3巻 世界言語編)』361-371. 東京: 三省堂 / Kiefer Ferenc (1998) *Alaktan. É. Kiss Katalin, Kiefer Ferenc, and Siptár Péter Új Magyar Nyelvtan. Budapest: Osiris Kiadó / Ruzsiczky Éva (1961) VI. A szóképzés. Tompa József A Mai Nyelv Rendszere Leíró Nyelvtan I. 333-420 Budapest: Akadémiai Kiadó*

調査資料: Berkáné Danesch Marianne (sz.) (2004) *Magyar - Angol Angol - Magyar Zsebszótár.* Budapest: Akadémiai Kiadó

インドネシア語の他動詞形成接尾辞-kan, -i について

瀧川 加奈絵

(東南アジア課程 インドネシア語専攻)

キーワード：インドネシア語，他動詞，接尾辞，意味的機能

0. はじめに

0.1. 本稿の目的

インドネシア語には語形成の主要な手段として、接辞と重複が存在する。特に接辞はその種類も多く、例えば他動詞形成接尾辞には-kan, -iがある。これら二つの接尾辞は接する基語の特徴により、派生語の意味的機能が変化する。本稿では接尾辞-kan, -iが派生語に与える意味的機能の違いを観察し、その用法を体系的に記述する。本稿で用いるグロス、囲み線、網かけ、日本語訳、例文番号、及び外国語文献の日本語訳は、特に断りのない限り筆者によるものとする。

0.2. インドネシア語の語形成

Alieva et al.(1991)によればインドネシア語には多くの派生語があり、その語形成の手段は接辞法、重複、複合語であるという。本節では本稿に関係の深い接辞法についてまとめる。

接辞法とは語根に接辞を付加することで新たな語を形成する方法で、インドネシア語では非常に生産性の高い方法である。インドネシア語の接辞法は一つの接辞でも接する基語によって異なる機能を示すことや、動詞派生接辞が派生的でもあり屈折的でもあることなど独自の様式を持っているが、一般に膠着的である。

接辞には、接頭辞、接尾辞、共接辞¹、接中辞の4種類があるが、現代インドネシア語では接中辞は生産的ではなく、主に3種類が用いられる。表1に接辞の種類をまとめる。

表1: インドネシア語の文法的機能に関わる接辞

| 接頭辞 | | | 接尾辞 | 共接辞 | |
|---------|------|-------------------|------|--------|---------|
| ber- | ter- | meN- ² | -kan | se-nya | ke-an |
| memper- | pe- | peN- | -i | ber-an | ber-kan |
| se- | ke- | | -an | per-an | peN-an |

(降幡(私信)をもとに筆者作成)

¹ 本稿で言及する共接辞とは *confix* のことであり、一つの基語に接頭辞、接中辞、接尾辞が同時に用いられることで一つの語形成を行う現象をさす。インドネシア語では接頭辞と接尾辞が一つの基語に同時に接するタイプの共接辞が存在する。

² N は鼻音交替を表す。接頭辞 *meN-* の場合、接する基語の語頭音により、*mem-*, *men-*, *meny-*, *meng-* の形をとる。

1. 先行研究

卒業論文では接尾辞-kan, -i の機能について記述した先行研究として、Chaer(1994)、Alieva et al.(1991)、Peterson(2007)、Shiohara(2012)を取り上げた。本稿では紙幅の都合上、Chaer(1994)、Alieva et al.(1991)における接尾辞-kan, -i に関する記述の比較、および接尾辞-kan, -i の用法の一つである applicative について Peterson(2007)の記述をまとめる。

1.1. 文法書における接尾辞-kan, -i の記述

本節ではインドネシア語の文法全般について記述した文法書である Chaer(1994)、Alieva et al.(1991)での記述をまとめ、比較する。両研究では接尾辞-kan, -i の文法的機能は他動詞の形成であるとしている。一方で接尾辞-kan, -i の意味的機能については類似する点が見られるものの、若干のずれが観察された。これを表2にまとめる。

表2: 意味的機能の記述の比較

| 接尾辞 | 意味的機能 | Chaer(1994) | Alieva et al.(1991) |
|------|----------------------|-------------|---------------------|
| -kan | (基語の表す状態) にさせる | ○ | ○ |
| | (基語の場所に) 存在するようにする | ○ | ○ |
| | (基語) に持って入る | ○ | |
| | causative | | ○ |
| | instrumental | | ○ |
| | benefactive | ○ | ○ |
| | 対象を～に変える | | ○ |
| | (基語) になる、とみなす | | ○ |
| | (基語で表す) ある行為を述べる | | ○ |
| -i | 動作の反復性 | ○ | ○ |
| | 前置詞的(prepositional) | ○ | ○ |
| | ある人物に (基語で表す) 感情を感じる | ○ | |
| | (基語で表す) あるものを加える | ○ | ○ |
| | (基語で表す) あるものを取る | | ○ |
| | (基語で表す) にする、とみなす | ○ | |
| | (基語で表す) ある状態にする | ○ | |
| | causative | | ○ |
| | locative | | ○ |

(Chaer (1994)、Alieva et al. (1991)をもとに筆者作成)

1.2. Peterson(2007)

Peterson(2007)は applicative 構造について以下のように述べている。

applicative 構造とは複数の言語に見られる手段で、周辺の項や補語をコード付けすることで中心的対象とする節の組み立て方である。機能としては、prepositional, indirective, benefactive, instrumental があり、基本的に意味的機能によって形態が変化することはなく、周辺項との関係において変化し、他動詞を形成する。

(Peterson 2007: 1)

Peterson(2007)で挙げられていたインドネシア語の applicative 構造の例³を引用する。

例文(1) a.は、動詞 mem-bawa 「持って行く」 が行為により移動を伴う surat 「手紙」を対象としており、行為の受け手である Ali 「アリ(人名)」は前置詞 kepada 「に、へ」を伴って表されている。一方例文(1) b.では、接尾辞-kan が後接されることで、行為の受け手である Ali が他動詞の対象となっている。これは典型的な benefactive の例であるとしている。

(1) a. Saya mem-bawa surat itu kepada Ali.
I TRANS-bring letter the to Ali
'I brought the letter to Ali.'

b. Saya mem-bawa-kan Ali surat itu.
I TRANS-bring-BEN APP Ali letter the
'I brought Ali the letter.'

(Peterson 2007: 47)

2. 調査概要

2.1. 調査目的

本調査では基語と接尾辞-kan, -i の後接で派生した他動詞の意味的機能について、先行研究で見られた相違点に注意しつつ、接尾辞-kan, -i の意味的機能を体系的に記述することを目的とする。筆者は接尾辞-kan, -i が後接した他動詞の持つ意味的機能が、その基語と関係性があると仮定している。

2.2. 調査方法

佐々木編(2008)『最新インドネシア語小辞典 第1.3版』は基語13,004語、派生語9,928語、計22,932語を収録した辞書である。同辞書に見出し語として掲載されている語の内、接尾辞-kan, -i が後接した他動詞、その基語および対応する自動詞を手作業で抽出する。

2.3. 集計および分析方法

調査の結果、接尾辞-kan が後接した他動詞は1,284例（うち例文が掲載されていたものは503例）、接尾辞-i が後接した他動詞は472例（うち例文が掲載されていたものは158例）が得られた。本調査では日本語での語義のみから判断することによる誤った分析を避ける

³ Peterson (2007)の例文中のグロスはすべて同書に掲載されたものを採用する。applicative の機能のグロスは Shiohara (2012) とは異なっている。

ため、例文を伴い記されていた語（接尾辞-kan 503 例、接尾辞-i 158 例）のみを分析の対象とする。抽出した他動詞、およびその例文を次の観点から分析する。

①基語の品詞

基語の品詞に関しては、Departemen Pendidikan Nasional Pusat Bahasa ed.(2008) *Kamus besar bahasa Indonesia Pusat Bahasa. Ed.4*（以後 *Kamus besar* と呼ぶ）⁴でそれぞれの見出し語に記載されている品詞を参照した。基語の品詞と抽出された他動詞の意味的機能の間に何らかの傾向がみられるかを観察する。

②対応する動詞形

インドネシア語では接尾辞-kan, -i が後接した他動詞に対応する動詞形として、接頭辞 meN-派生語、接頭辞 ber-派生語、接頭辞 ter-派生語、および基語単体が想定される。抽出された他動詞が対応する動詞形がいずれの形式であるか、またその語形成の形式によって派生語の意味的機能に傾向がみられるかを観察する。

③applicative の種類と対象の変化

Shiohara(2012)に述べられているような接尾辞-kan, -i の applicative の機能について観察する。特に掲載された例文内の他動詞の対象の変化に注目する。

3. 分析

Chaer(1994)で述べられていたように、接尾辞-kan, -i はどちらも異形態を持たず基語と接辞されていた。ただし接尾辞-i に関しては、基語の語末音が母音 i の音で終わるものが観察されず、同母音が連続することを避けるための制限があることが確認できた。

本節では 2.3.節で述べた観点をもとに分析した結果をまとめる。

3.1. 基語の品詞

Kamus besar を参照して同辞書の品詞分類に則って基語を分類した。各接尾辞の用例数は表 3 の通りである。

全ての品詞に共通して、接尾辞-kan, -i の主な意味的機能は「目的語を基語にする」であった。紙幅の都合上、本稿では各品詞において、意味的機能のバリエーションが見られた箇所を一部まとめた。

表 3: 基語の品詞に基づく分類

| | 接尾辞-kan | 接尾辞-i |
|--------|---------|-------|
| 名詞類基語 | 147 例 | 60 例 |
| 形容詞類基語 | 130 例 | 27 例 |
| 動詞類基語 | 214 例 | 66 例 |
| その他 | 12 例 | 5 例 |
| 合計 | 503 例 | 158 例 |

⁴ 同辞書は Pusat Bahasa（インドネシア語研究機関、現在の文化・小中教育省の前身）によりまとめられたインドネシア語-インドネシア語辞典で、国内でも最も権威ある辞書の一つである。なお使用した第 4 版は 90,000 語以上の見出し語を掲載している。

3.1.1. 名詞類基語

「目的語を基語にする」という主な意味的機能に加え、特に接尾辞-i についてはさらに細かく次の3つの意味的機能が観察された。

表 4: 名詞類基語+接尾辞-i の意味的機能

| | | | |
|--------------------|---|--|--|
| 意味的機能 | 「目的語に基語を与える」 | 「目的語の基語になる」 | 「目的語を基語とみなす」 |
| 基語の特徴 | 主語によって増減などの操作が可能な具体物 | 人の職業や地位を表す名詞 | 個人的感情の対象となる名詞 |
| 基語 | >jembatan 「橋」 | >juara 「チャンピオン」 | >musuh 「敵」 |
| meN-kan, -i 他動詞 | men-jembatan- <u>kan</u> 「橋をかける」 (佐々木編 2008: 124) | men-juara- <u>kan</u> 「(大会など)で優勝する」 (佐々木編 2008: 127) | me-musuh- <u>kan</u> 「敵視する」 (佐々木編 2008: 201) |

さらにその他の意味的機能で得られた用例には、数としては少なかったが次のようなものが見られた。

- (i) 接尾辞-kan が場所を表す名詞に後接して「目的語が基語の場所にあるようにする」という意味を表す用例 (>rumah 「家」 me-rumah-kan 「家に入れる」)
- (ii) 接尾辞-kan が道具類、もしくは道具を伴う動作を表す名詞に後接して道具動詞 (instrumental verb) を表す用例 (基語例: ikat 「束、帯」、gelitik 「こちょこちょ」)
- (iii) 接尾辞-i が後接されて受取者動詞 (recipient verb) を表す用例 (基語は anugerah 「賜り物」のような何らかの授与を表し、受取者の存在が想定される語であった)
- (iv) 動作の反復性を表す用例 (>hujan menghujan 「雨あられと浴びせる」)

先行研究の Alieva et al.(1991)では他動詞基語に接尾辞-i が後接することで反復性を表すとされていた。本調査では、Kamus besar において名詞類とされる基語でもこの1例のみ観察できたが、その一方で動詞類基語からは例文付きで用例を得ることができなかった。

3.1.2. 形容詞類基語

特に感情を表す基語は文脈により、「目的語に基語の感情を抱く、抱かせる」という意味を表していた。接尾辞-i が「目的語に基語の感情を抱く」という意味を表すのに比べ、接尾辞-kan は表5で表すように、他動詞の表す意味に幅が見られた。さらに同じ基語でも文脈によっては形容詞的⁵に用いる用例が観察された。よって、接尾辞の種類は意味的機能を完全に線引きし分類できるものではなく、基語によっては文脈による判断が必要なものがあると考えられる。

⁵ 本稿で述べる形容詞的用法というのは、名詞句のなかで修飾語として機能する用法や、項をとらず他動詞的には用いられていない用法のこととする。

表 5: 感情を表す形容詞類基語+接尾辞-kan の意味の幅

| 意味的機能 | 「目的語に基語の感情を抱かせる」 | 意味は文脈判断 | 「目的語に基語の感情を抱く」 | 形容詞的用法 |
|-------|-------------------|------------------|---------------------|-------------------|
| 感情の主体 | 目的語 | 主語/ 目的語 | 主語 | |
| 感情の原因 | 主語 | 目的語/ 主語 | 目的語 | |
| 基語 | >gembira 「嬉しい」 | >sayang 「惜しい」 | >bangga 「誇らしく思う」 | >gembira 「嬉しい」 |
| 例文 | (2) | (3) | (4), (5) | (6) |

- (2) meng-gembira-**kan** orang tua (3) me-nyayang-**kan** Nyawa
meN-happy-KAN parents meN-pity-KAN Life
親を喜ばせる (佐々木編 2008: 91) 命を惜しむ (佐々木編 2008: 215)
- (4) mem-bangga-**kan** kedua orang tua (5) mem-bangga-**kan** anak-nya
meN-proud-KAN both parents meN-proud-KAN child-3SG
両親を喜ばせる (佐々木編 2008: 215) 子供を自慢する (佐々木編 2008: 215)
- (6) hasil yang meng-gembira-**kan**
result NMLZ meN-happy-KAN
喜ばしい成果 (佐々木編 2008: 91)

3.1.3. 動詞類基語

動詞類基語に関しては、名詞類、形容詞類と比較して基語単体では文中で用いることのできない拘束形態素が多く、動詞派生接辞が伴うことで基語が内在している意味が現れ、文中で用いることのできる形となる。そのため動詞類基語では、両接尾辞の本来の文法的機能である他動詞の形成を示す用例が多く観察された。

その他の意味的機能としては、接尾辞-kan の後接により授受的動詞(benefactive verb)や道具動詞(instrumental verb)が形成され、接尾辞-i の後接により場所的動詞(locative verb)や受取者動詞(recipient verb)が形成された用例が観察された。これらの例文は applicative の種類について述べた 3.3.節で挙げることとする。

また接尾辞-kan, もしくは-i が後接することで、本来自動詞+前置詞で表される意味と同等の表現となる前置詞的用法(prepositional)も観察された。

- (7) 接尾辞-kan の後接による前置詞的用法(>tanya 「尋ねる/ 問い」)
- a. ber-tanya (tentang) b. me-nanya-**kan** nomor telepon
ber-ask about meN-ask-KAN number telephone
尋ねる、質問する 電話番号を尋ねる (佐々木編 2008: 301)

3.1.4. その他

代名詞や数詞、助動詞を基語とした用例がそれぞれわずかながら得られた。これらを基語にした場合の意味的機能を一般化するには不十分な用例数であったため、卒業論文本体では例文を挙げ分析をするに留めた。本稿では紙幅の都合上割愛することとする。

3.2. 対応する動詞

接尾辞-kan, -i が後接した他動詞に対応する動詞として、接頭辞 meN-派生語、接頭辞 ber-派生語、接頭辞 ter-派生語、および基語自体が想定される。本調査で得られた用例がそれぞれの形式に当てはまるか分類したところ表 6 のようになった。

中でも meN-派生語には自動詞と他動詞のいずれかになる可能性があるため、二つは区別する必要があると考えられる。

meN-自動詞、ber-派生語、ter-派生語対 meN-kan, -i 他動詞は、自動詞対他動詞という関係が見られた。それぞれの派生語の自動詞としての性質は厳密には異なるが、meN-kan/ -i 他動詞となることで、動詞の表す動作に関係する目的語を取る他動詞となると思われる。それ以外に色彩を表す基語を基にした語で、meN-kan, -i 他動詞では基語から連想される比喩的な意味を表す用例も観察された。

一方 meN-他動詞との対応については、接尾辞-kan/ -i の後接に伴い、benefactive や locative といった applicative としての機能や、自動詞+前置詞の意味を表しうる前置詞的機能 (prepositional)、動詞の表す動作の意味を限定化、特殊化するなど、元の meN-他動詞とは異なる意味的機能を与えている点で、意味の違いという関係がみられた。

3.3. applicative の種類と対象の変化

今回の調査では Shiohara(2012)で言及されていたすべての機能について確認することができたが、得られた用例数は少なく十分な数ではなかった。使役的用法(causative)に比較すると用例数も少なく、applicative の機能を示す語は使役的機能よりも新たなものが生まれにくい傾向があるのではないかと考える。さらに本来授受的動詞として機能する語でも、動作の恩恵を受ける人を「～のために」という前置詞を伴い表す用例も観察され、applicative の機能を示す語が減少傾向にある可能性が考えられる。授受的動詞について「損失」という本来の恩恵と逆の内容を表す例も観察された。表 7 には用例数とともに基語を示す。

- (8) >ambil meng-ambil-kan 「取ってやる、取って来てやる」
 Mau ku-ambil-kan jaket untuk-mu?
 want 1SG-ambil-KAN jacket for-1SG
 ジャンパーを取ってきてあげようか。 (佐々木編 2008: 10)

表 7: 接尾辞-kan, -i の applicative の機能

| 接尾辞 | applicative の種類 | 用例数 | 基語の例 (一部のみ掲載) |
|------|-----------------|-----|---|
| -kan | benefactive | 8 | beli 「購入して手に入れる」, rugi 「損、損をする」 |
| | instrumental | 16 | bidik 「標的に方向を合わせる」, lempar 「遠くに放る」 |
| -i | locative | 6 | jatuh 「落ちる」, tanam 「植える」, tulis 「と書いている」 |
| | recipient | 4 | ajar 「教え」, anugerah 「賜り物、賞」, pinjam 「借りる」 |

4. まとめと今後の課題

今回の調査では、辞書による調査から meN-kan, -i 他動詞の意味的機能の違いと基語との関係について、その傾向を導くことができた。この関係ははっきりと線引きすることができるものではなく、中間的なグレーゾーンも存在するものであることが確認された。

調査資料を辞書としたため、掲載された日本語の語義のみに頼った誤った判断を防ぐために例文が掲載された語のみを分析対象とした。その結果例文掲載がないために分析対象とできなかった語が多く残った。これらの語についても用例を収集し、meN-kan, -i 他動詞の意味的機能の違いと基語の関係の境界線をより明らかにすることを今後の課題とする。

調査を通じ、接尾辞-kan, -i のそれぞれの生産性の度合いに差があることも観察された。今回の調査のなかで大まかな傾向は把握できたが、実際にインドネシア語の語彙の中で比較的新しい語や外来語に対してそれぞれの接尾辞が対応可能なのか、また、どのような意味的機能をもった他動詞を形成するのも今後調査していきたい。

略語一覧

- 形態素境界/ 1 1 人称/ 3 3 人称/ APP applicative 標示/ BEN 授受的/ NMLZ 名詞化/ SG 単数/ TRANS 他動詞化

参考文献

Alieva, N. F., V. D. Arakin., A. K. Ogloblin., dan Yu. H. Sirk. (1991) *Bahasa Indonesia: Deskripsi dan Teori*.

Yogyakarta: Penerbitan Kanisius.

Chaer, Abdul. (1994) *Tata bahasa praktis bahasa Indonesia*. Jakarta: Penerbit Bhratara.

Peterson, David A. (2007) *Applicative constructions*. Oxford: Oxford University Press.

Shiohara, Asako. (2012) Applicatives in Standard Indonesian. *Senri Ethnological Studies* 77: 59-76.

Sneddon, James Neil. (1996) *Indonesian reference grammar*. St. Leonards, Australia :Allen & Unwin.

佐々木重次 (1982) 「インドネシア語における態の問題」 寺村秀夫他編『外国語との対照 I』(講座日本語学・10) 東京: 明治書院. 292-304.

調査資料

佐々木重次編 (2008) 『最新インドネシア語小辞典 第 1.3 版』鳩山町(埼玉県): Grup sanggar.

Indonesia. Departemen Pendidikan Nasional Pusat Bahasa. (2008) *Kamus besar bahasa Indonesia Pusat Bahasa*.

Ed.4. Jakarta: Gramedia Pustaka Utama.

イタリア語とフランス語の受動構文について

内藤 星美

(欧米第二課程 イタリア語専攻)

キーワード：イタリア語，フランス語，受動

0. はじめに

イタリア語とフランス語はともにロマンス諸語であり、どちらの言語にも受動を意味する形式が複数存在する。卒業論文では、これらの形式がイタリア語、フランス語それぞれでどのように使い分けられているのか、両言語の対照を通じて明らかにした。具体的には、小説の伊仏対訳本から受動構文を抜き出し、いくつかの観点から対照を行った。本稿では紙幅の都合上、イタリア語の小説から抜き出した *essere*+過去分詞形受動構文がフランス語ではどのように訳されたかを扱う。なお、本文中のグロス、斜字、下線、例文番号、日本語訳は、特に断りのない限り著者による。

1. 花本(2009)、敦賀(2009)

花本(2009)、敦賀(2009)は『語学研究所論集』(2009)に収められている論文である。両論文は各言語における受動表現に関する特集のために寄稿された。花本(2009)はイタリア語の受動表現について、敦賀(2009)はフランス語の受動表現について述べられている。まず各言語の受動形式の概説を述べ、日本語による10ほどの例文からなるアンケートに、若干のアレンジや省略を行いつつ作例している。

イタリア語、フランス語の受動表現はどのようなものか確認するため、花本(2009)、敦賀(2009)より各言語の受動表現の概説を引用する。

【イタリア語】

イタリア語における最も基本的な受動表現は、英語の *be* 動詞にあたる *essere* と過去分詞を組み合わせることによって作られる。また、*essere* の代わりに英語の *come* にあたる *venire* と過去分詞を組み合わせることで受動態の文を作ることも可能である。さらに、主語が3人称単数または3人称複数であれば、能動態の動詞に「受身の *si*」と呼ばれる代名詞を加えることにより、受動態の文にすることもできる。

(花本 2009: 153)

【フランス語】

フランス語の受動は基本的に「*être*¹+他動詞の過去分詞」で作られ、動作主は前置詞「*par*+名詞」によって表される。また、能動態の間接目的は原則として受動態の主格にはならない。また、受動に近いニュアンスは代名動詞構文「*se*+動詞(直訳：自身を / に ~する)」でも表されることがある。

(敦賀 2009: 148)

以下に花本(2009)、敦賀(2009)に挙げられている用例を、両論文が掲載されている『語学

¹ 英語の *be* 動詞にあたる。

『研究所論集』14号におけるアンケート調査の種類ごとに表1にまとめる。アンケートは日本語であったが、これを基準にイタリア語とフランス語の受動表現の使い分けを確認する。ただし、イタリア語とフランス語の受動形式が用いられる範囲は日本語のそれとは異なる。そのため、受動形式ではなく単なる能動文、もしくは何らかの代替的機能を果たす表現が用いられている場合もあることに注意されたい。

表1: 日本語から作例するイタリア語とフランス語の受動表現の使い分け

| 種類 | イタリア語 | フランス語 |
|------------------------------|----------------------------|-------------------------------|
| 直接受身 | essere+過去分詞 venire+過去分詞 | être+過去分詞 使役の代名動詞構文 |
| 持ち主の受身(体の部分) | essere+過去分詞 能動文 | 使役の代名動詞構文 能動文 |
| 持ち主の受身(持ち物) | essere+過去分詞 能動文 | 使役の代名動詞構文 能動文 être+過去分詞 |
| 自動詞からの間接受身 | 能動文+間接補語人称代名詞 | 能動文 |
| モノ主語受身(一回的) | essere+過去分詞 | être+過去分詞 非人称受動 |
| モノ主語受身(恒常的、動作主が問題にならない場合) | 受身の代名詞 si+3 人称単数形で活用させた動詞 | 能動文 être+過去分詞 代名動詞構文 |
| モノ主語受身(モノ主語の背後に被影響者が想定される場合) | essere+過去分詞 | être+過去分詞 |
| モノ主語受身(結果状態の叙述) | essere+過去分詞 venire+過去分詞 | être+過去分詞 代名動詞構文 |
| 感情述語の受身(特に動作主のメーカーに注目) | essere+過去分詞 | être+過去分詞 |
| 伝達動詞の受身(特に動作主のメーカーに注目) | essere+過去分詞 能動文 | 使役の代名動詞構文 非人称受動 |

(花本(2009), 敦賀(2009)を基に著者作成)

2. 先行研究のまとめと課題設定

表1から、それぞれ最も基本的な、両言語の2つの構文、すなわちイタリア語の essere+過去分詞形受動構文、フランス語の être+過去分詞形受動構文が広い意味範囲で用いられていることが確認できた。

特徴として注目すべきは、イタリア語、フランス語共に能動文を用いて受動的な表現が可能であるとされているが、その使用頻度に差異が見られる点である。両言語にはそれぞれ

れ受動構文で表現可能な部分に能動文を持ちいることがあり、その際の条件が受動構文の頻度における差異の一つであろう。しかし、花本(2009)、敦賀(2009)をまとめたこの分類からは両言語の受動構文の頻度を正確に把握することはできないと考える。

イタリア語、フランス語それぞれの受動構文に関する先行研究は多く見られるが、両者を直接対照した研究は管見の限り見当たらない。各言語の構文がそれぞれどのような頻度で用いられているのかをより多くの例文を通じて分析する必要がある。

3. 調査

2.の課題設定を基に、小説を用いた調査を行った。3.1.で調査方法を、3.2.で調査結果とその考察を、3.3.で調査のまとめと課題を述べる。

3.1. 調査方法

小説を用い、本文中からイタリア語の受動構文を手作業で抜き出した。抜き出した構文はイタリア語の文法書である坂本(1979)で受動構文として挙げられている中の、①essere+過去分詞、②venire+過去分詞、③andare+過去分詞形受動構文の3種類である。

過去分詞とその他の属詞との判断基準として、収録語数約75,000の池田(1999)『伊和中辞典第2版』を用いた。辞書の中で、見出しに「過去分詞」という記載がある、もしくは動詞の元の形が見出しに記載されているものを過去分詞の条件とした。

抜き出した構文に対応する箇所を、同小説のフランス語翻訳版の中で確認した。調査に用いた小説は、以下の通りである。イタリア語原作2冊とフランス語原作2冊、それぞれに対応するフランス語、イタリア語翻訳版の計8冊を使用した。方言が使用されておらず、平易な文章で構成されているものを選んだ。以下に調査に用いた資料を示す。

原作がイタリア語である小説

Calvino, Italo(1951) *Il visconte dimezzato*, Milano: Arnoldo Mondadori Editore [全91ページ]【原作、イタリア語、以下 CalvinoI】 / Calvino, Italo. Traduction de l'italien par Juliette Bertrand(1955) *Le vicomte pourfendu*, Paris: Gallimard [全138ページ]【フランス語翻訳版、以下 CalvinoF】(カルヴィーノ・イタロ『まっぴたつの子爵』) / Tamaro, Sussana(1995) *Va' dove ti porta il cuore*, Milano: Baldini&Castoldi [全161ページ]【原作、イタリア語、以下 TamaroI】 / Tamaro, Sussana. Traduit de l'italien par Marguerite Pozzoli(1996) *Va où ton cœur te porte*, Paris: Pocket [全228ページ]【フランス語翻訳版、以下 TamaroF】(タマーロ・スザンナ『心のおもむくままに』)

原作がフランス語である小説

Giono, Jean(1988) *L'homme qui plantait des arbres*, 東京: 第三書房 [全41ページ]【原作、フランス語】 / Giono, Jean. Traduzione di Luigi Spagnol(1996) *L'uomo che piantava gli alberi*, Milano: Salani Editore [全41ページ]【イタリア語翻訳版】(ジオノ・ジャン『木を植えた男』) / Simenon, Georges(2003) *L'affaire Saint-Fiacre*, Paris: Presses de la Cité [全187ページ]【原作、フランス語】 / Simenon, Georges. Traduzione di Giorgio Pinotti(1996) *Il caso Saint-Fiacre*, Milano: Adelphi Edizioni [全148ページ]【イタリア語翻訳版】(シムノン・ジョルジュ『サン・フィアクル殺人事件』)

3.2. 調査結果

イタリア語の小説内から得られた受動構文の数を表2にまとめる。

表2: イタリア語の小説内での受動構文の用例数

| | TamaroI | CalvinoI | GionoI | SimenonI | 計 |
|--------------|---------|----------|--------|----------|-----|
| ①essere+過去分詞 | 77 | 99 | 10 | 98 | 284 |
| ②venire+過去分詞 | 11 | 7 | 0 | 5 | 23 |
| ③andare+過去分詞 | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 計 | 90 | 106 | 10 | 103 | 309 |

イタリア語の小説では、最も基本的な受動構文、①essere+過去分詞形受動構文が全体の用例数の約91.9%を占めた。②venire+過去分詞形受動構文は計23例(約7.4%)確認できたが、③andare+過去分詞形受動構文は全体でわずか2例(約0.6%)しか現れなかった。イタリア語において、essere+過去分詞形受動構文は使用される条件に制約が少なく、最も使用される受動構文であることが伺える。

3.2.1. イタリア語 essere+過去分詞形受動構文の内訳と考察

イタリア語①essere+過去分詞形受動構文 284例がフランス語ではどのように表現されているかを確認した。その結果、être+過去分詞形受動構文が213例、不定代名詞 on が主語の能動文が20例、代名動詞が使われている文が7例、被動作主が主語の能動文が7例、過去分詞が単独で名詞を修飾している文が2例、使役の代名動詞文が1例、非人称受動文が1例、意識文が33例であった。以下に用例数が多かったものを用例と共に示し、分析と考察を行う。用例はイタリア語文、フランス語文の順に記載する。フランス語文には'(ダッシュ)'をつけてこれを明示する。抜き出した用例の前後を省略している場合があるが、特にはこれを示さない。

3.2.1.1. être+過去分詞形受動構文

être+過去分詞形受動構文は213例現れた。

今回抜き出した essere+過去分詞の中には、過去分詞の形が既に形容詞として一般化しており、受動構文として意識して用いられていない例も多く含まれると考えられる。しかし、主語と動作主補語の関係や、構文の意味内容にとらわれることがなく、最も使われる構文であると考えられる。

- (1) *Era stato lanciato fuori*
 be.IMPF.3.SG be.PTCP.PST.M.SG drop.PTCP.PST.M.SG outside

「彼は投げ出された」

(TamaroI: 11)

(1') *Il avait été jeté*
 he have.IMPF.3.SG be.PTCP.PST.M.SG drop.PTCP.PST.M.SG

「彼は投げられた」

(TamaroF: 14)

3.2.1.2. 不定代名詞 on が主語の能動文

不定代名詞 on が主語の能動文は 20 例現れた。

(2) *il vecchio Ezechiele spesso era stato visto*
 ART.DEF.M.SG old.M.SG NAME often be.IMPF.3.SG
 be.PTCP.PST.M.SG see.PTCP.PST.M.SG

「年老いたエゼキエルがよく見られた」

(CalvinoI: 70)

(2') *on voyait souvent le vieil Ézéchiel*
 PRN see.IMPF.3.SG often ART.DEF.M.SG old.M.SG NAME

「(人々は)年老いたエゼキエルをよく見ていた」

(CalvinoF: 109)

イタリア語では受動構文になっているものの、フランス語では不定代名詞 on を主語に持つ能動文の共通点は、動作主補語が「人々」となっていたことだった。イタリア語では動作主補語を明示せず問題なく受動構文を使うことができる。しかしフランス語では動作主補語を明示せず受動構文を用いるより、不定代名詞を主語とする能動文を用いる方が自然だと捉えられている可能性が高い。

3.2.1.3. 代名動詞が使われている文

代名動詞が使われている文は 7 例現れた。

(3) *A fianco della sella era agganciata...*
 at side.M.SG of+ART.DEF.F.SG saddle.F.SG be.IMPF.3.SG hook.PTCP.PST.F.SG

「鞍の側面に(剣と松葉杖)が掛けられていた」

(CalvinoI: 26)

(3') ... *s' accrochaient à l'un*
 RPRN hook.IMPF.3.SG at ART.DEF.M.SG one

des côtés de la selle.
 of+ART.DEF.M.PL side.M.PL of ART.DEF.F.SG saddle.F.SG

「(剣と松葉杖が)鞍の片側に掛けられていた」

(CalvinoF: 43)

イタリア語の辞書である池田(1999)で確認したところ、イタリア語の動詞 *agganciare* 「掛ける」は他動詞の意味のみ記載されていた。一方フランス語は、フランス語の辞書である田村(1985)で確認したところ、動詞 *accrocher* 「引っかかる」は自動詞、他動詞、代名動詞の3種類の意味が記載されていた。このためフランス語ではここで代名動詞が選択されたと考えられる。この例のように、残りの用例中で用いられていた動詞にも他動詞以外の意味が記載されていた。これらの例は、理由は不明ながら、動詞の複数の種類の中から代名動詞という選択が成されたものだと考えられる。

3.2.1.4. 被動作主が主語の能動文

イタリア語での元の受動文の被動作主が、フランス語では能動文の主語になった文は7例現れた。

(4) *gli altri ragazzi erano sempre cercati*
 ART.DEF.M.PL other child.M.PL be.IMPF.3.PL always look for.PTCP.PST.M.PL

dai genitori,
 by+ART.DEF.M.PL parents.M.PL

「他の子供たちはいつも両親に探されていた」 (CalvinoI: 38)

(4') *les parents cherchent les autres enfants,*
 ART.DEF.M.PL parent.M.PL look for.INF ART.DEF.M.PL other child.M.PL

「いつも両親が子供たちを探す」 (CalvinoF: 61)

essere+過去分詞構文で現れたイタリア語文7例の主語と動作主補語の関係を確認する。

表 3: 被動作主が主語の能動文7例の主語と動作主補語の関係

| 主語 | 動作主補語 | | | 例数 |
|------|-------|-----|---|----|
| 有生名詞 | 有生名詞 | 特定 | 2 | 2 |
| | | 不特定 | | |
| 有生名詞 | 無生名詞 | 特定 | 1 | 1 |
| | | 不特定 | | |
| 無生名詞 | 無生名詞 | 特定 | 1 | 1 |
| | | 不特定 | | |
| 無生名詞 | 有生名詞 | 特定 | 3 | 3 |
| | | 不特定 | | |

主語は有生のものが3例、無生のものは4例だった。動作主補語は有生が5例、無生が2例だった。主語・動作主補語ともに有生・無生に関しては特に偏りと言える特徴は見られなかった。しかし、7例すべての動作主補語が特定されていた。このことから、フランス語文では、主語と動作主補語が明示されており、その動作主補語が特定されている場合、被動作主が主語となる能動文が選択されやすいと指摘できる。

3.2.1.5. 意識文

意識文は33例現れた。表現が異なっていたり、文が省略されていたり、イタリア語文とは明らかに異なる動詞を使っているなど、翻訳上の問題を持っていたものである。

(5) *Medardo di Terralba era appiedato.*
 NAME of NAME be.IMPF.3.SG leave stranded.PTCP.PST.M.SG
 「テッラルバのメダルドは(馬から)降ろされていた」 (CalvinoI: 10)

(5') *Médard de Terralba restait sans monture.*
 NAME of NAME remain.IMPF.3.SG without mount.F.SG
 「テッラルバのメダルドは乗り物(馬)なしでいた」 (CalvinoF: 21)

上記の用例以外にも、構文自体は様々な変化をしているものの、ほぼ同じ意味の文として解釈可能なものも多く見られた。(5)は登場人物が馬から振り落とされたシーンだが、フランス語では意識し、能動文にしている。状況的には受動構文を用いても差し支えないように感じられるが、能動文が用いられているのは、やはりフランス語が能動文を好む傾向があると言えよう。

上記の用例以外にも併せて考察したところ、イタリア語では主語、動作主補語ともに有生・無生にとらわれることなく受動構文を用いることができるようである。しかしフランス語では、無生のものは主語になりにくく、有生のものを主語に立てて能動文で表現したり、文章を構成し直している用例が多かった。

3.3. 調査のまとめと課題

今回の調査において、イタリア語とフランス語の受動構文の使われる頻度を確認した。基本的な構文に関してはほぼ共通していると考えられるが、フランス語の方が能動文を好む傾向がある用例が多く見受けられ、特徴の一つとして挙げることができる。さらに、主語と動作主補語が特定されているか、されていないかによって、受動構文が使い分けられる可能性も指摘できた。

今回の調査では、考察の観点が主に主語と動作主補語の関係、意味からの推測の2点に絞られてしまった。そのため、使い分けの特徴までは明確にすることができなかった。小説での調査のみには限界を感じた面もあり、今後はインフォーマント調査などを行って考察を重ねていきたい。

略号一覧

3: third person / ART: article / DEF: definite / F: feminine / IMPF: imperfect / INF: infinitive / M: masculine / NAME: name /
PL: plural / PRN: pronoun / PST: past / PTCP: participle / RPRN: reflexive pronoun / SG: singular / +: fusion

参考文献

池田廉(1999)『小学館伊和中辞典第2版』小学館: 東京 / 坂本鉄男(1979)『現代イタリア文法』白水社: 東京 / 田村毅(1985)『ロワイヤル仏和中辞典』旺文社: 東京 / 敦賀陽一郎(2009)「フランス語 特集受動表現」『語学研究所論集』14: 148-152. 東京外国語大学語学研究所 / 花本知子(2009)「イタリア語 特集受動表現」『語学研究所論集』14: 153-157. 東京外国語大学語学研究所

調査資料

Calvino, Italo (1951) *Il visconte dimezzato*, Milano: Arnoldo Mondadori Editore. / Calvino, Italo. Traduction de l'italien par Juliette Bertrand (1955) *Le vicomte pourfendu*, Paris: Gallimard. / Giono, Jean (1988) *L'homme qui plantait des arbres*, 東京: 第三書房 / Giono, Jean. Traduzione di Luigi Spagnol (1996) *L'uomo che piantava gli alberi*, Milano: Salani Editore. / Simenon, Georges (2003) *L'affaire Saint-Fiacre*, Paris: Presses de la Cité. / Simenon, Georges. Traduzione di Giorgio Pinotti(1996) *Il caso Saint-Fiacre*, Milano: Adelphi Edizioni. / Tamaro, Sussana (1995) *Va' dove ti porta il cuore*, Milano: Baldini&Castoldi. / Tamaro, Sussana. Traduit de l'italien par Marguerite Pozzoli (1996) *Va où ton cœur te porte*, Paris: Pocket.

日本語の終助詞「よ」とベトナム語の文末詞の対照

中村 詩衣奈

(東南アジア課程 ベトナム語専攻)

キーワード：ベトナム語，伝達態度のモダリティ，終助詞，文末詞

0. はじめに

本稿は、日本語の終助詞「よ」に対応するベトナム語の文末詞と、その特徴を明らかにすることを目的とする。なお、先行研究の日本語訳、例文番号、グロス、文字飾りは特にことわりのない限り筆者によるものである。ベトナム語の文末詞は語気詞とも呼ばれるが、本稿では、文末詞¹と呼ぶこととする。

1. 先行研究

1.1. 日本語の終助詞「よ」

日本語記述文法研究会編(2003)の伝達態度のモダリティについての節を以下にまとめる。例文中の下線は日本語記述文法研究会編(2003)によるものである。

1.1.1. 伝達態度のモダリティの規定

話し手がその状況をどのように認識し、聞き手にどのように伝えようとするかを表すのが伝達態度のモダリティである。伝達態度のモダリティは終助詞によって表される。終助詞には、対話的な性質を強くもつものと非対話的な性質を強くもつものがあり、「よ」は対話的な性質を強くもつものである。一般的に対話的な終助詞は独話や心内発話として用いられることはない。終助詞が相互に接続することもあり、意味的にも1つの終助詞として重要な機能を果たしている。

1.1.2. 「よ」の接続

「よ」の接続についての記述を日本語記述文法研究会編(2003: 241-242)に基づき要約する。

「よ」はもっとも頻繁に用いられる終助詞であり、さまざまな文に接続することができる。

<平叙文> (1) あ、バスが来たよ。 (2) 山本さんは友達 {だ/φ} よ。

<認識のモダリティの形式> 「だろう」にはやや接続しにくく、接続する場合には、投げやりで、突き放したニュアンスを帯びる。

(3) 佐藤のやつ、今日は来れないらしいよ。

(4)? 人に仕事を押し付けたんだから、そりゃ、君はいいだろうよ。

<意志形> 意志形「しよう」は意志の解釈のときは基本的に独話的な性質をもつので、対話的な終助詞「よ」は接続しにくい、勧誘の解釈であれば自然な文になる。

¹ Thompson (1965) では final particles と表記されている。筆者はこれを文末詞と訳し、以後これに従う。

(5) 5時か。そろそろ帰ろうよ。

<命令文> (6) もう少し待っているよ。

<疑問文> (7) だれがそんなことを言ったんだよ。

1.2. ベトナム語の文末詞

ベトナム語の文末詞に関する先行研究として、ベトナム語の文法について網羅的に記述した、Thompson(1965)、Nguyễn(1997)、及び、55,500語を収録した最新の越日辞書である川本編(2011)をまとめる。

1.2.1. ベトナム語の文末詞の定義

ベトナム語の文末詞に関して、Thompson(1965: 260)は「文末詞は、文の最後に現れる。様々な意味を持ち、通常、主に話し手の態度や感情を伝えるものである。」と述べている。

1.2.2. ベトナム語の文末詞の種類

Nguyễn(1997)、川本編(2011)で挙げられた文末詞の意味・用法を以下にまとめる。本稿では、紙幅の都合上、調査によって得られた文末詞のみを扱う。

表 1: ベトナム語の文末詞の意味・用法

| | Nguyễn(1997) | 川本編(2011) |
|---------|---|--|
| áy | | 強調 |
| chớ/chứ | certainty, hope, assumption | 1. 同意の勧誘 2. 感動の表現 3. 督促の強意表現 |
| cơ | variant of <i>kia</i> (<i>kia</i> : preference) | 親密に疑問・誇示・詰問の表意 |
| đây | | たった今行われた、またはすぐに行われる動作の強調 |
| đấy | “personal touch” particle used in a question that has an interrogative substitute or a predication that is admitted rather grudgingly | 1. 疑問または強調・警告の語調を文意に加える 2. àを伴い、表現に驚き・懐疑・いぶかしさの語調を加えて |
| hà | mild surprise | 疑問や驚き |
| mà | insistance | 感情の強意表現 |
| nào | intimate offer or urging | 〔間投詞〕 勧誘・示唆・挑発 |
| nhá/nhé | friendly proposal | 依頼・勧誘・警告や軽く同意を求めて |
| thế | questioning the extent | 疑問の表示 |
| vậy | acceptance of a second best choice | 判断の決意を表す |

1.3. 先行研究の問題点

日本語記述文法研究会編(2003)では、「よ」に接続するいくつかの文型をあげているが、実際には上記の文型だけでなく、行為要求文「～して」や禁止形「するな」にも接続する。ベトナム語の文末詞については、諸先行研究において意味や例文が挙げられているものの、

抽象的であり、接続や人称といった使用の条件などについては明らかにされていない。

2. 日本語を基準とした調査

2.1. 調査方法

日本の漫画の日本語版、ベトナム語訳版を用い、日本語版の「よ」が用いられている例とそのベトナム語訳を手作業で抽出する。調査資料には、ベトナムでも広く知られている『ドラえもん』(DORAEMON)の1~5巻を用いる。分量は、日本語版、ベトナム語訳版共に各巻約190ページである。抽出した例文を、以下の観点から分析する。

- ①**頻度**: 「よ」に対し、どのような文末詞がどれだけ現れるか。
 ②**接続**: どのような文に接続しているか。抽出した用例を日本語を基準に<肯定文><否定文><認識のモダリティの形式><意志形><命令文><疑問文><行為要求><禁止形>に分類する。
 ③**話し手、聞き手**: 話し手、聞き手の性別や立場、用いられている人称を調査する。

2.2. 調査結果

調査の結果、終助詞「よ」が用いられている文は、652例抽出された。本稿では、ベトナム語に翻訳されていない例、意識されている例85例を除外した567例を分析する。

2.2.1. 頻度

全567例中に現れた文末詞とその数は以下の通りである。

表2: 調査の結果得られた文末詞

| | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-------------|-----|-------|-----------|-------------|-----------|-----|------------|-----|
| ベトナム語 | áy | chớ/ chứ | cơ | cơ mà | cơ chứ | đây | đây cơ | đấy | đấy chứ | há |
| 用例数 | 1 | 15 | 4 | 5 | 3 | 8 | 1 | 52 | 2 | 1 |
| ベトナム語 | kia | mà | nào | này | nè | nhá/ nhé | thế | vậy | φ | 計 |
| 用例数 | 4 | 23 | 4 | 2 | 4 | 11 | 5 | 1 | 421 | 567 |

ベトナム語の文末詞が用いられていた文の中では、đấyの使用が最も多かった。mà, chớ/chứ, há/nhéも多く見られた。cơ mà, cơ chứ, đây cơ, đấy chứ の様に、文末詞が相互に接続する例も得ることが出来た。更に、先行研究で扱われていない語 kia, này, nè もみられた。川本編(2011)では、いずれも間投詞として扱われている。以後、文末にみられた場合は文末詞として扱うこととする。

2.2.2. 接続

<肯定> đấy, mà が多く現れた。đấy, mà 共に肯定文に大きく偏っており、cơ, cơ mà, đây, đấy chứ, kia, này, nè は他の分類ではみられなかった。よって、これらは肯定文に接続しやすい文末詞であると考えられる。

<否定> 否定文に接続する用例に対応するベトナム語訳に、文末詞は現れなかった。これより、ベトナム語の文末詞は否定文には接続しないと推測される。否定文は意識され、疑問文や反語表現に訳されているものが見られた。

(8) a. のび太: (家に) だれもいないよ。 (ドラえもん 1: 51)

b. Nobita: Sao không thấy ai ở nhà?

何故 NEG 見る 誰 いる 家

(DORAEMON 1: 51)

<意志> 勧誘の意味を持つ *nhá/nhé* のみがみられた。これは、*nhá/nhé* が勧誘の意味を持つためである。ベトナム語訳の文型は、2例とも「平叙文+*nhá/nhé*」であった。

(9) a. スネ夫: ぼくたちとやろうよ。 (ドラえもん 1: 153)

b. Suneo: Cậu sang học cùng tui tớ nhé!

2.SG 行く 勉強する 一緒に 1.PL nhé

(DORAEMON 1: 153)

<命令> 督促の強意表現である *chớ/chứ* のみがみられた。

<行為要求> *nhá/nhé, nào* が目立ってみられた。

<禁止> *đầy, há/nhé* のみがみられた。

<疑問> 疑問の表示である *thế* の他、*chớ/chứ* がみられた。

2.2.3. 話し手、聞き手

立場や性別による制限は特にみられなかった。独話は10例抽出されたが、ベトナム語の文末詞は現れなかった。よって、ベトナム語の文末詞は独話では用いられないということが推測される。独話の10例中、5例が程度副詞 *lắm, quá* を用いた感嘆文に訳されていた。

(10) a. ドラえもん: くたびれたよ、もう。 (ドラえもん 5: 15)

b. Doraemon: Mệt quá...

疲れる とても

(DORAEMON 5: 15)

2.2.4. 呼びかけ、疑問文の付加

ベトナム語の文末詞が現れなかった例の中に、呼びかけや付加疑問文が付加されているものがみられた。文末詞が用いられない場合でも、これらを付加することにより「よ」の機能を補うことができることが明らかになった。

(11) a. 静香の父: もう、12時すぎたんだよ。 (ドラえもん 3: 188)

b. Bó Shizuka: Con ơi, đã qua 12 giờ đêm rồi.

2.SG 呼びかけ PST 過ぎる 十二時 夜 PRF (DORAEMON 3: 188)

(12) a. のび太: ぼくがほしいのは、バッジだよ。 (ドラえもん 5: 120)

b. Nobita: Cái tớ muốn là huy hiệu, cậu hiểu không?

CLF 1.SG 欲しい COP バッジ 2.SG わかる Q (DORAEMON 5: 120)

3. ベトナム語を基準とした調査

3.1. 調査方法

2章の調査において抽出された文末詞を、ベトナム語で書かれた小説から手作業で抽出する。調査資料には、ベトナム文学の代表的な作品である、Bảo Ninh(1990) “Nỗi buồn chiến tranh”全 320 ページを用いる。抽出した例を 2 章同様、「①頻度」「②接続」「③話し手、聞き手」の 3 つの観点から分類する。

更に、調査で得られた一部の結果について、インフォーマント²に聞き取り調査を行った。

3.2. 調査結果

3.2.1. 頻度

調査の結果、ベトナム語の文末詞は 215 例抽出された。内訳は以下の通りである。

表 3: 調査の結果得られた文末詞

| | | | | | | | | |
|--------|-----|---------|--------|---------|--------|---------|--------|-------|
| 文末詞の語形 | ây | chớ/chứ | chứ hả | chứ nhi | cơ | cơ chứ | cơ đấy | cơ mà |
| 用例数 | 1 | 29 | 1 | 1 | 5 | 4 | 1 | 6 |
| 文末詞の語形 | đây | đây mà | đấy | đấy chứ | đấy mà | đấy nhi | hả | kia |
| 用例数 | 9 | 2 | 55 | 2 | 1 | 2 | 6 | 1 |
| 文末詞の語形 | mà | nào | này | nhá/nhé | thế | vậy | | 計 |
| 用例数 | 27 | 1 | 2 | 37 | 16 | 6 | | 215 |

đấy が 215 例中 55 例と最も多く抽出され、chớ/chứ, mà, khá/nhé も多くみられた。文末詞が相互に接続する例は、新たに chứ hả, chứ nhi, cơ đấy, đây mà, đấy mà, đấy nhi が抽出された。đây cơ, nè の例はみられなかった。

3.2.2. 接続

<肯定文> 2章の調査結果同様に、肯定文に接続する例が最も多く抽出された。

<否定文> 今回の調査では chớ/chứ, mà, khá/nhé の例が現れた。頻出したベトナム語の文末詞(chớ/chứ, đấy, mà, khá/nhé)の否定文との接続についてインフォーマントに尋ねたところ、đấy も否定文で用いることができるとの回答を得た。

<意志形> 意志形に接続する例はみられなかった。日本語を基準とした調査同様、「平叙文+ khá/nhé」の形で意志を表す例がみられた。

<命令形> 前回の調査でみられた chớ/chứ の他に、mà, khá/nhé が 1 例ずつみられた。

<行為要求> 前回の調査同様 nào, khá/nhé がみられた。

<禁止形> khá/nhé の他 mà もみられた。

<疑問形> chớ/chứ, cơ chứ, hả, thế の他に、cơ, đây, đấy, vậy の例もみられた。疑問形の分類の中には、反語表現も含まれており、反語表現は cơ, cơ chứ, đấy にみられた。

² 1991 年生まれ、ゲアン省 (ベトナム北中部、中部方言) 出身、男性

3.2.3. 話し手、聞き手

日本語を基準とした調査結果同様、立場や性別による制限は特にみられなかった。

一方、独話については、対象の文末詞が用いられた例が 8 例観察された。独話、心内発話でのベトナム語の文末詞の使用についてインフォーマントに尋ねたところ、ベトナム語の文末詞は独話や心内発話で用いることはあまりないという回答を得た。

4. 結論

日本語を基準とした調査とベトナム語を基準とした調査の結果を以下にまとめる。

日本語の終助詞「よ」には、以下の表 4 に示したベトナム語の文末詞が対応する。2 章の調査でみられた文末詞を用いない表現も表内に記した。

表 4: 日本語の終助詞「よ」とベトナム語の文末詞の対応(全体)

| 日本語 | ベトナム語 |
|-------|--|
| ～+「よ」 | <ul style="list-style-type: none"> ・～+áy, chớ/chứ, chứ hả, chứ nhỉ, cơ, cơ chứ, cơ đấy, cơ mà, đây, đây cơ, đây mà, đấy, đấy chứ, đấy mà, hả, kia, mà, nào, này/nè, nhà/nhé, thế, vậy ・～+ ϕ ・感嘆文 ・呼びかけ、付加疑問文の付加 |

đấy, mà, nhà/nhé, chớ/chứ が多くみられた。特に **đấy** は両調査共に約 50 例抽出され、ベトナム語の文末詞の中で最も「よ」に近い性質も持つと考えられる。

「接続」、「話し手、聞き手」の調査結果を以下にまとめる。

肯定文には、**chớ/chứ, đấy, mà, nhà/nhé** を中心に、様々な文末詞の接続がみられた。否定文に接続する例は非常に少なかったが、**chớ/chứ, mà, nhà/nhé** を用いた例が確認された。更に、**đấy** も否定文に接続しうることが明らかになった。疑問文や反語表現に翻訳される場合もある。意志は、肯定+**nhà/nhé** で表される。行為要求も同様に、肯定+**nhà/nhé** で表すことができるが、行為要求文に **mà, nào, nhà/nhé** が付加された例もみられた。命令形には、**chớ/chứ, mà, nhà/nhé** の接続がみられた。禁止形には **đấy, mà, nhà/nhé** が用いられていた。疑問文にも比較的多くの文末詞の接続がみられた。認識のモダリティに接続する例は得られなかった。ベトナム語の文末詞も、日本語の終助詞「よ」と同様に、独話や心内発話ではあまり用いられない。以上の結果を表 5 に示した。

表 5: 日本語の終助詞「よ」とベトナム語の文末詞の対照 (分類別)

| | 「よ」 | ベトナム語 |
|---------|-------------------------|---|
| 接続 | 肯定+「よ」 | ・肯定+áy, chớ/chứ, chứ hả, chứ nhi, cơ, cơ chứ, cơ đây, cơ mà, đây, đây cơ, đây mà, đây, đây chứ, đây mà, đây nhi, hả, kia, mà, nào, này/nè, nhà/nhé, thế, vậy ・肯定+φ |
| | 否定+「よ」 | ・否定+chớ/chứ, đây, mà, nhà/nhé ・否定+φ ・疑問、反語表現 |
| | 意志+「よ」 | ・肯定+nà/nhé ・意志+φ |
| | 命令+「よ」 | ・命令+chớ/chứ, mà, nhà/nhé ・命令+φ |
| | 行為要求+「よ」 | ・行為要求+mà, nào, nhà/nhé ・行為要求+φ ・肯定+nà/nhé |
| | 禁止+「よ」 | ・禁止+đây, mà, nhà/nhé ・禁止+φ |
| | 疑問+「よ」 | ・疑問+chớ/chứ, cơ, cơ chứ, đây, đây, hả, kia, thế, vậy ・疑問+φ |
| | 認識+「よ」 | ・認識+φ |
| 独話、心内発話 | 一般的に独話や心内発話で用いられることはない。 | ベトナム語の文末詞は独話や心内発話で用いられることは少ない。 |

更に、今回扱ったベトナム語の文末詞の特徴を、接続を中心に以下の表 6 にまとめた。

表 6: ベトナム語の文末詞の特徴

| 文末詞 | 接続する文型 | 他の文末詞との接続 |
|---------|---------------------|----------------------------------|
| đây | 肯定、疑問 | đây cơ, đây mà |
| cơ | 肯定、疑問 | cơ chứ, cơ đây, cơ mà, đây cơ |
| đây | 肯定、否定、禁止、疑問 | cơ đây, đây chứ, đây mà, đây nhi |
| chớ/chứ | 肯定、否定、命令、疑問 | chứ hả, chứ nhi, cơ chứ, đây chứ |
| mà | 肯定、否定、命令、行為要求、禁止、疑問 | cơ mà, đây mà, đây mà |
| hả | 肯定、疑問 | chứ hả |
| áy | 肯定 | |
| kia | 肯定、疑問 | |
| nào | 肯定、行為要求 | |
| này | 肯定 | |
| nà/nhé | 肯定、否定、意志、命令、行為要求、禁止 | |
| thế | 肯定、疑問 | |
| vậy | 肯定、疑問 | |

mà, nhá/nhé は様々な文型に広く接続し、chớ/chứ, đây も比較的広く接続する。ここから、これらの文末詞は接続の制限が少ないために、頻繁に使われており、今回の調査でも多くの用例が抽出されたものと考えられる。

ベトナム語の文末詞は、日本語の終助詞「よ」と同様に文末詞が相互に接続して用いられることがある。相互に接続する文末詞の例は、chứ hả, chứ nhi, cơ chứ, cơ đây, cơ mà, đây cơ, đây mà, đây chứ, đây mà, đây nhi の 10 種が抽出された。接続の順番は以下の通りである。

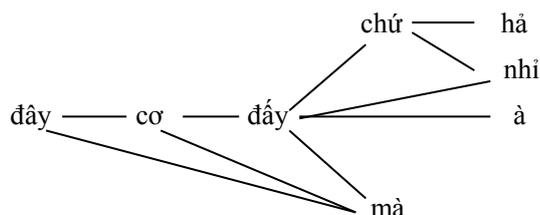


図 1: 相互に接続する文末詞の順番

chứ, đây, mà などの頻出する文末詞が相互に接続する例が多くみられた。頻出する文末詞は、接続の制限があまりないことから、他の文末詞とも接続しやすいと推測される。cơ は単体よりもむしろ他の文末詞と接続して用いられる例が多くみられた。nhá/nhé は様々な文型に広く接続するものの、本調査内では他の文末詞と接続する例は観察されなかった。

5. おわりに

本稿では、日本語の終助詞「よ」に対応するベトナム語の文末詞の、種類や頻度、接続、話者の 3 つの観点から調査を行い、ベトナム語の文末詞の性質の一片を明らかにすることができた。今後は、より多くの用例を収集し、時制や行為者などの観点から、更に詳細に検討する必要がある。今回扱わなかった文末詞についても同様に分析を行い、ベトナム語の文末詞全体の性質を明らかにしたい。

略号一覧

1: 一人称/ 2: 二人称/ CLF: 類別詞/ COP: コピュラ/ NEG: 否定/ PL: 複数/ PRF: 完了/ PST: 過去/ Q: 疑問/ SG: 単数

参考文献

川本邦衛編 (2011) 『詳解ベトナム語辞典』東京: 大修館書店/ Nguyễn Đình Hoà (1997) *VIETNAMESE*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company./ 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』東京: くろしお出版/ Thompson, Laurence C. (1965) *A Vietnamese Grammar*. Seattle: University of Washington Press.

調査資料

Bảo Ninh (1990) *Nỗi buồn chiến tranh*. Hà Nội: Nhà xuất bản hội nhà văn/ 藤子・F・不二雄 (1974) 『ドラえもん 1-5』東京: 小学館/ Fujiko F Fujio (2010) Giang Hồng, Hồng Trang 訳 *DORAEMON 1-5*. Hà Nội: Nhà xuất bản Kim Đông.

ウズベク語における現在未来接辞-a/-y と現在進行接辞-yap の棲み分け
— 動詞のアスペクト的性格の観点から —

西田 千花子

(南・西アジア課程 ウルドゥー語専攻)

キーワード：ウズベク語，現在未来接辞-a/-y，現在進行接辞-yap，アスペクト，動詞分類

0. はじめに

0.1. 本稿の目的

本稿は、ウズベク語¹の現在時制を表す接辞-a/-y と-yap の2つに注目し、その使用分布を明らかにすることを目的とする。ウズベク語はチュルク諸語の一種であり、アスペクト体系はさほど発達しておらず、テンスと一体化して捉えられている傾向がある。本稿では、動詞の接辞選択に関する簡単な事前調査を元にし、「習慣」という文脈に焦点を当て、日本語と対照させながらウズベク語母語話者へのインフォーマント調査を行なうことで考察を進める。なお、本稿でのウズベク語表記は1993年に採用されたラテン文字正書法²を用いる。

0.2. ウズベク語における時制表現

ウズベク語は、接辞や後置詞を用いる膠着型の言語である。動詞述語は、動詞語幹に時制を表す接辞＋人称接辞を付加して作られる。本稿で扱う時制接辞とは動詞が文末述語として用いられる際のものに限る。具体的には、①単純現在未来を表す-a/-y と②現在進行を表す-yap、の2つである。①現在未来接辞-a/-y は、動詞の不定形語尾-moq を取り除いた語幹のうち、子音終わりの動詞には-a が、母音終わりの動詞には-y が接続される。

1. 先行研究

1.1, 1.2 節では、接辞-a/-y, -yap についての記述がある文献を参照していく。1.3 節は、ウズベク語のアスペクトについての先行研究である。

¹ ウズベク語は、チュルク語の1種であり、チャガタイグループ、若しくは地理的分布から東(南東)グループに分類され、新ウイグル語と最も近い関係にある言語である(庄垣内 1988: 829, 1989: 937)。総話者数は最大で3600万人であり、その約3分の2がウズベキスタン共和国に分布していると言われている。6つの母音音素と25の子音音素が認められる(吉村 2009: 1-3)。チュルク諸語の大きな特徴である母音調和は文法上消失している。SOV 語順であり、接尾辞と後置詞によって文法範疇は表現される(庄垣内 1988: 830)。

² ウズベク語の正書法は、1929年にアラビア文字表記からラテン文字表記へ、1940年にはラテン文字からキリル文字表記へ変更されている(吉村 2009: 1)。

ウズベク語のキリル文字正書法に対するラテン文字正書法、ならびに IPA を以下に示す。

A/a=A/a [a][æ], Б/б=B/b [b], В/в=V/v [v][w], Г/г=G/g [g][j], Д/д=D/d [d], Е/е=E/e [e][e], Ё/ё=Yo/yo [jɔ], Ж/ж=J/j [ʒ], З/з=Z/z [z], И/и=I/i [i][i][u], Ў/ў=Y/y [j], К/к=K/k [k][c], Л/л=L/l [l], М/м=M/m [m], Н/н=N/n [n], О/о=O/o [ɔ][ɒ], П/п=P/p [p], Р/р=R/r [r][r], С/с=S/s [s], Т/т=T/t [t], У/у=U/u [y][u], Ф/ф=F/f [f], Х/х=X/x [x], Ц/ц=Ts/ts [ts], Ч/ч=Ch/ch [tʃ], Ш/ш=sh/sh [ʃ], Ё=i [i], Э/э=E/e [e], Ю/ю=Yu/yu [ju], Я/я=Ya/ya [ja], Ў/ў=O'o' [ɔ][o], К/к=Q/q [q], Ғ/ғ=G'/g' [ɣ], X/x=H/h [h], Ң/ң=Ng/ng [ŋ]

1.1. Nurmatova va Rixsiyeva (2013)

Nurmatova va Rixsiyeva(2013)はウズベク語学の立場から書かれた文法記述である。特にテンスとアスペクトを個別に扱っている箇所は無く、時制に関する記述の中で一つにまとめられている。それぞれに用いられる時制接辞を、以下の表にまとめる。

表 1: 動詞述語における時制接辞

| | | |
|------|---------------|-----------------------------------|
| 過去時制 | 近い過去 | -di |
| | 遠い過去 | -gan |
| | 過去時制伝聞 | -b/-ib |
| | 過去時制継続 | -r/-ar |
| 現在時制 | 現在時制継続動詞 | -yap, -yotir, -moqda ³ |
| | 現在未来動詞 | -a/-y |
| 未来時制 | 目的「～つもりだ、～たい」 | -moqchi |
| | 過程・推定「～だろう」 | -r/-ar |

(Nurmatova va Rixsiyeva 2013: 104 より作成)

当文献の中では、テンス・アスペクトに関するこれ以上の記述は見られない。

本稿で扱う問題の形式である-a/-y, -yap のグロスは、Nurmatova va Rixsiyeva (2013) に従いそれぞれ-NPST, -PROG とする。

1.2. Решетов (1966)

Решетов(1966)は旧ソ連期に編纂された言語事典 *Языки Народов* のチュルク諸語に関する項目の一節に書かれた、ウズベク語の概略である。

ウズベク語の直説法における現在時制は①現在未来時制、②現在時制習慣、③現在時制進行相、の3つに分けられるとしており、うちの①と②は現在時制副動詞⁴すなわち-a/-y に人称接尾辞を付加して作られる、と述べている。しかし、記述量に乏しく、これ以上の言及はされていない。一方で、現在時制進行相に関しては細かく取り上げているが、各接辞間に意味レベルでの違いは見られないため、本稿では現在進行接辞としては便宜的に-yap のみを取り上げることとする。

1.3. ハルナザロフ (2010)

ハルナザロフ(2010)は、ウズベク語のアスペクトについてまとめたものである。本稿で扱う現在時制の習慣においても記述がされている。習慣を表す場合には現在未来形も現在進行形も両方可であるとし、以下の2つの例文を挙げている。下線は筆者による。

³ -yap は主として口語で、-yotir, -moqda は文語で用いられる。-yap と-yotir はほとんど同じものである。-moqda は、-yap の最も固い言い方であると共に、ある動作が幾度かに渡って進行することを示す際に用いると良いとされている。"yozmoqtaman = have been writing for some time. (and will continue to do)" (Raun: 1969)

⁴ Решетов(1966) では、現在未来接辞-a/-y は副動詞(деепричастие) として扱われている。

- (1) Men har kun-i gazeta o'qi-y-man.
I every day-POSS.3.SG newspaper read-NPST-1.SG
- (2) Men har kun-i gazeta o'qi-yap-man.
I every day-POSS.3.SG newspaper read-PROG-1.SG

「私は毎日新聞を読む。」

(ハルナザロフ 2010: 351)

意味レベルでの違い等についてこれ以上の記述は見られないが、参照した先行研究の中では唯一現在未来形と現在進行形の共立について書かれたものであった。

一方、現在進行の動作であれ、恒常的な真理は現在未来形で表されると述べている。

2. 問題提起

ハルナザロフ(2010)で述べられているように、ウズベク語では現在の習慣を表す際に、現在未来形と現在進行形の2つの形を取ることができる。しかし、筆者の経験では、実際には現在未来接辞-a/-yの方が多く聞かれる。

先行研究では、個々の接辞について取り上げているものはあるものの、テンス・アスペクトを表す接辞を体系的にまとめたものは管見の限り見当たらなかった。進行形については多くの記述項目がみられたが、習慣を表す接辞に関してはどの先行研究を見ても著しく記述が少なかった。したがって、ウズベク語における現在時制の基本的な接辞の性格やテンス・アスペクト体系を明らかにすることが必要であると考えられる。

3. 調査

初めに事前調査として、大まかな傾向を掴むために計81名のウズベク語話者に対しアンケート調査を行なった。その結果、それぞれの動詞により接辞との共起性に特徴があることが明らかとなった。ハルナザロフ(2010)では、「習慣を表す場合は現在・未来形も進行形も可能。」としているが、どちらの接辞に接続するのかという点に関しては、動詞によってばらつきがあるように思われる。本調査では、意味や特にアスペクト的性質を考慮した上で動詞を下位分類したものを、横断的に見ていく。

3.1. 本調査

本調査では、ウズベク語の動詞を意味的側面から分類した Nurmatova va Rixsiyeva(2013)による動詞分類と、現代日本語の動詞をアスペクト的側面から分類した工藤(1995)による動詞分類を用いて、各動詞と接辞-a/-y, -yap との結びつきの度合いや共起性を調べる。工藤(1995)については、次の3.1.1節で詳しく述べる。各接辞-a/-y, -yap との共起率を見ることで、動詞のアスペクト的観点から見た分布図を明らかにすることができると考える。

3.1.1. 動詞分類に関する先行研究

本調査では、動詞の持つアスペクト的性格を考慮する必要があると考え、日本語のテン

ス・アスペクトについて体系的に書かれた工藤(1995)の動詞分類を参考にした。

工藤(1995)は以下のような定義を用いて、動詞分類を行なっている。

表 2: 工藤(1995)による動詞分類の定義

| | | 時間内現象・ 時間的展開 | 特徴 | アスペクト対立 ⁵ |
|-------------------|-----------------------|--|-------------------------|----------------------------------|
| (A) 外的運 動動詞 | (A・1) 主体動作・ 客体変化動詞 | 成立(開始)・展開・ 消滅(終了) (場合により、結果 も残す。) | ものの動的な運動 | ○ |
| | (A・2) 主体変化動詞 | | | |
| | (A・3) 主体動作動詞 | | | |
| (B) 内的情 態動詞 | (B・1) 思考動詞 | 問わない | 思考・感情・知覚・感覚 (人の内的事象) | ○(※内的な思考や 感情や感覚は、人 称性と絡む。) |
| | (B・2) 感情動詞 | | | |
| | (B・3) 知覚動詞 | | | |
| | (B・4) 感覚動詞 | | | |
| (C) 静態動 詞 | (C・1) 存在動詞 | × | 関係・特性 存在・空間的配置 | × |
| | (C・2) 空間的配置動詞 | | | |
| | (C・3) 関係動詞 | | | |
| | (C・4) 特性動詞 | | | |

(工藤 1995: 70-78 より作成)

それぞれの動詞グループは、切断的であると同時に、連続的である(工藤 1995: 78)と述べている。(A), (C) はアスペクトの有無で、切断的に対立しているが、(B) はその中間に位置づけられる。(C) 静態動詞が、基本的に(「いる」を除いて)、非意志的なものであるとすれば、(B・1) の意志的である思考動詞は、より運動動詞に近く、(B・3) (B・4) の非意志的な知覚動詞、感覚動詞は、より静態動詞に近くなる。

3.1.2. 調査方法

Nurmatova va Rixsiyeva(2013)と工藤(1995)の動詞分類を参考に抽出した動詞を用いて、ウズベク語を母語とするインフォーマント3名⁶に協力を依頼し、アンケート調査を行なった。以下に Nurmatova va Rixsiyeva(2013)と工藤(1995)よりそれぞれアンケートに使用した動詞を表に示す。なお2者の分類で重複している動詞には下線を引いている。

表 3: 本調査アンケートでの使用動詞

| Nurmatova va Rixsiyeva (2013) からの抽出動詞 (アンケート設問 1~26) | | |
|--|------|---|
| 動 作 | 1 動作 | ishlamoq 「働く」、mehnat qilmoq 「労働する」、ter to'kmoq 「過重労働する」 |
| | 2 思考 | o'ylamoq 「考える」、o'qimoq 「読む、学ぶ」、kashf qilmoq 「発明する」 |
| | 3 知覚 | sezmoq 「気付く」、his qilmoq 「感じる」 |

⁵ 「スルーシテイル」による日本語のアスペクト対立のこと。

⁶ インフォーマント情報は次の通りである。

A: 21 歳, 女, タシケント出身 / B: 20 歳, 女, ホラズム出身 / C: 24 歳, 男, タシケント出身

ウズベク語における現在未来接辞-a/-y と現在進行接辞-yap の棲み分け
 — 動詞のアスペクト的性格の観点から —

| | | |
|----------------------------------|--|--|
| 状態 | 4 感情 | kulmoq 「笑う」、xursand bo'lmoq 「嬉しくなる、喜ぶ」、qayg'urmoq 「悲しむ」 |
| | 5 発話 | aytmoq 「言う」、gapirmoq 「話す」、qichqirmoq 「叫ぶ、わめく」 |
| | 6 指示 | imo qilmoq 「合図する」、labini burmoq 「唇を噛む」、ko'zini qismoq 「ウィンクする」 |
| | 7 肉体状態 | og'rimoq 「痛む」、isitma chiqmoq 「熱が出る」、charchamoq 「疲れる」 |
| | 8 自然状態 | erimoq 「溶ける」、muzlamoq 「凍る」、gullamoq 「花が咲く」 |
| | 9 視覚 | ko'rmoq 「見る」、qaramoq 「見る」、boqmoq 「看る」 |
| 工藤(1995) からの抽出動詞 (アンケート設問 27~51) | | |
| 外的運動動詞 | ochmoq 「開ける」、qirqmoq 「切る」、o'ldirmoq 「殺す」、yemoq 「食べる」、ko'rmoq, qaramoq 「見る」、o'qimoq 「読む」、urmoq 「たたく」、yurmoq 「歩く」、o'ynamoq 「遊ぶ」、harakat qilmoq 「動く」、o'tirmoq 「座る」、bormoq 「行く」、o'lmoq 「死ぬ」、so'lmoq 「枯れる」、uylanmoq, turmushga chiqmoq 「結婚する」 | |
| 内的情態動詞 | o'ylamoq 「考える」、ishonmoq 「信じる」、xohlamoq 「望む」、bezovta bo'lmoq 「心配する」、ta'sirlanmoq 「感動する」、qiyinalmoq 「苦しむ」、hayratlanmoq 「驚く」、shokga tushmoq 「あきれれる」、his qilmoq 「感じる」、ko'rinmoq 「見える」、o'girmoq 「痛む」、charchamoq 「疲れる」 | |
| 静態動詞 | bo'lmoq 「ある・いる」、baholamoq 「値する」、anglatmoq 「意味する」 | |

以上 51(延べ個数 58) の動詞についてアンケート票を作成した。「結婚する」に関しては、男女で違う動詞を用いるので、その両方を選択肢に挙げた。

事前調査により、習慣を表す場合には動詞により選択される接辞に差はあるものの、現在未来接辞-a/-y の方が頻繁に用いられる傾向が見られたため、設問としては抽出した各動詞をあえて日本語の「(テ) イル」形にし、日本語として自然な表現となる文章を作成した。日本語で作成した各設問に対し、ウズベク語訳を 3 つ(-a/-y を用いたもの・-yap を用いたもの・-moqda を用いたもの) ないし 4 つ(+gan⁷を用いたもの) ずつ用意し、それぞれウズベク語としての容認度を○・△・×の三種類で判別してもらった。また、回答者自身の使用頻度の順位も合わせて回答してもらった。その回答を数値化することで、各動詞のアスペクト的性格から見た分布の図式化を図った。3 つ目の回答パターンである-moqda 形に関しては、-yap に準ずる現在進行の一形態として扱った。1 つの設問におけるインフォーマント 3 名それぞれの《容認度(○・△・×)》・《使用頻度(1, 2, 3, 4)》の回答を項目別にカウントし、それぞれの項目に対し、-a/-y 性が高い場合は大きく、-yap 性が高い場合には小さくなるように変数を与えて数値化し、結果を一覧表ならびに分布図に表した。

3.1.3. 調査結果

3.1.3.1. Nurmatova va Rixsiyeva (2013) の場合

まず、Nurmatova va Rixsiyeva(2013)による動詞分類を用いた調査だが、動作動詞・状態動詞、また下位分類に関係なく、幅広くそれぞれの動詞が分布する結果となった。故に、Nurmatova va Rixsiyeva(2013)による動詞分類は、現在未来接辞-a/-y と現在進行接辞-yap の使用分布に関しては、特に関連性が無いように思われる。

⁷ 表 1 を参照。完了、大過去、結果継続などを表す。設問によって、4 つ目の回答パターンとして接辞-gan を用意したが、あくまで参考の為であり、今回の論文のテーマとは異なるものであるため、結果分析においては除外し処理を行なった。

3.1.3.2. 工藤(1995)の場合

工藤(1995)による動詞分類を用いた調査結果を表4に示す。現在未来接辞-a/-y との結びつきが強いものが上位に、現在進行接辞-yap との結びつきが強いものが下位に位置している。最右列◆・*・■はA, B, Cを表し、図1に従うものである。表中点線は、標準値の8.7⁸を示す。

表4: 調査結果(工藤 1995: による動詞分類を用いて)

| 分類 | Jp. | Uz. | 容認度 | 頻度 | 合計値 | |
|-----|------|-------------------|-----|------|------|-------|
| A・3 | 見る | qaramoq | 18 | 0.6 | 18.6 | ◆外運 |
| A・1 | 開ける | ochmoq | 18 | 0.6 | 18.6 | ◆外運 |
| A・1 | 切る | qirqmoq | 18 | 0.6 | 18.6 | ◆外運 |
| A・3 | 食べる | yemoq | 18 | 0.6 | 18.6 | ◆外運 |
| A・3 | 歩く | yurmoq | 18 | 0.6 | 18.6 | ◆外運 |
| A・1 | 殺す | o'ldirmoq | 16 | 0.6 | 16.6 | ◆外運 |
| A・3 | 遊ぶ | o'ynamoq | 16 | 0.6 | 16.6 | ◆外運 |
| A・2 | 座る | o'tirmoq | 16 | 0.5 | 16.5 | ◆外運 |
| B・1 | 信じる | ishonmoq | 15 | 0.6 | 15.6 | *内情 |
| A・3 | 動く | harakat qilmoq | 13 | 0.6 | 13.6 | ◆外運 |
| B・1 | 望む | xohlamoq | 13 | -0.8 | 12.2 | *内情 |
| A・2 | 結婚する | uylanmoq | 12 | -0.2 | 11.8 | ◆外運 * |
| A・2 | 結婚する | turmushga chiqmoq | 12 | -0.2 | 11.8 | ◆外運 * |
| C・3 | 意味する | anglatmoq | 10 | 0.6 | 10.6 | ■ 静態 |
| B・2 | あきれる | shokga tushmoq | 10 | 0 | 10 | *内情 * |
| A・2 | 死ぬ | o'lmoq | 10 | -0.1 | 9.9 | ◆外運 * |
| A・3 | 読む | o'qimoq | 9 | 0.6 | 9.6 | ◆外運 |
| A・2 | 行く | bormoq | 9 | 0.6 | 9.6 | ◆外運 |
| A・3 | 見る | ko'rmoq | 9 | 0.5 | 9.5 | ◆外運 |
| B・1 | 考える | o'ylamoq | 9 | 0 | 9 | *内情 |
| B・3 | 見える | ko'rinmoq | 7 | 0.3 | 7.3 | *内情 |
| B・3 | 感じる | his qilmoq | 8 | -0.8 | 7.2 | *内情 |
| B・4 | 痛む | o'grimoq | 7 | -0.6 | 6.4 | *内情 |
| A・3 | 叩く | urmoq | 6 | 0.1 | 6.1 | ◆外運 |
| A・2 | 枯れる | so'lmoq | 6 | -0.1 | 5.9 | ◆外運 * |
| B・2 | 感動する | ta'sirlanmoq | 4 | -0.6 | 3.4 | *内情 |
| B・4 | 疲れる | charchamoq | 3 | -0.7 | 2.3 | *内情 * |
| B・2 | 心配する | bezovta bo'lmoq | 3 | -0.8 | 2.2 | *内情 |
| B・2 | 驚く | hayratlanmoq | 3 | -0.8 | 2.2 | *内情 |
| B・2 | 苦しむ | qiynalmoq | 2 | -1 | 1 | *内情 |
| C・1 | 存在する | bo'lmoq | | | | |
| C・3 | 値する | baholamoq | | | | |

⁸ 《頻度》項目(α)・《容認度》項目(β)の数値処理後の値の範囲は、それぞれ $-12 \leq \alpha \leq 6$ 、 $0 \leq \beta \leq 18$ であり、合計値(γ)の範囲は、 $-1.2 \leq \gamma \leq 18.6$ であることから、本調査における合計値の標準は8.7となる。

表 5: 本調査結果に基づく接辞選択に関する動詞分類の提案

| | | | |
|------------|----------|--------------------|-----------|
| (A) 外的運動動詞 | A・1 | -a/ -y への接続の度合いが高い | ↑ |
| | A・2, A・3 | | |
| (B) 内的情態動詞 | B・1 | ↓ | ← 平均値 8.7 |
| | B・3 | | |
| | B・4 | | |
| | B・2 | | |

5. 今後の課題

今回の調査では、外的運動動詞と内的情態動詞の分布は明らかになったものの、静態動詞に関してはほとんどデータを得ることができなかった。静態動詞に分類されるようなウズベク語の動詞は、形態・統語的に特徴があり、日本語の動詞への翻訳の段階で困難が伴ったことに原因があると考えられる。今後は、静態動詞にフォーカスを当てた調査を行なっていく必要がある。

略号一覧

-: 接辞境界 / 1, 3: 各 1, 3 人称 / NPST (non-past): 非過去 / POSS (possessive): 所有 / PROG (progressive): 進行アスペクト / SG (singular): 単数

参考文献

- ハルナザロフ, マルムジョン (2010) 「ウズベク語(データ:「アスペクト」, テーマ企画:特集「アスペクト」)」『語学研究所論集 no.15』 348-354. 東京外国語大学語学研究所. / 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 東京: ひつじ書房. / Nurmatova, M. va G. Rixsiyeva (2013) *O'ZBEK TILI*. Tashkent: Toshkent davlat sharqshunoslik instituti. / Raun, Alo (1969) *BASIC COURSE IN UZBEK*. Bloomington: Indiana University. / Решетов, В. В (1966) *Узбекский Язык. Языки Народов СССР т.2 Тюркские языки*. 340-362. Москва: Наука. / 庄垣内正弘 (1988) 「ウズベク語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編(上)』 829-833. 東京: 三省堂. / 庄垣内正弘 (1989) 「チュルク諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』 937-950. 東京: 三省堂. / 吉村大樹 (2009) 『LiCCOSEC (民族紛争の背景に関する地政学的研究) Vol. 4 ウズベク語文法・会話入門』 大阪: 大阪大学世界言語センター.

パラグアイのスペイン語における *leísmo*、*laísmo* について
— グアラニー語との言語接触の観点から —

濱口 恵利加
(欧米第一課程 英語専攻)

キーワード：パラグアイ，スペイン語，グアラニー語，*leísmo* / *laísmo*，3人称代名詞

0. はじめに

本稿は、パラグアイのスペイン語における *leísmo* / *laísmo* が現れる統語的環境、およびその頻度を考察したものである。加えて、同国ではスペイン語と並んでグアラニー語が公用語に定められている。そのため、両言語の対照研究も行い、グアラニー語¹が *leísmo* に与える影響を観察した。先行研究の和訳、本文中のグロス、斜字体、日本語訳、例文番号、表番号はことわりのない限り筆者による。*leísmo* / *laísmo* が現れたものに関しては、グロスはそれぞれ LE / LA で示す。

leísmo / *laísmo* とはスペイン語の目的格3人称代名詞(以下、「接語代名詞」²)に関する現象である。*leísmo* は人間・男性・単数の対格 *lo* が *le* で、*laísmo* は人間・女性・単数の与格 *la* が *le* で、それぞれ代用される(高垣 2007: 77)。これらの現象は以下の接語代名詞体系の変遷により起こると考えられる。

表 1: 接語代名詞対格・与格体系の変遷

a. 機能主体体系

⇒ b. 過渡的体系

⇒ c. 指示物主体体系

| | 単数 | |
|----|-----------|-----------|
| | 男性 | 女性 |
| 対格 | <i>lo</i> | <i>la</i> |
| 与格 | <i>le</i> | |

| | 単数 | |
|----|-----------------------|-----------|
| | 男性 | 女性 |
| 対格 | <i>le</i> / <i>lo</i> | <i>la</i> |
| 与格 | <i>le</i> | <i>le</i> |

| | 単数 | |
|----|-----------|-----------|
| | 男性 | 女性 |
| 対格 | <i>le</i> | <i>la</i> |
| 与格 | <i>le</i> | <i>la</i> |

(高垣 2007: 79)

高垣(2007: 78-79)によれば、a.の体系は格を明瞭に区別し、ラテンアメリカ(以下、「ラ米」)で一般に見られる。b.の体系は c.へと変遷していく過渡的体系である。c.の体系には格区別がなく、指示物の性の対立のみが意識される。男性は事物の対格でも *le* が、女性も事物の与格には *la* が用いられるようになる。

¹ トゥピ語族トゥピ・ワラニー語派トゥピ・ワラニー語群に属す。使用人口の多さでは南米先住民言語の中でケチュア語に次ぐ大言語である(細川 1992: 1140-1142)。

² スペイン語の目的格人称代名詞は、隣接する動詞と密接につながっている。以下、高垣(2007: 77)に従い「接語代名詞」と呼ぶ。

1. 先行研究

1.1 節で高垣他(2008)のラ米 5 ヶ国(メキシコ、アルゼンチン、パラグアイ、チリ、コロンビア)の *leísmo* / *laísmo* の受容率³、1.2 節で青砥(2010)の *leísmo* が起こる統語的環境、1.3 節で Palacios Alcaine(2000)より主にグアラニー語の目的格 3 人称代名詞体系について扱う。

1.1. 高垣他(2008)

調査された *leísmo* の 3 つの例文中、パラグアイの受容率が最も高かったのは以下の例文である。*le* は人間・男性・単数の直接目的語 *mi hijo* 「私の息子」(文中に明示なし)を指す。なお、調査では各国に合わせた語が用いられているが、本稿ではパラグアイの形のみ示す。

(1) Un coche que venía por la calle Palma *le*
a.ART.DEF.M.SG car.M.SG that.CONJ come.IND.IMPF.3.SG around.PREP NAME LE
atropelló y *le* mató.
run over.IND.PST.3.SG and.CONJ LE kill.IND.PST.3.SG
パルマ通りに来た 1 台の車が、彼(私の息子)をひき殺した。

(高垣他 2008: 397)

高垣他(2008: 397)によれば、ラ米全体の積極的受容率は 14%と低く、人間・男性・単数の直接目的語には *lo* を用いる傾向が強い。しかしパラグアイのみが 63%にも達しており、これは同国で特徴的に見られる *leísmo* に起因しているのかもしれないと述べている。

次に、*laísmo* は以下の 1 文のみ調査がされている。*la* は人間・女性・単数の間接目的語 *mi madre* 「私の母」(文中に明示なし)を指す。

(2) Yo *la* he dicho que se habían
I.NOM LA have.IND.PRS.1.SG say.PTCP.PST.M.SG that.CONJ PRN.REFL have.IND.IMPF.3.PL
quedado en *la* escuela.
stay.PTCP.PST.M.SG in.PREP the.ART.DEF.F.SG school.F.SG
私は彼女(自分の母親)に、彼らが学校にいたということを話した。

(高垣他 2008: 398、斜字体は原文まま)

高垣他(2008: 399)によれば、ラ米全体の *laísmo* の受容率は極めて低いが、パラグアイは 21%と比較的受容率が高い。

1.2. 青砥(2010)

青砥(2010: 56-64)より、パラグアイの *leísmo* が発生する統語的環境を以下に述べる。①～⑪の丸囲み番号は筆者による。

³ 被験者数の内訳は、メキシコ 21 人、アルゼンチンとパラグアイが各 20 人、チリとコロンビアが各 25 人の計 111 人である(Takagaki et al. 2008: 83)。

- ①文中に慣用的に *leísmo* と共起しやすい動詞⁴が存在する。
- ②情意動詞の主語が無生物の場合、接語代名詞には与格がくる傾向がある。
- ③使役構文の不定詞が他動詞の時、意味上の主語である接語代名詞には与格が来やすい。
- ④日常会話で女の人を指示する機能が定着しつつある。
- ⑤同文中に同じ指示対象の目的語と接語代名詞が現れる接語重複の文において、指示の重複する直接目的語が共起する場合に与格をとる。
- ⑥複数形の直接目的語を照応する時、複数形 *les* が *le* で代用されることがある。
- ⑦文法性を区別しない関係代名詞 *quien*(先行詞に人をとる)や疑問詞 *quién*「誰」を照応する時、与格の方が適する。
- ⑧目的および未確定の事態を表す「*para*+不定詞句」、「*para que* 節」で与格が現れやすい。
- ⑨目的以外を表す接続法(願望、要求・指示など)の文においても与格が現れる。
- ⑩動詞は直説法であるが信念とは裏腹に起こる疑念が語られる場合、与格が現れる。
- ⑪未来の事態や話し手の推量などを表す未来時制において与格が現れる。

(青砥 2010: 56-64 要約)

上記①～⑪の分類を、2.1.3 節における調査結果の考察の際に使用する。

1.3. Palacios Alcaine(2000)

Palacios Alcaine(2000)より、パラグアイの *leísmo* の特徴、およびグアラニー語の目的格 3 人称代名詞体系に関する記述を以下に要約する。

パラグアイでは、直接・間接目的語の唯一の形式として *le* に収束していく傾向にある。*leísmo* はスペイン語とグアラニー語の言語接触のある所で起こる。スペインでは格の中立化で性の区別が強化されるのみだが、パラグアイでは性・数共に *le* への統一化がみられる。

(Palacios Alcaine 2000: 123-128 要約)

表 2: グアラニー語の目的格 3 人称代名詞体系

| | 統語機能 | グアラニー語 | スペイン語 |
|----|-------|------------------------------------|-----------------|
| 単数 | 直接目的語 | <i>ichú-pe</i> | <i>lo, la</i> |
| | 間接目的語 | <i>ichú-pe</i> | <i>le</i> |
| 複数 | 直接目的語 | <i>ichú-pe (kuéra)⁵</i> | <i>los, las</i> |
| | 間接目的語 | <i>ichú-pe (kuéra)</i> | <i>les</i> |

(Palacios Alcaine 2000: 139 を一部改変)

⁴ *acompañar*「一緒に行く」、*ayudar*「手伝う」、*conocer*「知っている」、*creer*「信じる」、*encontrar*「出会う」、*esperar*「待つ」、*invitar*「招待する」、*llamar*「呼ぶ」、*llevar*「運ぶ」、*matar*「殺す」、*saludar*「挨拶する」、*ver*「見る」などである(青砥 2010: 56)。

⁵ 複数を表す際 *kuéra* を後置させる方法があるが、口語では殆ど用いられない(Palacios Alcaine 2000: 139)。

表 2 より、グアラニー語の目的格 3 人称代名詞は性・数・格の区別をもたない。この特徴が、スペイン語との言語接触を通してパラグアイの *leísmo* を誘因している可能性がある。

1. 4. 先行研究の問題点

パラグアイの *leísmo* / *laísmo* を統語的・数量的に分析して示した文献は管見の限り見つかっていない。*leísmo* とグアラニー語の用例を対照し、Palacios Alcaine(2000)の述べるような言語接触の影響を考察した研究も見当たらない。

2. 調査

以下 2 種類のテキストを用い、*leísmo* / *laísmo* が現れる統語的環境と、その頻度について分析した。

[1] Krivoshein de Canese et al.(2005) *Tetãgua Remimombe'u*⁶ 「祖国の大衆物語」(全 98 ページ、うち序文等を除く本文 10-95 ページ)

[2] Roa Bastos(1987) *Yo el supremo* 「我、至上なり」(全 612 ページ、うち本文 93-607 ページ)

手順としては、まず本文から *leísmo* / *laísmo* の用例を手作業で抜き出した。そして *leísmo* / *laísmo* を判断するには、辞書およびインターネットで本来の接語代名詞の現れ方を調べて確認した。

[1]の民話には口語体の短編が 12 話収録されており、偶数ページにはスペイン語、奇数ページにはグアラニー語が記述されている。本文のうち挿絵を除き、各言語のテキストは 31 ページずつである。[1]では *leísmo* / *laísmo* の調査に加え、*leísmo* の用例と、対応するグアラニー語の用例を対照し、Palacios Alcaine(2000)の述べる言語接触の影響を観察した。

[2]の小説は、[1]と分量を合わせるため本文の冒頭 93-125 ページの 10 行目までの約 33 ページを対象とした。スペイン語のみの記述であるが、著者⁷の意図により本文中にグアラニー語の語彙や表現が頻繁に現れる。[2]では *leísmo* / *laísmo* についてのみ調査した。

2. 1. *leísmo* の調査結果

今回の調査では *leísmo* が 17 例得られた。以下で、共起した動詞等、動詞の法・時制、1.2 節で述べた青砥(2010)による統語的環境に従った分類の順に考察していく。

2. 1. 1. 共起した動詞等による分類

leísmo を共起した動詞等に従って分類すると、表 3 のようになる。

⁶ グアラニー語からスペイン語に翻訳されている。訳者の Krivoshein de Canese(1926 年生まれ)は若くしてパラグアイに帰化したチェコ人であるため、同氏の翻訳はパラグアイ国民が話すスペイン語と変わらないと考える(http://www.portalguarani.com/623_natalia_krivoshein_de_canese.html 最終閲覧日 2015/1/8)。

⁷ 著者の Roa Bastos は 1917 年パラグアイの首都アスンシオンの生まれで、幼少期を同国で過ごした(Roa Bastos 1987: 11)。

表 3: 共起した動詞等

| | | 単独の動詞 | 動詞句 ⁸ | 使役 / 放任表現 ⁹ | 前置詞句 ¹⁰ | 命令表現 | 合計 |
|-----------------|-------------------|-----------|------------------|------------------------|--------------------|-------|----------|
| 全用例 | [1] | 39 | 15 | 7 | 8 | 3 | 72 |
| | [2] ¹¹ | 74 | 0 | 2 | 0 | 0 | 76 |
| <i>leísmo</i> | [1] | 8(66.7%) | 4(33.3%) | 0(0%) | 0(0%) | 0(0%) | 12(100%) |
| | [2] | 3(60%) | 0(0%) | 2(40%) | 0(0%) | 0(0%) | 5(100%) |
| <i>leísmo</i> 計 | | 11(64.7%) | 4(23.5%) | 2(11.8%) | 0(0%) | 0(0%) | 17(100%) |

leísmo は単独の動詞、「querer+不定詞」、「hacer+不定詞」と共起したものに偏っていた。紙幅の都合上、以下に単独の動詞と共起した用例を 1 例示す。

(3) No caminó mucho y le encontró a un
 NEG walk.IND.PST.3.SG much.ADV and.CONJ LE meet.IND.PST.3.SG to.PREP a.ART.INDEF.M.SG
 tigre que le dijo:
 tiger.M.SG that.CONJ him.DAT say.IND.PST.3.SG

彼(Sambo[少年の名前])は少し歩くと、彼にこう言った 1 匹のトラに出会った。

(Krivoshein de Canese et al. 2005: 76)

単独の動詞として現れたものは、encontrar「出会う」/pegar「殴る」が 3 例ずつ、escuchar「聴く」/llamar「呼ぶ」/querer「愛する」/ver「見る」/invitar「招待する」が 1 例ずつであった。例文(3)は encontrar の例文であり、le は直接目的語 a un tigre「1 匹のトラ」を指す。

2.1.2. 法および時制による分類

leísmo と共起した動詞の法・時制に従って分類すると、表 4 のようになる。

⁸ querer+不定詞「～したい」、ir a+不定詞「～するつもりだ」、tener que+不定詞「～しなければならない」を含む。

⁹ hacer+不定詞「～させる」、dejar+不定詞「～させておく」を含む。

¹⁰ para+不定詞「～するために」、al+不定詞「～すると」、hasta+不定詞「～するまで」などを含む。

¹¹ [2]では表 3 以外の分類も現れたが、本文の分量が多いため *leísmo* が現れた分類のみ全用例数を示した。

表 4: 共起した動詞の法および時制

| 法 | | 直説法 | | | | | 接続法 | 合計 |
|----------|-------------------|----------|----------|----------|-------|-------|---------|----------|
| 時制 | | 現在 | 点過去 | 線過去 | 命令 | 未来迂言 | 現在 | |
| 全用例 | [1] | 14 | 39 | 8 | 2 | 6 | 3 | 72 |
| | [2] ¹² | 32 | 26 | 3 | 0 | 0 | 1 | 62 |
| leísmo | [1] | 3(25%) | 6(50%) | 2(16.7%) | 0(0%) | 0(0%) | 1(8.3%) | 12(100%) |
| | [2] | 3(60%) | 2(40%) | 0(0%) | 0(0%) | 0(0%) | 0(0%) | 5(100%) |
| leísmo 計 | | 6(35.3%) | 8(47.1%) | 2(11.8%) | 0(0%) | 0(0%) | 1(5.9%) | 17(100%) |

最も多かったのは直説法点過去時制の 8 例であった。続いて、同現在時制で 6 例、同線過去時制で 2 例が現れた。[1]では、完結した出来事を表す直説法点過去時制が最も多かったが、これは民話の性質によるものであると思われる。[2]では、直説法現在時制と同点過去時制において、全用例数に比例し 3 例、2 例の leísmo が現れたと推測される。以下に、pegar が直説法点過去時制で現れた用例を示す。le は直接目的語 a Karayá[サルの名前](文中に明示なし)を指す。

(4) — lo agarró del cuello y le
him.ACC grab.IND.PST.3.SG of.PREP.+the.ART.DEF.M.SG neck.M.SG and.CONJ him.DAT
pegó mucho.
hit.IND.PST.3.SG hard.ADV

彼(Karayá[サルの名前])の首をつかみ、彼をボコボコに殴った。

(Krivoshein de Canese et al. 2005: 62)

2.1.3. 青砥(2010)の統語的環境に従った分類

1.2 節で述べた青砥(2010)の統語的環境に従って用例进行分类すると、以下のようになる。なお、2 つ以上の分類に属する用例、およびどの分類にも属さない用例がみられた。

¹² [2]では表 4 以外の時制も現れたが、本文の分量が多く leísmo が現れた分類のみ全用例数を示した。

表 5: *leísmo* の青砥(2010)の統語的環境に従った分類

| 統語的環境 | | ① ¹³ | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ |
|-------|-----|-----------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 該当例文数 | [1] | 5 | 0 | 0 | 1 | 5 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| | [2] | 2 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 合計 | | 7 | 0 | 2 | 1 | 6 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |

①の分類では、*encontrar*、*llamar*、*ver*、*invitar* の 4 つの動詞が現れた。⑤の分類に該当した用例が 6 例みられたため、青砥(2010)が述べるように接語重複の文では *leísmo* が起こりやすいということが確認できた。③の分類に関しては、[2]で現れた 2 例ともに不定詞として他動詞が現れたことから、青砥(2010)の記述どおり使役構文では他動詞と *leísmo* が共起しやすいと推測される。以下に、⑤の接語重複の例文を 1 例示す。*le* と指示対象が同一である直接目的語 *una piedra-bezoar* 「1 個の石」を下線で表す。

(5) *Le encontraron en la entraña una piedra-bezoar del tamaño de una toronja.*
 it.DAT find.IND.PST.3.PL in.PREP the.ART.DEF.F.SG core.F.SG a.ART.INDEF.F.SG
 stomach stone.F.SG of.PREP.+the.ART.DEF.M.SG size.M.SG of.PREP a.ART.INDEF.F.SG grapefruit.F.SG
 (法医学者らは牛の)内臓の中に、グレープフルーツ大の胃石を見つけた。
 (Roa Bastos 1987: 98)

2.2. *laísmo* の調査結果

今回の調査では、いずれの資料からも *laísmo* の用例を得ることができなかった。

2.3. グアラニー語の調査結果

leísmo の用例と、対応するグアラニー語の本文を対照した結果、2 例において目的格 3 人称代名詞(*i*)*chupe* が現れた。ただし実際に *leísmo* の部分に該当したものは以下の 1 例のみであった。

(6) ... *jaguarete mbohapyha ho-³u-sé-va ichupe.*
 jaguar third 3.SG-eat-VOL-REL to he
 彼を食べたいと思っていた 3 番目のトラ
 (Krivoshein de Canese et al. 2005: 79)

この *ichupe* については、対応する *leísmo* の用例では直接目的語を指示するのに *le* が現れていた。一方、*ichupe* が現れたもう 1 つの用例に関しては、対応するスペイン語の用例では

¹³ 青砥(2010)が *leísmo* と共起しやすいとしている 12 の動詞のみを分類基準とした(1.2 節の脚注 7 参照)。他にどのような動詞が共起しやすいのか、筆者は判断しかねるためである。

間接目的語を指示する *le* として現れていた。従って、用例は少ないが「グアラニー語の目的格 3 人称代名詞体系は格をもたない」とする Palacios Alcaine(2000)の記述の裏付けができたと考える。

3. まとめと今後の課題

今回の調査では、少ない用例数からではあるが、*leísmo* と共起しやすい動詞等、法・時制、*leísmo* が現れやすい統語的環境およびその頻度のある程度提示することができた。特に、「*querer*+不定詞」、不定詞に他動詞をとる使役構文、および接語重複といった環境において、*leísmo* が現れやすいという結果が得られた。グアラニー語の *ichú-pe* に関しては、スペイン語の用例では直接 / 間接目的語として *le* が現れていたことから、この「格をもたない」という特徴がパラグアイの *leísmo* に影響を及ぼしている可能性がある。

青砥(2010)などは「*leísmo* は口語に多い」と指摘しているため、今後は実際の会話やテレビドラマなどを用いて、より多くの用例を分析していくことが必要である。今回あまり扱わなかった、指示対象の有生性や数などといった点にも着目し、実際にパラグアイでは *leísmo* がどの程度進んでいるのかを調査していきたい。今回用例が得られなかった *laísmo* に関しても、その傾向を掴めるように調査していく余地がある。

略号一覧 1, 3(first, third person): 1, 3 人称 / ADV(adverb): 副詞 / ART(article): 冠詞 / CONJ(conjunction): 接続詞 / DAT(dative): 与格 / DEF(definite): 定 / F(feminine): 女性 / IMPF(imperfect): 未完了 / IND(indicative): 直説法 / INDEF(indefinite): 不定 / LA(*laísmo*) / LE(*leísmo*) / M(masculine): 男性 / NAME(proper name): 固有名詞 / NEG(negative): 否定 / NOM(nominative): 主格 / PL(plural): 複数 / PREP(preposition): 前置詞 / PRN(pronoun): 代名詞 / PRS(present): 現在 / PST(past): 過去 / PTCP(participle): 分詞 / REFL(reflexive): 再帰 / REL(relative): 関係詞 / SG(singular): 単数 VOL(volitive): 意志 / -: 形態素境界

参考文献 青砥清一 (2010) 「パラグアイにおけるレイスモについて」『神田外語大学紀要』22: 53-72. / 高垣敏博・上田博人・宮本正美・福嶋教隆・ルイズ・ティノコ, A. (2008) 「研究報告 2 メキシコおよび南米 4 カ国における調査結果—スペイン調査結果との比較—」『地理的変異に基づくスペイン語の統語研究』385-412. / 高垣敏博 (2007) 「スペイン語統語現象の地理的バリエーションについて—スペインでの調査から—」『スペイン語学研究』22: 69-86. / 田島久歳・武田和久 (2011) 『エリア・スタディーズ 86 パラグアイを知るための 50 章』東京: 明石書店 / 細川弘明 (1992) 「ワラニー語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第 4 巻 世界言語編(下-2)』1140-1142. Palacios Alcaine, Azucena (2000) “El sistema pronominal del español paraguayo: un caso de contacto de lenguas.”, en J. Calvo Pérez (ed.), *Teoría y práctica del contacto: el español de América en el candelero*. 122-143. Frankfurt-Madrid: Vervuert-Iberoamericana. / Takagaki, Toshihiro et al. (2008) *Encuesta sobre problemas sintácticos de la lengua española (2)*. Tokyo. 調査資料 Krivoshein de Canese, Natalia et al. (2005) *Tetagua Remimombe'u*. Paraguay: Asunción. / Roa Bastos, Augusto (1987) *Yo el supremo*. Madrid: Cátedra.

インターネット上の資料 Krivoshein de Canese のプロフィール

http://www.portalguarani.com/623_natalia_krivoshein_de_canese.html (最終閲覧日 2015/1/8)

内モンゴル語ホルチン方言の借用語について
—漢語を中心に—

ブヘ

(東アジア課程 モンゴル語専攻)

キーワード：モンゴル語，ホルチン方言，漢語，漢語借用語

0. はじめに

本稿では、内モンゴル語¹ホルチン方言²における漢語³借用語⁴に見られる音韻・形態的な特徴について考察することを目的とする。

モンゴル語ホルチン方言の使われている地域は、図1のように、モンゴル人民共和国の東側に位置する。内モンゴルのホルチン地方は、中国の遼寧省、黒龍江省、吉林省に地理的に近く、漢語借用語は日用品、農業、工業、交通、文化、技術など多方面にみられる。

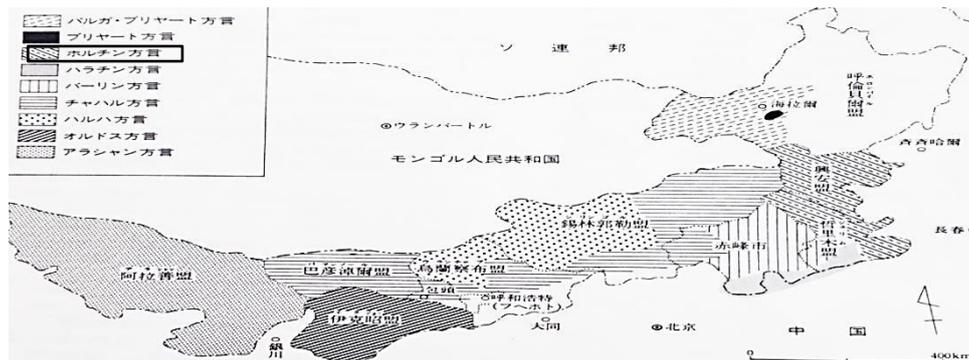


図1: モンゴル語諸方言の分布図

(栗林(1989)の内蒙古語の方言分布地図を基に筆者作成)

以下、1節で漢語借用語に関する先行研究をまとめ、2節では調査方法と分析の結果について述べる。なお、本稿における例文番号、下線、中国語のピンイン、中国語とモンゴル語の日本語訳は、特に断りのない限り筆者によるものである。

¹ 内モンゴル語とは内蒙古語のことである(栗林 1989)。

² 查干哈达 (1996) によると、ホルチン方言は中国内モンゴル自治区の通遼市、科左中旗、科左後旗、興安盟烏蘭浩特市、科右中旗、科右前旗、扎賚特旗、黒龍江省ドルブットモンゴル族自治県、吉林省前ゴルロス・モンゴル族自治県などの地域で話されている。ホルチン方言の母音 a, ə, i, ɪ, ɔ, u, ʌ, œ の9つと子音の b, p, m, f, d, t, n, l, g, k, x, j, s, dʒ, ʃ, ʃ, r, w, ɳ これらの基本子音以外に dz, tʂ, ʂ, dz, ts の五つの借用語に使用する子音がある。

³ 本稿では中国語の標準語を指す。

⁴ ある言語(=方言)の話し手が他の(諸)言語(=方言)から、それまで自分の言語になかった要素(語彙項目、意味、形態素、統語規則、音素など)を採り入れることを借用(また借入)という(亀井・河野・千野編 1996: 667)

1. 先行研究

包聯群(2011)は、中国黒竜江省ドルブットモンゴル族コミュニティー言語⁵(Dorbed Mongolian Community Language、以下では DMCL と省略する)の音韻的、形態的、統語的特徴について記述を行うことを目的としたものである。包聯群(2011)の音素表記 $\varepsilon, 3, \gamma$ は查干哈达(1996)の音素表記 α, e, g に相当する。

1.1. 音韻的な特徴

包聯群(2011: 130)は、DMCL ではモンゴル語⁶をベースにしており、漢語起源の語彙はもとの中国語と異なり、中国語にあった声調を失い、代わりに第一音節にモンゴル語のストレスが置かれ、イントネーションが付与されると述べている。中国語の「准备 zhun bei」(準備する)の「准 zhun」は以下の例文 (1) で[tʃun]になっており、そり舌音 [tʃ] が歯茎摩擦音 [ts] に変化している。

- (1) 更^{geng}ilu: 忙^{bang}-di: 准备^{zhun bei}-dɣ be:-na:.
 もっと多い 忙しく-DE 準備する-て いる-NPT
 「もっと忙しく、準備をしている。」

(包聯群 2011: 130)

1.2. 形態的な特徴

DMCL では中国語起源の語彙にモンゴル語の接尾辞、テンス語尾などを接続させており、様々な形態変化が見られる。

- (2) 农业^{nong ye} 越^{yu} 发展^{fa zhan}-bɜl 国家^{guo jia}-d 越^{yu} 好处^{hao chu}-te:.
 農業 さらに 発展する-ならば 国家-DAT さらに 利益-ある
 「農業が発展すればするほど国家に利益がある。」

(包聯 2011:135)

包聯群 (2011: 135) では、例文 (2) を次のように説明している。例文 (2) 中の、モンゴル語起源の条件を表す副動詞類語尾 -bɜl、与位格⁷を表す格語尾 -d 及び te:「ある」以外の単語は、中国語を起源とするものである。DMCL に借用された後、「国家 guo jia」(国家)には与位格語尾 -d、動詞語幹「发展 fa zhan」(発展)にはモンゴル語の条件を示す副動詞類語尾 -bɜl が付加されている。このようにモンゴル語起源の DMCL の接尾辞が孤立語である中国語の語彙に接続されている。

⁵ ドルブットモンゴル族自治州で暮らすモンゴル族の多くは日常的にモンゴル語の形態要素と中国語の語彙要素が混合した言語を使用している。包聯群(2011)はこのようなモンゴル語と中国語の要素から構成される言語を Dorbed Mongolian Community Language と呼んでいる。

⁶ 包聯群 (2011) の「モンゴル語」とは中国の標準モンゴル語(チャハル方言)を指す。

⁷ 原文では「対格」と書いてあるが与位格の間違いであると思われる。

1.3. 統語的な特徴

包聯群 (2011: 152) によると、DMCL は「VO」である中国語起源のフレーズを取り入れる際、そのまま VO で取り入れ、テンス語尾を直接付加することがあるようだ (3)。他方、目的語を前置させ、そのままテンス語尾をつけることもある (4)。

- (3) *maryaŋ* ^{shang k e} 上課-nə:
明日 授業に出る-NPT
「明日は授業に出る」
- (4) ^{w u dian} 五点-le: ^{hui} 会 ^{sān} 散-na:
五時-とき 会議 終わる-NPT
「五時に会議が終わる。」

(包聯群 2011: 145- 146)

1.4. 先行研究のまとめ

包聯群 (2011) では、DMCL が漢語をそのまま取り入れているとしている。一方で、モンゴル語の接尾辞、テンス語尾も多く使用されていて、モンゴル語の形態要素と漢語の語彙要素が組み合わせて構成されていることを指摘している。

2. 調査

2.1. 調査方法

筆者は 2014 年 8 月 15 日から 2014 年の 9 月 1 日の間にホルチン地方である内モンゴル自治区の科左後旗で調査を行った (図 2)。主に会話の録音と日常の会話から用例を手作業で収集した。

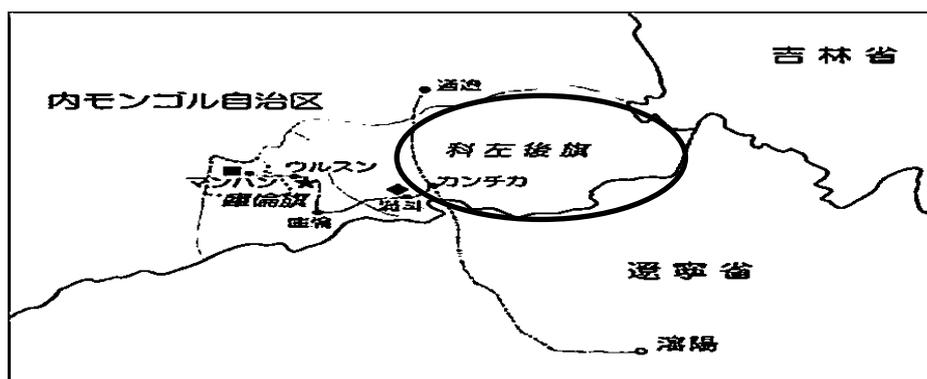


図 2: 科左後旗地域

(<http://www.foejapan.org/desert/site/>) を基に筆者作成

2.2. 調査結果

調査の結果、名詞が 102 (うち、人名 6 例、地名 13 例、その他 83 例) 例、動詞が 74 例、形容詞が 13 例、数詞 20 例、その他 29 例で計 238 の漢語借用語が収集できた。

品詞面において、名詞が一番多く借用され、その中には地名、人名、親族名詞を含む。

名詞の次には動詞が多く使われている。

卒業論文では、これら 238 例の漢語借用語を分析対象とした。音韻論的に見ると主に短母音、二重母音などを長音化させたり、子音において音素の添加、脱落、変化が起こったりことが多い。次節では、詳しい分析結果を示す。

2.3. 分析

2.3.1 では音韻的な変化について述べ、2.3.2 では形態的な特徴を述べる。

2.3.1. 音韻

まず、母音に関しては、漢語の短母音、二重母音がホルチン方言に借用される際は、長母音に変化することが見られる。

- 1) 漢語の二重母音 ai がホルチン方言の æ: に変化するパターン。

| | | |
|----|--|-------|
| 酸菜 | suan ai → soan sæ: | 味付け白菜 |
| 彩铃 | cai ling → sæ: liŋ | 着メロ |

- 2) 漢語の二重母音 ie がホルチン方言の æ: に変化するパターン。

| | | |
|----|---|------|
| 解决 | jie jue → dʒ æ: dʒyœ: | 解決する |
| 斜的 | xie de → ʃ æ: di: | 斜め |

- 3) 漢語の二重母音 ao がホルチン方言の ɔ: に変化するパターン。

| | | |
|----|---|-------|
| 领导 | ling dao → liŋ dɔ: | リーダー |
| 唠叨 | lao dao → lɔ: dɔ: | やかましい |

- 4) 漢語の二重母音 ou がホルチン方言の u: に変化するパターン。

| | | |
|---|---|------|
| 楼 | lou → lu: | ビル |
| 收 | sh ou → su: | 取り入れ |

- 5) 漢語の o がホルチン方言の ə: に変化するパターン。

| | | |
|----|--|----|
| 魄力 | p o li → p ə: li | 迫力 |
| 破烂 | p o lan → p ə: lan | 废品 |

次に、子音に関しては、子音の変化、子音の同化などのような特徴が見られる。

- 6) 漢語の子音 z, c, s を区別せず、すべて s と発音するパターン。

| | | |
|----|---|------|
| 琢磨 | z uo mo → s uə: mə: | 考える |
| 自来 | z i lai → s i lai | もともと |

7) 漢語の子音の n を m, ŋ に変化させて使用するパターン。

| | | |
|----|---------------------|-----|
| 安排 | a[n] pai → a[m] pæ: | 手配り |
| 含糊 | ha[n] hu → ha[ŋ] hu | 曖昧 |

8) 漢語の子音 f を p に変化させて使用するパターン。

| | | |
|-------|------------------------|-------|
| 反应 | [f]an ying → [p]an jin | 反応 |
| 舒服shu | [f]u de → [ʃu]p[u] di: | 気持ちいい |

最後に、説明しにくいパターンも存在する。

9) 漢語の子音 w を k に変化させたり子音 n を l に変化させたりするパターン。

| | | |
|----|---------------------|-------|
| 耽误 | dan [w]u → dan [k]u | 遅らせる |
| 泥板 | [n]i ban → [l]i ban | 道具の一種 |

10) 漢語の ong がホルチン方言の əŋ に変化するパターン。

| | | |
|----|------------------------|----|
| 农村 | n[ong] cun → n[əŋ] sun | 田舎 |
| 农业 | n[ong] ye → n[əŋ] je | 農業 |

11) 子音にも母音にもとくに大きな変化もなく借用されたものももちろん多く存在する。

| | | |
|----|------------------|------|
| 马棚 | ma peng → ma peŋ | 馬の小屋 |
| 煤气 | mei qi → mei tʃi | 石炭ガス |

12) 漢語の数字「二」と「儿化音」の er の発音がないので、数字「二」は ɔ: に発音され、「儿化音」の e は脱落する。

| | | |
|-----|-------------------------|----------|
| 二锅头 | er guo tou → ɔ: kuo tu: | 酒の名前 |
| 茬儿 | cha er → tʃar | 切り株 (量詞) |

2.3.2. 語彙

ここでは、漢語借用語の形態的な特徴を品詞ごとに見ていくことにする。

A) 名詞

i. ホルチン方言における一部の漢語借用語は、モンゴル語の固有詞と共存する。

| 漢語 | モンゴル語 | |
|-----------|-------|-----|
| 脾气(pi qi) | a:ʃ | 気立て |
| 谎(huang) | xudal | 嘘 |

ii. 名詞の漢語借用語に複数接尾辞 -nar と -uud を付けて借用語として使用することがある。複数接尾辞 nar は、主に人を表す名詞の後に付く。

ブへ

- 1) ^{xiaozhang} 校長-nar xoaral xi:ɕʒəna:.
学長-PL 会議 している
「学長たちは会議をしている。」

- 2) tər ^{ben z i} 本子-uud ʃin.
あの 本-PL 新しい
「あの本(複数)は新しい。」

iii. モンゴル語では語を重複させて、意味を広げる現象がある。漢語借用語においても同様に語頭の音を m に変化させて、重複に使用する例が見られる (3)。さらに、子音 m で始まった漢語借用語の語頭の音を ʒ に変化するもの、あるいは母音を変化させるものもある (4)。

- 3) tan ən dzil ^{yuan z i} mans tersi:?
貴方 この 年 庭園 など 植えたか
「あなたのは今年庭園を植えたのか？」

- 4) ^{ma xiao wu} sa:peŋ-a:n ʃiŋʃo:.
馬小屋 など-REFL 掃除する
「馬小屋などを掃除してください」

B) 形容詞

形容詞の漢語借用語の場合は、「漢語語幹 + 漢語助詞 di:」の形式が見られる (5)。さらに、この形容詞の漢語借用語を繰り返して、後に漢語助詞 di: を接続する形式も見られる。また、漢語語幹にモンゴル語形容詞の強意形接辞をつけて用いることも可能である。つまり「漢語語幹 + 強意形接辞 [-b] + 漢語語幹 + 漢語助詞 di:」の形式である (6)。

- 5) ən xuxət ^{bən} bən-di: bæna:.
この 子ども 愚かな 愚かな-DE である
「この子どもは本当に愚かなんです」

- 6) ən nɔko: ^{lɔ} lɔ-b ^{lɔ} lɔ-di:
この 料理 辛い-INT-DE
「この料理はとても辛いです」

C) 動詞

- i. 漢語起源の動詞にモンゴル語起源の接尾辞やテンス語尾、アスペクト語尾を接続するパターン。漢語の後にモンゴル語の接尾辞 -lka:、-əktə、-lta:t など付加して、語を作る。

- 7) utərtə:n xun-ə:r ^{ə i hoʊ}伺候-lkə:-dʒæna:.
 毎日-DAT 人-INST 世話-CVB-である
 「毎日人に世話を受けている」
- 8) xun-t axʊ: dzɔ:s ^{qian}欠-əktə-ʃæna:.
 人-DAT 多く お金 借り-CVB-ある
 「人に多くの借りがある」
- 9) xɔ: ^{ban}拌-lta:t bæna:.
 全て 混ぜる ている
 「全て混ぜている」

ii. モンゴル語には日本語の「する」に当たる動詞 xi:x があり、漢語起源の動名詞にモンゴル語起源の動詞 xi:x をつけて、ホルチン方言の動詞を構成することもある。

- 10) ^{lian x i}联系 xi:x→liænʃi:xi:x 連絡する
- 11) ^{kaoshi}考试 xi:x→kə:ʃixi:x 試験する

D) その他

その他の中には副詞、虚詞、接続詞などが含まれる。

<副詞>

時間を表す副詞

已经 yi jing→i: dʒiŋ もう

马上 ma shang→ma: ʃaŋ すぐに

程度を表す副詞

最 zui→sui 最も

更 geng→gəŋ もっと

<虚詞>

就 jiu→dʒiu 既にもう

该 gai→kai どんなに

<接続詞>

要不 yao bu→jɔ: bu さもないと

虽然 sui ran→sui ran けれど

3. 調査のまとめと今後の課題

本稿では、モンゴル語ホルチン方言における漢語借用語について、音韻・形態的な側面から分析を行った。分析資料は、筆者が内モンゴル自治区の科左後旗において行った調査で得られたものである。この地域は中国の遼寧省に近く、漢民族の影響を受けたのは明らかである。

本稿の分析結果によると、音韻的な特徴としては長母音化が多く見られ、一部の語では

母音が落ちることもある。また、語彙の面では、まず品詞面において名詞と動詞が一番多く、漢語の語幹にモンゴル語の接辞や語尾を接続する形式の多いことがわかった。ホルチン方言の漢語借用語の大部分はモンゴル語の文法の規則によってモンゴル語化している。

今回は触れることができなかったが、ホルチン方言の漢語借用語の統語的な特徴についても分析する必要がある。また、意味の面でホルチン方言に借用された際に、元々の意味を失った漢語借用語についても研究を進める必要があると考えている。例えば、ホルチン方言の *je:nu:* という語の語源は漢語の「热闹 *re nao*」(にぎやか) にあたるものであるが、ホルチン方言では「ジョーク」という意味で用いられている。これらの問題に関しては今後の課題としたい。

略号一覧

| | | |
|----------|---------------------|-----------|
| 2: 二人称 | DE: 漢語の助詞 <i>de</i> | NPT: 非過去形 |
| SG: 単数 | GEN: 属格 | PL: 複数 |
| ACC: 対格 | INT: 強意形 | REFL: 再帰 |
| CVB: 副動詞 | INST: 道具格 | |
| DAT: 与位格 | NEG: 否定 | |

参考文献

[日本語で書かれた文献]

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996) 『言語学大辞典 (第6巻術語編)』東京：三省堂
 栗林均 (1989) 「内蒙古語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典第2巻 世界言語編(中)』東京：三省堂
 包聯群 (2011) 『言語接触と言語変異-中国黒竜江省ドルブットモンゴル族コミュニティー言語を事例として』相模原：現代図書

[中国語で書かれた文献]

- 查干哈达 (1996) 『蒙古语科尔沁土语研究』北京：社会科学文献出版社

フランス語における未来表現
—単純未来形と近接未来形—

星野 加奈子

(欧米第二課程 フランス語専攻)

キーワード：フランス語，未来，時の表現，文体

0. はじめに

標準フランス語¹で未来の事柄を表現するには、主に①～③の形式のいずれかが用いられる。

- ①動詞を未来形に活用させる(=単純未来形²)。
- ②「aller(行く)の活用形³+動詞の不定形」という形式を用いる(=近接未来形)。
- ③現在形を用いる。

未来表現におけるこれら3つの形式のうち、①単純未来形と②近接未来形を取り上げ、それらの機能の違いを明らかにすることが本稿の目的である。③現在形については、今回は取り扱わない。卒業論文本体では、漫画・小説・コーパスを用いて両形式の文体による出現頻度を調べた調査Ⅰと、フランス語母語話者に対するアンケートから両形式の使い分けを調べた調査Ⅱの二つの調査を行なったが、本稿では紙幅の都合上、調査Ⅰと調査Ⅱの一部のみを掲載する。本文中の例文番号、グロス、下線、フランス語で書かれた文献の引用文の訳は特に断りのない限り筆者によるものである。

1. 先行研究

1.1.と1.2.で単純未来形と近接未来形の差異を扱っている Franckel(1984)と Jeanjean(1988)の記述を確認し、単純未来形と近接未来形の本質的な違いを整理する。1.3.では南館(1998)の中で文体について触れられている部分を引用する。

1.1. Franckel (1984)

Franckel(1984)は単純未来形と近接未来形の機能的差異を取り扱った論文である。以下の表1にその主張をまとめる。

¹ 「パリを中心としたイル・ド・フランス地方で話されている方言をもとにして作られた標準語」を指す。(町田 1992: 84)

² 人称・数に応じてそれぞれ-rai / -ras / -ra(1-3 人称単数)、-rons / -rez / -ront(1-3 人称複数)という語尾を動詞語幹に付与する。

³ 直説法現在形の活用はそれぞれ vais / vas / va(1-3 人称単数)、allons / allez / vont (1-3 人称複数)。

表 1 : Franckel(1984)における単純未来と近接未来の差異

| | 単純未来 | 近接未来 |
|------------------|--------------------------------------|---------------------------------------|
| [1] t_0^4 との関係 | 断絶 | 隣接 |
| [2] 事行の位置付け | t_i^5 で位置付け | t_0 で位置付け 直示的に未来を指す副詞で二次的な位置付けも可 |
| [3] 一次的制約 | 事行・状態を t_0 につなぎとめる傾向にあるすべての限定操作を排除 | t_0 に対する断絶をもたらすすべての限定操作とは両立しえない |

(Franckel (1984)をもとに筆者作成)

1. 2. Jeanjean(1988)

Jeanjean(1988)はフランス語の口語コーパス GARS(Groupe Aixois de Recherches en Syntaxe)のデータをもとに、単純未来形と近接未来形の特徴を考察している論文である。以下にその主張をまとめる。

表 2 : Jeanjean(1988)における単純未来と近接未来の差異

| | 単純未来 | 近接未来 |
|---------------|---------------------------------------|--|
| [1] 基本的性質 | 内在的制限のない未来 | 前望的照準を表わす未来 |
| [2] 用いられやすい動詞 | être (～である)や avoir (～を持っている)のような状態相動詞 | vieillir(老いる)のような前望的照準を表わす動詞 mourir(死ぬ)のような自らの内に空間的・時間的な制限を持つ動詞 |
| [3] 時の表現 | 共起しやすい | 共起しにくい |

(Jeanjean(1988)をもとに筆者作成)

1. 3. 南館(1998)

南館(1998)では、文体について以下のように述べられている。

va^6 は主観的で日常の会話や子供の話の中によく現れるのに対して、 ra^7 は客観的かつ形式的で文学作品でも多用されると言われる。

(南館 1998: 31)

文体による使い分けの傾向はある程度観察されるようであるが、これ以上詳しくは触れ

⁴ 発話時のこと。

⁵ 未来時における任意の一点を指す。

⁶ 近接未来形のこと。

⁷ 単純未来形のこと。

られていない。

2. 調査

2.1. 調査 I

調査 I では、文体の違いによる単純未来形と近接未来形の出現数の差を調べるために、漫画・小説からは手作業で、コーパスからはいくつかの語と品詞を設定して両形式を抽出した。使用した資料は以下の通りである。近接未来形について、「aller の活用形+動詞の不定形」は「～しに行く」という意味を表わす場合もあるが、それらは訳文、または前後の文脈から判断し除外してある。

【漫画】 Arakawa, Hiromu(2013) *Silver Spoon - La cuillère d'argent - 1* (traduction: fabien Vautrin & Maiko_O). (邦題『銀の匙 Silver Spoon』総ページ数 192・漫画本編 180、以下 SS1)

【小説】 De Saint-Exupéry, Antoine(1943) *Le petit prince*. (総ページ数 96、以下 PP)⁸

【コーパス】 CbLLE POS Research Engine < Spoken French > (コーパスに基づく言語学教育拠点 品詞検索エンジン<話し言葉フランス語>、総語数 813,579 語⁹ 以下 POS)

コーパスでの用例収集の際、近接未来形に関しては「aller+動詞の不定形」という基本的な形に加え、「aller+人称代名詞+動詞の不定形」、「aller+否定語 pas(～ない)+動詞の不定形」、「aller+否定語 plus(もはや～ない)+動詞の不定形」、「aller+否定代名詞 rien(何も～ない)+動詞の不定形」も含めて総数を出した¹⁰。

2.1.1. 調査 I 結果

SS1、PP、POS から得られた単純未来形と近接未来形の総数と割合はそれぞれ以下のようである。表 3 のパーセンテージにおいて、小数点以下は示していない。

表 3 : SS1、PP、POS における単純未来形と近接未来形の総数と割合

| | 単純未来形 | 近接未来形 ¹¹ | 計 |
|-----|------------|---------------------|-------------|
| SS1 | 53(58%) | 39(42%) | 92(100%) |
| PP | 100(92%) | 9(8%) | 109(100%) |
| POS | 1,740(51%) | 1,703 (49%) | 3,443(100%) |

⁸ 他の媒体と条件を揃えるために、PP からは会話文の中に現れる単純未来形と近接未来形のみを抽出した。

⁹ 今回の調査ではエクス・マルセイユ大学で取られた 753,976 語だけを使用した。

¹⁰ 近接未来形とともに代名詞などの要素を用いる場合、それらは aller の活用形と動詞の不定形の間にかかることになり、「aller+不定形」という条件で検索するとそれらが省かれてしまうため。

¹¹ POS の中で、近接未来なのか「～しに行く」の意味なのか判別できなかった 22 例は除いている。

2.1.2. 調査 I 考察

SS1 においては単純未来形と近接未来形が約 6 : 4 の割合で、PP では単純未来形と近接未来形が約 9 : 1 の割合で出現した。このように、同じ文字媒体でありながら、単純未来形と近接未来形の出現割合は漫画と小説ではかなり異なるようである。また、POS を用いた調査では、単純未来形と近接未来形の割合が約 5 : 5 となった。この結果はより口語的であると考えられる漫画に近く、小説→漫画→話し言葉コーパスの順で口語度が高くなればなるほど単純未来形より近接未来形の方が用いられやすい傾向があるように見える。しかしながら、今回の調査では書き言葉コーパスについての調査はしておらず、漫画・小説ともに一冊ずつしか見ていないため、用例の量が十分であったとは言えない。さらに、話題の内容が両形式の使い分けに影響している可能性もあるため、今後は調査資料を増やし、用例の均質化を図った上での調査をする必要があると考えられる。

2.2. 調査 II

調査 II では、SS1 から抽出した単純未来形と近接未来形の用例のうち、単純未来形が用いられていた 53 例の動詞部分を空欄にして、単純未来形と近接未来形のどちらの形式がどの程度ふさわしいと感じるかを、フランス語母語話者のインフォーマント三人¹²に 1~4 の数字で選択してもらうという形のアンケート調査を実施した。選択肢はそれぞれ 1. 「可能であり自然」、2. 「可能だが特殊な状況下(親しい者同士の / 改まった場での会話、劇の台詞など)でのみ受容可」、3. 「可能だが不自然」、4. 「不可能」である。同じ質問で 1 を二度選択した場合は、それぞれの形式で意味の違いはあるか、あるとしたらどのように異なるのかを、また、2 を選択した場合はどのような状況下で受容可能になるのかを合わせて聞いた。

2.2.1. 調査 II 考察

以下の節では、構文上の制限と時の表現という二つの観点から考察を行う。例を挙げる際、アンケートに使用した例文、グロス、訳、各形式に対するインフォーマントの回答の順で提示する。各設問の例文の訳は『銀の匙 Silver Spoon』第一巻(荒川弘原作 総ページ数 192・漫画本編 180)を適宜参考にしている。【】の中の数字は SS1 内でのページ数である。

2.2.1.1. 構文上の制限

構文上の制限は、インフォーマント全員が単純未来形を 1. 「可能であり自然」、近接未来形を 4. 「不可能」としたのみに見られた。以下に例を挙げる。

¹² インフォーマントの情報はそれぞれ、A : 1992 年生まれ・女性・フランス(ノール県)出身、B : 1990 年生まれ・女性・スイス(ヴォー州)出身、C : 1986 年生まれ・男性・スイス(ジュネーヴ州)出身。

(1) Au moins, dans cette école, ce
PREP+ART.DEF.M.SG 最小 M.SG PREP ART.DEM.F.SG 学校 F.SG これ NOM
 [sera / va être] facile pour moi
COP.IND.3.SG.FUT 行く IND.3.SG.PRES COP.INF 簡単な ADJ.M.SG PREP EMP.1.SG
 d' être premier de la classe.
PREP COP.INF 一番の ADJ.M.SG PREP ART.DEF.F.SG 教室 F.SG

「少なくともこの学校では、クラスで一位になることは簡単だろうな」【24】

表 4 : (1)の結果

| (1) | A | B | C |
|---------|---|---|---|
| sera | 1 | 1 | 1 |
| va être | 4 | 4 | 4 |

インフォーマント全員が単純未来を 1.「可能であり自然」、近接未来を 4.「不可能」としたものは 49 例中 6 例あったが、このうちの 5 例は「ce+être(〜である)+補語」という構文をとるものであった。朝倉(2002: 102)では、ce は主として être の主語になるが、ほかに devoir être(〜に違いない)や pouvoir être(〜かもしれない)の主語にもなることができると述べられている。aller も devoir や pouvoir と同じく準助動詞であるが、devoir や pouvoir と違って ce を主語にした構文をとることはできず、「ce+aller の活用形+être」という形は使用不可になるようである。「ce+être(〜である)+補語」という構文については、インフォーマント全員が近接未来形を用いることができないとしながらも、ce を cela や ça(cela の短縮形)などの代名詞に置き換えれば近接未来も使用可能であると答えた。

cela(ça)が être の近接未来形 va être と共起できる理由としては、cela(ça)と近接未来の性質の類似性が挙げられる。春木(2014)は ça を主語とする発話をさまざまな観点から分析し、その特性を明らかにしようと試みている論文であるが、その中で ça は「実際にその現象が起こっている現場で用いられることが多く、また発話主体、すなわち認知主体に関わる現象として述べられることが多い」(春木 2014: 64)と述べられている。すなわち、ça は現場指示的な機能を担っているということである。近接未来も、Franckel(1984)の言う「発話時との隣接」や Jeanjean(1988)の「現在に根ざした未来」という特徴を持っており、これもまた現場指示的である。このように、cela(ça)と近接未来の性質が似ているために相性が良く、そのため両者が共に用いられることが可能になるのではないかと考えられる。

2.2.1.2. 時の表現

時の表現と未来形式の選択との関係について、Jeanjean(1988)では、事行に制限を与えるような時の副詞句¹³は近接未来形と共起しづらく、逆に単純未来形と使われることが多いと述べられている。また、Franckel(1984)では「単純未来は事行・状態を t₀につなぎとめる

¹³ Jeanjean(1988)では complément de temps「時の補語」となっているが、本稿では「時の副詞句」とした。

傾向にあるすべての限定(操作)を排除する」、「逆に、近接未来は t_0 に対する断絶をもたらすすべての限定(操作)とは両立しえない」(Franckel 1984: 67)とされている。しかしながら、SS1 では発話時と断絶しているように思われる時の表現を含んでいても、単純未来形・近接未来形が共に使用可能であるとインフォーマントが答えたものが何例か見つかった。

(2) Je me demande quand on
NOM.1.SG PRON.REF.1.SG 問う IND.1.SG.PRES いつ ADV.INT PRON.INDEF
 [pourra / va pouvoir] monter à cheval...
～できる IND.3.SG.FUT 行く IND.3.SG.PRES ～できる INF 乗る INF PREP 馬 M.SG
 「自分はいつになったら馬に乗れるのだろう」【87】

表 5 : (2)の結果

| (2) | A | B | C |
|------------|---|---|---|
| pourra | 1 | 1 | 1 |
| va pouvoir | 1 | 1 | 1 |

(2)には quand(いつ～)という時の表現が出てきているが、どのインフォーマントも近接未来形を問題なく使えると回答した。quand 以下は間接疑問文になっており、Jeanjean(1988)の言う「特別なコンテキスト内で現れる、近接未来形とも共起し得る例外的な時の表現」に相当すると考えられる。これはおそらく Jeanjean(1988)が指摘しているように、疑問文が対話者を想定した現場指示的な発話であることが多いという性格を持っており、同じく現場指示的な性質を持つ近接未来形と相性が良いために、共起が可能になるのではないかと考えられる。

(3) On doit tous passer
PRON.INDEF しなければならない IND.3.SG.PRES 全部 PRON.M.PL 通る INF
 le test d' aptitude physique dans
ART.DEF.M.SG テスト M.SG PREP 適正 F.SG 身体の F.SG PREP
quelques jours, vous [aurez / allez
ADJ.INDEF.PL 日 M.PL NOM.2.PL 持つ IND.2.PL.FUT 行く IND.2.PL.PRES
 avoir] tout le temps de
持つ INF すべての ADJ.M.SG ART.DEF.M.SG 時間 M.SG PREP
 choisir un sport adapté ensuite.
選ぶ INF ART.INDEF.M.SG スポーツ M.SG 適合した ADJ.M.SG それから ADV

「何日後かにみんな体力テストを受けなくてはならなくて、そのあとに自分に合ったスポーツを選ぶ時間があるだろう」【30】

表 6 : (3)の結果

| (3) | A | B | C |
|-------------|---|---|---|
| aurez | 1 | 1 | 1 |
| allez avoir | 1 | 3 | 1 |

dans quelques jours(何日後かに)という時の副詞句は、インフォーマント A、C が単純未来形・近接未来形の両形式と問題なく用いることができると回答した。これは、この時の副詞句が一見発話時と断絶した未来時の一点を指しているように見えるが、「(今から)何日後かに」という発話時と隣接した意味を持っているからであると思われる。Jeanjean (1988) は「ときおり前望的照準の意味の中でも使われる時の副詞句がある」(Jeanjean 1988 : 239) と述べているが、おそらく dans quelques jours もその中に含まれるのであろうと考えられる。

(4) Je suis votre professeur principal
NOM.1.SG COP.IND.1.SG.PRES ADJ.POSS.2.M.SG 先生 M.SG 主な ADJ.M.SG
 et j'enseigne la littérature.
CONJ NOM.1.SG 教える IND.1.SG.PRES ART.DEF.F.SG 文学 F.SG
 Je [vous suivrai / vais vous suivre]
NOM.1.SG ACC.2.PL ついていく IND.1.SG.FUT 行く IND.1.SG.PRES ACC.2.PL ついていく INF
 pendant les trois prochaines années.
PREP ART.DEF.F.PL 3.NUM 次の ADJ.F.PL 年 F.PL

「私が君たちの担任で、受け持ちは国語。これからの三年間よろしくな」【19】

表 7 : (4)の結果

| (4) | A | B | C |
|------------------|---|---|---|
| vous suivrai | 1 | 1 | 1 |
| vais vous suivre | 1 | 3 | 1 |

Jeanjean (1988)では、(4)と同じような表現である pendant dix ans (十年間)は単純未来形としか使われないとされているが、(4)では A、C がともに 1。「可能かつ自然」を選んでいる。この例も(3)と同じように、prochaines(次の、来たる)という形容詞が発話時に trois années を結び付けているために近接未来形を用いることが可能になっていると考えられる。(3)、(4)と Jeanjean(1988)で挙げられていた近接未来と共に使える時の副詞句の特徴を考えると、Jeanjean の言う「ときおり前望的照準の意味の中でも使われる時の副詞句」とは「発話時に隣接し、時を指し示しながらも自らの内にある程度の長さを持つもの」であるということがわかる。

3. まとめと今後の課題

調査 I では漫画・小説・コーパスで単純未来形と近接未来形の出現割合がかなり異なる

という結果になった。しかし、その違いが文体差によるものなのか、あるいは別の要因が働いていたのかまでは判断できなかった。フランス語母語話者に対するアンケートを用いた調査Ⅱでは、両形式の使い分けには構文上の制限や時の表現の質の違いが関わってくるということを指摘することができた。今後、単純未来形と近接未来形の文体による出現数については、調査資料を均等に増やした上でより詳細な調査を行いたい。さらに、今回のアンケート調査では目的を絞り切れずにアンケートを実施してしまったために、調査が円滑に進まなかった。今後は調査目的を明確にしたうえでインフォーマント調査を行う必要がある。

略号一覧

1 : 1st person 1人称 / 2 : 2nd person 2人称 / 3 : 3rd person 3人称 / ACC : accusative 対格 / ADJ : adjective 形容詞 / ADV : adverb 副詞 / ART : article 冠詞 / CONJ : conjunction 接続詞 / COP : copula : コピュラ / DEF : definite 定 / DEM : demonstrative 指示 / EMP : emphasis 強勢 / F : feminine 女性 / FUT : future 未来 / IND : indicative 直説法 / INDEF : indefinite 不定 / INF : infinitive 不定詞 / INT : interrogative 疑問 / M : masculine 男性 / NOM : nominative 主格 / NUM : numeral 数詞 / PL : plural 複数 / POSS : possessive 所有 / PREP : preposition 前置詞 / PRES : present 現在 / PRON : pronoun 代名詞 / REF : reflective 再帰 / SG : singular 単数 / + : fusion 融合

参考文献

<日本語で書かれた文献> 朝倉季雄 (2002) 『新フランス文法辞典』, 東京: 白水社 / 春木仁孝 (2014) 「ÇAを主語とする発話と認知モード L'énoncé < Ça + verbe > et le mode de cognition」『フランス語語学研究』48. 57-76, 東京: フランス図書 / 町田健 (1992) 「フランス語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 (第3巻世界言語編)』, 東京: 三省堂 / 南館英孝 (1998) 「Aller + *inf.*と単純未来」東京外国語大学グループ《セメイオン》編『フランス語を考える フランス語学の諸問題Ⅱ』22-33, 東京: 三修社
<フランス語で書かれた文献> Franckel, J.-J. (1984) "Futur « simple » et futur « proche »". *Le français dans le monde* 182. 65-70, Paris : Hachette et Larousse. / Jeanjean, C. (1988) "Futur simple et le futur périphrastique en français parlé". *Hommage à la mémoire de Jean Stéfanini* 235-257, Aix-en-Provence : Université de Provence.

調査に使用した資料

荒川弘 (2011) 『銀の匙 Silver Spoon』第一巻, 東京: 小学館 / De Saint-Exupéry, Antoine (1943) *Le petit prince*. New York : Guallimard. / Arakawa, Hiromu (2013) *Silver Spoon -La cuillère d'argent-* 1 (traduction : fabien Vautrin & Maiko_O). Paris : Kurokawa. / CbLLE POS Research Engine (Spoken French) <http://cbllle.tufs.ac.jp/tag/fr/index.php> (最終閲覧日 2015/1/10)

現代日本語の「たしかに」
— 「なるほど」と「たぶん」との比較から —

望月 雪絵
(欧米第一課程 英語専攻)

キーワード：日本語，陳述副詞，用法変化，性差

0. はじめに

原田(2010)によると「たしかに」が相槌として単独で用いられる用法が特に若年層の間で増えている。その単独用法についてコーパスを用い「なるほど」と「たぶん」と「たしかに」を比較した。結果、「たしかに」の単独用法が増加している証拠に加え、その要因としては性差や会話のジャンルが関わっていることがわかった。なお本稿における例文番号、図表番号、下線は特に断りのない限り筆者によるものである。

1. 先行研究とその問題点

原田(2010)は大学生による日常会話をデータとして、「現代東京の話しことば」の共時態における「たしかに」の用法（特に単独でターン¹を構成する用法を持つもの）を会話分析の手法により記述・分析し、用法変化についても分析を行っている。しかし用法変化についての考察の過程で原田自身の作った例が多く、客観性に欠ける部分がある。ゆえに話し言葉をデータとして、原田(2010)が述べている「たしかに」の用法変化について客観的に立証する必要がある。さらに先行研究では触れられていない、年齢差や性差といった観点からも分析を行い、その用法変化の要因について考察することも必要である。

2. 仮説

2.1. 単独用法

先行研究で得られた仮説をまとめる。なお原田(2010)の三種類の独立用法の分類と区別するため、以下では「単独用法」という用語を用いる。

本稿における単独用法の定義を以下に示す。実際の用例は(1)のようなものである。

- ・ 同じ文中に被修飾語がなく、単独でターンを構成する
- ・ social action として成り立つ、独立した発話である
- ・ 相手の発話を受け入れる token agreement である

(1) M09 「その前に、なんか、り、料金がやばいことになる<笑い>」

M10 「確かに。」

(親しい同性友人同士(男女)の雑談 5-1-M09-M10)

¹ Sacks, Schegloff & Jefferson(1974)によって明らかにされた the organization of turn-taking for conversation(会話における順番取りのシステム)における turn(ターン)のことを指す。

2.2. 単独用法の増加とその要因

「たしかに」の用法は変化していると思われる。陳述副詞としての用法に加えて単独で感動詞のように用いられることが増えている。特に原田(2010)が述べているように、若い世代で変化が広がっているものと考えられる。さらに、南(1993)や竹内(1973)では、より文の中心に近いほどことがらの概念的叙述、そこから前後の外側になるほど話し手の態度の表明の性格が強くなると述べられている。この話し手の態度を表すのが陳述副詞である。そこで筆者は単独で用いられる要因として、原田(2010)が述べた語用論的強化とコミュニケーションの効率化の他に、南(1993)などが述べているように陳述副詞が文構造の外側にあることが考えられるという仮説を立てた。

3. 調査方法

3.1. 調査方法

コーパスを用いて用例を抽出し、それらを分析する。現代日本語の話し言葉を対象とするので、『BTSJ による日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声) 2011年版』(以下『BTSJ コーパス』)と『JPNCorpus』/『PacRim』を使用した。なお紙幅の都合上、本稿では『BTSJ コーパス』の特徴とその結果についてのみ述べる。

3.1.1. 『BTSJ による日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声) 2011年版』

宇佐美まゆみ研究室が公開しているコーパス。294 会話(約 66 時間)のトランスクリプトが収められており、そのうち 136 会話(約 20 時間)に音声が付いている。話者の年齢や性別・国籍などの情報が得られるデータシートも付いている。ほとんどが 20 代の学生であるが、中には 30~40 代の社会人のデータもある。雑談の他に討論や電話の会話も収録されている。このコーパスの中には、日本語母語話者ではない人の会話も含まれているが、今回の研究には用いず、それらを除いた 237 会話を用いる。

3.2. 調査内容

3.2.1. 調査内容

現代日本語の話し言葉における「たしかに」の用法の変化とその要因を探る。具体的には「たしかに」が陳述副詞の用法から、単独で用いられる感動詞化した用法への変化が若い世代で進んでいるかを探る。

3.2.2. 予備調査

はじめに予備調査として『BTSJ コーパス』の性質を調べたところ、ほとんどの話者が 20 代の学生であることがわかった。このため変化において一番重要なファクターであると仮定していた年齢・年代を分析するのに十分な量の用例がないことが問題としてあげられた。そこで、「たしかに」以外の他の陳述副詞との比較をすることによって「たしかに」の単独用法の証拠と要因を探ることとした。調査結果として、単独度、修飾方向と呼応、定型化、修飾語と被修飾語との距離といった文法的、日本語学的側面からこれらを「たし

かに」の単独用法が増えている証拠とした。そしてどのような層がどのような場面で単独用法を用いているのかを単独度と会話のジャンル、会話のジャンルと性別、異性間・同性間での単独度の割合、単独度と性別、年齢、年代といった社会言語学的側面から分析し、それらを単独用法の要因とした。本稿では紙幅の都合上、単独用法の増加の証拠として単独度を、要因として会話のジャンルと性別を取り上げる。

4. 調査結果

4.1. 『BTSJ コーパス』の調査結果

4.1.1. 単独度

まず単独用法の一つ目の証拠として、単独度について述べる。三つの陳述副詞について用例を見て行くうちに単独の度合いが強いものから、修飾語としての機能が強いものまであることに気づいた。そこでそれぞれ単独の度合いごとに用例を以下のように手作業で振り分けた。3Cに向かうほど単独の度合いが高い。なお感動詞と終助詞が組み合わさっているものに関しては、単独度 3A に分類する。

1：修飾語として機能しているもの / 1.5：修飾・被修飾の関係が曖昧 / 2A：被修飾語が内容語ではないもの / 2B：文の中には存在しているが被修飾語がないもの / 3A：感動詞がつくもの / 3B：終助詞がつくもの / 3C：その陳述副詞のみで用いられているもの

- (2) IF10「確かに英語の勉強にはなるわ。」(初対面と友人同士の女性の雑談 35-2-IF09-IF10 L389-344) 1
 (3) BM04「あ、でも確かにでも、その、今、1人身っていうか、(うん)別に自分のことだけ考えてるんだったら、職場環境とかあんま関係ないけど」
 (友人同士男女(雑談、討論) 227-16-BM04-F08-touron L24-23) 1.5
 (1)再掲 M10「確かに。」(親しい同性友人同士(男女)の雑談 5-1-M09-M10 L647-608) 3C

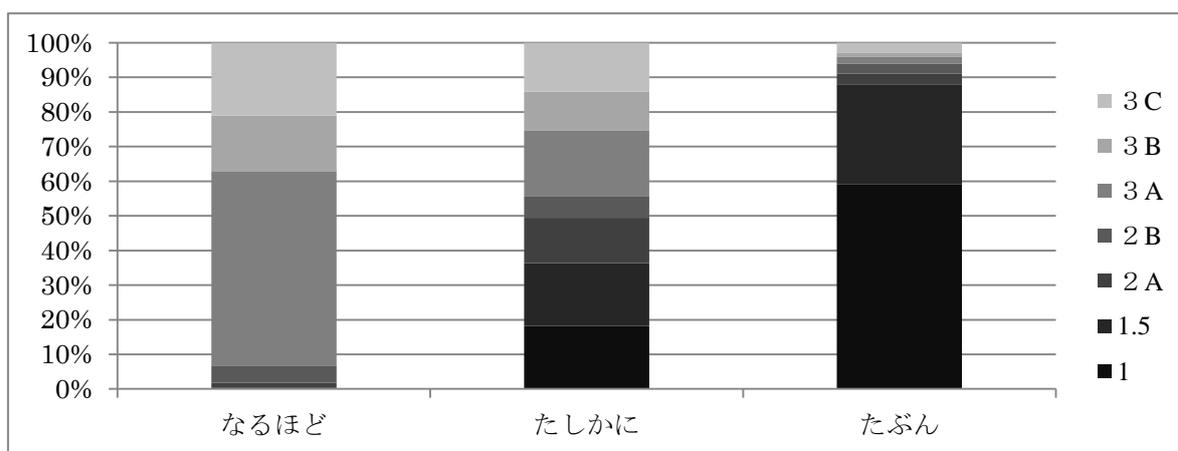


図1: 各陳述副詞の単独度ごとの用例数の割合

表 1: 各陳述副詞の単独度ごとの用例数

| | 1 | 1.5 | 2 A | 2 B | 3 A | 3 B | 3 C |
|------|-----------|-----------|----------|---------|-----------|----------|----------|
| なるほど | 1 (0.4%) | 0 (0%) | 4 (1.4%) | 15 (5%) | 161 (56%) | 45 (16%) | 59 (21%) |
| たしかに | 59 (18%) | 59 (18%) | 42 (13%) | 20 (6%) | 61 (19%) | 35 (11%) | 46 (14%) |
| たぶん | 394 (59%) | 192 (29%) | 18 (3%) | 17 (3%) | 16 (2%) | 9 (1%) | 19 (3%) |

「なるほど」は単独度が高い3A~3Cがほとんどを占める。「なるほど」自体の修飾の意味合いが弱く、修飾のターゲットが曖昧であることがわかる。「たぶん」は単独度が低い1がほとんどを占める。「たぶん」自体の修飾の意味合いが強く、その意味が強く残っていることがわかる。「たしかに」に関しては単独度1が一番多いが、単独度3A~3Cを併せると142例と1を上回る。このことから「なるほど」と「たぶん」の間であると考えられる。さらに全体に占める1.5の用例数の割合においても「たぶん」(29%)、「たしかに」(18%)、「なるほど」(0%)の順で多いことがわかった。

4.1.2. 単独度と会話のジャンル

単独用法の要因の一つとして、単独度と会話のジャンルとの関係を分析した。『BTSJ コーパス』はそれぞれの会話がジャンルごとに分類されており、そのうち19種類の会話を用いた。それらを「フォーマルな会話」と「インフォーマルな会話」に分け、その際筆者が「フォーマルな会話」には(a)~(i)、「インフォーマルな会話」には(j)~(s)の記号を付けた。分類の基準として、敬語を用いる会話を「フォーマルな会話」、用いない会話を「インフォーマルな会話」とした。なお、女性同士の断りの電話会話についてはベースとなる話者の立場から見て、対先輩・対後輩・対同級生というジャンル分けがなされていた。筆者がこれを「フォーマル・インフォーマル」の基準に合わせて、(a) 女性同士の断りの電話会話 <対先輩>と(k) 女性同士の断りの電話会話 <対後輩・対同級生>に分けた。以下に会話のジャンルを提示する。

「フォーマルな会話」

- (a) 女性同士の断りの電話会話 <対先輩>²
- (b) 初対面女性雑談（母語）
- (c) 初対面女性ベース雑談その1（母語）
- (d) 初対面男性ベース雑談（性差・年齢差）
- (e) 初対面同性同士雑談（男女）
- (f) 論文指導
- (g) 初対面と友人同士の女性の雑談（初対面）

「インフォーマルな会話」

- (j) 謝罪の会話
- (k) 女性同士の断りの電話会話 <対後輩・対同級生>
- (l) 同性同士の依頼を含む電話会話
- (m) 初対面と友人同士の女性の雑談（友人）
- (n) 親しい同性友人同士（男女）の雑談
- (o) 友人同士の女性の雑談
- (p) 友人同士女性の誘い

²この括弧は筆者が設定した。その他の括弧は『BTSJ コーパス』の会話タイトルで用いられているものである。

結果だけ見ると、合計では「インフォーマルな会話」の割合の方が高く、全体を通して「フォーマルな会話」と「インフォーマルな会話」との差は女性よりも大きい。単独度の高低で比べると、単独度の低い用法も高い用法も「インフォーマルな会話」に多い。これらのことから男性は「インフォーマルな会話」において「たしかに」を多く用いていることがわかる。以下に結果をまとめる。

表3: 「たしかに」の単独度と性別、ジャンルの関係

| | 単独度の低い用法 | 単独度の高い用法 |
|---|----------|---------------|
| 女 | フォーマル | インフォーマル+フォーマル |
| 男 | インフォーマル | インフォーマル |

表4: 「なるほど」の「フォーマル・インフォーマルな会話」の合計数

| 女性 | 単独度 1~2A | 単独度 3A~3C | 合計 |
|------------|----------|-----------|----------|
| フォーマルな会話 | 1 (1%) | 76 (99%) | 77 (65%) |
| インフォーマルな会話 | - | 41 (100%) | 41 (35%) |
| 男性 | 単独度 1~2A | 単独度 3A~3C | 合計 |
| フォーマルな会話 | 5 (4%) | 118(96%) | 123(81%) |
| インフォーマルな会話 | - | 29(100%) | 29 (19%) |

女性の結果だけ見ると「なるほど」の使用は「フォーマルな会話」の割合の方が高く、「フォーマルな会話」でも「インフォーマルな会話」でも単独度の高い用法の割合の方が圧倒的に高い。男性も女性と同様の結果を見せており、性差による傾向の違いは見られない。合計を見ると「なるほど」は「フォーマルな会話」を選好することがわかる。

表5: 「たぶん」の「フォーマル・インフォーマルな会話」の合計数

| 女性 | 単独度 1~1A | 単独度 3A~3C | 合計 |
|------------|----------|-----------|----------|
| フォーマルな会話 | 127(93%) | 9 (7%) | 136(32%) |
| インフォーマルな会話 | 268(94%) | 17 (6%) | 285(68%) |
| 男性 | 単独度 1~2A | 単独度 3A~3C | 合計 |
| フォーマルな会話 | 61 (97%) | 2 (5%) | 63 (28%) |
| インフォーマルな会話 | 148(90%) | 16 (10%) | 164(72%) |

女性の結果を見ると、「たぶん」の使用は、合計数において「インフォーマルな会話」の方が高く、「フォーマルな会話」でも「インフォーマルな会話」でも単独度の低い用法の割合の方が圧倒的に高い。男性も同様の結果を見せており、ここでも性差による傾向の違いは見られない。さらに合計数を見るとどちらも「インフォーマルな会話」を選好していることがわかる。三つの陳述副詞を比べると、会話のジャンルと単独度との関係におい

て性差による違いが顕著なのは「たしかに」であることがわかる。これは「たしかに」の用法における「揺れ」を現しているものとみなすことができる。

5. まとめと今後の課題

5.1. まとめ

今回の研究で得られた結果を以下の表にまとめる。

表 6: 全体の傾向

| | 「なるほど」 | 「たしかに」 | 「たぶん」 |
|---------|--------|--------|---------|
| 単独度 | 高い | 中間 | 低い |
| 修飾の度合い | 低い | 中間 | 高い |
| 定型化の度合い | 低い | 中間 | 高い |
| 会話のジャンル | フォーマル | 両方に渡る | インフォーマル |

全体的な傾向として、「なるほど」は単独度が高く、「たぶん」は単独度の低い修飾語としての働きが強いという対極にある。対して「たしかに」には他の二つの陳述副詞には見られない「揺れ」が見られ、他の二つの陳述副詞の中間にあるという図式が目立った。これは「なるほど」が既に陳述副詞から感動詞としての単独用法への変化を遂げているが、「たしかに」はその変化の途中にあるからだと考える。つまり今後「たしかに」は引き続きその単独用法の使用率が高まれば、「なるほど」のように単独用法がより一般的になる可能性もある。表から見て取れるように、単独度、定型化、修飾の度合いにおいても「たしかに」は「なるほど」と「たぶん」の中間に位置していた。さらに修飾方向において「なるほど」のほとんどが前の語を修飾しているのに対して、「たぶん」はほとんどが後ろの語を修飾していた。「たしかに」の修飾方向は前後で半分くらいずつであった。これらは「たしかに」が単独度の高い「なるほど」と単独度の低い「たぶん」の中間にあるためであると考えられる。つまり本来の用法である陳述副詞としての用法にから、単独度の高い新たな用法に変化しているということを客観的に示している。さらにどのような層がどのような場面で単独用法を用いているのかという点において、単独度と会話のジャンル、性別との関係を見てきた。その結果「たしかに」は「フォーマル・インフォーマル」どちらでも使われており、単独用法は「インフォーマルな会話」を選好することがわかった。さらに女性が「フォーマルな会話」でも「たしかに」の単独度の高い用法を積極的に用いているということに着目した。これは女性がこの言語変化を先導しているということであり、単独用法の広がり的重要因素として考える。以下に本稿でわかった「たしかに」「なるほど」「たぶん」の分布について図にまとめる。

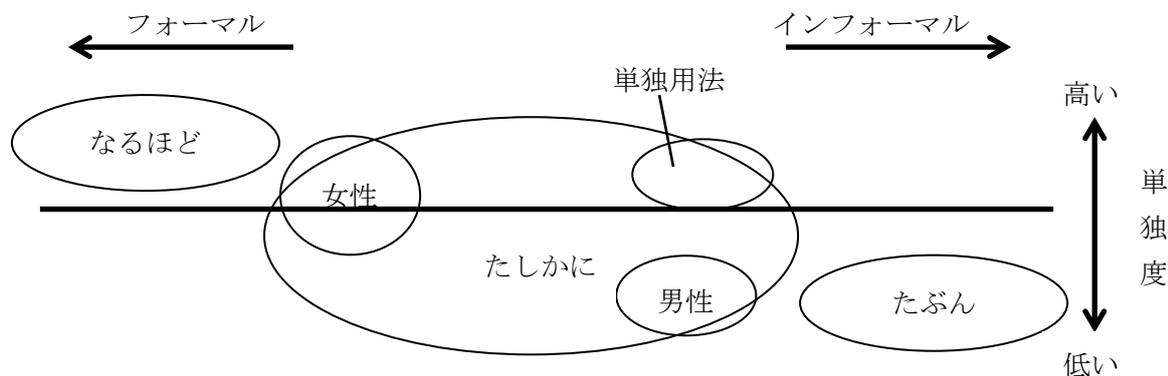


図2. 「たしかに」「なるほど」「たぶん」の分布

5.2. 今後の課題

今回は主に『BTSJ コーパス』を用いて調査を行ったが、このコーパスに収録されている会話の話者のほとんどが20代の学生であった。このため年齢差による単独度の違いについて調査が行えなかった。これを補うものとして今後は、『JPNCorpus』/『PacRim』における調査データ数を増やし、幅広い年齢層における「たしかに」の単独用法の用いられ方について調査していくことが課題となる。そうすることにより、「たしかに」の用法の変化についてより詳細な分析ができるのではないかと考える。さらに陳述副詞が文構造の外側にあることが単独用法にどう関わるかということに関しては、立証することができなかった。これも今後の課題としたい。

参考文献

- 内田万里子 (1991) 「副詞「たしかに」をめぐって」京都外国語大学編『Cosmica 20』135-146. / 大野文 (1997) 「「たしかに」と「なるほど」大阪外国語大学編『日本語・日本文化研究 第7号』155-164. / 竹内美智子 (1973) 「副詞とは何か」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別 日本文法講座 5 連体詞・副詞』72-140. 東京：明治書院 / 刀祢睦月 (2013) 「副詞「たしかに」と終助詞」奈良女子大学編『叙説 40』339-332. / 中村桃子 (2001) 『ことばとジェンダー』東京：勁草書房 / 原田幸一 (2010) 「現代東京の話しことばにおける言語形式「たしかに」：大学生による日常会話をデータとして」社会言語学会編『社会言語学 13 (1)』136-150. / 南不二男(1974)『現代日本語の構造』東京：大修館書店 / _____ (1993)『現代日本語文法の輪郭』東京：大修館書店 / 森本順子 (1994)『日本語研究蔵書 7 話し手の主観を表す副詞について』東京：くろしお出版
- Labov, William (1990) "The intersection of sex and social class in the course of linguistic change," *Language variation and change* 2, 205-254. / Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel A., & Jefferson, Gail. (1974). "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation." *Language*, 50(4), 696-735. / Trudgill, Peter. (2000). *Sociolinguistics: an introduction to language and society Fourth Edition*, London: Penguin Books.

1.1. 白岩・平塚(2009)



白岩・平塚(2009)は、日本語の諸方言において、ノダ文¹のマークは準体的な形式(標準語の「の」および方言形のガ、トなど)が行う場合のほかに、繋辞動詞が直接付いて行う場合の2パターンが存在することになるとした上で各地でノダ文を何で(繋辞動詞か準体形式か)マークしているかを調査した。調査結果によれば、島根では全18例中、繋辞動詞でマークしている例が17例、準体形式でマークしている例が1例である。ノダ文を繋辞動詞でマークする島根の例文を挙げる。

図2: ノダ文を繋辞動詞でマークするか(白岩・平塚 2009: 88)

- (1) (前略) ドーモソレデアスコハノコトバガ イーダカワリダカソラシランワネ
 どうも、それであちらのほうのことばがいいのか悪いのかそれはわからないね。

図2で示す通り、繋辞動詞がノダ文のマーカースとしてはたらくのは、東日本から北陸にかけてと山陰地方、香川であり、おおよそ語形がダの地域に重なるが、石川・愛知・香川など、ジャ・ヤという語形の地点をもふくむ。一方、山陰・香川を除く近畿以西の地域では繋辞動詞がノダ文のマーカースとしてはたらくことはない。

(白岩・平塚 2009: 88-90 要約)

1.2. 杉浦(2004)

国立国語研究所(1982)中の「鳥取県八頭郡郡家町奥谷」を資料として扱った杉浦(2004)は「動詞・助動詞の終止形+デス」と「動詞・助動詞の連用形+マス・マシタ」、「動詞・助動詞の終止形+ダ」と「動詞・助動詞の終止形」の分布を調べた。その分布の偏りが共通語の「動詞・助動詞の終止形+ノダ・ノデス」の分布の偏りと類似していることから、「奥谷方言における『動詞・助動詞の終止形+ダ・デス』は共通語の『動詞・助動詞の終止形+ノダ・ノデス』に相当する」という仮説を立てた。偏りが見られた2つの環境とその分布の偏りは次のように述べられている。

(i) 終助詞「ガ」の前

「終止形+デス+ガ」は17例見られたが「連用形+マス・マシタ+ガ」は1例のみであった。当該方言では「動詞・助動詞の終止形+デス+ガ」の終助詞「ガ」は「聞き手が知

¹ 白岩・平塚(2009)は「ノダ文」を「共通語の『ノダ』という形式」という意味で使用していると筆者は考える。よって杉浦(2004)の言う「ノダ」と同一の形式を表していると考えるが、本稿1.1. 白岩・平塚(2009)内においては、原文まま「ノダ文」と示すこととする。

らない情報を知らせる」という機能を担っている。この「聞き手が知らない情報を知らせる」という機能は、共通語では「動詞・助動詞の終止形+ノデス (+ヨ)」が担っているものである。

(ii) 疑問文と疑問文に対する答

疑問文では「連用形+マス・マシタ」2例、「終止形+デス」3例の両形が見られたが、疑問文に対する答においては「連用形+マス・マシタ」9例に対し、「終止形+デス」は見られなかった。同様に、疑問文では「終止形」13例、「終止形+ダ」3例の両形が見られたが、疑問文に対する答えにおいては「終止形」4例に対し、「終止形+ダ」が見られなかった。共通語で質問する場合には(2) (a), (b) のどちらも状況によっては使うが、答える場合には (c) を使うのは稀、(a) の問いに対しても、普通 (c) でなく (d) で答える。

(2) (a) 海に行ったんですか? (b) 海に行きましたか?

(c) ええ、行ったんです。(d) ええ、行きました。

(杉浦 2004: 14)

(杉浦 2014:12-15 より筆者が要約)

2. 先行研究のまとめと問題提起

白岩・平塚(2009)は、日本語諸方言において共通語の「のだ」を何でマークするかを調査した。その結果、島根県の方言では共通語の「のだ」を繫辞動詞でマークする傾向があることを示した。繫辞動詞が共通語の「のだ」のマークとしてはたらく地域としては山陰が飛び地となっているのが注目すべき点である。島根方言における「終止形+ダ・デス」について詳細に記述を行っている文献は管見の限り見当たらないため、島根県大田市方言における当該形式の共起の状況を把握することは意義があると筆者は考える。

杉浦 (2004) は、鳥取県奥谷方言を対象に、一定の環境において「終止形+ダ・デス」と共通語の「終止形+ノダ・ノデス」の分布を比較、検証することで「奥谷方言における『動詞・助動詞の終止形+ダ・デス』は共通語の『動詞・助動詞の終止形+ノダ・ノデス』に相当する」という仮説を立てた。当該形式と共通語の「のだ」の性質・機能についての検討を行っている点が前述の白岩・平塚(2009)と異なる点である。分布の偏りが共通語の「終止形+ノダ・ノデス」の分布の偏りと同じとされた環境は2つに限られているが、共通語の「のだ」との比較のため、同じ環境における分布の偏りを観察するという方法は参考になる。

以上のことから筆者は、以下のような調査を行った。

調査 1: 「終止形+ダ・デス」の終止形になりうる形式を整理し、その数を確認する

調査 2: 「終止形+ダ・デス」に後接する終助詞を整理し、杉浦(2004)にならい、同じ終助詞が後接する「終止形」及び「連用形+マス・マシタ」の数を数え、分布の偏りを観察する

本稿では、紙幅の都合上、調査 2 の結果のみ取り扱う。

3. 調査 - 分布の偏り

3.1. 調査・集計方法

本調査は、大田市方言の「動詞（＋助動詞）／形容詞終止形＋ダ」（以下、「終止形＋ダ」）と「動詞（＋助動詞）終止形＋デス」（以下、「終止形＋デス」）に後接する助詞のバリエーションを明らかにし、同環境、すなわち同じ助詞の前に現れる大田市方言の「終止形＋ダ」と「動詞（＋助動詞）／形容詞終止形」（以下、「終止形」）、「終止形＋デス」と「動詞（＋助動詞）連用形＋マス・マシタ」（以下、「連用形＋マス・マシタ」）の分布の偏りを明らかにすることを目的とする。以下に、対立する形式を示す。尚、表中では各形式を【】内の省略形で表示する。

| | | | | |
|--------|--------|---|-------|------------|
| 【スルダ】 | 終止形＋ダ | ↔ | 【スル】 | 終止形 |
| 【スルデス】 | 終止形＋デス | ↔ | 【シマス】 | 連用形＋マス・マシタ |

図 3: 調査で対立する形式

本調査で使用した資料は次の 3 つである。

- ① 筆者が書き起こした談話（2012 年当時 40~80 代の大田市出身の男女計 9 名分）
- ② NPO 法人 緑と水の連絡会議・島根県教育庁文化財課世界遺産室(2012)²
（2011 年当時 50~80 代の男女計 11 名の談話を収録）
- ③ 三瓶山国立公園指定 50 周年記念事業実行委員会(2014)³
（2013 年当時 70~90 代の男女計 13 名の談話を収録）

これらの 3 つの資料から「終止形＋ダ」及び「終止形＋デス」を抜き出し、その終止形の形式を整理し、それぞれの数を数える。次に、抽出した各助詞の前に「終止形」及び「連用形＋マス・マシタ」がどれくらい現れるかを数え、先に数えた「終止形＋ダ・デス」の出現数と比較する。ただし「終止形＋ダ」に関しては①の資料のみで調査に十分と考えられる数が抽出できたため、「終止形＋ダ」は①のみ、「終止形＋デス」は①、②、③を調査対象とした。

3.2. 結果

本節では、調査の結果を述べる。卒業論文では「終止形＋ダ」及び「終止形＋デス」それぞれについて結果を表で示し、分析・考察を行ったが、紙幅の都合上、本稿では前者のみを扱う。

調査対象の談話より、「終止形＋ダ」は合計 96 例、「終止形」は 249 例抽出され、13 の助詞の前に「終止形＋ダ」が現れることを確認した。それぞれの分布の偏りを観察し、調

² 平成 23 年度島根県地域社会雇用創出共同事業の 1 つとして、石見銀山のある大森町在住の男女計 11 名の石見銀山にまつわる話を録音・文字化して制作された。

³ 大田市と大田市に隣接する飯南町にまたがる国立公園三瓶山の国立公園 50 周年を記念し、お年寄り（大田市在住）の三瓶山にまつわる話を録音・文字化して制作された。

査結果を「終止形+ダ」に偏りが見られる助詞、「終止形」に偏りが見られる助詞、偏りが見られない助詞の3つに分類(表1, 2, 3 後述する考察で主に扱う助詞は太字・下線で示す)した。ガ、ケ、ケン、ニに関しては、文中に用いられる場合と文末に用いられる場合⁴があったため、まずは前者を接続助詞、後者を終助詞として集計した。しかし分析の結果、文中に用いられていても主節が見当たらず、かつ、省略されているとも考えられないものは接続助詞から終助詞へ、文末に用いられていても倒置や繰り返しによって接続助詞が文末に現れていると判断したものは終助詞から接続助詞へ分類し直した。尚、表中の数は修正後の数字である。

表1: 「終止形+ダ」に偏りが見られる助詞

| 助詞 | 【スルダ】の 出現数 | 【スル】の 出現数 | 分布の偏り | |
|-------------------|---------------|--------------|-------|------|
| | | | 【スルダ】 | 【スル】 |
| <u>接続助詞ドモ</u> | 1例 | 0例 | 1 | |
| 接続助詞ニ | 2例 | 0例 | 2 | |
| <u>終助詞ニ</u> | 21例 | 5例 | 16 | |
| <u>終助詞モノ (モン)</u> | 3例 | 1例 | 2 | |

表2: 「終止形」に偏りが見られる助詞

| 助詞 | 【スルダ】の 出現数 | 【スル】の 出現数 | 分布の偏り | |
|-------------|---------------|--------------|-------|------|
| | | | 【スルダ】 | 【スル】 |
| 終助詞カ | 3例 | 14例 | | 9 |
| 接続助詞ガ | 8例 | 34例 | | 26 |
| 終助詞ガ | 2例 | 9例 | | 7 |
| 接続助詞ケ | 8例 | 67例 | | 59 |
| 接続助詞ケン | 0例 | 6例 | | 6 |
| 終助詞ネ | 2例 | 7例 | | 5 |
| <u>終助詞ノ</u> | 1例 | 45例 | | 44 |

表3: 偏りが見られない助詞

| 助詞 | 【スルダ】の 出現数 | 【スル】の 出現数 | 分布の偏り | |
|-------|---------------|--------------|-------|------|
| | | | 【スルダ】 | 【スル】 |
| 終助詞ケ | 35例 | 46例 | | 11 |
| 終助詞ケン | 2例 | 2例 | | |
| 終助詞ヨ | 8例 | 13例 | | 5 |

⁴ ここでは当該形式のあとに句点がなく文が続く例を「文中」、あとに句点が付く場合を「文末」とする。しかし調査対象の談話は筆者及び企画者により書き起こされたものであるためその客観性に問題がある。

3.3. 考察

当該方言の「終止形+ダ」に後接する助詞について以下のように考察した。

「のだ」と同じ分布を示す環境

以下の2つの環境（ムードの「のだ」⁵の前、終助詞モノ（モン）の前）において「終止形+ダ」は共通語の「のだ」と同じ分布の偏りが見られたと考える。

【ムードの「のだ」の前】

筆者が調査の際に終助詞として集計していたノの前に現れる「終止形+ダ」及び「終止形」はそれぞれ1例、45例であった。しかし「終止形」に後接するノのうち41例は野田(2007)が言うところのムードの「のだ」の異形「の」であった。一方、ムードの「のだ」の異形「の」は「終止形+ダ」には後接していない。

表4: ノが後接する「終止形+ダ」、「終止形」

| | 【スルダ】 | 【スル】 |
|----------|-------|------|
| ムードの「のだ」 | 0例 | 41例 |
| 終助詞ノ（詠嘆） | 1例 | 4例 |
| 合計 | 1例 | 45例 |

共通語でも「のだ」が重なることは稀であるため、「終止形+ダ」にムードの「のだ」がつかないことは共通語の「のだ」と共通する性質であると考えられる。

【終助詞モノ（モン）の前】

調査の結果、終助詞「モノ（モン）」の前に現れる「終止形+ダ」及び「終止形」はそれぞれ3例、1例であった。

(3) ソレモナ 80デ 死ヌルマデ 後ロツカマエトツテ、クドキシチャッタダモン。

ホンニ好キダッタダ。

「それも、80歳で死ぬまで後ろをつかみながら、くどきをしてられたんだもん。

本当に好きだったんだ。」

日本語記述文法研究会編(2003: 271)によると、「共通語の終助詞『モノ』は、現在の状況の背景説明として用いられることが多いため、『モノ』はノダとともに用いられることが多い。」という。今回の調査で得られた用例を見ると、(3)では「(木田の格さんが) 祭りでの歌が本当に好きだった」ことの根拠として「80歳で死ぬまで(祭りで) 歌っていた」こと

⁵ 野田(2007)は「のだ」を、スコープの「の(だ)」(前接する部分を名詞化して否定などのスコープに入れる機能を持つ)とムードの「のだ」(説明などの意味を持たせるために用いられる)に二分している。

を示している。今回の調査で得られた例数は少ないため、当該方言の「モノ」が共通語の「モノ」と同じように用いられていると特定することはできない。しかし背景説明として用いられる「モノ」の前に現れやすいということは共通語の「のだ」に共通する特徴であると考えられる。

一つの助詞として定型化している形式

本調査で「終止形+ダ」に分布の偏りが見られた助詞のうち、「終止形+ダ」に後接する接続助詞ドモ、終助詞ニは、ダと接続した形で一つの助詞として定型化しており、それゆえに「終止形+ダ」に分布の偏りが見られたのではないかと考える。

【ダドモ】

接続助詞ドモが「終止形+ダ」に後接する例は1例のみであったが、調査資料中には、次の(4)のように逆接の接続詞としてダドモが用いられる例が1例見られた。このことから、当該方言においてこのダドモは定型化しているのではないかと考える。

(4) 2回軍需工場ニ、徴用ガキマシタ。ダドモ、ワタシハ絶対行カン。

「2回軍需工場に、徴用がきました。でも、私は絶対に行かない。」

【終助詞ダニ】

終助詞ニの前に現れる「終止形+ダ」及び「終止形」は、それぞれ21例、5例であった。「終止形+ダ」やダッタにさらに、ダと終助詞ニが接続した形式(ダニ)が後接する例が見られた。このことから、当該方言においてこのダニは一つの終助詞として定型化しているのではないかと考える。

(5) (最近の祭りには人が集まらないという話を受けて)

ソガナラ祭りノ日休マンデイイノニ、祭りニ参ルガタメニ海マデ休ムダダニ。

「それなら祭りの日は休まなくていいのに、祭りに行くために海まで休むんだよ。」

個々の例で「のだ」と共通する性質が観察された助詞

分布の偏りからは共通語の「のだ」に共通する特徴は見られないものの、個々の例を見ると「終止形+ダ」が共通語の「のだ」と同じ性質を示している環境(前置きの接続助詞ガ)があった。野田(2007: 172)によると、共通語のムードの「のだ」を含む前置きの「のだが」は、話し手が聞き手は従属節の事態を知らないと見なしたときに用いられるという。本調査で得られた前置きの接続助詞ガの前に現れる「終止形+ダ」は1例を除く2例、「終止形+デス」は全3例が、話し手が聞き手は従属節の事態を知らないと見なしている文脈で用いられている。

4. おわりに

本稿において、大田市方言における「終止形+ダ」について明らかになったことを以下にまとめる。

- A) 終助詞モノ・モンの前、ムードの「のだ」の異形である「の」の前において、当該方言の「終止形+ダ」は共通語の「のだ」と同じ分布の偏りを示す。
- B) 接続助詞ドモ、終助詞ニはダと接続した形で定型化している可能性がある。
- C) 前置きの接続助詞ガの前では「終止形+ダ」は共通語の「のだ」と同様の性質を示す。

今後、当該方言の「終止形+ダ・デス」の性質・機能の整理を進める上での課題は、大きく2つに分けられると考える。1つ目は、「終止形+ダ・デス」形式の定義に関する課題であり、2つ目は共通語の「のだ」との対照に関する課題である。

1つ目として、具体的には、本稿で定型化していると述べたダドモやダニのダを「終止形+ダ」のダと同様のものと判断して良いのかという問題がある。ダニのダは「のだ」よりも共通語の「よ」などの終助詞と近い性質を示しているようにも感じられる。2つ目としては、今回の調査で得られなかった文脈（先行研究で分布の偏りが見られるとされた応答文など）における当該方言の「終止形+ダ・デス」の出現数や、今回は把握できなかった接続詞（背景説明に用いられる「つまり」、「要するに」など）との共起の状況を確認することで整理を進められるのではないかと考えている。

参考文献

神部裕康 (1982) 「鳥根県の方言」飯野毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 8』211-238. 東京: 国書刊行会 / 国立国語研究所 (1982) 「鳥取県八頭郡郡家町奥谷」『方言談話資料 6』11-112. / 白岩広行・平塚雄亮 (2009) 「名詞述語に繫辞動詞は必要か—繫辞動詞の使用頻度に認められる方言差—」『日本語文法学会第10回大会発表予稿集』82-90. / 杉浦滋子 (2004) 「鳥取県の『終止形+ダ・デス』の用法について」『日本方言研究会第78回研究発表会発表原稿集』9-16. / 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』東京: くろしお出版 / 日本放送協会編 (1966-72) 『全国方言資料 1-9』(1999年にCD-ROMで再版) 東京: 日本放送出版協会 / 野田春美 (2007[1997]) 『の(だ)の機能(改訂版)』東京: くろしお出版 / 広戸惇・大原孝道 (1992) 「鳥取県・鳥根県方言」平山輝男編『現代日本語方言大辞典 1』225-231. 東京: 明治書院

調査資料

三瓶山国立公園指定50周年記念事業実行委員会 (2014) 『三瓶山とともに』/ NPO法人 緑と水の連絡会議・鳥根県教育庁文化財課世界遺産室(2012) 『石見銀山の町、大森で聞いたこと。』

モンゴル語の接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee について

若松 元樹

(東アジア課程 モンゴル語専攻)

キーワード: モンゴル語, 接尾辞, 主語の人称, 疑問文, 共起

0. はじめに

モンゴル語ハルハ方言は、過去を表す為に動詞語幹に接尾辞をつけて表す。過去を表す接尾辞の内-v, -laa⁴, -jee/-čee は文を終止させる用法のみを持つ「終止形」の接尾辞である¹。本稿は、上記の三つの接尾辞の用法等の違いを検討する事を目的とする。なお、本文中のグロス、和訳、例文番号、表番号はことわりのない限り筆者によるものとする。本稿は、三つの接尾辞を単なる過去の接尾辞であると断言するのを避けるため、-v, -laa⁴, -jee/-čee を表すグロスをそれぞれ V, LAA, JEE と定める。本稿のモンゴル語表記はモンゴル語キリル文字正書法を基にしたローマ字転写したものを使用し、表記方法はジンガン(2008)にならう²。

1. 先行研究

本稿では紙幅の都合上橋本(1993)、ジンガン(2010)、山越(2012)の接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee に関連する記述部分のみを示す。

1.1 橋本(1993)

以下では、橋本(1993)による過去を表す接尾辞に関する記述を要約する。なお、以下に示す例文のグロスと和訳は橋本(1993)によるものである。

橋本(1993)は、三つの接尾辞について「動詞語幹に付き、過去時の行為、状態、出来事などを指示する過去形接尾辞である」と定義している。一方で、三つの接尾辞は意味に関してまったく重なり合う同意義要素というわけではなく意味の分岐を見せるという。

第1の分岐は、-v と-laa⁴, -jee/-čee の間に見られる。接尾辞-v は、過去時の事態をアオリスト的に示すだけである一方で後者の二つの接尾辞には、現在時への影響を含む例が見出された。

¹ 過去を表す接尾辞には他に形動詞の-san⁴がある。形動詞とは、述語として用いられる叙述用法、他の名詞を修飾する名詞修飾用法、名詞的に用いられる名詞的用法という三つの用法がある。

² a=a, б=b, в=v, г=g, д=d, e=ye/yö, ё=yo, ж=j, з=z, и=i, й=i, к=k, л=l, м=m, н=n, о=o, ө=ö, п=p, р=r, с=s, т=t, у=u, ү=ü, ф=f, х=x, ц=c, ч=č, ш=š, ъ=ı, Ъ=ı, ы=iı, э=e, ю=yu/yü, я=ya(ジンガン 2008: 1)

(1) a. Xičeel exlex cag bolloo.
 授業 始まる-[非過名] 時間 なる-[過]
 「授業が始まる時間になった。」

b. Tanií xüü tanigdasgüí tom xün boljee.
 あなたの 息子 見分けがつかないほど 大人の 人 なる-[過]
 「あなたの息子さんは見分けがつかないほど大人になりました。」

(橋本 1993: 10)

第 2 の分岐は、-laa⁴ と -jee/-čee の間で生じる。接尾辞-laa⁴ は、現在時と直結した未来時を表す事ができるが-jee/-čee はそれを表す事ができない。

(2) Bi odoo yavlaa
 私は 今 行く-[過]
 「私は今行きます。」

(橋本 1993: 11)

橋本(1993)は接尾辞-laa⁴ には、ある行為や事態が物理的/認知的に話者にとって制御可能である「制御可能性」という固有の意味特性があるという。この意味特性と二人称主語は話者にとって最も制御しがたい対象であるという特性が衝突する為、-laa⁴ と二人称主語は同一文章中で共起しにくいと指摘する。

1.2 ジンガン(2010)

以下では、ジンガン(2010)による過去を表す接尾辞に関する記述を要約する。

ジンガン(2010)は、橋本(1993)が接尾辞-laa⁴ には「制御可能性」という意味素性があると解釈する根拠の一つとして二人称との共起がまれであるということを挙げ、三つの接尾辞と共起する主語の人称との共起の強さを調査した。結果は以下の通りである。

表 1: 人称と各接尾辞との共起の強さ

| | 二人称との共起頻度 | 一人称との共起頻度 |
|-------------------|-----------|-----------|
| -laa ⁴ | 29 | 822 |
| -jee/-čee | 16 | 54 |
| -v | 19 | 469 |

(ジンガン 2010: 94)

表 1 から接尾辞-laa⁴ と二人称主語との共起関係が弱いことが観察されるが-jee, -v におい

でも同様に弱いという結果から二人称主語の共起がまれであるという現象は-laa⁴ のみにおける現象ではないとジンガン(2010)は指摘する。

ジンガン(2010)は口語では-v が平叙文では用いられず疑問文において多く用いられていることが先行研究で述べられているにも関わらず、実際には疑問文における三つの接尾辞の出現率に関する相違は少ないのではないかと考え、疑問文における-v, -laa⁴, -jee/-čee の分布を調査した。調査の結果は以下の通りである。

表 2: -laa,-jee,-v の疑問文における分布と頻度

| 疑問文の類型 ³ | -laa | -jee | -v |
|---------------------|--------------------------|--------------------------|---------------------------|
| 真偽疑問文 | 77(17.2%) | 46(13.9%) | <u>1167(80.9%)</u> |
| 選択疑問文 | 0(0.0%) | <u>12(3.6%)</u> | 20(1.4%) |
| 補充疑問文 | <u>275(61.5%)</u> | 0(0.0%) | 255(17.7%) |
| 疑念的疑問文 | 0(0.0%) | <u>272(82.4%)</u> | 0(0.0%) |
| 確認想起的疑問文 | <u>95(21.2%)</u> | 0(0.0%) | 0(0.0%) |
| 計 | 447(100%) | 330(100%) | 1442(100%) |

(ジンガン 2010: 99)

-v は、疑問文で使われる頻度が最も高く-laa⁴ と-jee/-čee と比較するとおよそ3倍ほどであったことから-v は疑問文で多く使われる。ただし、80.9%が真偽疑問文である。-laa は補充疑問文の出現割合が大きい、-jee と-v には一般的でない確認想起的疑問文の用法が多い。-jee は、疑念的疑問文に出現する事ができ-laa と-v とは異なる。選択疑問文に出現する点でも-laa とは異なる。以下に、ジンガン(2010)で挙げられた接尾辞-v が使われた真偽疑問文の例を挙げる

- (3) či dor-oos ir-ev üü?
 2SG 下-ABL 来る-V QP

「君は地方から来たか?」

(ジンガン 2010: 100)

1.3 山越(2012)

以下では、山越(2012)による過去を表す接尾辞に関する記述を要約する。なお、以下に示す例文の和訳は山越(2012)によるものである。

接尾辞-v について山越(2012)は、過去に起こった動作に用いられると述べている。特に書き言葉や新聞の見出しなどで目にする事が多く、話し言葉ではあまり用いられないが疑問文においては、話し言葉でも用いられると指摘する。

³ 真偽疑問文、選択疑問文、補充疑問文などの用語は、日本語記述文法研究会編(2003)に従っている。

- (4) Zasg-iín gazr-iín giš-üüd xöröng-öö med-üül-ev.
政府-GEN 場所-GEN 党员-PL 財産-REFL 知る-CAUS-V
「国会議員が資産を公開した。」 (山越 2012: 90)

接尾辞-laa⁴について山越(2012)は、過去に起こった動作、極めて近い未来に確実に行われる動作に対して用いられると指摘する。

接尾辞-jee について山越(2012)は「過去に起こったとされるが、話し手自身が確認していない出来事」、「話し手がその事態を実際に経験したわけではない過去の出来事」に対して用いられ昔話や過去の歴史的事実を述べる文に頻繁に見られると述べる。加えて、主語が1人称あるいは2人称である場合には用いられにくいと指摘している。

- (5) Ter xoyor-iín yaria-g Dorj sons-čee.
3SG 二-GEN 会話-ACC ドルジ(人名) 聞く-JEE
「その二人の会話をドルジは聞いた(そうだ)。」 (山越 2012: 92)

1. 4. 先行研究のまとめ

-laa⁴は現在から未来について表す用法が可能であること、-jee/-čee は非過去の文脈における用法も解釈可能というように表すことのできる時間は-vと比較すると幅広い。

橋本(1993)、山越(2012)は、主語と接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee の共起についての記述が見られる。橋本(1993)は-laa⁴と2人称主語が共起しにくいと指摘する一方で山越(2012)は-jee/-čee と、1人称主語と2人称主語がそれぞれ共起しにくいと指摘している。ジンガン(2010)は、橋本(1993)が指摘した現象は、接尾辞-v, -jee/-čee においても起こりうるもので-laa⁴のみで起こる特有の現象ではないと述べている。

ジンガン(2010)、山越(2012)は疑問文と接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee の関連性についての記述が見られ、いずれも接尾辞-v は疑問文においては頻繁に用いられると指摘している。

2. 調査

2. 1 調査方法

会話文における接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee の用例を収集することを目的に Oídov(1966)『道』(全167ページ)というモンゴルの戯曲作品、及び会話文における接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee の用例と比較するためモンゴルの新聞社 Önnödör の9月1日から11月10日の間の政治、外交に関するインターネットサイトの記事の二つの資料から接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee が現れる文を Microsoft Excel に入力し手作業でそれぞれを検索して接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee の分布、主語との共起等を分析した。

2.2 調査結果

2.2.1 『道』の調査結果

以下では、Oídov(1966)『道』における三つの接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee の調査結果をまとめる。なお、以下に示す例文の和訳は小沢(1966)によるものである。

Oídov(1966)『道』からは、接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee が合計 242 例見られた。以下に接尾辞の出現回数と割合を表にまとめて示す。

表 3: 『道』における接尾辞の分布

| -v | -laa ⁴ | -jee/-čee | 計 |
|------------|-------------------|-----------|-----------|
| 136(56.2%) | 81(33.5%) | 25(10.3%) | 242(100%) |

三つの接尾辞の総計は-v が半数以上を占める一方で、-jee/-čee は全体の約 10%を占めるのみであるという結果になった。

次に、三つの接尾辞と共起する主語の人称についての結果をまとめる。以下に Oídov(1966)『道』における主語の人称と三つの接尾辞の共起の分布を表で示す。

表 4: 主語の人称と接尾辞の共起の分布

| 主語 | -v | -laa ⁴ | -jee/-čee | 計 |
|--------|-----|-------------------|-----------|-----|
| 1 人称単数 | 7 | 46 | 4 | 57 |
| 2 人称単数 | 19 | 6 | 3 | 28 |
| 3 人称単数 | 82 | 21 | 14 | 117 |
| 1 人称複数 | 1 | 5 | 0 | 6 |
| 2 人称複数 | 1 | 1 | 0 | 2 |
| 3 人称複数 | 26 | 2 | 4 | 32 |
| 計 | 136 | 81 | 25 | 242 |

橋本(1993)は-laa⁴と 2 人称主語、山越(2012)は-jee/-čee と 1 人称主語と 2 人称主語がそれぞれ共起しにくいと指摘した。調査結果からは、-laa⁴と 2 人称主語が共起する用例が見られたが-laa⁴と 1 人称、3 人称主語との共起と比較すると用例数は少ない。-jee/-čee と 1 人称、2 人称主語の共起についても 3 人称主語と共起した用例数に比較すると大幅に少ない。

-laa⁴と 2 人称主語の共起の例

- (6) Donoí guai ta odoo Gerel-teí-g-ee uulz-laa.
 ドノイ さん 2SG 今 ゲレル-EXIS-E-REFL 会う-LAA
 「ドノイさん、ゲレルと今会いましたね。」 (『道』: 126 ページ)

-jee/-čee と 1 人称主語の共起の例

- (7) bi saíxan xüüxd-üüd-ífn-xee tolgóí-g av-ax ge-j
 1SG 美しい 子供-PL-GEN- REFL 頭-ACC 取る-P.NPST 言う-C.SIM

ödií boltl-oo amí-d yav-san yum baí-jee.
 これほど なるまで-REFL 生命-DAT 行く-P.PRF 物 ある-JEE

「わしは可愛い子供たちの死水を取るために、これまで生きて来たのだったか。」

(『道』: 106 ページ)

-jee/-čee と 2 人称主語の共起の例

- (8) Ta bid-end xel-sen üg-ee mart-jee.
 2SG 1PL-DAT 言う-P.PRF 語-REFL 忘れる-JEE

「(あなたは)われわれに言った言葉を忘れましたね。」

(『道』: 164 ページ)

次に、疑問文と三つの接尾辞の共起についての結果をまとめる。本調査では三つの接尾辞が現れる疑問文は 41 例見られた。以下に、疑問文における三つの接尾辞の分布を、正否を問う疑問文である Yes/No 疑問文、疑問詞⁴を伴う疑問文である疑問詞疑問文の順に表にしてまとめる。

表 5: Yes/No 疑問文における接尾辞の分布

| -v | -laa ⁴ | -jee/-čee | 計 |
|----------|-------------------|-----------|----------|
| 17(100%) | 0(0%) | 0(0%) | 17(100%) |

表 6: 疑問詞疑問文における接尾辞の分布

| -v | -laa ⁴ | -jee/-čee | 計 |
|-----------|-------------------|-----------|----------|
| 18(75.0%) | 6(25.0%) | 0(0%) | 24(100%) |

Yes/No 疑問文、疑問詞疑問文のいずれにおいても接尾辞-v と共起する例が多数を占めた。特に Yes/No 疑問文はすべて接尾辞-v と共起するという結果になった。

- (9) Za xüü mini surguuli-a togs-ööd bür ir-ev üü?
 はい 息子 1SG.POSS 学校-ACC 終わる-ANT 全く 来る-V QP

「よう一、学校を卒えて本当に帰って来たのか?」

(『道』: 68 ページ)

接尾辞-laa⁴は疑問詞疑問文において共起する例が 6 例現れた。疑問詞疑問文と接尾辞-laa⁴が共起した 6 例のうち 5 例は疑問動詞 yaa-(如何にする)が使われた用例であった。

⁴ ここでいう「疑問詞」には、名詞に分類されるもの、形容詞に分類されるもの、動詞に分類されるものなど、様々な品詞の語彙が含まれる。

- (10) önöö utas maamı yaa-laa?
 今 電話 1PL.POSS 如何にする-LAA
 「例の電話はどうだ?」 (『道』: 142 ページ)

今回の調査では、接尾辞-jee/-čee が疑問文に現れる例が見られなかった。これは、そもそも『道』で収集された接尾辞-jee/-čee の全ての用例数が 242 例中 25 例というように接尾辞-v, -laa⁴ の用例数と比較して極端に少なかったことが一因であると筆者は考える。

2.2.2 新聞 Önnödör の調査結果

以下では、モンゴルの新聞社 Önnödör のインターネットサイト記事の調査結果をまとめる。今回調査の対象とした記事は、2014 年 9 月 1 日から 11 月 10 日の間の政治、外交に関するインターネットサイト記事である。

インターネットサイト記事からは、三つの接尾辞-v, -laa⁴, -jee/-čee が合計で 272 例見られた。以下に三つの接尾辞の出現回数と割合を表にまとめて示す。

表 7: Önnödör のインターネットサイト記事における接尾辞の分布

| -v | -laa ⁴ | -jee/-čee | 計 |
|------------|-------------------|------------|-----------|
| 79(29.04%) | 117(43.01%) | 76(27.94%) | 272(100%) |

『道』では、-v が合計の半分以上を占め最も多く出現したがインターネットサイト記事においては、接尾辞-laa⁴ が合計の半分弱を占め最も多く出現し、-v と-jee/-čee がほぼ同じ回数出現するという結果になった。

次に、三つの接尾辞と共起する主語の人称についての結果をまとめる。インターネットサイト記事においては、出現した接尾辞 272 例の全てにおいて 1 人称、2 人称主語は出現せず、共起した主語はすべて 3 人称であった。これは、新聞の役割が主に 3 人称の人物等についての情報を客観的に伝えることを目的としている為であると筆者は考える。

次に、疑問文と三つの接尾辞の共起についての結果をまとめる。今回の調査では、3 つの接尾辞が現れた疑問文は 7 例見られた。出現した疑問文の 7 例は、全て正否を問う Yes/No 疑問文であり、いずれの疑問文も接尾辞-v と共起した。

- (11) 2008 on-í bütc-iíg xoyor salga-j danxaí-lga-san
 2008 年-GEN 構造-ACC 二 区別する-C.SIM かさばる-CAUS-P.PRF
- aldaa-g-aa Yörönxií said yuu-nií ömnö ergen xar-ax
 誤り-E-REFL 総体の 大臣 何-GEN 前 周囲に 見る-P.NPST

bol-ov uu.

なる-VQP

「2008年の構造を2つに区別してかさばらせた誤りを総理大臣は何の前で周囲にみるようになっただろうか。」 (2014/9/12)

3. まとめ

今回の調査より、橋本(1993)が指摘した接尾辞-*laa*⁴と2人称主語が共起しにくい点、山越(2012)が指摘した接尾辞-*jee/-čee*と1人称、2人称主語が共起しにくい点については用例が得られたが用例数は比較的少ない為、筆者は以上の先行研究を支持する。ジンガン(2010)、山越(2012)が指摘した疑問文において接尾辞-*v*が用いられるという点については、今回の調査により接尾辞-*v*が、疑問文で頻繁に用いられたという結果を得たことから疑問文と接尾辞-*v*についての先行研究を支持する。戯曲『道』では、接尾辞-*laa*⁴が見られた疑問文6例のうち5例が、疑問動詞 *yaa*-(如何にする)が用いられた用例であるという特徴も見られた。

4. 今後の課題

今回は戯曲『道』とモンゴルの新聞社 *Önödör* のインターネットサイト記事を調査資料として利用した。今後は上記の資料の更なる分析、他のモンゴルで出版された小説等からの調査、話し言葉における三つの接尾辞の特徴を知る為のアンケート調査という三つの調査を並行して行いたい。

略号一覧

1, 2, 3: 1st, 2nd, 3rd person 1, 2, 3 人称/ABL: ablative 奪格/ACC: accusative 対格/ANT: anterior 前方性/C: converb 副動詞/CAUS: causative 使役/DAT: dative 与格/E: epenthesis 挿入子音/EXIS: existence 存在/GEN: genitive 属格 /NPST: non-past 非過去/P: participle 分詞/PL: plural 複数/POSS: possessive 所有/PRF: perfect 完了/QP: question particle 疑問小辞/REFL: reflexive 再帰/SG: singular 単数/SIM: simultaneous 同時性

参考文献

ジンガン (2008) 「モンゴル語の動詞語尾-*laa* と-*jee* について—コーパスに基づく分析—」
日本言語学会第137回大会/ジンガン(2010) 『モンゴル語のモダリティ: コーパスに基づく記述的研究』東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士論文/日本語記述文法研究会編(2003) 『現代日本語文法 4 第8部モダリティ』東京: くろしお出版/橋本邦彦(1993) 「過去の領域—モンゴル語の過去形接尾辞の意味について—」『言語研究』104: 1-20 /山越康裕(2012) 『詳しくわかるモンゴル語文法』東京: 白水社

調査資料

Oídov, Č. (1966) 『道』(小沢重男訳) 東京: 大学書林/“Önödör” <http://mongolnews.mn/> (最終閲覧日: 2015/1/7)

思言 東京外国語大学記述言語学論集 第11号

2015年12月1日発行

編集・発行： 東京外国語大学 記述言語学研究室（風間伸次郎）
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
mail: kazamas@tufs.ac.jp

Edited and Published by Department of Descriptive Linguistics
Graduate School of Global Studies
Faculty of Foreign Studies
Tokyo University of Foreign Studies
3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo,
183-8534, JAPAN

SHIGEN

vol. 11

Articles

- Case marking in P argument in Daru dialect in Rawang languageONISHI Hideyuki (3)
“Negative + =lee” formation in the Mongolian spoken in Inner Mongolia A Comparison to “le” in Mandarin
Chinese YAMADA Yohei (15)
The ‘be + p.p.’ Construction in Irish YAMADA Leo (31)

Abstracts of the MA Theses

- A Descriptive Study of Khamts Tibetan Khri`du Dialect With Special Focus on the Auxiliaries An Analysis
.....Tse Skyid Dbang Mo (51)
On deictic motion verbs in Mongolian Tserendavga Buyanjargal (61)
Passive and related constructions of Modern Standard Arabic and Egyptian Arabic MATSUO Ai (71)

Abstracts of the Graduation Papers

- An Analysis of Semantic Functions of English Causative *Have* : With Special Emphasis on the Volition of Causers
and Causees against Causative Action..... ISHIKAWA Mai (85)
Appropriate use of“(Sa) Seteitadaku”: Focusing on speakers’ and hearers’ notion on the expression
..... OKAGAKI Ryoga (93)
On *Kakari-musubi* in the Okayama-Bizen dialect OKAMOTO Susumu (101)
Differences between Hungarian derivational suffixes “-z(ik)” and “-l(ik)”SAKAI Yuri (109)
The Two Transitive Suffixes -kan and -i of Indonesian TAKIKAWA Kanae (117)
Italian passive and French passive NAITO Hoshimi (125)
A contrastive study of the final particle “yo” in Japanese and final particles in Vietnamese
..... NAKAMURA Shiina (133)
The Usage of Present Tense Affixes “-a/-y” and “-yap” In Uzbek - with a Focus on the Aspect of Verbs
..... NISHIDA Chikako (141)
“Leísmo” and “Iaísmo” in Paraguayan Spanish — Regarding the language contact with Guaraní —
..... HAMAGUCHI Erika (149)
The loan words in Khorchin dialect of Inner Mongolian — especially on the words from Mandarin Chinese
..... Buhe (157)
Future expressions in French — simple future and periphrastic future—HOSHINO Kanako (165)
Contemporary Japanese “tashikani” — comparing with “naruhodo” and “tabun” — MOCHIZUKI Yukie (173)
“Finite Form + da, desu” in the Ohda City Dialect of Shimane Prefecture..... MORIYAMA Misako (181)
Suffix “-v, -laa⁴, -jee/-čee” in Mongolian WAKAMATSU Genki (189)
-

2015

Department of Descriptive Linguistics
Graduate School of Global Studies / Faculty of Foreign Studies
Tokyo University of Foreign Studies